

---

# 夜月下の枝垂桜

クロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜月下の枝垂桜

### 【Nコード】

N5444Y

### 【作者名】

クロ

### 【あらすじ】

運命の止まった、終わりを迎える世界。航空都市艦・武蔵に住む少年結城は、何もかもが縛られた武蔵と自分の運命を同じものと感じていた。周りの仲間達と共に支えあっている最中で、彼は己の心の渴きを満たしてくれる何かを探していた。そんな中、世界を揺るがす日が訪れる。今までの世界を壊し尽くす境界線を目的地に、結城は己の過去と向き合いながら死地へと赴く。

## 第一話 能ある鷹は爪を隠す

目を瞑り、最初に目に浮かぶものは赤だった。

炎のような真っ赤な色。血のような鮮やかな色。破裂するような感情の色。思考や視線を焦がす色が、オレの原初の記憶だ。

勿論、それ以外のことも憶えている。色んな人に迷惑を掛けた下らない人生だったが、それでも楽しいことはあった。

ただ、嫌な思い出の方が多いただけの話だ。

自分の過去を形作る記憶の中で、オレは明確な区分けを持って自身を二分した。

今の自分と、過去の自分。同じ存在なくせに、オレはそれを別物だと言う。酷く矛盾した話だ。

しかしそれも十年近く続けば、当たり前のように思えてくる。

「……」

目を閉じる。

暇なときに嫌なことを思い詰めるのはオレの悪い癖だ。だから意識

を外に向けるために、オレは過去ではなく、今を感じた。

風の匂いがする。水気を含んだ、澄んだ柔らかな匂いだ。

そして風の流れに混じって、音が聞こえてくる。音は一つだけではなく、色んな音程や音色を含んでは、世界を構築している。

目を瞑り、耳を澄ませ、意識を他の感覚器官に集中させれば、視界に頼らずとも世界を感じることが出来る。

そして真つ暗な意識の中で、色が現れた。いろんな色が、情報となつて脳に送り込まれてくる。

最初に感じたのは、空だ。無限に広がる大空に、自分の身体を運ぶ巨影がある。

巨影は船の形をしており、全部で八隻存在している。

一隻一隻が都市程の大きさを持つ船は、それぞれ太い縄で連結されており、青い空の下で波を立てながら進んでいる。

そして船の上で動きがあった。

動きは様々で、全てを感じ取れるには時間が掛かる。

人の足音。市場街の喧騒とした賑やかさ、商店街の客人や店主達の遣り取り、機関部の作業音。野良猫や走狗、溝の中にある黒藻の獣の気配など。

様々な音が、感触が、気配が、匂いが、蒼穹に蔽かと渡り進む船の

生活圈を構築している。

波と共に走る八艦連結式の白船の名は”武蔵”。

波濤な歴史を進んだ今の世界における、極東で唯一認められた移動する領土だ。そしてこの独立した社会空間を持つ航空都市艦の上で、オレは十年近く暮らしている。

オレの名は結城。

訳有つて、苗字しか名乗れない、この世界では何処にでもいる”学生”だ。

/  
/

武蔵中央後艦”奥多摩”の一角。

左舷住宅街には安価な家賃を持つ長屋がある。

瓦で敷かれた屋根の上、朝の涼しい微風と暖かな日差しを浴びながら、結城は堂々と日向ぼっこをしている。

腰まで伸びた黒い長髪を三つ編みに結び、黒と白を基調とした制服を身に纏う。極東式の中量級はオートクチュールの高級品で、制式なデザインとは懸け離れた、フード付きのコート様式を用いている。そして右腕には緑の腕章がつけられており、武蔵アリアダスト教導

院の校章が描かれたそれには、黒の文字で”臨時相談役 結城”と記されている。

屋根に横たわっている自分の隣りでは、長さの異なる二本の線が走っている。二メートル程の長さを持つ長い線は棒であり、外見を隠すために棒全体を白い布で隠している。そしてもう一本の短い線は剣の形をしている。黒い金属製の外装と鞘、簡素な金の装飾を持つたそれは十束剣だ。

東洋式の両刃長直剣と白い棒を傍に置き、結城は目を瞑り、静かな朝の一時を満喫していた。

そして不意に、遠くの方、奥多摩艦首から右舷二番艦”多摩”の方へと向けて、音がした。

大気を揺らし、僅かに肌を打つような響きは爆発の破砕音だ。風の流れに沿って伝わってくるそれは、連続して各艦に響く。

空に巻き上がる砂塵と絶え間ない衝撃音に釣られて、住宅地や商店街の方から大勢の物見が出てきた。

彼らは騒ぎの監視を兼任している地元の店主達で、多摩へと渡る破砕の荒波に視線を向けては、その中の誰かが叫んだ。

「後悔通り”を艦首側に行くぞー!!」

叫び声に導かれ、結城は身体を起こした。

彼は小さく欠伸をして、ボーっとした表情で空を眺め、

「何時も通りだな……」

と、小さく呟いた。

そして、

「おお、こんなところにいたのか。結城」

通りの方、屋根の下で自分を呼ぶ声がした。

釣られて結城が視線を向けると、其処には一人の男性が立っていた。番屋の正式装備である中量級装甲を着た、体格のいい中年男だ。

「戸塚さん……」

無精髭を生やした見覚えのある顔に、結城は軽く挨拶を交わす。それを戸塚と呼ばれた番屋の警備員は、よっ、と手を挙げて返事を返す。

「お前さんは授業に出ないのかい？ 連中、気合入って行っちゃったぞ？」

「……出席点数は足りている。今日はサボりだ」

結城の短い返事に、戸塚と呼ばれた男は、やれやれ、と頭を掻いた。

しかし彼は気を悪くしたわけでもなく、そのまま言葉を作る。

「そうかい……、ところで結城。今、暇か？」

質問に、結城は返事もせず、視線も向けない。

ただ其処に座っているだけの、動きを見せない反応を肯定として受け取ったのか、戸塚は続けて言った。



「暇なら頼み事があるんだが、話だけでも聞いてくれ。最近、浅草と品川の方でヤクザの地上げが頻繁になっていてな、そのせいで被害届けが増えてきている。アソコは番屋の管理が薄いところだから警備が難しく、この前に魔神族が連中を仕切ってから生意気になってきてるんだ」

「それで？」

戸塚の説明に、結城が問いかけた。

短い促しだが、その反応に戸塚は笑みを浮かべる。

彼は一つ息を吸ってから、

「まあ、先日、夜警団がお前んとこの担任に、連中の品川の事務所を潰して欲しいと頼んでな。んで俺達番屋の方は、俺が代表してお前さんに依頼しに来たわけよ。どうだ？ 興味あるか？」

「……………」

誘いに、結城は暫し考えた。

今、多摩表層部の商店街で破壊の音が続いている。艦首の方まで進むそれは自分のクラスである三年梅組のメンバー達だ。

朝の一時限目は体育の授業で、自分の担任はバトルレースによる実技教育を好んでいる。路線から見れば品川方面へと一直線。戸塚の言っているヤクザの件は結城にも心当たりがある。最近の被害者が自分の担任で、そのせいで教導院の壁が八つ当たりで彼女に壊されたらしい。

個人的にどうでもいい事件を思い浮かべながら、同時に、話に乗るのも悪くはないと思う。今日は仕事の関係で午後に予定があるが、それ以前は暇だ。少し運動をするのも悪くない。

ゆえに、

「場所と人数は？」

質問に、戸塚は即答した。

「浅草第五階層の貨物区画の奥に事務所がある。人数は魔神族やその他含めて全部で100人くらいか。品川の連中より数が多い面倒な相手だが、片付ければ後は安泰だ。援軍いるか？」

「いらん」

返事と共に、結城は傍にある長剣と棒を取った。布に覆われた棒を背後に背負い、鞘に収めた剣を左腰に携える。

彼はそのまま屋根の上から通りへと飛び降り、戸塚の真横へと着地する。

「一時間で終わる。後片付けの準備でもしてろ」

「Judd」

肯定を意味する返事と共に、結城は前へと歩き出した。

ゆったりとした歩調で目指すのは左舷一番艦”浅草”。品川へと向かった級友達とは逆の方向に向けて、結城の一日が始まった。

/  
/

「おい、三嶋くん。ちょっと手伝ってくれない？」

「あ、はい、今行きます」

武蔵左舷二番艦”村山”の艦首。

村山の観光街大通りの先にある場所に、一軒の番屋がある。地元の自警団と消防団が役割分担で運営している建物の中で、若い男女の声が響いた。

広いスペースを持った事務所の中、番屋の制服を着た先輩格である若い女性が、後輩の男性に色々と指示を出している。

「三嶋くん。一時間後に皆で浅草の方に行くんで、救護品や装備の準備手伝ってくれない？」

「は？ ま、まあ、別に構いませんけど。……どうしたんですか急に？ 何か事件でも？」

若い警備員、三嶋の質問に、先輩格の女性は、そうじゃないわよ、

と苦笑を浮かべた。

彼女は事務所の奥にある、装備品が納められてある倉庫の鍵を開け、  
「最近、貨物船である品川と浅草でヤクザの地上げがあるのは知ってるでしょ？」

「ええ、魔神族が仕切っている組織のことですよ。連中、艦首の方で事務所立てて、力技で地主や借家人から土地を強引に”買収”していると聞いてます。横暴で人数が多い上に、管理が難しい貨物船の市場街に陣取っているため、中々手が出せないと隊長が言っていました。それがどうかしましたか？」

三嶋の説明に、女性が、うんうん、と頷く。

装備品や救護に必要な応急品を一つずつ取り出しながら、

「そのヤクザの連中、最近生意気になってあちこちで暴れては迷惑増やしてるんだよね。多摩やうちにも被害届けがじゃんじゃん届いてさ。それで戸塚さんが頭抱えていて、でも人間じゃあ基本的に魔神族には勝てないじゃん？ 番屋は警備担当だけど、戦闘のプロとは限らない。ああいう相手とやりあうには現役が必要なんで、それで戸塚さんが助っ人を探しに行ったの。朝早くから」

「助っ人？ 魔神族に対処できる人がこの武蔵にいるんですか？」

三嶋の疑問に、女性隊員が目を丸くした。

質問自体がおかしいと思っっているような表情を浮かべ、しかし直ぐに納得したような表情に変わり、

「そう言えば三嶋くんは、瀬戸内から武蔵に帰化したんだっただね。去年から？」

「ええ、この街ではまだまだ新人入りです」

「そっか、じゃあ知らないのも当然か」

女性隊員の言葉に、三嶋は首を傾げた。

その反応に先輩格は笑みを浮かべ、取り出した装備品を運ぶようにと、三嶋に合図を出す。

そして、

「少ないけどいるわよ。優秀な流体種族とサシで勝負できる人がこの武蔵に。あたしの現役時代の担任や、当時の後輩とかマジで化け物だし……、戸塚さんが頼んだ助っ人もそういう人物みたいよ。品川の事務所には多摩の夜警団が前以て誰かに頼んだそうで、浅草の方も後で片付けるとの連絡が、通神文でさっき戸塚さんから入ったわ。」

「一時間後に終わりそうだから、後片付けの準備をしておけ」って」

説明に、三嶋が眉を顰めた。

俄かに信じ難い話だが、有り得ないことではない。自分の生まれ故郷であるK・P・A・Italiaでも似たような話は沢山ある。他の国でも、教導院の役職クラスや英雄クラスの人物には、都市破壊兵器級の戦闘力を持つている者だつてある。武蔵は聖連からの条約によつて武装解除されており、教導院の学生にも年齢上限があつて、貿易を主としている武蔵には実戦経験がない。

そしてそのような鳥籠の中で、自分の先輩は、肉体的に先天的優勢のある魔神族と渡り合える人物がいると言つた。三嶋は武蔵に来て日が浅いが、自分なりにこの武蔵のことは見てきたつもりだ。

変人・奇人・怪人・異人の集まりである極東の独立領地は、毎日が賑やかで騒がしく、同時に居心地がいい。政治的立場で他国に遅れを取つてはいるが、それを物ともしない個性が、この国にはある。

しかしそんな風に考えていると、不意に三嶋は思った。

変質者揃いの武蔵の中で、魔神族を相手に出来る者はどのような人なのかを、頭の中で奇天烈な奇人怪人を想像し、思わず、うぬぬ、という唸りを上げる。

「三嶋くん。変な人とか想像してるんじゃない？  
まあ、武蔵の住民には碌な奴がないけど」

「それ、自分のこと言ってます？」

「あら？ 変人だと自覚できるまでは、あたしはまだまだ常識人だ  
と思うな。ほらっ、ポーっとしてないで早く手伝いなさい。  
そろそろ出発するわよ」

/  
/

極東唯一の独立領土である武蔵。

八隻の大型輸送船を連結させた準バハムト級航空都市艦は、艦内の社会経済に対する円滑な循環性の保持のために、個別の艦に異なる役割分担を行っている。



両舷一番艦である”浅草”と”品川”は貨物船としての役割を持ち、暫定居住区を兼任した市場街や貨物運搬用のデリックなどがある。

観光・行政地である二番艦や、住居・生産地である三番艦。教導院・全艦統括指揮である中央両艦に比べて、貨物船である一番艦は作業区画や入り組んだ居住区画が多いため、治安の維持や管理が難しく、不法者の集落としては打ってつけの場所になっていた。

そんな事情のある武蔵両舷一番艦、その内の片方である左舷側の”浅草”で、一人の少年が艦首側に向けて歩いていく。

背中に布に包まれた長棒を背負い、左腰に一振りの長剣を携えたのは結城だ。

彼は貨物運搬・格納用の巨大スペースを持つ地下第五階層の巨大通路を、表層部にある横町と平行するように進む。

周りでは多くの運送業者や企業の作業員達が歩き回っており、作業用地下階層ならではの汗ばんだ賑やかさが広がっている。そんな中、制服姿の結城の足取りは軽く、そして優雅だ。偶に周りにいる作業員や業者が視線を向けてくるが、彼は気にしない。

向かう先は第五階層、艦首側の企業区画にあるヤクザの事務所だ。事前に仕入れた情報では、連中は浅草で勢力の最も大きいヤクザだ。品川の暴力団とは協働関係を持っており、左右両舷から畳み込んで貨物艦である一番艦を有る程度牛耳っている。

迷惑な話だと、結城は思う。無意味で、軽薄で、華がない。子供の我儘に似たものだ。やっтерることは暴力を脅迫材料にした土地財産

の強奪。強盗紛いの、悪党に為り切れない小物の喚き声。聖譜記述による歴史再現と教導院が国を管理する今の世の中で、そんな連中は何処にでもある路傍の枯葉みたいなものだ。己のちっばけな欲望を満たすための悪行を働き、しかし本当の意味での外道には大きく劣る。

目の前を飛ぶ八工が鬱陶しいように、彼奴らの所業もまた虫に等しい。そして目障りな害虫を捻り殺すのも、人間にとっては気紛れみたいなものだ。

そう、気紛れだ。

一時限目の授業は体育。これはその延長線であり、生徒会臨時相談役としての責務でもある。お膳立ては十分だ、相手がヤクザで、依頼人が番屋の警備隊長、誰も文句は言わない。

「……うっか」

と、どうでもいい考えことをしている間に、目的地へとついた。

目の前、石場街と貨物区画から少々離れた場所に、大きな空き地がある。その向こう、艦内壁側の方角に、小さな企業区画を構成する幾つもの事務所や建物がある。

今、結城の目の前には二階建ての事務所があり、彼はその入り口である正門前に静かに佇んでいる。

顔を上げ、事務所の窓や壁の構造、辺りを見回す。

そしてややあつてから、結城は無言で前へと進み、事務所の入り口である扉のドアノブへと手を伸ばす。

次の瞬間。

音を立てながら扉を開いた結城の視界に飛び込むものがあつた。

目と鼻の先に一瞬で近づいたのは一面の赤。

視界の殆どを遮る、強固な赤い鱗で覆われた豪腕が、時速百五十キロと言ふ猛スピードで突っ込んできた。

/  
/

ヤクザを仕切る、身長三メートルはある赤い巨体を持つ魔神族は、苦しい表情で息を詰めた。

突然のことに思考が追いつかず、息の通らない感覚に苦悶の声を小さく挙げた。

そして朦朧とした意識の中で疑問を作る。

自分達はこの一体の市場街と区画を仕切る暴力団だ。右舷一番艦”

品川”にあるヤクザと協働し、地上げや暴力沙汰で土地買収を行って金銭を稼いでいる。自分達は左舷艦群を縄張りに活動しており、先日、三番艦である”青梅”の一軒屋を”買収”してからは金に困ってはいない。

しかし問題なのは、その後品川の連中から知らせが届いた。今まで亀みたいに引き籠もっていた番屋の臆病虫達が、助けを呼んだそうだ。

別に可笑しな話ではない。

魔神族は肉体的性能に恵まれた流体種族であり、並みの人間では傷一つ付けられない頑丈な身体を持っている。警備・治安維持を担当している番屋の連中でも、自分達を遥かに凌ぐ存在を前にしては手も足を出さない。だからこそヤクザとして好き放題活動でき、それを何とかしようと、番屋があの手この手を使ってきたものもある。そしてそれを全て返り討ちにして来た。

今回も同様だ。

品川のからの連絡で、番屋が自分達を駆逐するために援助を請うたのを知り、予め子分達を集めて事務所待ち伏せしていた。

数はざっと150人余り。品川からの援軍も加え、相手が来るのを待っていたが、窓の外から来た人物を見たときは拍子抜けしたものだ。

向こうはたったの一人。極東の制服を着た、黒髪の少年だ。体格は痩身に背の高さも一般的。腰に剣を持つてはいるが、魔神族である自分の鱗に、そんな細い刀身は効かない。当初は番屋の連中と一緒に

に大人数が仕掛けてくるとか思っていた分、向こうが子供一人だと  
言うことに皆が失笑した。

番屋の連中も、ついに頭がイカれたか。子供に頼るほどの腰抜けに  
街の警備を任せるなど、世も末だと思った。ならばその御厚意に甘  
えて、折角の客人を持って成そうと思いい、自分が出た。

ドアの前に待ち伏せし、向こうがそれを開けたのと同時に奇襲を掛  
ける。

タイミングを計り、ドアノブが回されたのと同時に丸太の如く腕を  
振り上げる。右足を前に踏み込み、それを軸として腰を捻るように  
右から左へと回し、同時に腕を全力で前に突き出す。

地面を基点とした全身の軸運動は、接地面・足首・膝・大腿筋肉・  
股関節・腰・背筋・肩・二頭筋肉・肘・手首・拳の順に沿って、体  
内で燃やされた運動エネルギーをコンマ二秒の瞬間で連続増幅させ  
る。

そして編み出したのは時速百五十キロの右ストレート、暴走トラッ  
クの如き勢いを持つ真紅色のハンマーの直撃に、少年の細い身体は  
無様に吹き飛んだ。

そうなる、筈だった。

/  
/

「ぐっ……」

息の詰まった声が頭上で小さく響く。

そして同時に、結城の視界を赤の一色が埋め尽くした。

ヤクザの事務所に足を踏み入れた瞬間、こちらの脳天を叩き潰す拳は振り抜かれているが、伸び切った巨大な腕は数ミリの差で結城の眼前に止まっている。足を一步踏み出し、拳を突き出した姿勢のまま、魔神族は動かない。

そしてその背後、事務所の机を囲んだヤクザの子分達が怪訝そうな表情で視線を魔神族の背影に向けていた。赤い巨体に隠れて、彼らは結城の姿を確認できない。しかし立ったまま動かない自分達のリダーをおかしく思ったのか、子分の一人が口を開けた。

「親分……?」

疑問が作られる。そして動いた。

動いたのは魔神族の方だ。背後しか見せない赤は、錆付いた歯車のようにゆっくりとその頭を上げて、次の瞬間、三メートル大の巨躯が宙を浮いた。

「……………！」

ヤクザどもの表情が驚愕に変わる中、魔神族の突き出された拳は力無くだらりとぶら下がり、両足が地面を離れ、空中で静止した。そしてその現象の正体と一連の動きを、壁際に立っているヤクザが魔神族の側面から覗き込んだ。

「おい……………、マジかよ……………」

眩きに似た言葉と共に、彼は見た。

視線の先で、奇襲を掛けた魔神族のパンチに対し、結城が背後に背負った長棒を右脇下から瞬時に抜き出し、攻撃が自分に当たるより早く、魔神族の咽喉に刺突をカウンターで返した。予想しなかった強烈な突きを受けた衝撃で、魔神族は息を詰め、同時に軽く意識を失う。そして布に包まれた二メートル長の棍棒が、魔神族の喉笛に突き刺さり、それを支店に結城が片手で魔神族を棒で持ち上げた。フラットとした表情で、結城はまるで机に置いてある林檎を手に取りるように、苦も無く魔神族を空中に支えている。

その姿にヤクザの思考が止まった。予想できなかった、想像するこ

とすらしなかった光景を前に、次の瞬間、

「お騒がせする」

結城の短い一言に、全員が武器を手に取った。

/  
/

朝の浅草地下第五階層。戸塚を先頭とした番屋の警備隊隊員達は、賑やかな市場街の大通りに沿ってヤクザの事務所へと向かう中、遠くから響く大きな破碎音と共に、通りの向こうから素早い速度で地面を何度もバウンドして転がって、自分達の目の前で停止した赤い巨体を見た。

そして彼らは目を白くして地面に突っ伏した魔神族を無言で見ている、

「よし、先ずは要救護者第一名だ」



戸塚の軽い口調と共に隊員が担架を出して魔神族を運び、皆は事務所に向かってまた歩き出した。

/ /

砕かれた事務所の入りを潜り、結城は事務所を出た。ゆつくりとした歩調で空き地へと進む彼の後を追って、ヤクザどもが事務所から飛び出し、彼を囲む。数は150人。手に握る武器は棍棒やバット、刃物など様々だ。そして自分の周囲を円で埋め尽くすヤクザを見渡し、結城は遣る瀬無い顔を浮かべた。

室内での戦闘は自分に有利だが、それでは運動にならないし、面倒だ。どうせやるなら全員纏めて張り倒した方が効率が良いし、広い空き地でなら後始末が楽だ。それに懸念事項である魔神族も、懸念のけの字が出る前に退場して貰った。顎と咽喉の二発と蹴りを合わせた三発で倒れるとは、魔神族も地に堕ちたものだ。

これだと嫌でも溜息をしたくなる。少しは髑り甲斐のある相手だと思っただけに、この落胆は隠し切れない。こんな肉の塊を叩くだけのような行いじゃ、弱い者虐めみたいで後味が悪い。

だから、

「気が変わった……、此処からは職務だ。武蔵アリアダスト教導院生徒会臨時相談役として宣告する。全員武器を捨てて投降しろ、今なら骨を折るだけで赦してやる。そうじゃない奴は纏めて掛かって来い、半殺しにしてから赦してやる」

「あんま大差ねえよ!!?」

ヤクザのツツコミに、結城は、ム? とした機嫌の悪い疑問系を作った。

そして彼は右手に持った棍棒の先端を強く地面に突き立て、

「おいおい、お前等のボスがあまりにも無様だから、オレが慈悲深くして命乞いのチャンスを与えてやったのに、少しは感謝の気持ちは抱いたらどうだ? 本来なら、今此处で血塗れになっても文句は言えない立場なんだよ、お前等」

警告の口調で言葉を返し、結城が棍棒を肩に担ぐ。

身構えるヤクザ達を前に、彼は視線を右から左へと送り、

「Judgmentだ。お前等の罪は強奪と暴力、そして警備機  
関に承認されていない危険物の所持と使用だ。これらに基づき、臨  
時相談役の名において、貴様らを杖刑に処す」

判決の声に、双方が同時に動いた。

円陣を囲むヤクザの内、結城の背後に立つ一陣が奇襲を掛ける。数  
は8人。バットと刃物を振り上げた彼らに対し、結城の対処は簡単  
だった。

視線を向けず、向こうが武器を振り下ろすより早く、バックステッ  
プで自分から相手の懐へと飛び込んだ。

「！？」

突然の行動に距離感を狂わせられたヤクザは動きを止めた。足を止  
め、武器は頭上に振り上げたまま。殆ど密着状態の中で、今度は結  
城が反撃する。

肩に担いだ棍棒をそのままに、ステップで足が地面に着地した瞬間、  
重い震脚と共に地面を踏み鳴らす衝撃音が響く。同時に全身の体重  
を背後に乗せ、腰の捻りと上半身の微かな弾む動きを相乗し、全身  
の瞬発力を打撃面に集積させる。背中を相手と密着させた状態で、  
結城は胴体と足腰の『頸』のみで、強烈な体当たりを打ち出した。

清武田で古くから伝わる近接武術の絶技の一つ、『寸頸』を鉄山靠に上乘せした打撃技だ。

ぱあんつ、という軽快な破裂音が空間に響き、同時に8人の大人が宙を飛んだ。砲弾の勢いで突き飛ばされたヤクザは背後にいる仲間達を薙ぎ払い、そしてそのまま背後にある事務所奥の壁へと叩き込まれた。今の一撃で間違はなく骨を何本か砕いた、脳震盪や強度な打撲、当たり所にもよるが、今吹き飛んだ連中の傷は全治一ヶ月。最もダメージの大きい精神こころは治療不可能だろう。立ち直れてまた悪さをさせられても困る。

「さて、……次は誰だ？」

二十人もの大男が宙を舞った光景に、全員が啞然とする。思考の止まった彼らを現実呼び戻すように、悪魔の脅迫が響いた。

「ひ」

呻き声が上がった。

結城は棍棒を背後に背負う。

「あ……ああ……」

恐怖の喚きと共に誰かが武器を下ろした。

威嚇の一撃が即座に効いてきた、ならばこれから先は素手で十分だ。

「ま……待ってくれ……」

命乞いか？　だが遅い、今更逃げても、追いついて捕まえて骨を折って心を砕いて薙り倒してやる。

人の懇切丁寧な助言は初めから聞くものだ、生意気に粹がって、今まで好き勝手暴れてきたツケを払って貰おう。

「貴様らには、トラウマが必要だ」

/  
/

数分後、事務所の前へと辿り着いた番屋の警備員達は見た。通りの奥から響いた二度の破碎音の後、続いて彼らの耳に届いたのは悲鳴だけだった。

喚き声、呻き声、泣き声、叫び声、肉体の痛みよりも、精神的苦痛が生者に断末魔を上げさせる。

「お、お、願いだあ……だ、だすけてくれええ!!」

誰かが自分達の前で、頭を垂れては助けを求める。そのような人間は様々だ。

両足を曲げられ、這い蹲ることしか赦されない者。

「ぐあ、しうっ、があ、ぶ……っ!!」

顎を砕かれ、言葉を奪われた者。

「あ、ああ、あああああああ、！！！」

心を折られ、狂った者。

そして、

「おい、其処の虫けら、誰が休んでいいと言った？ まだ御仕置きは終わってねえぞ」

「ひいひい！！？ や、やめでくれえええええええ！！！」

黒服の魔人が、彼らの襟首を掴んでは引き摺り、投げ飛ばし、殴り続ける。そしてまた誰かが逃げようとしては、彼に捕まってまた繰り返す。百人以上の暴力団が宙を舞い、壁や地面に叩きつけられては血を流し、新たな惨響を生んだ。

圧倒的な、一方的な蹂躪だ。暴力以前に、局地的天災が降臨したかのような。

その惨劇に、皆が息を飲み、佇み、無言になり、ただただ全てが終わるのを待っていた。

/  
/

浅草地下階層で血の制裁が行われている中、時を同じくして、品川方面では三年梅組の生徒が体育の授業を終えて教導院へと戻る途中である。

表層部の市場街大通りから多摩に向けて、種族雑多な一団は賑やかな雰囲気で雑談しながら、担任の女教師を筆頭に帰り道を歩いている。

「にしても結城さん、結局来ませんでしたね？」

誰かに向けたものでもない質問を作ったのは、眼鏡を掛けた小柄な従士少女アデーレだった。

彼女は上目で首を傾げ、その質問に黒い軽装甲ジャージを着た担任のオリオトライが、肩越しに視線を寄越して言った。

「ああ、結城ならさつき、村山の戸塚さんが連絡寄越してくれたわよ。なんかこっちと同じで、浅草を陣取っているヤクザ張り倒しに行っちゃって」



「授業サボったんじゃないんですか？」

「サボってるわよ。だから暇なところを番屋の手伝いに駆り出されたんでしょね。まあ、アイツは出席点数足りてるから、授業の代わりに役職の責務を果たすのも良いかもね」

笑ったようなオリオトライの返事に、皆がうーん、と唸った。

そして今度は忍者帽子を被った覆面の少年、点蔵が手を顎に当てて言う。

「しかし……、浅草のヤクザで御座るか。大丈夫で御座ろうか？」

「心配するだけ無駄よ。せいぜい殺されないように、ヤクザ達を祈って上げなさい」

オリオトライの言葉に、皆が一様に後ろを振り向いた。

視線の先には、一人の少女がいる。長身で長い黒髪、両目の色が異なるのは浅間・智。武蔵内神社の主社、浅間神社の跡取り娘は皆の

動きに身を引いて、

「な、なんですか？」

「いや、お祈りといえば浅間の仕事だろ？ 幼馴染の黒く淀んだサ  
デイズムを被ってあげるよ」

「何時も俺達にだけズドンしてるのがいけねえんだよ、だから結城  
が授業サボってヤクザに八つ当たりなんかするんだ」

「やっぱり日頃の役員生活でオツパイ成分が足りてないのか、その  
辺どうにかしろよ、射殺巫女」

「なんか最後、非常に関係ない台詞出てましたけど、とりあえずズ  
ドンしときますか？」

青筋立てながら弓を構えた浅間に、皆が同じタイミングで土下座を  
した。

色々と愉快的なその光景に、オリオトライは溜息を吐いて、

「皆、浅間をからかうのもその辺にしときなさい。浅間も、巫女が人を撃つちゃ駄目でしょ？」

「え？ あ、はい、そうですね……、巫女としては邪念を祓うのも仕事の一環ですし、ズドン気持ち良いですし、結城君もクラスの中で連中にやるなら容赦はいらないと言っていましたし……」

「おいおい、真ん中辺りから本音しか出てねよ、このヨゴレ巫女」

うるさいですね、と浅間が皆を睨んで黙らせる。対してオリオトライは苦笑し、視線を浅草の方へと向けた。

「東といい、ミリアムといい、正純といい、どうしてうちのまともな人間は揃いに揃って欠席かねえ。武蔵はもうじき三河に着するし、結城はどうするのか」

遠くで、破碎音が小さく響いた。

その音にオリオトライは息を吐く。

「無茶してなきやいいけど」

/  
/

「おじちゃんとしては、もーちょっと手加減して欲しいんだけどなあ」

溜息交じりの言葉を作り、戸塚は空き地の脇で目の前の惨状を見渡していた。

半壊したヤクザの事務所、地面を斑に染めた血の色、貨物の上や壁の穴、路上や建物の上に引っ掛かっている者達。それを番屋の隊員達が担架で運んで治療し、病院に送って行く。この様子だと手錠はいらないう、どうせ傷で逃げることも出来はしない。

「ちゃんと手加減してますよ？ 殺してないじゃないですか」

「物騒で極端な基準だな、おい。もう巨人族以外にお前と殴り合える奴なんていねえんじゃねえの？」

「戸塚さん、真喜子のことを忘れてません？ アレくらい物騒なゴリラがいるんですから、オレだけ人間捨てたようなこと言わないで下さい」

「モンスターやってるところは否定しないんだな……」

半目で汗を掻く戸塚に、隣りに立つ結城は気にしない。

作業を続ける隊員達の姿を見ている彼に、不意に前から声が来た。

「何処の台風が通りかかったかと思えば、相変わらず化け物やってるねえ、ユツキー」

晴れやかな女性の声に、結城は何時もの半眼で視線を向けた。

その先に立っているのは、自分より背が少し低い、桜色の長髪を持った女だ。軽装甲で纏めた番屋の制服を着た彼女は、上目遣いで結城の顔を覗き込み、笑みを作る。

見知った女性の姿に、結城は眉を顰め、

「どつしてこの女がここにいるんですか？ 戸塚さん」

「おいおい、可憐で愛しの先輩に対して、その物言いは良くないぞ、元副長補佐」

「可憐って誰のことだ？……」

「なんだ？ 鞠禰まりね。お前、結城と知り合いなのか？」

戸塚の質問に、桜髪の女性、鞠禰はうんうんと頷いた。

「この子、私が教導院で副長やってたときの補佐役で、二年下の後輩だったんだよー。私が卒業してからは臨時相談役に職変わりして、今ではあちこちで顔を出してるんだよねー？」

「オレに話を振るな。つかなんでマリが番屋で働いている？ やっぱリアレか？ 暴れ足りないか？」

「私をアンタみたいなバトルマニアと一緒にしないでよ。番屋では内勤担当だから戦わないし、でもたまには手伝いもするけどね」

「あ、そう、じゃっ、オレ帰るわ」

「ちょっと待ちなさいよー。久しぶりに会ったんだから、元パートナーとして色々話すこととか有るんじゃないの？」

回れ右の結城の右腕を、鞆褌は抱きしめるように掴み取る。それに対して結城は舌打ちしてから、邪険な表情を彼女に向ける。

彼は空いた左手で髪を掻き、

「あのな、オレはこれから用事があるんで、構って貰いたいなら他をあたれ、今はノーサンキューだ。つか腕を谷間に埋めるな、年頃の女性がけしからん」

「おやおや？ 氣遣ってくれてるの？ お姉さん嬉しいなあ。ほれほれ、こんなのがいい？」

「この淫乱ピンクが、張り倒してやるっか……」

先程より密着してくる鞆に、結城はこめかみに青筋を立てながら拳骨を掲げる。

その動きに鞆は気にせず、笑みのままで言う。

「まあまあ、冗談だよ。可愛い後輩に会えてちょっといい気になってみただけ、ユッキーには既にお似合いの幼馴染がいるもんねー」

「ばっ！ 智とはそう言う関係じゃない……！」

「あれー、そうなの？ おかしいなあー、ムムム……」

「何がムムムだ……」

首を傾げる鞆に、結城は強引に腕を剥す。

そして彼は背後に背負った長棒を担ぎ直し、今度こそ現場を離れようとする。

「もう行くの？ 少しは見物して行ってもいいのに」



「午後には正純と一緒に酒井学長を三河まで送るんだ。その前に学長を迎えに行かなければならない」

「正純って、今の副会長だよな？ 去年に武蔵へ転校して来たと言ってるけど」

「その正純だ。今の総長連合には副長がいないから、オレが代表に選ばれた。行つてすぐ帰るといふ気楽な仕事だが、形だけでも誰かがやらなければいけないからな」

「ふーん。昔に比べて様になって来たじゃない。いいぞ、ユッキー、格好いい」

何を訳の解らんことを、と結城が呟いた。

そして彼は市場街へと向かう道へと進み、その後姿を、今度は戸塚が呼びかける。

「結城！ 今回は助かったが、次は病院送らないで済む程度で頼む  
！！ 医者に一々説明するのも面倒なんでな！！」

言葉に、結城は軽く手を振った。表層部へと向かう道程を歩き、そして外では、既に空が白く染まっている。

農村などの生活地域上空を通る武蔵が、情報遮断ステルス航行へと入ったのだ。それが示す意味はたった一つ。もうじき、次の目的地である極東代表国・三河へと到着する。

そしてそれは、この先の世界に掲げる、絢麗な宴の始まりの合図でもあった。

## 設定補足&前回との変更点（ネタバレ少々）

第二話投稿前の、本作に対する説明です。

ネタバレ要素があるため、見なくても構いませんが、見た方がキャラクターに対して理解し易い部分があります。原作や葵三葉を読んでいない方が見たら解らない部分も有りますが、余り気にする必要はありません。

で、先ずは主人公から…

### 結城・XX

皆さんご存知の主人公。愛称はユツキー。字名は”酔姫すいき／鬼”。  
実況通神での名前は酒姫さけひめ。前回と比べてやや好戦的になっているが、本質的に変わりはない。

外見：男女共に取れる中性的な風貌、女顔とも言う。可愛い、綺麗と言うよりは凜々しい印象。三つ編みの黒長髪で青い瞳、吊り上った半眼が特徴。身長はやや高め、瘦躯で華奢だが、貧弱なイメージは無い。女装フラグ……。

人間関係：馬鹿姉弟、アサマチとは幼馴染。正純とは転校当初から世話をしていたため、他の連中より親しい。外道クラスの一員としては、物理的で一番ぶつ飛んでる人。ゆえに梅組（99%は某全裸馬鹿）のストッパー役としての役割を働いている。大部分の級友

と同じく、小等部からの古参メンバーだが、古参の中では新参扱い。役職上、武蔵の重要機関に顔が知られており、外交・観光を担当する二番艦（村山、多摩）ではそれなりに有名人。クラスの騒ぎに対して心労が絶えない後片付け役の一人であるため、似たようなポジションである正純や里見・義康、守銭奴コンビや麻呂とは仲が良い。ちなみに人間的に相性が悪いのは立花嫁や毛利・輝元。そしてアサマチや喜美、アンヌ・ドートリツシュのような保護者には頭が上がらない。

戦種：ストライクフオースター近接武術師。基本的には体術や武器による近接戦闘を好むが、集団戦・遠距離戦もそつなくこなす。葵三葉の渡る苦悩と違って、今回はスピードファイターからマルチアタッカーに変更。基本ポテンシャルは一言で言うならば、某第四次聖 戦争での黒ファンと同等。体術・柔術・剣術・槍術・棒術・忍術・手裏剣など、武芸全般を修めた、所謂達人モンスター。経験と技を至上とし、チート的な能力が無い分、安易な小手先は通じないが、技量重視の武者の例に漏れず、性能が自分より上の相手は苦手。例として無敵能力を持つルイ・エクシヴ、自分より実戦経験の多い本多・忠勝など。

術式1（ネタバレ）：契約しているのは浅間神社主祭神の配祀であるオオヤマツミ。山海の神、酒神として信仰されているオオヤマツミの酒の力を体現し、『酔い（＝狂い、酩酊、極度な集中）』を奉納することによって人間大の器で天変地異の破壊力を生み出すことが出来る（片手で魔神族を軽々持ち上げるなどがその例）。酒は古来より国家の重要な祝祭において、神に捧げる神聖な飲み物であり、中国でも殷代で製造された青銅器の多くは酒器である。神道でも身を清め、神との一体感を高めるために酒（＝お神酒）を飲む事はある（wikipediaより抜粋）。オオヤマツミとの上位契

約は極度な集中力、或いは興奮、高揚状態が高ければ高いほど、強力な力を発揮するが、限界に達した精神は人を錯乱させ、狂気を生むため、術式の制御には理性と本能の絶妙なバランスが必要。なお、奉納に必要な『酔い』は敵味方の精神状態も含まれているため、乱戦では双方の士気が高いほど加護の力も増す（基本的に神は祭り好きのため、尚且つオオヤマツミは武神・軍神としても信仰されているからである）。

術式2：神社の基本術式である禊系統の術。アサマチが普段から使用しているものを近接戦に特化したもの。メジャーでシンプルだが安価で安定性が高く、障壁・結界破りや対魔・対霊的加護など、汎用性は高い。結城の場合、練度はアサマチに及ばないが、酒神の術式と併用して出力と効果、そして有効範囲を強化することが出来る。これによって武蔵のメインイージスシステム二号機へと昇格。

武器：十束剣<sup>とつかのつばね</sup>、及び布に包まれた二メートル長の棍棒。結城家が自作した神格武装だが駆動能力は封印中、今は強固な一般武装として機能している。剣と棍棒はセットであるため、二つで一つの武装である。

（ ）

解らない人、少し勘違いしている人がいるようなので少し説明。

十束剣<sup>とつかのつばね</sup>の十束は長さの単位で、『拳10つ分の幅の長さを持つ剣』という意味で、一つの剣の固有の名称ではなく、長剣の一般名詞として使われています。

境ホラの前作である終わりのクロニクルでは十拳とじかという同名の武器が登場していますが、本作における十束剣とは一切関係がありません。

( )

特技：一人暮らしであるため家事全般は得意。及び契約している神が酒神であるため、奉納の一環として酒量が異次元クラスなまでに高い。

その他：結城の正体について念のため説明。結城は襲名者ではなく、あくまで某史実人物をモチーフとした同姓同名のオリジナルキャラだけです。この先原作で同じ名前のキャラクターが登場しても、本作品では違う方向で解釈して行きますので、御諒承下さい。

次。一部原作キャラの、本作での主人公との関係と立ち位置。

浅間・智：巨乳ヨゴレ巫女少女アサマチ。原作ではトリー依存症患者で側室候補の一人。本作では結城の介入で好意のベクトルが主人公向けに。ヒロイン一号。

本多・正純：ヒロイン二号。本作での結城依存症患者。片思いだが自覚が無く、ある意味第二主人公。

葵・トリー：原作主人公。本作では少しだけまとも(?)なキャラ。ホライゾンの死と自殺未遂の件で結城に負い目を感じている。陰で結城が武蔵に居続けられる要因を十年間作り続けてきた人物。

ヒロインじゃないよ？

葵・喜美：賢姉。結城の理解者兼天敵一号。馬鹿と一匹狼な二人の弟を温かい目で見守る(?)エロスの代弁者。基本原作同様。

ホライゾン・アリアダスト：ホラ子。葵三葉を読んだ方々なら解る、結城と最も因縁深い人物。ホラ子救出篇以降の結城との遣り取りが鍵。

本多・二代：まだ書いてもないのにパートナーフラグがピンピン立っている侍娘。ステレオ本多をハーレム要員にしろと言ったその君、ちよつと廊下で土下座して来い。

立花夫妻：葵三葉でライバルフラグが確定した二人。主に立花嫁アルマダ海戦後に仲間になるため、所謂一面ボス扱いという可哀想な二人。虐めじゃないよ？

酒井・忠次：左遷男。結城の恩人であり、被監護者。結城と武蔵

さんの気苦労要素の一人。何気に結城の切り札解放に役立つ人物。

五大頂：結城と因縁深い魔境軍団、ボスフラグ確定。

ルイ・エクシヴ&毛利・輝元：ラスボス予定キャラ。物理的性格的にも結城と相性が最悪な二人。歴史再現上、必ず敵対するキャラ。

アンヌ・ドートリッシュ：原作では惜しい人。結城の本気を促すおかんキャラその一。

以上、後半辺りから訳がわからない感じですが、今後の予定とか含めた説明(?)です。

質問があったら感想欄に書いてください。時間が有ればお答えします。



## 第二話　騒がしい昼休み

side 暴れた後の虚しさ（配点：相談役）

時刻は四時限目の授業が終わる前、日の光が人々の真上に登った中で、オレは空を見上げた。

場所は奥多摩表層部。艦首の墓地へと渡る道程の上、ステルス航行下の、仮初の白い空で、武蔵は三河に向けて飛ぶ。時間としては一年。この広大で小さい神州を一周し、再び自分達はこの場所に戻ってきた。

自分達の居場所である、この武蔵を支配する者がいる土地へ。

……松平・元信……

極東代表国・三河の当主にして、実質的な極東の国主でもある男。他国の極東居留地が、そのまま他国の暫定支配下に置かれた今、聖連に唯一認められた独立領地である武蔵の所有者でもある彼は、しかしその正体は聖連の極東管理における傀儡政権の権化に過ぎない。

十年前、聖連に半脱退したP・A・ODAとの正式同盟を結んだ三河は、聖連やP・A・ODAとも鎖国状態となり、家臣団や住民の人払いを含め、P・A・ODAへの献上物として、中心部である名古屋に大型地脈炉である”新名古屋城”の建造等という国策により、

今では三河は地脈の乱れによる怪異の多発によって天外魔境と化している。

その場所に、オレは午後以降りに降りることとなっているが、今年も多分名古屋には入れないだろう。

自分は、生まれが少々特別な人間だ。訳有って、三河中心地である名古屋に足を踏み入れることが赦されない。以前にも何度か三河に交渉して、どうにか名古屋に入れないのかと頼んでみたが、一度も許可が通ったことはなかった。

今年は、酒井学長の三河時代の旧友が、十年ぶりに連絡を寄越したのを契機に、番屋への書類手続きと護衛を兼ねて、オレと正純が同行することとなったが、それでも過去の例に漏れず、三河郊外への同伴のみとなった。

「……ちっ」

思わず舌打ちする。待ちに待っていたクリスマスプレゼントが前にあり、ワクワクした気持ちで箱を開けてみれば、中身が空っぽであるような喪失感だ。よく思えば、オレはずっとそんな期待と空虚の狭間で行き渡っている。昔、思い出したくも無い思い出の中で、子供頃の自分は後悔と失意の最中にいた。それは今でも自分の中にあるもので、たとえ十年の時を経ても、その感情の苛烈は治まることは無い。

折り合いを付けられずに、この心は現在と過去を二分することで、その苦痛を耐えてきた。その切欠もまた、自分にとっては思い出したくも無いものだが、その御蔭で今の自分がいると思うと、矛盾した気持ちにもなる。

逃げていた。それと同時に向き合いたい気持ちもある。そのためにも、オレは名古屋にいかなければならないというのに……

「……………結城？」

「ん？」

呼び声に、空を仰いだ視線を前へと向ける。周りをよく見ると、何時の間にか墓地の方へと辿り着いていた。走馬灯よろしく、嫌な赤色の記憶に浸っていた意識が、白天に照らされた死者の庭園によつてようやく現実へと引き戻された。そして同時に、コンマの差を経て、オレは縦列に並ぶ墓標の中で見知った顔を見つけた。

その瞬間に、自分の息が詰まるのを自覚する。

目の前に立つ人物は二人。一人は男子制服を着込んだ小柄な黒長髪の子供のようなあどけなさの残る顔立ちでオレを見るのは、午後の予定に同伴する副会長の正純だ。

しかし問題なのはもう一人。

正純の隣に立つのは白い長髪と人工生態パーツで身を包んだ自動人形の少女。無表情な顔の下で、こちらを見る青い瞳に、オレの思考にノイズが走った。

どうしてだ？　今の自分には、自動人形がまったく違う人間に見えるてくる。

スラリとした黒い長髪と、宝石のような青瞳。透き通るような肌を持つのは、今とは姿形の違う幼い少女。顔立ちが自分と何処か似ているのは、昔の自分か、それとも今まで逃げてきた後悔か。

ざり、砂を踏むような感触が脳に響く。何処か悲しいような少女の表情に、熱い汗が首筋をなぞる。やめる、やめてくれ、そのような顔でオレを見るな。懺悔に似た悲哀と嫌気が、無自覚に暴れまわる。二分した自分を、また一つに纏めてしまうような感覚に、オレは自己のアイデンティティーを見失いそうになる。

しかし、

「どうかしたのですか？　結城様」

他の誰でもない、自動人形の声に、オレは我に返った。

ノイズだらけの世界に色が走り、五感が摂取する情報は正常だ。やばい、まさか白昼夢を見てしまうとは。目の前で、P-01sが首

を傾げており、その横で正純が心配そうな目線でオレを見ている。気付けば、汗を流しているのは気のせいではない。

「大丈夫か？ 結城。顔色が悪いぞ？」

「あ、ああ、平気だ。少し日を当たり過ぎたようだ」

「結城様。よく日向ぼっこをしておられるようですね？ 夏も近いのですから、身体にお気を付け下さい」

言葉と共に、自動人形ことP-01sが空を見た。

その動きに、オレも正純も釣られて上を見る。すると視線の先で、空が裂けた。ステルス航行の白い空が、カーテンのように左右に広がり、その上で、青い色が一気に周囲を覆う。

情報遮断ステルス航行が解除された。それが意味することは一つ。武蔵が三河に到着するのだ。

「もうすぐ三河か。 あれから一年、また色々と変わっているだろっ」

感慨めいた正純の言葉が響く。コイツは元々三河の住人だ、一年前に転校してきたのだから、そういう気持ちがあるのも無理も無い。対して自分には、そのような懐古的な気持ちや居場所も無い。武蔵で自己完結している身にとっては、この小さくも巨大な船だけが全てなのかもしれない。此処にいる住民の中にも、武蔵で人生の全てを歩き終えるという考えを持つ奴がいるかもしれない。

自由な鳥籠だ。

矛盾した言い方だが、こう言う言葉が似合っているとオレは思う。オレは武蔵生まれの人間ではないから、そういう考えに理解は出来ても、共感は出来ない。

嘗ての自分と同じように、武蔵を通過点として、また別の何処かへと去ってしまうという気持ちもある。今までがそうだったし、これからそうなってもおかしくはない。羽を休める時間が早すぎて、つい十年も寛いでしまっただけなのかもしれない。本当の自分には、ただ其処にいて良いだけの居場所なんてないのに。

「……」

哀愁だ。昔のことを考えると、つい気弱になってしまつ。悪い癖だと思ひ、しかし追い討ちをかけるように、それが来た。

頭上。奥多摩艦首の前方、中央前艦武蔵野の上空を抜けるように出てくる影がある。準バハムート級の武蔵と比べたら赤子みたいな大きさを持つのは、一隻の航空客船だ。

客船は非戦闘状態下の空域では、規則違反になる高さで武蔵と擦れ違つような操鑑を行っている。普段なら撃墜や警告が入ってもおかしくないのだが、その行動に武蔵側からの放送がないのは、

「……三つ葉葵の紋章」

陽の逆光の中、客船の側面に暗くも自己主張しているのは、三河松平家の家紋だ。つまりそれは、

「あの船に、元信公が乗っているのか!？」

正純の言葉に、オレは心の中で頷く。

松平・元信は、P・A・ODAとの正式同盟を結んでから、三河の中立的立場を証明するために、武蔵への乗艦を聖連に禁じられている。

前に武蔵に降りたのは十年前、武蔵が改修される直前のことだ。今

こうやって客船で此処に来るのは、あの男のサービス精神に基づいた御出迎えだ。

そして、

『 やあ、久しぶりだ武蔵の諸君。先生の顔を憶えているかい？ 』

武蔵全体に、男の声が響いた。

外部拡声器から作られるそれと同時に、目の前の空に巨大な鳥居型の表示枠が展開される。同じ状況は艦内のあらゆる場所で起きており、そして誰もがその光景に目を奪われているだろう。

しかし、

『 毎度毎度、私が、 三河の当主、松平・元信だ。先生と呼んでくれて結構だとも 』

画面の中、眼鏡を掛け、学帽を被った男の姿に、オレは背を向けた。



/

/

side 未熟者の空回り（配点：副会長）

斑な雲に飾られた空の下で、放送が流されている。三河松平の家紋を持つ客船から展開されている表示枠を前に、私は極東の主である男の声を聞いていた。

『 』として、聖連の指示により、武蔵住人は三河に降りることが出来ない……』

話の内容は、今回の三河貿易に関する注意などだ。相変わらず、三河に関する現状の説明はなく、それが当然と言えば当然だとも思う。

『 だから皆、社の地脈通神やコネクションを使って三河と交流して欲しい。出来れば先生も知りたい。君達がどんな生活をしているかと、これからどうしたいのか……』

元信公の言葉が続く中で、不意に、背後で動きがあった。砂埃の覆いかぶさった地面を擦るような音と共に、私の背後にいた結城が背を見せた。

「どうしたんだ？ 結城、三河当主の放送だぞ？ 見ないのか？」

「いいんだよ。 武蔵全体でやっている放送だ、見なくても耳には届く」

それはそうだが、何やら様子がおかしいな。

目の前の男、武蔵の臨時相談役である結城と私は、私が転校当時のらの知り合いだ。クラスの皆との付き合いが短い中、どうしてか、この男だけとは普通に接してられる。

去年の生徒会選挙で自分が副会長に任命され、会長が総長を兼任している葵・トリーに立候補された中で、自分は周りと距離を置いてしまっている。私は武蔵に来て日が浅く、より武蔵を理解している彼が会長に選ばれたのは致し方ないことだが、芸人気質な葵の言動は人々の支持を得ても、それは実務的なものではない。

アイドル人気のような、聖連の暫定支配下に対する諦めのような感覚に、私は周囲との距離感を憶えているのかもしれない。それが祟って、私は学費を稼ぐためのバイトと、副会長の仕事に漬けっぱな

しでいた。付き合い方の差が広がっていく中で、しかし結城だけは、何時も通りに接してくれていた。

よく考えれば、この武蔵で友人と言えるのは、彼しかいないだろう。だから、

「どづかしたのか？ さつきから様子がおかしいが……」

「否……」

後姿の結城の返事に、私は彼の表情が見えない。しかし低い声から聞くには、気分が優れないのは確かだろう。

参ったな、普段は自分から世話になっている分、逆の立場になると気遣いが出来ていない。これでは友人失格なのではないのか？ そしてそんな自分の悩みに対して、元信公の放送は御構い無くに続ける。

『夜に、三河の方をしてみるといい。ちよつとした花火を用意しているからね。では、本日の授業はまずこれまで……！』

言葉と共に、通神が消えた。

そのことに、結城が一瞬だけ視線を空に向けたのを見逃さなかった。どうやら、放送か、元信公のことが気になっていいのかもしいれない。しかしここでそれを確かめるのは果たして正しい判断か、そう考えられている中で、結城は顔を私の方に向けた。

こちらを凝視し、眉を浅く顰めた彼の表情に、私は思わず緊張した。少女然とした整った容姿にドキリとした自分の気持ちは悪くないよな？　ともあれ、何かと思い、とりあえず質問を試みたが、

「な、なんだ？」

「あれ……」

指を私の背後に指すその動きに、私は遅れて後ろを振り向いた。

そして視線の先、通りの脇に立っているP・O1sに、私の目は固定された。当然だ、頭上の空を通り過ぎる客船に向かって、こちらに背を向いているP・O1sが手を振っているのだ。

その動きは客船が艦首を三河の方に向け、帰途への道を取るまで止まらない。思わずえ？　という疑問詞を作り、私は好奇心のあまり聞いた。

「お上がりの観光客のようなことをするんだな」

「Jud、船の方から、こちらに手を振っている方がおられましたので」

艦橋の方からだろう。自分には見えていなかったが、P-O1Sも相手が誰だか解らないだろう。自動人形は人の助けになることを行動原理としているため、それを基準に手を振っているのかもしれない。

しかし、

「こちらを見て、笑っていました」

その言葉に、背後で結城が遠ざかっていく音がした。しまった、どうやら逃げられる隙を作られてしまったようだ。

慌てて振り返ると、既に彼は木陰通りの方へと向かっている。そして同時に、教導院の方角から鐘の音が響いた。

四時限目を終え、昼休みに入る音に、私はただ、友人の背中を見送ることしか出来なかった。

/  
/

side 白昼下の告白会議（配点：馬鹿）

「何やってんだ？ お前等」

昼休みの最中、既に三河の武蔵専用陸港に停泊した武蔵の上、奥多摩艦首の墓地で正純とP・01sと別れた結城は、今、目の前にある光景に疑問を作った。

場所はアリアダスト教導院前、校舎二階へと続く橋の下、一番下の階にある階段で、見覚えのある面々が集っている。

笑ったような目と茶色の髪を持った少年を中心に行っているのは、三年梅組の生徒達だ。クラスの大半が生徒会と総長連合の役員である彼らは、リーダーである総長兼生徒会長の葵・トリーを筆頭に、ある議題を進めていた。

それは、

「ああ？ 見て解らねえのかよ、結城！ 俺の心のブラザーであるお前とは電波で繋がっていると思っていたのに、悲しすぎるぜ！」

「オレが何時電波系になってお前のブラザーになったのかは全く身に覚えが無いが、とにかく説明しろ」

結城の素っ気無い促しに、茶髪の少年、葵・トーリが額に手を当てて、あちゃー、という感嘆と共に言った。

「そうかそうか、聞いてくれるのか、マイブラザー。ならば  
単刀直入に言おう、実は俺、明日、コクリに行くんだ」

「よし解った。死刑判決だ。罪状はうら若き乙女の人生に対する物理的脅威と精神的脅迫だ。つまり死ね」

「おいおいおい、まだ告白が成功すると決まった訳じゃねえのに、何そのラスボス発言。それに裁判はウツキーの担当だろ？」

やかましい、と結城が吐き捨てる。

彼はおもむろに長棒を引き抜き、肩へと担ぐ。その動きに周囲五メートル圏内にいる生徒全員が十メートル程退却し、木々や遮蔽物に身を隠す。

それに対して結城は気にせず、ムスツとした表情でトリーに言った。

「お前の悪巧みは計画段階から周りに迷惑を掛けているんだよ。ことが起きたときには既に遅い。一応冥福は祈ってやるから、その危険な告白を受ける相手は何処の誰だ？ お前が死んだときに自分のせいだと自責させないように、オレが代わりに説明してやる。貴女の御蔭で武蔵の日常が守られました」とな

「あれ？　なんか朝から本気モード出してね？　ちよつとまって、人生ロード。おかしいな、俺何処で選択肢間違えたんだ？　結城の攻略は一番最後に取っておく積もりだったんだが……」

「よしつ、決めた、今此処で死なす！！　現代アート風味な愉快なおブジエに変えてやる！！　ピンク色のクリームムース宜しくみたいな奴に！！」

両腕で棍棒を頭上に掲げた結城を、皆が一斉に押さえつける。華奢



な体格からは想像できない怪力で暴れる彼を前に、トーリが愉快な表情で言った。

「まあまあ、落ち着けよ結城。別に迷惑になることは無いと思うぜ？　なにせお前も知っている相手だからな」

「その台詞はこの一週間聞いた中で最もおぞましい台詞だぞ？　誰だ？　後戻りは利く相手なんだろうな？　つかトラウマにならないよな？　主に相手への」

質問に、トーリは大丈夫だって、と手を振りながら言う。

彼は少し間を置いて、息を吸い。結城に聞こえる程度で、はつきりと言った。彼が告白する相手、それは、

「ホライゾンだよ」

告げられた名前に、結城の動きが止まった。

彼は硬直し、目を見開き、しかしややあってから、掲げていた棒を下ろした。そして力の抜けた結城の動きに、皆が手を離す。対して

トリーは階段に座ったまま、ただただ笑みのまま、己の親友の動きを見ていた。

結城は目を伏せて、溜息を一つ吐く。彼は何時も通りのゆっくりとした歩調でトリーの前へと進み、軽く手をトリーの肩に乗せて、

「気の毒に、思いつきりフラれて来い」

断言された言葉に、トリー以外の全員が地面に突っ伏した。

「おいおい！ 何で此处でお前が俺の台詞を奪うんだよ！？」

「お前もフラれること前提かい！！？」

皆のツッコミに、トリーは何処吹く風。彼は笑った目のまま、目の前の結城に溜息交じりの口調で言う。

「あのな、結城。此处は普通、新たな青春への第一歩を踏み入れる長年の幼馴染に対して、何処か助言とか、祝いの言葉を送るのが先

じゃねえの？ まあ、視聴率考えて、俺がフラれた方が面白いけど。その辺はちゃんと俺たち心で通じてるんだな！！」

「とりあえず、その愉快的な舌はいらないよな？」

今度は左腰の長剣を引き抜こうとした結城を、またも皆が宥める。同時に皆がトリーを睨んで黙らせ、各々が階段に座りなおしたことで、結城を交えた会議が再び始まる。

「で？ 馬鹿が人の身内に手を出すのは非常に勘弁ならないが、トリーに恥をかかせるための準備は出来ているのか？ 書記のネシンバラ君。説明どうぞ」

言葉に、目の前の表示枠を操作している眼鏡少年が答える。彼は何処か詰まらなさそうな表情でズレた眼鏡を掛け直してから、結城の質問に答えた。

「議題そのものが不真面目なこの会議に、どんな期待を込められると思う？」 結城君」

「つまり点で駄目だと言うことだな。でも少しは何かやっているんだろう？ 三河に降りる前に、少しはオレに暇潰しのネタとかを寄せよ」

「結城君、色んな意味で最悪だよな」

二人の会話に、横で誰かが手を挙げた。

忍者帽子に覆面という格好をしたのは、”第一特務 点蔵・クロスユナイト”という腕章をつけた少年だ。結城が視線を寄越した先で、点蔵は先ほどの結城の質問について説明する。

「結城殿。実は先ほど、告白の練習として、”手紙作戦”を提案したで御座る」

「……手紙作戦って、あれか？ ラブレターか？」

問いに、点蔵はJud・と答えた。

そして、



「論点がズレてるが、まあいいか。しかし確かに、これは初心者には難易度が高いな。点蔵は失敗経験豊富だから好として……」

「ちよっ！？　さらりと痛いこと言ったで御座るよ、この御仁！！  
最悪で御座るよ！！」

「うっせーなあ。この前、テメエの告白の準備に一緒に一夜漬けになって、結局お前がフラれたことでこっちの労働力が損になったことを忘れるなよ？　お前、貸し一つな？」

告げられた事実には、点蔵が地面に跪く。それを皆が無視し、しかし今度は、結城とトリーの後ろから声が響いた。茶色の長い髪を靡かせているのは、“葵・喜美”の名札をつけた少女だ。

「フフ、そんなこと言って。じゃあ、結城。そういう貴方はこのよ  
うなことに對して経験とかは？　可愛い顔で偉そうなこと言って、  
それで何の答えも無かったら駄目じゃない？」

喜美の言葉に、皆が結城を見た。

そしてやや離れた場所。近くを通る生徒の間で、ひそひそと声が届いてくる。

「結城先輩の色恋話！？ やだ、私超知りたい」

「武蔵で貴重なクーデレキャラの恥ずかしい話……！ 去年の女装ネタは今でも伝説だと言うのに！！」

「酒姫まじ戻って来い！！」

話題に、結城が鋭い眼光を飛ばす。それだけで生徒達はそそくさと校庭を通り過ぎて行き、同時に喜美が背後からノートとペンを結城に渡す。

「とりあえず、愚弟の道標として何か書いて見たら？ 何でもいいから」

「は？ オレ、そんな相手はいないんだけどなあ……」

言葉に、背後の校舎三階の窓で動きがあった。

茶道部の活動に使われている教室の窓から、巫女少女の浅間が思いつきり手を振っている。ジエスチャーからして、”私！ 私が練習相手が良いです！！”とか言っているようだが、背を向けている結城には当然伝わらない。

しかし浅間の動きに気付いた皆の内、黒い三角帽子を被った金色の六枚翼少女が代わりに言う。”第三特務 マルゴット・ナイト”の腕章をつけた彼女は、笑みの顔で結城に提案する。

「ナイちゃん思うに、アサマチとかどう？ ユツキーとは幼馴染で、日頃の感謝を含めて一言とか？」

言葉に、校舎側で浅間が親指を立てた、対して結城はと言うと、

「え？ 智？ うーん、どうだろうか。智とは家族みたいで、そんな風に見たことは無かったなあ……」

校舎側で浅間が涙目で頂垂れる。しかしそんな彼女に御構い無しに、今度は黒い六枚翼、”第四特務 マルガ・ナルゼ”が言った。



「じゃあ、手始めに総長のことを書いてみたら？ その方が面白いし」

「ナルガ。お前ホモネタが欲しいだけだろ？ でもそうだな、野郎相手には気遣いもいらさないか」

笑った顔が非常に腹立つのでどうにかして欲しい

いい加減全裸ネタにはもう飽きたからどうにかして欲しい

今もオレの隣りで脱ごうとしているのが鬱陶しいのでどうにかして欲しい

e t c ……

「こんなもんか？」

「こつちも箇条書き！！？ しかもスラスラ書きまくっているで御座るよー！！」

「仕方ねえだろ？ コイツの印象がインパクト過ぎるのがいけねえんだ」

「なんか俺の告白作戦から結城の桃色話題攻防戦になっているようにだけど、結城ってそんなに俺のこと見てたんだ？ 照れるなあ」

「うん、コレ、殺意の裏返しだから」

現在進行形で全裸になろうとしている馬鹿を冷たい目線で睨む。そして結城はペン先でノートを突付き、その後ろで喜美が再び問う。

「まあ、愚弟に対する嫌味はともかく。結城、貴方も好みの女性の一人や二人くらいいるでしょう？ 妄想でもいいから、それについてのコメントくらいあっても良いじゃない？」

「お前達って本当にこう言うの好きだな。いい加減本題に戻れよ」

ムツツリ系キャラの恥ずかしい反応が面白くて堪らない

自爆発言が可愛くてつい虐めたいのが堪らない

長着の隙間から見える谷間がエロくて目のやり場に困るのが堪らない

e t c ……

内容に、皆が一斉に校舎側を見た。視線の先では浅間が耳を赤くして両手で顔を隠しているのが見える。そして御構い無しに、結城はペン尻で頭を搔きながら言った。

「語呂悪いな。書き直すか？」

「フッフ、流石は我らが臨時相談役ね。その無自覚なSには惚れ惚れするわ」

うーん、と唸る結城の背後で、喜美がノートとペンを取り上げる。

そして、

「つまり今の状況で、結城も愚弟も大概だということが解ったわ。

やっぱり男は皆オパイ好きよね!」

喜美の高らかな発言の横で、御広敷が首を横に猛烈に振っているが、

誰も気にしない。

そして今度は、階段の二段下に座る巨軀が言葉を作った。強固な外殻に覆われたのは半竜のウルキアガ。彼は腕を胸の前で組みながら、結城に問う。

「なるほど、拙僧はてつきり、結城も拙僧と同じく年上粹だと思っていたが……、まさか巨乳粹だったとは誰も思つまい」

「おい、其処のトカゲ。人の人格が疑われるような発言は止せ。オレはどちらかと言うと正常な範囲での雑食だ。男は含まない」

「見境無しかよ!」

言葉に、皆が一様に突っ込む。しかし結城はそっぽを向き、横にいるトリーに言葉を作った。

「まあ、なんだ。改めて言うけどよ、こう言うのは気持ちの問題だろ? お前はそれに余計なものが付いて来るから迷惑なんだ。たまにはネタとか芸風捨てて当たって来い。そうすればどうにかなる」

「おお、今日聞いた言葉の中で一番ツツコミ難いな、コレ。  
成程、余計なものは必要ない、真正面からかかれと言うことだな？」

「？　なんか微妙にズれているが、まあ、そう言うものだろう」

結城の返事に、トーリがガッツポーズをする。彼は相変わらずの笑顔で両手を結城の肩に乗せ、

「有り難う、結城！！　これで次の練習にも精が入れるぜ！！」

「？　……何のことだ？」

「モミンクの練習だよ！！　明日の告白の前に、ホライゾンのオパ  
ーイを疑似体験しなくちゃならねえのさ！！　なんだか近頃、ソム  
リエとしての誤解が広まってんだ。キャラ立ちというのが有るだろ  
う！！？」

「オレに触るな糞虫。　　つか十二分にキャラ立っているだろ。  
そもそもお前はなあ……」

「 あら？ 皆さん、こんなところで何してるんですの？」

結城の言葉を遮るように、階段の上から声が響いた。皆が一様に振り向くと、校舎の入り口から二つの影がやってくる。

一つは、煙管を啜えた猫背の中年過ぎ男性。その姿に、結城が腰を上げた。彼は猫背に向き直り、その名を呼んだ。

「酒井学長……」

呼び声に、酒井が、よう、と手を挙げる。そして彼の横では、ボリユームの大きい銀色の髪を持った少女がいる。獣のような黄色の瞳を持つ彼女は、”第五特務 ネイト・ミトツダイラ”という腕章を付けている。己の背丈ほどある革製バッグを担いだミトツダイラは、階段に陣取る皆を見て、首を傾げた。

その反応を余所に、横にいる酒井が結城に言う。

「そろそろ時間だ、結城。正純君は見なかったか？」

「待ち合わせは村山の昇降口だろ？ さっき墓地の方で会ったが、

多分先に行ってると思う。

で？ ネットも一緒に降りる訳？」

尋ねられた質問に、ネットが首を小さく横に振った。

そして、

「今回、武蔵住民は三河に降りることが出来ませんのよ？ それに松平分家を預かる騎士の私が、P・A・ODAへの献上物を作る三河に行くわけがないでしょうに。酒井学長には、分家の権利関係に必要な証書を求めただけですわ」

返事に、酒井が頷いた。

そして今度は、トーリが笑みのまま酒井に問う。

「学長先生、三河に降りるのかよ？ 左遷されたのによく許可が出たな」

「昔の仲間からの呼び出しでね。あれから十年、色々変わっている処もあるだろうし、酒飲んだら直ぐに帰って来るよ。最近の三河は物騒だから、あまり寛いでいると聖連が煩いしねえ」

酒井の言葉の横で、誰かが背後から結城の肩を叩いた。

その反応に、結城が振り返ると、其処には一人の男性と少女が立っている。”会計 シロジロ・ベルトーニ”と”会計補佐 ハイディ・オーゲザヴァラー”の腕章をつけた二人の内、シロジロが結城に向けて言う。

「結城、少し頼みごとがあるのだが」

「……なんだ？」

「金を使わない程度で頼む。序でいいから、三河の流通を見てきてくれないか。　　妙なことに、今年の三河は武蔵から何も買っていないか、売りに徹している。さつきも入港前に大量の売り込み提示が来たんだ。御蔭で貨物区画では運送業者が倉庫の取り合いをしている」

「成程。まあ、オレは郊外の方で引き戻してくるから、帰りに番屋で見に来てやるよ」

「助かる」



シロジロの礼に、結城は軽く手を振った。しかし今度は、横にいるハイデイが言葉を作る。

彼女は目の前に表示枠を展開し、一列の数字が記されたそれを結城に見せた。

それは、

「で、ここから悪いけど、とりあえずユッキーにはここに書かれた金額を予定の日付前に払って欲しいの。理由は解っているよねー」

「今朝に浅草の貨物区画を吹っ飛ばしたからな、覚悟はしているが……この数字ちよつとおかしくない？　こんなにかかるのかよ、あのオンボロ区画」

「ちゃんと色々と計算して出した値段だよ？　お金で解決できる内は、ちゃんと払って欲しいな。あとここにサインしていてね？　ユッキーが借金張り倒すのは有り得ないと思うけど、一応念のため」

色々馬鹿げた数字に、結城が眉を寄せるが、ここで難癖つけても意

味は無いと思い、素直にサイン枠に指を押しした。軽快な音と共に、契約成立の文字が浮かび上がり、ハイデイが笑顔でまいどありー、と答える。

そしてその背後で、皆との会談が終わったのか、酒井が階段の方で結城を呼んだ。

「おう、結城。時間もそろそろだ。行こうか」

「ああ、解った」

先に前へと進む酒井の背後に続き、結城が足を踏み入れようとした時、またも結城を呼ぶ声がした。それは階段の方、皆の中心に座るトリーからだ。

「結城」

「なんだ？」

「頑張れよ。名古屋には行けねえけど。お前の望みは何時か叶うと思っぜ」

その言葉に、皆が身を固くした。誰もが気遣いの視線を結城に向け、しかし結城は気を悪くした訳でもなく、何時もの感じで答えた。

「お前、何を根拠に……」

「お前の昔話は難しすぎて、俺には解んねえ。 けど、お前のことを解ってくれる人が、この武蔵にはいるだろ？ 浅間やセージくんみたいに、ちゃんとお前のことを祈ってやれる奴がいるなら、お前の望みはきつと叶うさ」

言葉に、結城は苦笑した。そしてそのまま視線を校舎の方へと向ける。開かれた三階の窓で、幼馴染の少女が微笑みでこちらを見ている。そしてそれは、目の前にいる皆も同じだ。どうやら、三河と元信の事で、皆に余計な心配をさせたようだ。

そのことに自然と結城も笑みをこぼし、ややあつてからトリーに言った。

「駄目男のくせに、決まり具合だけは上等だな」

「俺は不可能だからな、だから万能なお前が、背中を押してくれるんだろ？」

「プラスマイナスで両方有能ってことか。だったら、どうにかしてでも名古屋に行かなくちゃならねえな」

言葉に、結城が振り向いた。酒井の後を追うその動きに、トリーは手を振ろうとしたが、

「あっ、そつだ。ちょっと待ってくれ」

「？ 今度は何だ？」

急な呼び掛けに、結城がまた足を止めた。

そしてトリーが何かを思い出したかのように、また言葉を作る。

「実は今夜。八時に明日の告白の前夜祭としてここで幽霊探しするんだけど、結城も来るか？」

「またお前は妙な悪巧みを……、って、幽霊探しか……。確かに近頃は末世や怪異とかで色々と騒がしいから、時期的には丁度いいか」

「セージュンにも聞いて来てくれ。人数多い方が楽しいだろ？」

「目的と手段を間違えてね？ まあ、解ったよ。時間が間に合えばオレも参加するけど、正純の方は知らないぞ？」

「ああ、結構だ」

返事に、今度こそ結城は教導院を後にした。目の前で酒井が自分のことを呼んでいるのが解る。そして、徐々に遠ざかっていく彼の後姿に、トリーは笑みのまま、皆に言う。

「いよっ！！ んじゃあ、俺も張り切って告白の練習をするぞ！  
！ ネイト、さっき言った協力の話、本当に良いんだな？」

「え、ええ、勿論ですよ。 騎士として、約束を違える訳がありませんことよ」

日の下で、騒がしくなっていくクラスの動きに、誰もが思った。

何時もと同じ、変わらない朝、変わらない風景。こんな平凡で、しかし何処か違った日常が続けばいいと。

例えそれが、最後の日常を迎えるだけの静けさでも、人々はそう願わずにはいらなかった。

## 第二話　騒がしい昼休み（後書き）

ようやく出来ました第二話。

東辺りとか、正純辺りとか、アサマチ辺りとか色々欠けているが、これからもじゃんじゃん書いていくよ。

あと、最近奥州組が気になって仕方ありませんクロです。結城が成実や政宗と対面したらどうなることやらと、想像という名の妄想が止まりません。

では皆さん、また次回。

### 第三話 事後の告白

山道。武蔵から降りて、東の山系を通る回廊の上で、三河郊外に向かつて歩く人影が三つある。

横に並んで会話をしながら先に進むのは、武蔵アリアダスト教導院である副会長の本多・正純と、煙管を啜えた猫背の中年、酒井学長だ。政治や今の御時世を笑いながら語る二人の後ろでは、数歩離れた距離で、臨時相談役の結城が着いて来ている。

彼は二人の会話に混ざることなく、護衛としての責務から安全距離を保っている。用心深いとも言いが、三河に近づくに連れ、結城はどうしても気が重くなってしまう。しかしそれと同時に、気を紛らわそうと辺りを観察する中で、あることに気付いた。

下り道である山道の先、遠くに見える関所の前に待機場がある。貨物の受け取りなどを行う広場には、手続きを待っている貨車が何台か停められている。その殆どが空で、荷物を積んでおらず、それが意味することは一つしかない。

……シロジロの言う通りだな、三河からの買い付け発注がない。どういうことだ？

疑問を表情に浮かべ、眉を顰める。同じ事に気付いたのか、先を進む酒井と正純も、似たような表情をした。

そして、



「三河の”人払い”で、物資の需給が減ってきているのか？ しかしそれでは、自分達から物資を武蔵に送るのは……、結城、どう思う？」

「へ？ ああ、そうだな……」

質問されることを予想してなかったのか、結城が僅かに口籠る。その反応に正純が何処か心配そうな顔をしたが、とりあえず結城が今の問題に言葉を返した。

「まあ、どうだろうな。ただでさえ三河は鎖国状態で、武蔵や他国とも距離を置いているんだ。そういう隔絶的行動にも、国主である松平・元信の思惑があるのかもしれない」

「そうだが、しかしこれでは死ぬ前の形見分けみたいじゃないか。一方的な物資の売り込みなんて、他の関所では見たこと無いぞ？」

形見分けという言葉に、結城は自分の得物を見た。戒めとして外見を包んだ棍棒と長剣も、自分にとっては形見みたいなものだ。死に

行く者の行動や思いなんて、結城は幼い頃に嫌というほど見て来た。自分の人生には死が付き纏い、そして自分が生きてゆく中できつと誰かが死んでゆく。

正純の言葉に、結城は嫌な予感がした。武術を極める者として、勘と言うものは時に鋭く、あらゆる理屈や言語よりも真実を探り当てる。そして直感や感覚について、結城のそれは長年の修練の中で、最早術式に等しい能力を発揮している。戦闘では役立つが、今としては、その予感に外れて欲しい。

そしてそんな思いに耽っている中で、空が曇った。

思わず顔を上げると、頭上に大きな影があった。それは、

「船隊か」

東の山岳回廊の真上を、数隻の艦船が通る。そして同時に、反対側である西の空にも、一隻の巨大な白船があった。

頭上を通る艦船の二―三倍はある大きさを持つ艦を、結城は知っている。それは、

「聖連代表国、K・P・A・Italia所属。教皇総長インノケンティウスの持つ同国の旗艦、ヨルムンガンド級ガレー船”レイヨ・ユート栄光丸”

”か。上にいるのは三征西班牙トレス・エスパーニアの警護艦隊だろう。旧派首領がわざわざP・A・OD Aの息がかかっている三河に来るとは、やはり噂は本当か？”

「Jud、P・A・OD Aが浅井攻めに集中している今を狙って、ロイスモイ・オフロ教皇総長が新型の大罪武装を無心に来たって話だな。この世に八つしかない都市破壊級個人武装。七大罪の原盤とされる人間の八想念をモチーフにした武装で、使用者は世間では”八大竜王”と呼ばれているな」

正純の説明に、結城は心中で頷いた。

先史時代。六世紀最後の旧派教皇で、問答者グレゴリウスと呼ばれていたグレゴリウス一世は、人なら誰でも持つ原初の大罪を七つに纏めた。

四世紀のエジプトの修道士、エウアグリオスが自身の著作で提示した八つの「枢要罪」、つまり今で言う八想念を原盤としているのは、罪に対する厳しさの順でガストリマル叛叛ネイア暴食、フィラルジア淫蕩、リビ強欲、オルジイ悲嘆、アーケデアケノド憤怒、クシアハイベリフアニア虚栄、フノイトス驕り。そしてこれらの内、虚栄は驕りに含まれ、悲嘆と嫌気は怠惰として一括された。そしてその中に嫉妬を追加して七つ。

大罪武装とは、この典故を基にして、三河中心地にある地脈炉”新名古屋城”を使って、松平・元信が開発したものだ。

十年前、P・A・OD Aとの正式同盟が迫られている中で、松平・元信は聖連と敵対状態にあるP・A・OD A以外の聖連所属国に八

つの大罪武装を送り込んだ。

それらは今では各地の戦争で使用・活躍され、その原典でもある聖譜顕装を超えるアドバンテージを持っている。

人の大罪を持って、相手の罪を思い知らせるための武装。しかし結城の目から見れば、それは人の罪を助長しているようなものだ。手段と目的が違っている。抑止力である筈の大罪武装が、何時の間にか被害そのものと化している。その上、大罪武装には必ず付いて来る噂がある。

それは……

「大罪武装は、人間を部品に使っている、か……」

/  
/

関所前の広場。歩行者優先に区切られた歩道を進みながら、酒井は隣りと背後に着いて来る若者に言った。

彼は口に啜えた煙管を吸い、煙を吐いてから、

「二人はこれからどうする？ 正純君は書証を取ったら帰って遊んでも良いけど。結城は一緒に郊外まで行くんだよね？」

「Jud。」

酒井の問いに、二人が肯定を意味する返事を作る。しかし次の瞬間、正純が何かを思い出したように、酒井に向けて言葉を作った。

「あの、酒井学長。松平四天王だったら知っているかと思いますが、もし同じ四天王である本多・忠勝公の御息女にお会い出来たら、宜しく言っておいて下さい。私、三河では同級生だったので」

「言われて見ればいたなあ、そんな子。……まあ、会ったら代わりに言っておくよ」

「有り難う御座います」

礼に、酒井は軽く手を振った。

そして二人を余所に、結城は何時の間にか、先に関所の方へと進んでいた。

彼の後姿を前に、ふと、正純はあることを思った。

それは、

「結城は、毎年三河に降りる際、名古屋へ入る許可を申請しているようですね？ 酒井学長は何か知っています？」

「ん？ そうだねえ。俺から言えることは少ないけど、結城は元々三河生まれの人間なんだよ」

「へ？ そうなんですか？ 私はてっきり、彼が武蔵生まれだと思っていました」

言葉に、酒井は煙管を咥えなおす。彼は関所へと入る結城の後に続き、彼に聞かれない程度の声で、正純に答えた。

「結城は、十数年前に武蔵に移住したのさ。実家が色々と訳ありで、アイツは子供の頃から武蔵で一人暮らしをして来たんだ」

「それは、初耳です。」

彼、あんまり自分のこととか話さない

から……」

「そうか？ クラスの皆や王様は知っているけどね、結城の昔話。正純君は武蔵に来て日が浅いから、知らないのも無理ないけど。」

まあ、正純君もこっち側に来て見れば、少しは解るかもしれないよ？」

「それは……」

言葉に、正純は首を傾げた。

酒井の言う、こっち側というのは、

「人にはそれぞれ、口では言い難いことがあるのさ。言わない限りは普通の付き合いだけど、それが笑っていえるようになって、初めて距離が縮まるものさ。俺の場合、左遷の話になるけど、その辺正純君は知ってる？」

質問に、正純は言葉を失った。酒井の言う、彼の左遷のことは、三河住人ならば誰でも知っていることだ。

それは今から十五年前の話。三河当主である松平・元信公には妻が

おらず、その下に跡取りである嫡子がいなかった。

松平・信康。後に解釈によってその名を襲名したのは、松平・元信の弟であったが、当時、魔王信長の襲名者がいないP・A・ODAとの同盟を拒んだ三河は、聖譜記述を”拡大解釈”で切り抜けようとした矢先に、P・A・ODAの武装包囲によって強引に暫定同盟を結ばされた。そのときのトラブルに対する責任問題として、三河はP・A・ODAに対する恭順の証として、弟公の自害を迫られた。

そして当時の信康公の後見人が、松平四天王の一人である酒井・忠次であり、酒井は信康公の自害を止められなかったことで、武蔵に左遷された。

資料には載っている、調べれば誰でも解ることだが。人の生き死に  
関することを、容易く口に出れない自分は、やはり未熟なのだろう。

そんな風に考えると、この話で疑問に思うことがある。それは酒井  
が言っていた結城の過去に関する話で、同時にさっき言っていた”こ  
つち側”に対する意味。

それは、

「結城の過去にも、そういう人の命が関わっているのですか？」

「どうだろうねえ。俺は結城が武蔵に移住したときに、手続きとか  
やってあげただけなんだけど、それ以前の結城がどのように生きて  
来たのかは知らないよ」



「そう、ですか……」

人の過去を詮索するのは良くないことだが、正純としては、やはり知りたい思いがある。

正純も、他人に知られたくない秘密はある。

十年前の三河の家臣団に対する人払いで、自分は襲名手術を受ける最中でそれに巻き込まれ、襲名の道を失った。しかし政治家の道を諦められない自分は、三河で勉強を続け、しかしその中で虐めや差別を受けたものだ。

苦い思い出だ。幼い頃に、父は武蔵に暫定議員として渡り、母と共に暮らす正純には、努力を続けるという道しかなかった。後に母が神隠しに遭い、一人武蔵に来た今でも、それは変わらない。

何も得られなかった喪失感に、しかし諦めきれないのは何故か。政治家を目指す自分に、同じ政治家である父は何の祝福も与えてくれなかった。

クラスの皆とも距離を置き、正純は、世界でたった一人になったような感覚を覚えた。

しかし、

「結城だけ、当たり前のように話しかけて来るんです。 ” お前は賢い馬鹿だ。危なっかしくて見てられん” とか言って、何時も背中を押してくれる……」

「アレは、昔から良く出来た子だからなあ。毎年の年明けでも、浅間神社の方で手伝いをしているし。武蔵の外燃拝気貢献量もダントツで一位だ。あの献身的精神の裏では、本人としても色々と考えがあるのだろう」

言われて見れば、正純の記憶の中で、結城が暇を得たことは殆どなかった。

臨時相談役は各生徒委員会、武蔵各機関、暫定議会と武蔵王、そして総長連合と生徒会という、武蔵の重要機関同士の橋渡し役である。

他の国では臨時相談役委員会の下で、複数人単位で活動しているそれを、結城は一人で全てこなしている。一度だけ彼の週間スケジュールを見せたことがあったが、初日を見た時点で正純は後悔した。そして同時に、その余りにもオーバーワーク気味なスケジュールに、彼の身体が持つかどうか心配した。

しかし、

「鼻で笑われましたよ。」金稼いでいるくせに行き倒れされている

お前に心配されたくない”って。それで何時も通りに仕事をこなすんですから、全く頭が上がりません」

「ああ、それ、俺も解るわ。アレって実は分身術を使ってるんじゃないかって時々思うわ。アイツ忍術の方もそこそこ使えるしねえ。ホント、どういうスベックしてるんだか」

謎だらけな友人だ。自分勝手にマイペースで、しかし迷惑にならない範囲で、他人に気遣い出来る器用な男。そして何時の間にか、正純は結城のそのような神秘性に惹かれているのかもしれない。そう考えると、余計に彼のことを知りたいと思いはじめた。

そして不意に、こちらの考えを読んだかのように、酒井が言葉を作った。

それは、

「まあ、結城の話は本人に聞いてみるといいけど。さっき言ってた”こつち側”と俺の左遷についてだけど、一っいいかい？」

「え？ まあ、何ですか？」

「弟公が自害したのは政治的要因だけど、殿先生の身内のことで、

続きがあつたら、どうする？」

「続き……、ですか？」

質問に、酒井がJud・と答える。

元信公の話、それは元信公に妻と嫡子がいないと言うことで、それにどのような続きがあるというのか。思わず首を傾げそうになる正純に、酒井が間を置いてから言う。

彼は、口から煙を大きく吐いてから、

「その話、実は殿先生に、内縁の妻がいて、外に子供が居たとしたら？」

「……へ？」

告げられた言葉に、正純の思考が停止した。

話題の切り替えもそうだが、今の情報がこの場で出てくるのが理解できない。そしてなによりも、いきなり聞かされた情報のスケールに、脳の処理が行けず、しかし正純は強引にも口を開いた。

「え？ そんな……。待つて下さい。もし、本当にそんな子がいたら……。その子は今、どこで何をしているんです？ ……どうして今まで、表にでないのですか？」

「だからさあ。ここで最初の話題に戻るわけよ」

戸惑う正純に、酒井は言った。

道標ともなりうる言葉、それは、

「知りたいのなら、こっち側に来なよ。俺、正純君が俺や結城の方に来ると、面白いと思うんだよね」

/  
/

日がやや傾き始めた午後、三河北部にある専用陸港に停泊してある武蔵の上、観光・外交艦である右舷二番艦・多摩の表層部商店街は賑やかな雰囲気満ちている。

旧派首長が三河に新型大罪武装の開発を交渉しに来たこともあり、南西側の一般陸港からはK・P・A・Italiaや三征西班牙の学生達が武蔵に観光に来ている。そして武蔵の上空では、聖連の監視が一時的に解かれた中で、運送業者や航空系の者達が、模擬戦やレースを始めている。

そんな活気に満ちた船の中、商店街の大通りの上を、幾人かの少女が両手に荷物を抱え、談笑しながら歩いている。

先頭に行くのは巫女服姿の浅間で、その背後には右手が義腕の女・直政と、眼鏡を掛けた小柄な少女アデーレ、そして前髪で目を隠した鈴がついて来ている。

彼女達は明日のトリーの告白の祝い、その打ち上げに使う料理の食材を買出しに来ていた。そして皆が全身に荷物を吊るしている中、作業用の大型レンチのみを担いだ直政が、先を歩く浅間に言った。

「えらく買い込んだものだねえ。男子の方も買出しに行ってるんだから、流石にこれは買い過ぎなんじゃないさね？」

「うーん。でも、うちのクラスは結構食べる人が多いですし、主に結城君やミトがエンゲル係数の大半を占めていますから、これくらい丁度いいと思いますよ」

「ミ、ミトツダイラ、さん。よく、お肉とか、た、食べるもんね」

狼だからさね、と直政が鈴の補足に頷く。横でアデーレが苦笑し、そして続いて浅間に問うた。

「にしても、浅間さんもお疲れです。神社の仕事、今は色々大変ですよね？」

「春先は契約関係の仕事が多いですから、カウンター業務が忙しくて……例年は結城君に手伝って貰っているんですけど、今年は機関部の整備点検や議会と武威王との業務で手が貸せないらしくて」

言葉に、直政がニヤついた顔を浮かべた。

彼女は左手を顎に当てて、

「悪かったねえ、未来の夫との楽しい協働時間を奪ってしまって。埋め合わせしようか？」

「な!?! 何言ってるんですか、マサ!?!」

顔を赤くした浅間に、照れなくてもいいのに、と直政が宥める。

二人の遣り取りに、横でアデーレが不思議そうな顔を浮かべながら質問した。

「相談役って、よく浅間神社で手伝いとかするんですか？」

「何？ アデーレ知らないのかい？」

傍で首を傾げるアデーレに、直政は笑みで視線を寄越した。彼女の疑問に、直政は、そうさねえ、と前置きしてから答えた。

「結城は、契約している神が酒神のオオヤマツミでね。オオヤマツミは浅間神社主催祭神の配祀だから、奉納の一環として、よく浅間神社で献身活動をしてるのさ。んで、それがアサマチにとっては都合が良くて、コイツったら何時も神社で祭事とかイベントとか仕事とか有ったら、必ず結城を誘うわけよ。御蔭でアサマチに代わって、結城が逆に押しかけ女房やってる訳さね」

「マサ、余計な事言わないで下さい！！」



「何さね？ アンタのオドオドしたアプローチは見てて歯痒いのさ。昼休みでの遣り取りだって一緒に騒いでいればいいのに、アンタ茶道部の方でムツツリしているから要らん事を書かれるんさね。オツパイとか可愛いとか」

「あーあー！！ 聞こえませんか！！」

惚けた反応に、皆が揃って笑みを吹いた。

浅間はムスっとした顔を浮かべ、そっぽを向きながら言う。

「結城君が鈍感だからいけないんです。少しは人の気持ちを察してくれてもいいじゃないですか」

「アサマチ。アンタそれで誰かに気付いて貰おうなんて、マジで笑わせるね。昨年文化祭だって、弓道部の人間射的に、道場からマジ逃げた部員までズドンしたさね。そんで景品の殆どを孤児院に渡したのはいいが、残りは結城へのプレゼントにしたけど、後で弓道部からの苦情が結城に殺到したのが祟って、一時間くらい結城に叱られたらどう？ アレ、手段と目的を間違っちゃいかんさね」

「だ、だって、アレは部員が悲鳴上げて外に出ようとしたのが悪いんですよ？ 皆に迷惑掛けますし、あと加速術式入れてない人間なんて遅すぎて撃つてくださいと言ってるようなものですよ。それにズドン気持ち良いですし……」

「アンタ、さり気なく箍が外れるからやり難いんだよね」

後ろで溜息を吐く直政を無視し、浅間は空を見た。

義眼”木葉”が眺める青空では、レース組が悠々と空を駆け回る。中にはナイトとナルゼの姿も確認出来、ふと浅間は、あることを思った。

「皆、夜には教導院の方に集まるんですよね？」

「まあ、あたしは泰造爺さんに夜番の休みを取るから。他の連中も、昼間の内に仕事とか終わらせちゃって、夜には集合するんだろっさね」

「あ、自分も、模擬戦用の従士槍持参しますんで。術式付きで」

「わ、私も、行きます」

皆の返事に、浅間が眉尻を下げて笑った。

今朝から色々あったが、何だかんだと、皆はトリーのことを気にしている。そして同時に思う、自分の幼馴染は、結局彼に祝いの言葉を送らなかつたけど、それはどうしてか。

「結城君って、本当は反対なんじゃないでしょうか……。トリー君がホライゾンに告白することを」

呟きに似た一言に、直政達が言葉を失った。

しかし、ややあってから、

「……………それはどうさね。今時世間じゃ、P・A・ODAだの末世だので騒がしいし、武蔵もこう言う複雑な御時世で空を飛べるのも奇跡みたいさ。そんな中で、馬鹿一人の告白が通るかどうか……、正直言って怖いさね。トリーの馬鹿も、よくやる気になったもんだ。結城も、多分考えが決まっていなくても知れないさね」

「ゆ、結城君。ホライゾンのこと、だ、大事に、してた、よね」

鈴の言葉に、浅間はやや俯いた。

それと同時に思い出す。子供の頃、家の神社の前で、よく一緒に遊んでいた四人の子供。幼い自分と、元気のある二人の姉弟。芯の強い、何時も笑顔を持った黒髪と青い瞳を持った少女。

少年は、何時も青目の少女と一緒にいて。幼い時間の中で、多くのものを共有した。そしてそんな中で、彼が現れたのだ。

悲しい目をした、少女とよく似た少年、子供の頃の結城が。

その日から、きっと皆の運命が変わったのだろう。彼の出自は、後で知ったことだが、それを抜きにしても、彼と幼い日のホライゾン  
は仲が良かった。あの時の自分達は、ただ仲の良い兄妹を見ている  
みたいで微笑んだけど、本人達は、きっとそれ以上の複雑な気持ち  
を抱いていたに違いない。

だって、それは、

「あの二人は、血の繋がった本当の兄妹ですからね……」

事実、場の空気が静まった。

そして彼女は足を止めた。なぜなら、この先は、

「じ、この道、って…」

「ああ、何時もトーリや結城が通っている軽食屋がある。そんな女の子もいるさね。今の時間じゃ、午後の暮参りだろう」

「……よく知ってますね、マサ」

「まあ、皆知ってるんじゃないさね？ 多摩や村山辺りで、外殻の非常階段で一服していると、決まった時間に聞こえてくるんだよ」

「それって……」

浅間の言葉に、直政が先を行く。青雷亭へと向かう道程の上で、彼女は話を続きをした。

「通し道歌。昔、よく皆で一緒に唄いながら遊んでいたさね。結城だけ輪の外で見ただけ、今思えば、あの時の結城は、まだ自分と折り合いがつけていなかったのだらうさ」

「彼もホライゾンも、生まれが大変な人ですからね……。まあ、それを知ったのも、ホライゾンが亡くなつてからですが」

「そうさね……。丁度そんな時からかね。馬鹿なトーリと、結城が変わってしまったのは。片方はどんどん馬鹿になって、もう片方はどんどん人間離れしていつてしまった。あの二人、一体全体何を考えているんさねえ。前向いているのか、後ろを振り向いているのか、さっぱり解らない」

直政の言葉に、浅間は目を細めた。

思つるのは、幼馴染の少年二人。

奇天烈で人望のあるトーリと、剛毅で気遣いのある結城。少女ホライゾンの存在に人生を変えられた二人は、まるで鏡みたいだと。

「そう言えば、トーリ君って、あれから一度も”後悔通り”を歩いたことがありませんよね」

「Jud、そしてその代わりに、結城は毎朝必ず登校前に後悔通りを歩く。通れない親友の代わりに、自分が親友の後悔を見守ると」

「ゆ、結城、くん。何時も、朝練の、最後に、た、立ち寄る、よね。せ、石碑の、前を」

「ああ、アレ、追弔しているんですね。十年間、一日も欠かさずに」

そのことは、浅間も知っている。毎朝、日が出てきた時間で、必ず彼が其処にいるのを。だから自分も、朝のランニングでは、必ず最後に教導院前を通ることになっている。

気にはする、見守りたいと思う、だから解るのだ。結城にとって、ホライゾンという存在は救いであり、己の罪でもあると。

トリーはずっとホライゾンから逃げて来たけど、結城はずっとホライゾンで自分を責めていた。互いが死んだ者の人生を背負って、ただただ、時の流れが傷を癒してくれるのを待っていた。

だから、記憶の中に確かに刻まれたあの日に、二人はそんな約束をしたのだ。

「皆、知っていますか？ トリー君と結城君。中等部の頃に、約束をしたんです」

「約束？」

確認するような直政の疑問に、浅間は頷いた。

彼女は、Jud、と前置きしてから、息を吸って、

「結城君は言っていました、”お前がその後悔にケジメをつけるまで、オレは決して自分の名前を名乗らない”と。そしてトリー君も言いました、”なら俺がお前の罪を洗清してやる、そのためにも、オレは必ずホライゾンに報いてやる”って……」

「勝手な都合さね。……まあ、それも明日で何もかもが決着をつくらんדרうけどさ。そのためにも……」

間を置き。直政は教導院の方角を見た。今頃、後悔通りと教導院を繋ぐ階段に居る姉弟二人を思いながら、

「あの馬鹿には、後悔通りを通って貰わないといけないさね。そんなで結城にも、早く三河から帰って、一緒に騒いでくれないかね」



言葉に、浅間は頷いた。

明日を過ぎれば、きっと皆の中で何かが変わる。その先で、何時も通りの、誰もが願う平凡が続くようにと、祈るしかなかった。

/  
/

三河へと続く山肌の中、各務原の麓にある木陰道の上を、結城と酒井は歩いてきた。関所での手続きを済ませ、正純と別れた二人は、三河郊外へと向かう道程に行く。

そんな中で、酒井は自分の横を歩く結城に言った。

「んで、正純君がねえ、”後悔通り”を調べたいって言うんだよ。その辺どう思う？」

「さつきからぎゃあぎゃああ煩いなあ、もう。調べさせれば良いじゃないかい。減るもんじゃないし」

「冷たいねえ、結城は。俺は単に、才能ある若者の踏み出す新たな一歩を祝っているだけなんだよ？ 少しは気遣ってくれてもいいじ

「やない」

「酒井学長。アンタ、正純に余計なこと吹き込んでないだろうな？」

質問に、酒井が肩を竦めた。

彼は口に啜えた煙管を離し、

「人聞きが悪いねえ。俺は何にも言っていないよ？ 結城の昔話とか、恥ずかしい話とか、何にも」

「今滅茶苦茶腹立つたぞ？ 同窓会の前に精神教育いる？ 死にたい？」

「うん、さり気なく剣を抜こうとするのは止めてくれる？ 冗談だよ。本当に何も言っていないから。ちょっとこっち側に来ないか誘ってみただけだから」

「それを余計な事と言ってるんだよ……、後悔通りとか、こっち側とか、別に面白いものじゃないし、知ってて得になるようなもんじやないよ。武蔵では大半の人が知っていることだしな」

吐き捨てるような言葉と共に、結城は足を速めた。

そして自分の先を歩み、後姿のままの結城に、酒井は言う。

「お前は過保護な奴だな。

しかし立ち止まっている焦燥を抱

えている人にとっては、先に進めるチャンスは麻薬だよ？ 誰もが

お前さんみたいに、何もかも背負って生きて行ける訳じゃないのさ」

「解ってるよ、そんなことくらい」

「ならいいけどさ。

しかし、正純君、お前のことよく気にか

けていたよ？ 結城、正純君の友達だろう？ 見て解るような煩惱

を浮かべるのは武芸者としてよくないね。正純君が先を進みたいの

も、ムツツリなお前が有能過ぎるんだよ」

「説教になってるぞ、学長」

指摘に、酒井は、む？、と目を丸くした。

そして歳は取りたくないものだねえ、と言いながら、しかし次の瞬間、二人は同時に足を止めた。

それは、

「お出迎えか」

言葉に、前方、左右に広がる木々の陰から、三つの影が現れた。遠くにある三河の町並みを背景にしているのは、二人の中年過ぎの男性と、彼らの背後に控えている少女だ。

その姿を確認した後、結城の後ろにいる酒井が微かな笑みで言った。

「松平四天王の内、榊原・康政と本多・忠勝か。御本人が出迎えとは、俺も捨てたもんじゃないってか？　で？　井伊はどうしたよ？　四天王が一人欠けては、何か気分が来ないね」

酒井の質問に、眼鏡をかけた初老の男性、榊原が身体を前に出した。

「それがな、酒井君、井伊君は……」

「井伊については他言無用だ。忘れたか、榊原」

榊原の言葉を、横にいる体格のいい男性、本多・忠勝が止める。

その動きに、結城と酒井が微かに眉を寄せるが、それに続いて、忠勝は結城の後ろにいる酒井を見ながら言った。

「連れがいるとは予想外だが、まあいいか。見せろ」

同時に、忠勝の影に隠れていた少女の姿が消えた。

それに気付かず、酒井はやや首を傾げながら答えた。

「は？ 待ってくれよダっちゃん。ダっちゃんの言う”見せろ”って大抵ろくなことじゃ……」

台詞が終わるより早く、目の前で動きがあった。

二つの円運動。互いに長い黒髪を持つ若者の軌道が交差した。

「！」

驚嘆の表情を示したのは果たして誰か。四天王が見る手前、風を切る速さで突進する少女の動きに、結城は片手だけで反応した。

空気抵抗に抗う低姿勢での瞬間加速。恐らく術式の加護を受けた少女の奇襲は鋭く、無駄が無く、そして的確だ。得物は腰に携えた二本の刀。白砂代座製の黒い木柄を持った長刀は、初動である加速と同時に振り抜かれている。

地面を蹴る動きに続いて、彼女は距離五メートルの位置から既に攻撃動作に入った。両手で刀を横に振りきり、動態運動と全身の瞬発力を、コンマの瞬間の中で腰と手首の微かな捻りのみで、最も破壊力を持つ剣先に集中させる。

迷いの無い、手加減容赦ない殺すための一撃だ。そしてこの時点では、結城も酒井もその動きに反応出来なかった。

酒井は距離が離れており、結城と忠勝によって少女の初動を確認出来なかった。そして結城は、少女の初動に気付いていたが、彼女の目標が誰なのかを見極めていなかった。

酒井と自分、どちらかを先に仕留めるかで、結城の対応は変わって来る。

……どっちだ？

思考の中。視線を忠勝と榊原に向けたまま、結城の直ぐ隣りで動きがあった。少女の圧倒的な加速に、結城の目は追いつかないし、気付かない。それほどまでに少女の速度は凄まじく、隙が無い。

しかし、結城には解る。今、自分の右横スレスレを突き抜ける空気の流れに減衰は無い。もし少女が自分を狙うのなら、少なくとも一メートル先でブレーキを掛ける筈だ。背後を狙うにしても、トップスピードのままでは小回りが利かないため、どうしても近接戦闘系は間合いに入った瞬間に、速度を攻撃に転換する。

ようするに、速度を維持したまま結城の背後に突き進む少女の狙いは酒井だ。結城の武装を用心してか、少女は対処の難しい、長棒を背負っている結城の右側から回り込んだ。例え反撃を喰らっても、棍棒より小回りの利く刀なら迎撃も容易だ。的確な行動だと、結城は内心で評価した。しかし果断で迷いが無く、命令した瞬間に動く少女の行動力は、事前に準備をしている証拠だ。忠勝の言葉から察するに、向こうは酒井が同伴者を連れて来ていることを想定していない。

それでも一心不乱に酒井を狙うのは、

……馬鹿正直な女だな！

だから動いた。自分の右後ろ。あと数瞬で酒井に迫る少女の後姿に対し、結城のカウンターもまた一瞬だ。

既に身体の半分を通り過ぎた少女に、結城は左手を左腰に携えている長剣の柄頭に当て、そのまま左下へと強く引いた。同時に左足を半歩引いて、背中を少女に向けるように左側へと回す。

左半身に徹底した動きの中で、腰を軸として、シーソーのように片方を押された長剣は、速射砲の勢いで鑑けんを少女の顔面に向けて打ち出す。

目の前で突然跳ね上がった鞘の先端に、しかし少女の対応も早かった。大きく横に引き抜いた刀を、素早く眼前に引き戻す。脇を締め、両腕を胸の方へと引いた動きを利用して、少女は剣の柄頭で鑑を上へに弾いた。それと同時に、加速の動きを途中で遮断された少女の周囲で、青白い光が散った。術式中断され、無効化された際に発する流体光だ。

そして、

「  
」

同じ瞬間に、少女が目を見開いた。

術式が破られたこともそうだが、それより危険な要素が迫っている。その理由は背後。鞘の一撃目が前から来たのと同時に、逆方向から二撃目が打ち出された。初撃を捌いた隙を狙って、結城が右手で背中への棍棒を引き抜いては、少女の後頭部目掛けて棍棒の先端を叩き



付けたのだ。

バトンのように片手で背後に振り回された棍棒は、数ミリのズレも無く、殺人的な遠心力を持って少女に喰いかかる。

そして迫る二発目の砲弾に、少女はまた動いた。鎗を弾いたために自分の両肘は上がっている。今は刀を左肩に担いだ姿勢だ。少女はそのまま強引に膝を落とし、つんのめるように上半身を地面に向けた。

ヘッドスライディングの体勢で、少女は身体の高さを更に低くすることの後方からの攻撃を凌いだ。結果、棒の先端は頭上スレスレの位置を通り過ぎ、後頭部で結んだ少女の髪を掠るだけに終わった。

そして少女は地面を蹴り、無理にでも結城との距離を開かせるのと同時に、低空での前転跳びを持って着地する。そのまま彼女は、三撃目に対する警戒として背後を振り向く。

視線の先には結城がおり、互いの距離は三メートル弱。二連撃の間を狙って、少女が反撃として刀を構えようとするが、しかし彼女は見た。

腰を落とし、術式の展開で加速段階に入る矢先に、既に向こうは攻撃していた。

……早い！

反撃の糸口を見せないのは、銀色の剣先だ。少女の着地と、振り向

く瞬間にタイミングを合わせ、結城は身体を傾かせた姿勢のまま、左手で十束剣を引き抜き、彼女の鳩尾に向けて剣を投擲した。

三発目の射撃。

結城の一連の動きから、少女は向こうも自分と同じ近接ストライクフォーサー武術師だと判断した。それは結城も同様であり、だからこそ、少女は近接系戦士としては先ずありえない行動に瞠目する。

……得物を投げ捨てるとは！！

しかし舌を巻く暇すらない。空気を切り裂く突進力を持った長剣は、間違いなく自分の急所を狙っている。だが少女は見切った。相手は得物を二つ持っている。先ほどの挟撃と同じように、本命の棍棒が投擲の後に潜んでいる可能性は高い。長剣は目くらましで、トリである四撃目が危険だ。そして事実、少女の思っている通りに、結城は確かにそうする積もりだ。

故に、少女は勝負に出た。術式の発動シークエンスを続行させ、剣を弾いたのと同時に加速する。彼我の間合いは三メートルだが、瞬発力ではこちらが上だ。懐に潜り込めば、その先は自分のテリトリ―となる。

だから、

「っ

！！」

激突する。黒い刀と、黒い長剣が衝撃と共に火花を散らす。

飛来物を弾く際、弾かれた物体が身体を切らないようにするため、斜め上方向に流すのがセオリーだ。人間の正面から見た空間では、肩より横上の空間が広いため、その方が二次被害を受け難い。

そのため、少女も同じように、十束剣を弾こうとしたが、

……重い！？

衝撃力が半端無い。今までの訓練で、少女は弾き防御や攻撃の受け流し訓練は何千何万回も繰り返してきた。剣戟の応酬は双方の質量の相対速度のぶつかり合いであるため、剣士は見た目以上の衝撃力と破壊力に対処しなくてはならない。その点に関しては、少女は常に体格や腕力が自分より優れている父で慣れているが、今の一撃は明らかにその十倍はある。

骨が軋むような重圧が、少女の両腕に一気に押し掛けてくる。しかし退けない。一瞬でも退けば、銀色の切っ先が己の体を貫く。死と隣り合わせの刹那に、少女は強引にでも両足を踏ん張った。

身体感覚が極限に引き伸ばされる中で、術式の発動が迫っている。その前に剣を弾かなければ、術式加護の奉納に必要な初動を取れなくなり、術は不発に終わる。そうすれば相手に隙を与えてしまう。

そうしたら終わりだ。

武士の娘として、安直な敗北は赦されない。だから少女は振り絞った。全力で、懸命に、歯を食い縛りながら、強引に突き進む銀の尖端に抗い、そして、

「ああ……！！」

吼えるような叫びに、剣が軽快な金属音と共に宙に舞った。

だが、

……しまった！！

力を力で押し返した反動が、致命的な空白を作る。強烈な剣戟同士の衝突により、十束剣を弾いた少女の上半身が僅かに仰け反った。そして両腕は大きく上に掲げられ、腰も少しだけ浮いている。

術式発動の準備は完了した、しかし今の体勢で初動を踏み入れるのは最低でもコンマ2秒は必要。このような絶命的ミスを見逃すほど、向こうは甘くない。

その証拠に、来る。

「！」

右足を前に踏み出そうとするこちらの前で、既に結城は長棒を振り抜いた。

彼は右手で棒の末端を握り、右半身を前に出すことで射程を限界にまで伸ばせた。棒の全長は二メートル程。繰り返すが、両者の距離は三メートルだ。つまり結城は、一メートル程度の短距離を進めば攻撃を届かせることが出来る。そしてその短い距離は、棒を振りぬく遠心運動に全体重を乗せたチャージには事足りる距離だ。

少女の足が地面に着くより早く、断頭台のギロチンを思わせる棒の末端が彼女の脳天に落とされた。容易に頭蓋を打ち砕く一撃に、少女は理解した。

たったの四撃。一瞬の内に雌雄を決した攻防は、しかし自分が思っているようなものではなかった。一つ一つの動きに駆け引きを持ち出した自分と違って、向こうは最初から必死なのだ。陽動と思っていた剣の投擲も、実際は陽動ではなく、本当にこちらを殺すつもりで投げ出された。

こちらの算段や思惑を正面から蹂躪する。

少女は知った。この男には小細工は通用しない。象を相手するのに、蟻がどれだけ手を尽くしても無駄なのと同じように。

そして少女は思った。今までの自分の戦い方を根本から否定するその力に、この瞬間、少女は憧れたのだと。

/  
/

「……」

振り抜けた棒の先端を、結城はジッと見ていた。

手応えは無い。それは攻撃がその効果を作用していないことであり、つまり棒の先端は少女の頭蓋を砕かずに終わった。

当然だ。振りぬかれた棍棒は、少女の頭上数ミリの高さで停まっている。本気でけしかけて来たのは向こうだが、態々日の当たる時間で殺し合いをする必要も無い。勝負が決した時点で、これ以上の決め手は野暮なものだ。

その上、己の背後では、榊原も忠勝も動く気配を見せない。つまり最初からこちらを試すことを目的として少女を遣わせたのだろう。或るいはこちらを教材にして、少女の実力を試すために出させたのか。どちらにしても、結城としては大差ない。

考えと共に、結城は棒を少女の頭上から引き戻した。その動きに、少女は啞然とした顔で結城を見ている。

何故とどめを与えなかったかのような表情に、結城は可笑しな気持ちを抱いた。

……リアル侍だな、コイツ。

真面目とも言つ。愚直さが残るその仕草に、しかし悪い気はしない。行き成りの奇襲に呆れはしたものの、結城は内心で少女の腕前を評価した。彼は長棒を背中に背負い、弾かれて地面に刺さった剣を回収しながら、少女に言う。

「良い動きだな。でも正面から突っ込み過ぎだ。性格が次のモーシヨンに映っているから、それだと技量のある相手に読まれ易い。もっと頭空っぽにした方が良くんじゃない？」

「え？ あ……、Judd。」

遅れた返事に、結城は少し苦笑した。身内にも、似たような反応をする人がいて、思わず親身的になったものだ。どうやら、武蔵以外にも、トーンの通じる相手がいるらしい。

思わず笑みをこぼそうとした考えの中で、ふと、結城は気付いた。少女が、やや頬を赤くしてこちらを見ていることに。

「？」

今の手合わせで、何処か具合を悪くしたのかと思い、結城は眉を寄せた。相手が本気だったので、こちらもつい殺る気モードで挑んだため、それで何か不都合があつたら面目無い。

とりあえず、大丈夫か、と気遣ってやろうと思ひ。結城が口を開けようとしたが、しかし、

「!?!」

言葉を作るより早く、少女が素早く動いた。

彼女はそのまま両膝を閉じながら地面に落とし、臀部をかかとの上に載せ跪座となる。そして両手の五指を揃え、膝の前の地面に人差し指をくっ付けるように置いた。前かがみの上半身はほぼ地面と平行しており、その余りにも隙の無い座礼に、結城は啞然とした。否、一歩引いた。

そして、次の瞬間。少女は顔を上げ、



「拙者。極東、三河圏新名古屋城教導院三年所属、兼三河警護隊総隊長。同所属である特殊予備役副長、本多・忠勝が娘、本多・二代と申す。恐縮ながら、貴殿の御名前を教えて頂けぬでは御座るうか？」

「え、あ、うん……、武蔵アリアダスト教導院三年、結城。臨時相談役……」

向こうの畏まった質問に、つい自分も所属と役職を教えてしまった。流石に名前は姓しか名乗れないが、少女、本多・二代はそれに気にせず、小さい声で、結城殿、とか呟いている。

一体どうしたのかと、結城が首を傾げているが。酒井や背後の榊原と忠勝を見ても、こちらと同じ反応をしている。

そして次の瞬間。結城は未だに正座状態の二代の発言に、言葉を失った。

それは、

「拙者。武芸に明け暮れて十八年。何時か父と同じ高みに辿り着こうと修練を重ねており申した。実戦経験を持たず、手合わせの相手は父と師の鹿角様のみ。故に、先ほどの結城殿との戦闘には多くの

ものを教えて貰いました。その見事な棒術捌きと戦術、この本多・二代、心から感服致し申す」

ですから、

「拙者。結城殿の迷い無き戦い方を身近で見習いたいで御座る。宜しければ、その……、不束者ふつつかものですが、この本多・二代を、嫁にして貰えぬで御座ろうか？」

「……………え？」

### 第三話〜事後の告白〜（後書き）

原作基準でどうかしたい今の気分。

大罪武装も殿先生の妻子の話も、キーワードだから飛ばせないよう  
〜（涙）

三河決戦後にも臨時生徒総会という難関が待っていますし、やっぱり戦闘描写は楽だな、適当に書いて。

で、まあ、原作第九巻が中々手に入らない中、かなり鬱な気分のク  
ロです。

そして続けて投稿した第三話。タイトルで変な事を考えたその君  
は間違いなく負け組です（笑）

では皆さん。また次回〜

#### 第四話 赤色に染まった無情

「よう、チビ姫さんよ、何見てるんでい？」

赤い色に染められた大地の前で、姫と呼ばれた幼い少年は静かに地平線を眺めていた。

赤く燃える大地、黄金色に照らされる空、黒く焦げる大気。あらゆるものを蹂躪する破滅の匂いに、可愛らしい少女の面影を持つ少年は、頭上から響く声に面を上げた。

「……勝<sup>かつ</sup>。」

どうして勝達は、人を殺すの？」

質問に、声の主である勝は答えなかった。

感情の籠っていない結城の問いは、心の奥底から生じた単純な疑問であることを、勝は知っている。自分達が焼いた野原と町並みに対する哀傷や空しさは無く、少年はただ、どうしてこんなことをするのか理解できないでいる。

だからこそ、勝は心の中で言葉を選んだ。空虚と白紙な心しか持たない少年に、正しい色を与えるために。

「そりゃあ、チビ姫さん。これは戦争なんだ。俺達は生きて行くために、人を殺さなきゃならねえ」

「……じゃあ。人を殺せば、生きられるの？」

新たな質問に、勝は考えた。

生きるために殺す、それとも殺すために生きるか、と。

前者は手段であり、後者は目的だ。命を奪うという究極の略奪に対して、目の前の幼い命は、どうしてこどもも残酷な疑問を抱いたものか。目の前の朱色に対する裏返しか、それとも、少年に血の色しか見せなかった自分達に対するあてつけか。そしてその何れも、自分達が招いた結果に過ぎない。

しかしだからこそ、勝は答えなければならぬ。目的であろうと、手段であろうと、自分達が殺すことに妥協したのは事実だ。それについて嘘をつくことは赦されず、そしてその理由を持ってして、勝は少年に自分達の思いを伝えなければならぬ。

「チビ姫さん。チビ姫さんは、俺が嫌いかな？」

「ううん。嫌いじゃないよ。　　勝、おつきくて、角生えて、面  
白い人だから。光や利達<sup>ミッチーとし</sup>、仕事で忙しいから、勝しか遊んでくれな  
いもん」

「そつか……。じゃあ、そいつらのことは嫌いか？」

問いに、少年は暫し考えてから、首を横に振った。

その上で、少年はこう言った。

「皆、遊んでくれないけど、良い人達だよ。ミッチー、何時も御土  
産買ってくれるし、利もまっちゃんと一緒に色んな話をしてくれる。  
あと……」

「ああ、いいよ、その辺で。よく解った」

言葉を遮られた事で、少年は不思議そうな表情で勝を見た。例え仲  
間に相手にされなくても、我儘を言わずにそれを解ってくれる少年  
に、勝は似合わない微笑を浮かべた。この子が此処に居ることは間  
違いだが、その間違いに、少年は自分達を否定しなかった。ならば  
そのことに、勝は感謝しなくてはならない。自滅の道しか辿れない  
自分達や、少年を孤独にさせてしまったあの男の意図に、何時か罰<sup>ツゲ</sup>

を払わなければならないと覚悟し、

「じゃあさ、チビ姫さん。何時か俺達が、もう姫さんと会えなくなつたら、どうするっ？」

「え？」

問い掛けに、少年は目を見開いた。

客観的に別離や破滅を見てきた幼子は、一度もそのことについて主観的になったことはなかった。だからこのとき、少年は初めて考えた。

角の生えた陽気な父親役である勝。忙しくても必ず笑みを向けてくれるミッチー。何時も仲が良くて、たくさんのことを教えてくれる利とまっちゃん。他にも色んな人が居り、皆と一緒にいる時間は楽しいものだ。それがもし、消えてなくなるのなら、

「勝は……、何処か行っちゃうの？」

「今じゃねえけど……。何時かはな……」

「……何処に？」

「さあな。　　遠い何処かか、或いはその辺かな」

曖昧な返事に、少年は俯いた。鬨りのある表情に、勝は苦笑しながら、その大きな手を少年の頭に乗せた。何れこの場所を去る自身の運命に、しかし勝は後悔も不安も無く、少年にこう告げた。

「嫌か？」

「……うん」

「そうか。　　ならば、それがチビ姫さんの最初の質問への答えだ」

言葉に、少年はまた顔を上げた。やや涙ぐんでいるその大きな瞳は、どういう意味？ というジェスチャーを含みながら勝を見ている。そんな彼に、勝は未だに赤く燃え盛る地平線を見ながら、静かに語った。



「いいか、チビ姫さん。俺達は何時か消えちまうものだ。聖譜記述や歴史再現、末世や襲名者なんかが生意気に旗上げていて世の中で、この国は必ず滅びる。つまり、バッドエンドが最初決められているんだよ、この国は。そしてそれは多分、決して避けられない運命だ」

淡々と作られる言葉に、少年は耳を傾ける。近くから感じる勝の温もりに安堵を憶え、しかし破滅を述べる話の内容に心が冷めていく。

「だからまあ。それだからこそ、俺達は限られた時間の中で、強く生きていかなきゃならねえ。他人に舐められず、奪われず、見下されずに、誰よりも強くに、だ」

破滅は必然。ならばどのようにその破滅を迎えるのかは、自分達の自由だ。最後を花々しく飾るような空しい最後ではなく、誰にも忘れられない華麗な生き様こそが、自分達の生きた証なのだ。

「戦うことは、己を示すことだ。そして俺達は、無闇に自分を失わせないために、世界に己を示す。誰もが認める本当の自分を、皆に解らせてあげるんだよ」

「本当の、自分……」

「ああ、だから殺す。殺して、自分が強いと示す。　　しかし……、殺すだけが、全てじゃねえ」

それは哀愁は、それとも後悔か、もしくは自嘲か。

闘争に生きる身の上で、勝は初めて自分の生き方に妥協した。可憐な小さい命に、世界の残酷さを思い知らせる前に、本当に教えるべきものがある。

それは、

「気が合った奴と一緒に笑って、喧嘩して、暴れて、惚れた女と一緒にイチャイチャして、恥ずかしい思い出を作って、幸せになることだってある。　　俺達は馬鹿な大人だから、殺して皆に解らせることしか出来ねえが、チビ姫さんには、他にも色々出来るもんがあるだろう。世の中何も、赤一色とは限らねえからな」

可能性の話だ。

汚れきつた大人達じぶんには遅すぎた、青臭い夢の話。今の自分に満足しているからこそ、勝は少年に別の道を示したのだ。何も解らない少年に、破滅だけの生き方は余りにも詰まらない。それを教えてあげられる者には、それを教えただけの責任がある。若い命に対する責任に、勝は無聊な人生を吹き込むという粹の無い真似事はしない。

強く、楽しく、好きに生きる。

それが勝が見出した。限られた自分の運命に対する挑戦だ。

「強く、生きる……」

「ああ、そうだ。そしてそう出来るように、チビ姫さんには色んな色を憶えて欲しい。流石に赤ばっかりだと、何時か飽きちまうだろう？」

「……うん」

頷きに、勝は陽気な笑みを浮かべた。

納得はしてくれなくても、解ってくればそれでいい。たとえこの先、互いが同じ境界線で交わらずとも、この遣り取りの中で、勝は確かに本当の自分を少年に示せたのだから。

「強くなれよ、チビ姫さん。      チビ姫さんが自分に納得出来た  
その時には、姫さんを置いてきぼりにした親父さんにギャフンと言  
わせてやれ。そして嫁の一人や二人を貰え、孤独はクールで格好良  
いかもしれねえが、一人ぼっちだと暇で詰まらねえからな。ダチや  
女房と一緒に遊んでいた方が楽しいのは当たり前だからな。そんな  
は、俺も誘えよ。一緒に騒いでやるからよ。」

「……………うん。      ありがとう、勝」

「いいんだよ。      ”秀康”」

/  
/

「……………き、……………おい、結城」

朦朧とした意識の中で、結城は聞き覚えのある呼び声によって我に  
返った。はっ、と目を見開き、顔を上げた彼の目に映るのは記憶に  
新しい背景と人物達だ。

場所は三河郊外にある一軒の食堂。二十畳程度の大きさを持つ店の

中で、結城は畳敷きの部屋の一角に座っている。窓際の席に腰を下ろし、右手側には酒井がいる。そして料理や酒の出された机の向こうでは、榊原と忠勝がおり、その横に二代を控えさせている。酒井の古い友人である松平四天王との対面と、その挨拶代わりである二代との手合わせと彼女の求婚から数刻。自分達はゆっくりと話を出来る場所を探してこの店に来たのだが、会話の途中から結城はつい過去の記憶に浸ってしまった。

「大丈夫か？ さつきからボーっとして」

「あ、ああ……、すまん。ちょっと考え事して……」

返事に、酒井は怪訝そうな表情を浮かべるも、黙り込む結城にかけ、言葉は見つからない。

そんな二人の前で、今度は向かいに居る忠勝が言葉を作った。

「なんだあ？ 二人ともそんな辛気臭い顔をしておって。縁談話の最中なんだから、少しはテンションを上げたらどうだ？」

「おい、誰のせいでこんなことになってると思っていやがる？ 首押し折るぞ、ジジイ」

「まあまあ、少し落ち着けよ、結城。ダっちゃんが頭おかしいのは何時ものことだけど、昼間から人をバラすのはよくないでしょ？ 血塗れで武蔵に帰っても、皆にドン引きされるだけだよ？」

「ちっ、それもそうだな……」

「お前等、なんか論点がズレてるぞ？」

張り合いの無い遣り取りに、しかし結城は何時もの調子を取り戻した。頭の中で昔の光景が残滓のようにこびり付く中、彼は忠勝に向き直り、

「で？ アンタ等はどうするつもりだ？ 先に言うておくが、初対面で行き成りプロポーズしてくる女に、はい結婚しましょうとか御免だぞ、オレは」

「なにい？ お前、私の娘じゃ不服だとも言いたいのかあ？」

「問題そこじゃないでしょ？ ダっちゃん。結城も、そんなに率直に断らなくてもいいじゃない」

「己の人生の一大事に対して、そう簡単に締め括られてたまるか。  
そんなことより、二代って言うんだっけ？ アンタはどうい  
うつもりなんだ？」

「え、あ、……Jud。」

話が自分に回って来たことで、二代は姿勢を正した。彼女は結城と  
目を合わせるように向き直り、やや身を乗り出した。

「拙者は、三河を出たことが殆どありませぬ。幼少の頃から武芸の  
鍛錬をこなして来ており申したが、そのが果たして確かな力となっ  
ているのかということに、不安を感じているで御座る」

言葉に、皆が静かに聞く。二代としても、この話は既に父と話し合  
っていることだ。武家の娘ではなく、同じ一人の武者として、更な  
る高みを目指すのは至極当然のこと。スポーツ選手的な気質の中で、  
心身の強さを求めるのが己の目的なのだ。だからこそ、二代は井戸  
の中の蛙になりたくはない。

焦燥はある、だから先ほど、向かいに座る酒井から武蔵に行くかど  
うかと誘われたときは心が躍る想いだった。貿易船として各地を転

々とする武蔵でなら、より多くの物事を見聞きする機会がある。昔の級友である正純もそこにいるし、何より武蔵学長である酒井の誘いだ、フォローは万全だろう。

しかし、それ以前に、

「結城殿の技には、今までの拙者には無いものを感じ取ったで御座る。武芸を習う者として、それが何であるかを確かめたいで御座る」

でも、

「ただ見るだけでは、学ぶだけでは足りないで御座る。武術は、人の心と生き方を表す。結城殿の戦い方には、流儀に縛られない個性があり申す。拙者、結城殿のその果敢さに心を惹かれたで御座る」

未知とは、恐怖と期待を併せ持つものだ。その未知に対して理解を得た瞬間。人は始めてそれが脅威か希望かと把握出来る。そしてその何れも等しく、人にとっては人生の宝だ。

三河という檻に育った二代に対して、結城という存在はまさしくそれだ。同じ生の時間を歩んでも、自分と彼との実力の差は歴然のもの



のだ。それだけで、二代は世界の広さを実感した。

強ければ誰でも良いという訳ではない。先ほど自分が言っていたように、目の前の少年には、既知に囚われない自分の生き方がある。そしてそれは、きっと自分が長年求めていたものだ、二代は確信出来る。それが何であるかを知るためにも、もっとこの男に近づきたいと。

「今すぐ返事を返すとは言いません。だがせめて、結城殿の御傍にいられる機会を与えてくれぬでは御座ろうか？」

頭を下げ、そう願う。誠心誠意なその態度に、しかし結城の答えは、

「やだね」

即答された否定の言葉に、二代は硬直した。いきなり告げられた言葉に、彼女は遅れてからその意味を理解し、そして、

「え？　そ、それはどうしてで御座るか！？　やはり、拙者が未熟

者ゆえ……」

「ちげえよ」

慌てた反応を見せる二代に、結城は彼女の言葉を遮る。彼は机に頬杖をつきながら、何時もの半眼でこう言った。

「お前は何か勘違いをしている。改めて婚姻を断る前に、これだけは言っておく」

それは、

「お前はオレを買被りすぎている。オレが強いとか、自分が未熟だとか、そんな的外れで対等ではない考えでオレとお前の立ち位置を決め付けている。いいか？ オレは武蔵の学生だ。聖連の暫定支配下にある、戦う力を奪われた国の住民だ。実戦経験を言うのであれば、オレはお前と同じで、人を斬ったことはない。戦える技術を持って、それを戦うことに使えないオレもまた、未熟者だ。」

だからオレとお前は対等だ。自分を卑下して、私は弱いから、強い貴方の傍にいさせて下さい的な発言は無しだ。そんなのは、強くな

りたいと願うお前自身と、勝手に持て離されたオレへの侮辱だ。武芸を学びたい、知りたい、先に進みたい。それは結構だが、しかしそんなのでオレと一緒にいたいのは単なる憧憬だ。そんな履き違えた想いに、オレとお前の人生をかける積もりは無い」

強く、楽しく、好きに生きる。

そう言ってくれた人のことを思い出し、結城は淡々と言葉を紡ぐ。悲劇に囚われた今の自分には、もうあのような生き方を選ぶことは出来ないが、決して赤色だけの人生を歩まないという約束だけは、今でも憶えている。そしてだからこそ、結城は縛られたくない。縛られるような考えや生き方を見たくはない。

「だからこの縁談。オレは受けられない。　　気持ちは嬉しいが、安易に妥協して、お互いの価値を下げるような真似はしたくない」

「……それで、御座るか」

答えは明白だ。そしてこちらの考えも、明確に伝わった筈だ。向こうは残念な表情を浮かべているが、目には力が宿っている。それでいいと、結城は思う。

目の前の少女は、一人の侍だ。しかしそれ以前に、一人の女でもあ

る。自分の知る異性達は、どんな時でも自分を示すことに精一杯だった。夢を追うのと同時に、決して自分自身を見失わない。だからこそ、一時の熱で掛替えの無い青春を天秤に載せることを、結城は良しとしない。そしてきつと誰も、そんなことを望んではない。

「もっと自分を磨いてくれ。オレより強く、魅力的な男を惚れさせるほどに、自分を生きてくれ」

「己を磨く、で御座るか……」

「ああ、そうだ。年頃の女は、高嶺の花みたいに自分を咲かせておけ。綺麗に咲き誇れたら、そんな時はオレの方から嫁に貰いに行くかも知れねえぞ？」

「え、あ……、それはそれで、いいかもしれないで御座る、かな……」

机の向こうで、愛嬌よく首を傾げる二代に、結城は苦笑した。やや説教臭い話し方だが、互いに納得がいくようならそれで良しと、結城は内心頷いた。

そして場の空気が落ち着いた時、不意に出口の方から足音が響いた。誰かがこちらに近づいているという物音に、皆が音のする方向に視

線を向ける。

「なにやら騒がしいですね、皆さん」

「げえ……!!」

現れた人物に、何故か横にいる酒井が声をあげた。

狼狽したその反応に結城は片方の眉を釣り上げ、座敷の上がり口で足を止めている人影を見た。長身の侍女服を身に纏い、黒い角型の感覚器を持った女性の人型は自動人形だ。

「鹿角様」

「J u d .」

二代の呼び声に、自動人形、鹿角は返事を返す。そして彼女は半眼の視線で全員を見て。最後に酒井を見据えてから、こう言った。

「どなたかと思えば、酒井様ですか。左遷からのこのこやって来て、未来ある若者を前にサービスもなしで昼間から酒飲みとは、大した大人ですね。二代様、早く御屋敷にお戻りを。このままでは駄目親父の菌がうつってしまいます」

辛辣な発言をする自動人形に、酒井が難色を示す。そんな彼の隣りでは、結城が新鮮な表情で鹿角見て、酒井に問うた。

「何この女？ 学長に対する話し方が武蔵さんみたいでメチャクチャ好感持てるんだけど」

「あ？ 結城、お前の目は節穴か？ あの刺々しい態度の何処が良いんだよ？」

ヒソヒソとした二人の会話に、鹿角は視線を結城に向ける。侍女としての佇まいを崩さずに、彼女は結城に一礼し、

「自己紹介が遅れて申し訳ありません。本多家御用兼三河所属自動人形統括である鹿角と申します。お気に召されて光栄です、結城様」

答え、しかし結城は自分の名前を呼ばれたことに怪訝な表情を浮かべた。

「あれ？ オレ名乗ったっけ？」

「Jud、制服の腕章に書かれていたので、お呼びさせて貰いました」

「ああ、成程」

左腕につけられた腕章に視線を寄越し、結城は軽く頷いた。しかし傍にいる酒井は相変わらず顔を顰めており、向かいにいる忠勝に質問した。

「……ダっちゃん。十年前と同じで、相変わらずこの女、ダっちゃんどこ？」

「ま、まあな。女房の料理とか剣筋とか、コイツしか再現出来ねえからな。礼儀作法とかも、人に教える分にはちゃんと出来てるし…」

…」

「Jud、現在は、私が二代様の基本師範を務めております。二代様も年頃の女性ですので、生活に対するケアを怠けてはいけません。なのに忠勝様ときたら風呂に入ろうとか焼き肉屋行こうとかかなり駄目ですので。情けない」

「まあな、昔からダっちゃんとかは駄目人間のダだからねえ」

言葉が出た瞬間。酒井の眼前に黄色の尖端が突きたてられた。右目の正面数センチの位置に浮かんでいるのは、焼き鳥を刺していた一本の竹櫛だ。持ち手のいない竹櫛は宙に浮かんでおり、しかしその延長線上では、鹿角が右手を肩と同じ高さに掲げていた。

自動人形の種族としての基本機能である重力制御。その力を使って、彼女は竹櫛を浮かばせている。

「幾ら駄目でも、忠勝様は当家の主です。愚弄はお止め下さい」

「なあ学長。うちにも何体かああいうの欲しくね？ そうしたらオレと武蔵さんの心労も軽くなるから」



「おいおい、冗談よせよ。なんで俺がピンチになっているときに、護衛のお前が余所でお茶飲んでるんだ？ 手助けしろよ」

言葉に、結城が、いやいや、とんでもない、と手を横に振る。その仕草に、鹿角がJud、と会釈した。

「立派な付き人をお持ちになりましたね酒井様。 主の悪いところに対する矯正に手加減が無い、良い心掛けです」

「コレ、付き人っつーか単なる目付役。 て言うか、本当に何しに来たの？ 鹿角」

「Jud、今年の三河警護隊の隊長は二代様ですので、そろそろ警護艦が出港する時間です。 忠勝様、二代様。 出発の準備をお願いします」

説明に、結城は、成程、と頷いた。

他の停泊地と違って、極東代表国である三河は毎年、武蔵の出港の安全を約束する露払いを行う。安芸まで先に先行し、山岳回廊の安全を調べるための部隊を遣わせる。そしてその部隊が、俗に言う三河警護隊だ。

極東諸国は聖連の暫定支配下において、戦闘能力が大きく削られているが、しかしその中で、三河警護隊は防衛的対外闘争が認められている。三河はP・A・ODAとの同盟で鎖国状態にあるが、聖連所属国であることに変わりはない。中心部に大型地脈炉”新名古屋城”を持つこの地は、大罪武装を始めとする開発技術のせいで、聖連諸国のターミナルポイントとなっている。中立的立場を主張するのであれば、IZUMOに似通る部分も有るが、政治的立場として言えば、やはり極東代表国の肩書きの意味は重いだらう。

何せ聖連からしてみれば、三河を牽制するだけで、極東の大半を掌握したみたいなものだ。そして何れ起きるP・A・ODAとの相対を前にして、三河の兵器開発技術は必要なものだ。同時に、そんな三河を<ruby><rb>覬覦</rb><rp>( </rp><rt>きゆ</rt><rp></rp><rb>>する国も当然ある。しかしそんな輩に対して、聖連諸国が牽制するための余分の兵力を持ち出す訳も無い。だからこそ、こんな時のためにある三河警護隊だ。

「では、我はここまでだ。この先、しっかりやれよ」

「結城殿。先ほどの話、勉強になり申したで御座る。機会があれば、また手合わせを」

/ /

去って行く三人の武者を見送り、遠く離れていくその後姿に、酒井はテーブルに肘をつきながら言った。

「唐突に求婚された分、随分とあっさりと終わっちゃったな」

言葉に、結城は軽く肩を竦めた。

元々今回の主役は自分ではないのだ。プロポーズもアクシデントみたいなもので、一時の熱に流されるほど、自分は子供ではない。

それに、

「女は情が熱くて苦手だ、うちの連中も少しは柳のように静かになつて欲しいものだ」

「期待するだけ無駄だろ。にしてもダっちゃん、食い逃げ？」

「私、麦茶だけですの」

「右に同じく」

質問に、今まで黙っていた榊原が答え、結城が続いて頷いた。

二人の返事に酒井は髪を掻きながら、参ったねえ、と溜息し、

「にしても榊原、結局井伊はどうしたんだ？」

「井伊君は……」

「待ってくれ」

二人の会話に、しかし遮るように結城が手を小さく挙げた。

その動きに酒井は眉を軽く寄せ、対して横にいる若者は直ぐに言葉を作った。彼は向かいに座る榊原に向き直り、

「この先、重要な話か？」

「……ええ、ある程度は」

「そうか、じゃあ、部外者であるオレは席を外すとしよう。

「ここは三河だ、内政に関する可能性があるのなら、ここは学長に任せ  
ておくよ」

「俺は別に構わないが。お前はどつするんだ？」

「この辺りを見てくるよ。物資の流通とか、まだ色々と気になるこ  
とがあつてね」

「そうか、と酒井が会釈した。座敷の上がり口に足を運ぶ結城を視線  
で追つて。彼は最後に一つだけ聞いた。

「俺、連絡手段無いけど。帰りはどうすんだ？」

「関所で合流だ。なんなら先に帰ってもいいぞ？」

Jud、と酒井が頷いた。その言葉を最後に、結城は店を出た。

向かう先は三河郊外から東に向いた方角。中心部である名古屋に一番近い、住宅地のある場所だ。

/  
/

武蔵アリアダスト教導院前の橋上で、正純は非常に遣る瀬無い表情をしていた。

理由は一つ、酒井と結城の二人と三河に降りた正純は、関所で書類の手続きを済ませた後、そのまま武蔵へと戻ってきた。そして当初の予定通り、後悔通りの調査のために奥多摩へ来たのはいいが、そこで思いがけない事に出くわしてしまった。いや、ある意味それこそが、本日の自分の課題でもあるのだが。

……色々聞かされたが、それでも解らないことの方が多いな。

先ほど、後悔通りで父である正信に出会った。商工会の役員と共に、馬車で奥多摩の組合所に向かうところを。そしてそこで聞かされた、後悔通りの意味を。

葵・トーリの後悔。

少女ホライゾン・アリアダスト。

松平・元信の内縁の妻子。

酒井学長の言っていた、こっち側の意味。

より多くの情報を知っても、帰ってくるのは更なる疑問だ。この武蔵が抱えた、十年にも渡る重みは、一つの命の喪失。そしてそれを、今では一人の少年が背負っている。取り返しのつかない後悔を、ただ静かにその小さく狭い背肩で。

「それでも、解らない……」

喪失という名の苦痛は正純にも解る。襲名が失敗し、母を神隠しで失い、一人この武蔵に渡ったとき。自分は胸が裂けそうな思いだった。

なのに、

「どうしてお前は、笑っていられるんだ……、葵」

理解できない。





を求めるのであれば、彼もまた総長か生徒会長に相応しい人材だ。誰かに尽くすことがあっても、誰かを導いてもいい筈だ。

以前、気紛れに他の皆や武蔵の住人に聞いてみたが、皆一様に結城の能力を肯定したが、彼がリーダーになるという可能性だけは認めなかった。そしてその理由を、正純は最初は理解できなかったが、彼を見ているうちに納得した。

あの男は、己自身を肯定せず、周りの物事に価値を見出す人だ。

気遣いはあるが、同時に己に無頓着。自身の能力と才能を必要値として捉え、決して成長することに意義を見出さない結果主義者。彼は自身が定めた『目的』のためには、己の経験や技術、そしてそれらを培ってきた努力すらも道具として切り捨てることの出来る男だ。日頃の外道な佇まいや話し方、容赦のない制裁や威嚇も、全てがその『目的』のために必要な要素に過ぎない。

……自己限定の現実主義者。

究極の利他的。結城という名の戦う家畜は、決して己自身を過大評価しない。自身の性能を商品のように計り、そしてその手綱を握られるのは、彼がその価値を認めた者達だけ。そしてそれはこの武蔵全体であり、彼の存在意義は全てこの船にある者達のためにある。千のために一を投げ捨てる。それは正純が武蔵に転校してきて一年で得た、結城という人物に対するたった一つの真実だ。

己に対して無感情で、非道になれる。しかしその犠牲を他者の安寧と幸福に遣わせる。そのためには芝居や打算も出来る人間。見返り

を求めない献身的な姿勢は最早狂人の域に達しており、己を殺しえる痛々しい姿は苦行に浸る求道者そのものだ。他の国では十数人単位で動く臨時相談役委員会を、この武蔵でたった一人仕切っていることが何よりの事実だ。

何が彼という人間を其処まで壊したのかは、正純には解らない。他の皆に聞いても、自分達には言えないと返される。そう返事をしたときの、皆の苦虫を噛み締めたような表情を、正純は忘れない。あんな顔をされては聞きたくても聞けなくなる。しかしそれが葵・トリーと、ホライゾン・アリアダスト、そして彼の過去に関っているのは解る。そしてそれもまた、先ほど父から教えられたことなのだ。

……アレは主を失った獣だ。主人の死を受け入れられずに、未練がましく墓穴を守っている狼だ。何れ自壊し、己の愚かさに溺死する、哀れな道化だ。

父の言葉に、正純は何も言えなかった。武蔵に来て一年しか経っていない新参に、何か言えた義理か。結城は暫定議会とも交流のある人物で、父も結城も、互いの人格を理解しているし、共に何度も仕事した仲でもある。そんな父があのように結城を評価したのは、父なりの感慨があるのだろう。

どちらにせよ、正純には解らない。

後悔通りのことも、葵・トリーのこと、結城のこと、この武蔵のことも、何一つ理解できていない未熟者だ。そんな無力な自分に、思わず泣き出したくなる。

「泣くとは、見つとも無い話だな」

嘆きのような呟きに、正純は空を仰いだ。乾いた目からは何も溢れることなく、しかし確かな涙が流れているのは、心の慟哭か。

何時もなら、くよくよしている自分に、結城が横から飛び出して檄の一つや二つを飛ばして来るのだが、そんな彼は今、此処にはいない。

今は遠い三河にいる友人を思い、正純はただ静かに、夕焼けに近い空を見上げた。

#### 第四話〈赤色に染まった無情〉（後書き）

なんかグダグダ感が拭えない第四話で済みませんでしたのクロです。

頭が鬼柴田の背影を前にフリーズしていたので、思わず英国篇での利家登場時に結城がどうするのかを妄想（計画）していました。

あと、いよいよデスね。三河決戦もうすぐ目前、もう色々飛ばしたいや。なげやりでもバトルシーンを書きたいこの衝動、まさしく愛だ。

アルマダ海鮮書きたい、三方ヶ原書きたい、おっぱい母ちゃん苛めたい、立花夫婦はトイレで反省している。あと成実くれ、ウツキーはもげる。

とまあ、投稿時点で何か色々壊れているクロですけど、ちゃんと創作時はまともですよ。

なんか愚痴っぱい後書きになってすいません。

では皆さん。また次回……

## 第五話　祭り前の喧騒

草木も眠る逢魔の刻。夕色のカーテンに遮られた空は炎の残光を引き摺り、地平線から覗かせる真紅色の天体は本日分の労働から解放されようとしていた。

そんな夕方の三河街道の上を、オレは静かな足取りで闊歩している。古来より環境神群の加護を得てきた土地は、過去の栄光に未練がましく縋りつくような哀愁感を漂わせ、今の時代に生きる人間に説明の出来ない違和感を与えている。コンクリートによつて舗装された国道はぞつとするような冷ややかさを漂わせ、伝統的な建築構造を持つ民家や建物との間には拭いきれない時代差がある。

そしてなによりも人の目を引くのは、タイムトンネルの如き町並みの最奥に佇む、巨大な四角形の箱だ。中身を包み込む四方の壁に”NEW CASTLE of NAGOYA ATELLIER on MATSUDAIRA.”という表示を示すそれを、オレはただ見詰めることしか出来ない。冷色系の塗料に覆われた四基の地脈炉と一基の統括炉を内包したパンドラの箱には、あの男がいる。

松平・元信。極東代表国・三河の国主。三河松平家の当主。都市破壊級個人武装・大罪武装の生みの親。航空都市艦・武蔵の主。自らを先生と自称して憚らない、聖連の傀儡。今の世界を作り上げた元凶の一人に思いを馳せ、しかしそこから得るものは何一つ無い。

そんな結論と共に、オレは進む足を止めた。背中から当たる斜光の暖かさを感じつつ、右手前に聳え立つ道路標識に目を向ける。中心部である名古屋を指す案内の文字に、オレの心身は楔を打たれた。

この先にはもう進めない。そういう決まりだ。例え進めたと

しても、どうして進むのかと問われる。そしてその答えを、オレは持っていない。

「……寒いな」

季節は春だ。

それでも寒く感じるのは、もうすぐ夜になるからだろう。自分が冷え性であるのも原因の一つだが、最大の要因は、この心の落胆によるものだろう。

「まったく……、寂しがりやな子供のようだな」

そんな感傷はとっくの昔に捨ててきた筈なのに、それでも暗く感じるのは、やはり人としての性か。　　いかな、夜に皆と一緒に教導院で騒ぐと言うのに、こんな気持ちでは駄目だ。少しは楽しいことでも考えなければ。

「オレは武蔵の人間だ。」

もう、こことは関係ない」

三河の血を引いても、オレは三河を知らない。だからこそ、オレが思うのは、今の自分を取り巻くことだけだ。

そんな考えと共に、不意にそれを想像した。

今頃、学長は旧友と大事な話を終わらせ、関所に向かっている処だろう。時間的に考えれば、自分も合流に向かわなければならぬ。そして二人で武蔵に帰り、番屋のあんちゃん達と軽く挨拶を交わしながら、村山の賑やかな表層部上がる。その頃は既に夜になるだろう。そのまま教導院に向かつてもいいが、ついでに多摩にも寄つて見よう。今日は花火があると聞いている。真面目な正純のことだ、皆と騒いで近所迷惑をするより、多摩で花火を見るのが性に合っているだろう。細かいところで律儀な奴だ。そうだ、多摩なら、ついでにP・O・I・sとも挨拶を済ませた方がいいだろう。折角の三河来訪だ、帰りに御土産を買ってあげるのも良いだろう。最近読書を嗜んでいると聞いたから、本がいいか。どのジャンルが好みかは知らないが、あの子のことだから、どれでもいいのだろう。

そして待ち合わせの時間に皆と合流し、その後は幽霊探し。主催者はトリーだから、どうせ碌でもないサプライズを用意しているのだろう。皆の呆れる顔が簡単に想像できる。

予定に無い被害に頭を抱えるシロジロ。それを横で微笑みながら金勘定するハイディ。愚痴を言いつつ、指示を飛ばすネシンバラ。騒ぎの中で、皆にあれこれパシリされる点蔵。横で笑いながら、しかし自分も暴れているウルキアガ。溜息をこぼし、でもトリーの言うことには逆らえないネイト。無口で面倒な顔を浮かべながら、しかし一緒にイベントを楽しむノリキ。そんな中で、ネタ探しに余念がないナルガと、真っ先に先頭でムードを上げるナイト。その後ろで

は、相変わらずのマイペースで、しかし幽霊が怖くて縮こまっている喜美。仕事のついでに、何時の間にか自分が楽しんでいる智と、それを傍でビクビクしながら鈴とアデーレがついていく。そしてそれを、マサが呆れながらも見守っているだろう。外野では、個性とは裏腹に、置いていかれた者達をフォローするのはペーヤんとイトケン、そしてネンジ。腹を鳴らしている休憩組に、御広敷とハツサングがカレーを配っている。表層部での騒ぎにイライラしながら、何時の間にかミリアムが様子を見に来るかもしれない。それをトリーの馬鹿が引き摺り回して、また愉快な連中が輪の中に入る。もし余がいるなら、多分皆についていけず、横でソワソワしているだろう。

そして余にも騒がしいため、最後は麻呂が何時もの不機嫌な顔で現れて全員に説教し、それを遅れてきた学長が暢気な顔で宥める。今日の夜番は真喜子だが、どうせ自室で酒飲んで倒れているだろうから、それを麻呂に見つけられて皆と一緒に校庭で反省の土下座し、その後は三河の花火を痺れた両足と共に見ながら、そのまま解散。

ああ、そうだ。それが日常だ。何時も通りの、誰もが当たり前と願っている幸福だ。そしてそれを容易に思い浮かべられるほど、オレもこの幸福に浸っていたのだろう。ならば、それ以上のものを望むこともない。帰る場所があり、帰りを待っている人たちがおり、その居場所を守りたいという思いもある。真つ当な人間としての、そうあって然るべき要素を持っているのだから、それ以外の余計なものはいらない。

だから、

「諦めてもいいはずだ」



もう、あの日の真実を求めなくてもいいはずだ。

日が沈む空を背に、オレは踵を返した。それと同時に、目に映るものがある。西の空を、幾つもの船が擦れ違つように交差する。

三河の警護艦と、三征西班牙の審問艦だ。

蠢く世界の舞台裏で、オレは日常に戻るための道程に行く。強く、楽しく、好きに生きる者達の傍へと。

/  
/

三河南西にある一般用露天陸港。K・P・A・Italia 旗艦である”栄光丸”に遅れて入港した三征西班牙の審問艦の上では、厳粛ながらも賑やかな雰囲気は漂っていた。教皇総長の護衛として派遣された護衛艦三隻と、政治的による牽制を担った審問艦は待機命令を下され。自由時間を与えられた学生達は次々と船を降りては、心身を休ませるための観光や貿易に勤しんでいる。

そんな中、多くの学生と擦れ違つるように、二人の男女が船から港へ降りた。艦首下に巨大な懸架台を持った黒の長方艦から堂々と歩み出たのは、三征西班牙の主教導院、アルカラ・デ・エナレスの制服を着た三年生だ。

男子の方は金色の短髪を持った長軀で、女性は彼の傍に付き従い、そのシルエットは遠くから見てもやや大きい。両腕が巨大な義腕である黒髪の少女に、金髪の男子は笑みを向けながら質問した。

「やっと三河に着きましたね、？さん。まずは何処へ遊びに行きましようか？」

「私達は遠足に来たものではありませんよ、宗茂様。自由時間とは言え、15分以内に帰艦出来る範囲内で活動しなければいけません」

「解っていますよ、？さん。長い時間、船の上にいたから、気晴らしに言ってみただけです」

「ならいいのです」

少女、？の淡々とした返事に、宗茂が苦笑する。彼女の生真面目な反応を楽しみながら、彼は遠くにある三河の方角と、武蔵のある北の方角を交互に見た。

「今日の三河は色々賑やかですね。まさか武蔵の入港日と鉢合わ

せするとは」

「Tes、向こうは恒例行事でしょう。我々は教皇総長の新型大罪武装の交渉に同行させられただけです、何事もなければ、それで好かと」

「八大竜王が二人も同じ場所にいるのであれば、嫌な憶測も増えるでしょうね。それに私、アレはちよつと苦手ですね」

宗茂の言葉に、？は彼の視線の先にある三河を見た。苦手なアレという意味を考え、？はその結論を出す。

「新名古屋城のことですか。宗茂様、また先ほどの話を引き摺っているのですか？」

「そういう事ですかね」

？の問いに、宗茂は肩を竦める。先ほどの話というのは、入港前に二人で確認した、今回の三河来訪と大罪武装に関する話だ。

都市破壊級個人武装である大罪武装には、決まってある噂がある。

人間を部品として作られていると言われては、宗茂は複雑な思いを抱いている。西国無双として名高い自分は、立花・宗茂とガルシア・デ・セヴァリオスの二重襲名者であると同時に、大罪武装”リビ・カクスリブン悲嘆の怠惰”を扱う八大竜王の一人だ。国の代表として、曰く付きの力は人々の疑念を集まらせるものがあると、宗茂は考えた。罪を破壊の力として具現した技術に、人なら誰でも眉を顰める筈だ。

「松平・元信公と新名古屋城それを成し遂げた。一体何を考えているのでしょうかね、あの男は。こんなものを作り出して……」

嘆きのような宗茂の言葉に、？はやや俯いた。気持ち解らないわけではないが、解らないことに悩むことを？はしない。自分にとって、宗茂の居る場所が世界の全てであるため、？は何よりも宗茂を優先させる。だからこそ、何よりも大切な彼の悩みもまた、自分の悩みだと、？は思う。しかし、今の宗茂の疑問に答える術を、？は持っていない。

ならば、

「そんなこと、元信公ではない私達が考えても詮無きことです。

宗茂様。夜は花火と祭なのですから。今の内に見晴らしのいい場所を探しましょう」

「……そうですね。考えても仕方の無いことです」

答えが出ないのなら、それで良いと思う。煩惱は人の性だ。時には煩惱を持って前向きに考え、先に進む剛胆さを求められるときもある。だから？は考えない。考えることを諦めるのではなく、答えが出るそのときまで、悩むこと以外の生き方をしてもいい筈だと。

「じゃあ、先ずは何処へ行きましょうか？ 祭ならやっぱり、屋台とか出るのでしょうかね？」

「……宗茂様。やっぱり自分が遊びたいだけなのでは？」

/  
/

「元信公。そろそろ時間です」

朱色の残光が尾を引く町中で、声が響いた。

眼前に鳥居型表示枠を展開して連絡を取っているのは、侍女服姿を

した自動人形、鹿角だ。彼女は遠くへ散っていく気配を感覚器で感じながら、画面の向こう側にいる人物と会話をしている。

『ご苦労だ、鹿角。忠勝も最初の現場に向かっているし、これだと祭がバレルのは予定通り八時過ぎになるだろう。懸念事項はないな？』

元信の質問に、鹿角はJud・と答えた。しかし彼女はややあつてから、返事を取り消すように、こつ言った。

「一つだけ報告が遅れました。元信公。一人、イレギュラーが三河に居ります」

『それは？』

問いに、鹿角は間を置いた。記憶にある人物の姿を思い浮かべ、そして彼女ははつきりとした声で告げた。

しかし、

「Judd、  
若様が、三河に戻っておられました。如何致しますか？」

『……………』

確認を取る鹿角の報告に、元信は答えない。画面の中では、彼は考えるかのように目を細める。しかしそれもまた、何時も通りの表情に戻り、だが明らかに先ほどとは意味の違う口調で、彼は言う。

『今夜の祭に、賓客を招待した覚えはない。  
鹿角』  
解っているね、

「……………Judd。」

短い返事と共に、表示枠が閉じた。そして無人の静寂の中で、鹿角は西の地平線を見る。世界を相手にした三河最後の祭の前に、彼女は静かな足取りで、やがて訪れる宵闇へと潜り込んでいった。

/  
/





かもしれない。花火や祭があると聞いてはいるが、生憎、特等席を  
独り占めする気はない。つか明日の相談役の会議書類がまだ残って  
る。どうしてくれるんだ、あの白髪。今度禿にしてやろう、うん、  
そうしよう。

「如何なさいます？ 先に港へ向かうのであれば、手続きを申し込  
みますが」

受付の姉ちゃんの問いに、オレはうーん、と唸った。こんな遅くに  
なっても帰らない学長も学長だが、護衛のくせに職務放棄したオレ  
にも責任がある。ていうか、マジで何処へほつつき歩いているのや  
ら。

「流石に手ぶらで帰るわけにもいかない。 少し探しに行っ  
てくるわ」

「門限は八時ですので、その前によろしくお願いします」

はいはい、と手を軽く振って会釈し、早足で関所を出る。ここから  
三河に戻るには少し距離があるが、それでも行くしかないだろう。  
こういうことになるんだったら、加速系の術式を祈願すればよかつ

た。バランス重視の末に速度を抑えて来たが、そろそろそつち系の技能も欲しい。今度智に頼んでおこうか。とまあ、夜道は急げだ、分厚い硝子で出来たの自動ドアを潜り、オレは又一度、東南へ向かう道に行く。しかし関所からやや離れた時に、不意にそれが目に映った。

「…………？」

視界の隅。山岳回廊の東側の山溪から黒い煙が昇った。位置的には三河郊外と名古屋を一望できる番屋がある場所だ。聖連が三河の監視として設けたもので、関所とは別働として機能しているが、

「狼煙ではない…………、なんだ？ あの煙は…………」

祭だからといってキャンプファイヤーでもやっている…………、わけないか。今期の監視は三征西班牙の担当だ、統制が取れている真面目な連中が哨戒を余所に騒ぐ筈もない。だとしたら、

「火災か…………っ!？」

その時、オレは確かに聞いた。思考を遮るように五感に響くのは震動と微かな音響。余人では感じ取れない小さな反応が、オレの脳に警告を訴えている。その情報に、オレは反射的に視線を其処へ向けた。

南。三河のある方角で、それがあった。遠くに映る中心部である名古屋で、光があった。何故だ？ 三河は人払いで、住民は全て郊外に移住した筈、なのにどうして光がある？ 祭の準備に、自動人形が何かしたのか？ 違う、遠目から見える光は遠近効果から逆算してもかなりの規模を持っている。さっきまであんな光は無かった。

それに、

「今の震動と音は……」

爆発だ。確信はないが、あの燃えるような光が爆発によって生じられているという予感がする。幼い頃、何度も見てきた暴虐の陽炎が脳に浮かび上がる。その上、未だに煙を昇らせている番屋の方も余計に気が障る。流星にあれが花火だといわれても、誰も信じないだろう。

「……………どうなっている？」

昼間までは、何事も無かった。なのに今、何かが起きている。学長もまだ三河にいるし、番屋の方も気がかりだ。それによく見ると、三河の光はかなり奥の位置にある。

「名古屋なら、オレにはどうこう出来ないが……」

そうでなくても、オレ一人では何も出来ない。

しかし、

「出来ないからといって、何もしないのも気が引けるな」

うむ。やる気はある。面倒事は嫌いだ、首を突っ込まない程度に野暮用を済ませればいい。となると、先ずは番屋に向かおう、距離的にはあそこが一番近いから、状況を確認次第、三河に直行だ。あれだけ派手な爆発なら、学長も既に三河から退散しているだろう。そうなれば、無駄足にも価値があるものだ。

「単なる事故であってくれば、良いのだがな」

言葉と共に、全速力で山道を走る。希望的観測を抱くとは、オレらしくないな。ともあれ、御節介は心労が絶えないのが、世の理というものだ。

/  
/

「ハア、ハア……、  
最悪です」

夜空の下で、少女の声があった。その周りでは、時間と場所的にとても宜しくない喧騒がざわめいている。武蔵アリアダスト教導院の前で、多くの学生や見慣れた住民達が騒いで休み、術式を放つては避けている。特に騒動が激しいのが校舎内部で、間隔を持ちながら爆発や震動が校庭と橋上に響いている。そんな場違いな破壊を現在進行形で眺め、しかし休憩組である学生達は一向に止める素振りすら見せない。

そして体力切れで地面に突っ伏している者達の中で、息絶えた浅間が湿ったタオルを顔に被せながら、仰向けに倒れている。その横では、鈴がハンカチを扇子代わりに彼女の顔を扇いでいる。

「なんでまた、幽霊探しの途中からバトルしてるんだか……」

と、呆れたような言葉を吐いたのは、直政だ。彼女は右の義腕を腰に当て、息を上げている浅間に苦笑しながら言った。そしてそれを、反対側にいるアデーレが従士槍を杖代わりに身体を支えながら頷いた。彼女は、視線の先にある学生達と白いコスプレ集団を見据え、

「あれって、商店街の皆さんですよね？                    総長、また個人的なキャラ集めて……、これじゃあ、後で相談役の御仕置きが怖いですね」

「そう言えば、まだ結城の姿が見えないさね。                    まだ帰ってないのか？」

「さあ……、時間前に、浅間さんが連絡を取ってみたんですけど、通神が繋がらないらしいので。多分、まだ武蔵に戻ってないのでしょ」

「ふーん」

気の抜いた直政の返事に、少し間を置いてから、浅間が身体を起こした。彼女は傍で自分を介抱してくれた鈴に礼を言いつつ、左舷の方角を見る。未だに姿を現さない幼馴染を思いながら、浅間は表示枠を開いた。

通神履歴に登録された新しい記録は結城宛だが、其処には圏外と記されている。時刻は七時。つまり一時間前に、結城は武蔵に戻っていないこととなる。

……おかしいですね……

結城は時間に頼い人間ではないが、遅刻をするような人でもない。少なくとも、用事があってイベントに参加できないときは、自分から連絡を寄越してくるのだ。その相手は大抵はトリーか浅間だが、稀に他の級友と連絡を取ることもある。

……今回は珍しいですね。

圏外ということも有るが、それは個人通神に限られた話だ。地脈通神を使えば、連絡手段なんて幾らでもある。なのに未だに消息が掴めない状況に、浅間は一種の歯痒さを感じていた。自分でも気付かない心の奥にある焦燥に、自然と眉尻が下がる。そんな浅間の落胆したような表情に、横にいる鈴が首を傾げながら問うた。

「だ、大丈夫？ も、もういち、ど。結城君と、れ、連絡、してみ  
る？」

「え？ いや、どうでしょう……、用事で忙しいかもしれませんし。  
結城君のことだから、そのうち行き成り顔を出してきますよ……」

「……そう、かな？」

確認を取るような鈴の質問に、浅間は、きつとそうですよ、と笑み  
を返す。その小さな遣り取りに、不意に彼女は、はっ、と気付いた。  
今回のイベントの主役はトリーだ。明日の告白に対する前夜祭なの  
に、自分は祭の雰囲気余所に結城のことばかりを考えていた。

……い、いけませんね。これは……

何がいけないのかは解らないが、自分でも驚くくらいに、今日の浅  
間は彼のことを気にかけている。普段は手の届く場所にいる結城も、  
毎年誓って、三河に来るときは疎遠に感じてしまうのだ。言葉に出  
来ないその距離感が浅間にとっては怖くて、だからこそ、春先の神  
社の行事には何時も結城を誘っている。毎年半ば強引な手段で彼を  
引き込んでいることに負い目を感じながらも、本人は一度も嫌な顔  
をせずに、神社の仕事を手伝ってくれた。何時の間にかそれが当た  
り前のようになってきた。浅間はたまに、自分が彼に依存している



かのように思えてくる。そしてそれを証明するかのように、彼の存在を感じ取れない今の状況に、浅間は微かな不安を抱き始めた。

「やっぱり連絡……、とってみましょうか……」

はつきりとしなない、掠れたような口調で、浅間は表示枠を操作した。三河との地脈通神を選択し、神社の仲介を経て、結城へアクセスする。画面内に記された、通神接続中の文字を見据えながら、浅間は落ち着かない気持ちになっている。僅かな待ち時間が酷く長く感じ、周囲に響く騒がしい人声や震動が耳に障る。そんな息苦しい空白を待つこと数秒、新しく表示された文字に、浅間は姿勢を正し、しかし、

「通神……失敗……？」

という簡潔な四文字に、浅間は眉を顰めた。画面内には、地脈の混雑によって連絡対象との通神接続が出来ません、という情報が表示されている。

……通神祈願に優れているうちの神社のアクセスが利かない？

国家間の情報コミュニケーションの基盤である地脈通神を使っているのに、それが接続不可能という結果として返って来たことに、浅間は疑問を隠せない。そして眉間を寄せた浅間の表情に気付いたのか、直政とアデーレが彼女の背後に回り、共に表示枠を覗いた。

「なんさね？ これ」

「地脈通神が不通だなんて、今まで一度も遭ったことないですね」

即座に違和感に気づき、二人は浅間と揃って首を傾げた。背後で開かかっているイベントとは真逆な雰囲気の中で、しかし不意に、大きな声が響いた。

「一体何の騒ぎだこれはあー！！ 麻呂の町でこの狼藉とは！！」

叫びに、空気が沈黙した。爆撃を受けた校舎も、ざわめきで覆われた橋上も、賑やかに満ちた校庭も、呆れて溜息を吐いている学生や住民達も、皆が一様に声の主のいる方向に振り向いた。

「全くもってけしからん！！ 誰だこんなことを始めたのは！！？  
出てき賜え！！！」

視線の先にあるのは、一人の王様だ。トランプのキングをそのまま引っ張り出したかのような格好をした男性は、静まった騒ぎを前にもともと厳粛だった表情を更に不愉快に歪ませた。そんな彼、武蔵王ヨシナオの矯正を求める言葉に、皆が頷くが、

「ああ？ なんだよ、皆、いきなり静かになっちゃって……、まだパーティーは始まったところだぜ？」

「また貴様かあー！！！」

見計らったようなタイミングで、校舎最上階の窓から馬鹿の音が響くのと同時に、ヨシナオ王が叫んだ。それに気付いたトリーは、何時もの笑った顔を浮かべ、大きな声でこう言った。

「あ？ なんだ、あれ？                   おい！ 皆見ろよ！ あそこに麻呂のコスプレをしている馬鹿がいるぜ！」

「何を戯けたことを言っておる、総長兼生徒会長！！ 此処にいるのは真正正銘、真の武蔵王ヨシナオ公であるぞ！！ 貴様こそ、早く降りてきたまえ！！ この騒ぎは一体どういうことだ！ 降りてきて麻呂に説明しろ！！」

「おいおい、偽者の分際で自分を麻呂呼ばわりだぜ、アレ。知らねえのかよ？ 麻呂は友達いないからこんなところには来ねえよ。オリジナルは今頃、部屋で伝算器<sup>PC</sup>開けてマインスイーパーやってんだぜ？」

「貴様様ああー！！」

高度差10メートルを隔てた国のトップ同士の遣り取りに、皆が冷めた視線を向ける。ああ、またか、と誰もが溜息を吐き、しかしともあれ、武蔵王が出て来た時点で、今回のイベントは終了したようなものだ、と心の中でそう結論付けて、皆が小さい動きでその場を退散しようとする。トリーがヨシナオの注意を引いている間に、先に一足逃げようとしているのだ。しかし、ヨシナオを背に、中腰で退避しようとしている学生達の中で、不意に動きがあった。

それは、

「……………あ、れ？」

足を止め、疑問の声を上げたのは鈴だ。彼女は左舷の方角、東にある各務原の山溪に顔を向け、そのまま動かないでいる。そんな彼女の動きに気付いたのか、先を歩く浅間が首だけ振り返り、鈴を見た。

「どっかしたんですか？」

「……うん。あ、あそこ」

質問に、鈴は各務原の方を指差した。それに釣られて、浅間は視線を遠くにある山に向ける。夜の三河、明かりのない凹凸の地平線は底無しの暗闇に包まれており、湿った空気の匂いだけが風の流れに沿って伝わってくる。

「？」

なんの異変もない漆黒の空間を前に、浅間は首を傾げた。横では、鈴が各務原の方向を見ては視線を離さない。一体あそこに何があるというのかと、浅間が考えたそのときだ。

闇の中心で、光が灯った。

遠くから見て、まるで蠟燭の炎が点けられたかのような光は、不規則な揺れを持った炎だ。各務原のサン山峰に、炎が燃えた。

「おい、なんだあれ？」

「火？ どうして山の真ん中で燃えてんだ？ 爆発？ それとも火事か？」

「あのあたり……、聖連の番屋があるところだろう？ 下にいる連中、気付いてないのか？」

退却する人達の中で、異変に気付いた者がいた。そして遅れて、皆が足を止めては、東の方角を見る。遠くに見える炎は時間が経つに連れ勢いを増しており、それに呼応するかのように、人達の疑問や不安もまた、徐々に大きくなっていく。どうした、と。何があった、と。答えを求めようと、帰ってくるのは更なる疑問だけだ。

そして、

「……………つ、結城君」

ざわめきの中で、浅間はまだ表示枠を開いた。通神回線を開き、連絡を取るのには勿論、武蔵の臨時相談役だ。突発事項に対して、彼の判断力は頼りになる。同じ考えを持っているのか、他の生徒達も浅間の動きに注目する。

しかし、

「っ……、駄目です。やっぱり繋がりません」

接続不可。焦りを含んだ浅間の声に、追い討ちをかけるかのように、遅れて声が続いた。

「三河の商工団とも連絡が取れない。 どういうことだ？ 自  
動人形がない筈無いんだが」

言葉を作ったのはシロジロだ。彼は無数の表示枠を眼前に展開し、様々な情報呼び出しては閉じていく。何かが起きている、という確実な異変に、浅間は三河を見据えた。

未だに姿を見せない少年と、その因縁の土地に不穏な予感を感じな

がら。

/  
/

「どづいことか、説明してくれるか？」

砂埃の被った道の上、民家や屋敷が照らす人工の光の傍で、酒井は目の前にいる人物に問いかけた。人気のない三河の町中では、一つの動きがある。それがなんであるかを確かめるために、彼はその答えを持つ者を見据えた。

そして考えた、午後の食事の後、忠勝と結城が先に席を立った食堂で、酒井は残された榊原と話をした。内容は姿を見せないもう一人の松平四天王、井伊・直政のことと、去年、突然三河に乗り込んだ自動人形、P-01sのことだ。対話の後に色々と解ったことはあったが、それでも疑問に思うことが幾つもある。そのために、更なる詳細を求めて、榊原が今夜に纏まった資料を自動人形に渡してくれると言ったが、現実は事情が違った。待ち合わせの場所で八時近くまで待ち、ようやく伝言役である自動人形が現れたのはいいが、まさか渡されたのが白紙の束というのは流石におかしかった。堅物で生真面目な榊原に限って、こんな意味の解らない行動をするはずがないと思つた酒井は、急ぎ三河郊外にある彼の屋敷に来たのだが、そこには榊原の姿はなかった。



あるのは、

「神原が消えた。部屋に二境紋が残されている。”公主達”  
によって、神隠しに遭った。一体全体、何がどうなっている？  
ダ  
っちゃん」

「お前は老けたな、酒井。」

グランヘット  
大総長も既に過去形か」

そして己の問いに、声の主、本多・忠勝は不敵な笑みで嘆きの言葉を送った。正式装備である鎧を身に纏った彼は、武者の気迫と共に酒井の前に立ちほだかっている。そしてその隣りでは、侍女服姿の鹿角が無言で付き添っている。合戦前の静けさを漂わせる二人に、しかし酒井が気になるそれではない。頬を伝う熱い汗が示す焦りと疑念、そして不安の矛先は二つある。

一つは、

「神格武装”蜻蛉切”。こんな時間にそんなものを持ち出して、槍の修行とかじゃないよな？」

言葉に、忠勝は笑みを作った。彼は右手に握る長大な槍を地面に突き、酒井にこう言った。

「これから殿の御遣いでな、少し準備をしてきたところだ」

「……準備？」

「ああ、あれだ」

眉を顰める酒井に、忠勝は顎で北西の方角を示した。其処にあるのは、三河を監視するために聖連が設けた番屋がある。山の上で黒い煙を昇らせ、炎を噴き上げているその光景に、酒井に身構えた。右手を腰の後ろに忍ばせ、短刀の柄を握る。

「連中の対応が生温いんでな、予定より早く済ませてきた。そんでついでにお前の顔を見に来たわけよ」

「……何故だ？」

何故このようなことをする、という意味を含めた質問に、忠勝は地面を見た。その仕草に、酒井は懸念しているもう一つの要素に意識を向ける。

それは、

「気付いているだろう？　酒井。地面の奥底から伝わるこの響きが」

言葉と共に、突然、大気が揺れた。空間全体を大きく長く、しかしゆっくりと圧迫してから浮き上がらせるような震動に、酒井は唾を飲んだ。

知っている。地殻と、その上に構築された地面を波が打つように揺らすそれを、酒井はよく知っている。血管の鼓動のような定期を持つのは脈だ。人体に流れる命の音と震動を、何千、何万倍というスケールで引き伸ばしたのは地脈の響きだ。

「地脈が揺れている……、どうなっている？」

「そんなに驚くことではねえよ。　地脈炉を暴走させているんだからな。さっき三つ目がイッチまったから、ようやく此処まで来たって事だ」

告げられた言葉に、酒井の思考が止まった。

地脈炉の暴走。確かに聞こえたその一言に、今まで燻っていた酒井の熱が一気に冷めた。そして信じられないかのように、啞然とした表情を浮かべた酒井に、忠勝が答えた。

それは、

「今、新名古屋城では膨大な量の流体が蓄積されている。方向性を持たない空間変異素子が互いに”変換”し合い、そこに更に大量の地脈を送り込んでいるんだ。あと二つで、全てが始まる」

あと二つ。それは今現在でも暴走を続けている地脈炉の数だと、酒井は判断した。残りの地脈炉も爆発すれば、そのあとの光景は想像したくない。

かつて、重奏統合争乱が起きる前に、重奏神州の露西亞にて地脈炉が暴走自壊したことがある。そして似たようなケースとして、八年前に信長の襲名者が現れたP・A・ODAもまた、地脈炉の暴走を利用して領地内に残るムラサイ反勢力を滅ぼした。これらの陰惨な事件により、地脈炉は現在では三河とP・A・ODA以外の国では建造・所有を禁じられている。理由は暴走の際の危険性と、地脈の乱れを引き起こすという問題があるからだ。地脈炉は土地に流れる地脈を強引に吸出し、その土地の環境を悪化させることにある。三河で怪異が多発するのも、それが原因が一つだ。

しかし、今この三河を取り巻く危機の中で、本当に危惧するべきなのは、

「地脈炉暴走なんて……正気か？ 過去の事件では、たった一基で半径数キロの土地が消滅したんだぞ？ それを五つも行ったら、名古屋どころか三河が消えるぞ！！」

「だからお前は老けたって言うんだよ」

酒井の叫びに、忠勝が笑って告げる。

「見るよ、あれ。三征西班牙の武神だ。予定にない地脈炉の稼動に気付いて、偵察を行って来たんだろうよ。対空装備で上がってるたあ、運がねえ奴等だ。番屋の連中も山岳装備で纏まっている辺り、三河に乗り込んでも優勢は取れねえ」

空で、十字型の翼を持った赤い巨人が三河の上空を旋回している。状況から見れば、まだ聖連は事態の深刻さに気付いていないだろう。しかしそれもまた、時間の問題だ。

「今の三河に人はいねえ。居るのは自動人形と我達だけだ。井伊に続いて、榊原も消えたのは惜しかったがな、だがまあ、仕方ないか」

「惜しい……だと？」

「ああ、 我は殿の命令で動いているだけだからな。井伊や榊原は何か知っているようだが、我は何も聞かされていない。ただ、殿から聞いているのは……」

一息ついて、忠勝が言った。再び脈打つ、大地の鼓動と共に告げたのは、

「これが、創世計画の始まりだってことだ」

/  
/

創世計画は、P・A・ODAが世界に銘打った末世解決のための国

策だ。しかし実態の掴めない末世に対して、計画の詳細と具体的な法案を提示しないP・A・ODAに、誰もがその信憑性を疑っている。勿論、酒井もまたその一人だ。理解を示さない手段は単なる口先の戯言だ。だからこそ、酒井は忠勝が告げた言葉の意味を理解しかねた。

創世計画は、P・A・ODAが打ち出したものだが、そのP・A・ODAと同盟しているのは三河だ。そして今まで、P・A・ODAは一度も計画の全容を表に出さない。それはどうしてか？ その疑問に対する答えは、実は簡単なことではなかったのか？

「創世計画は、三河が、  
P・A・ODAに持ちかけた計画とでも言うのか？」

「ようやく、一つは理解出来たか。  
まあ、我也知ってるくらいの話だ。気づかない方がおかしい」

満足した頷きに、忠勝は踵を返した。終始無言を貫き通した鹿角を連れ、彼はこの場を去ろうとする。それを、酒井が構えのまま動いた。短刀を小さい軸運動で引き抜き、足を前に一歩踏み込んだときに、

「  
」

眼前に、蜻蛉切の穂先が突きつけられた。

「やめとけ。                      結ぶぞ」

「っ……、何処に行く気だよ？」

先制をかけられて事に、酒井は動かないまま問うた。その声に、忠勝は振り返らずに応える。

「我はお前に構っている暇がねえんだよ。                      直ぐにでもK・P・A・Italiaと三征西班牙の部隊がやってくる。これから鹿角と迎撃にいかなきやいけねえ」

「馬鹿野郎！                      その間に地脈炉が暴走したら、お前達はどつすんだよ！？」

酒井の叫びに、忠勝は僅かに視線を向けた。肩越しに伝わる武者の



眼光に、酒井は答えを予想できても、それを認めたくないと思う。

しかし、それでも、

「舐めちゃいかんなあ、酒井。これは殿が望んだことだ。それをただ守り抜き、そのための勝利を手にするのが我の忠義だ。理  
由なんて関係ねえ、我の生き様よ」

強く、楽しく、好きに生きるとは、誰が言ったか。

そんな言葉を脳に浮かべながら、酒井は目を見開いた。視線の先では、忠勝が嬉しそうに笑みを浮かべている。

「忠次。次へ繋げるのがお前の忠義だろう？ 我は、お前が武蔵の学長で良かったと思っているよ。 次 of 世代を導くのがお前の役目なら、ここはもうお前の居場所じゃない。先に過去へと向かう我らの背中を、ジッと見守ってくれ」

そして、

「時が経つたら、お前もいずれ来い。そして教えてくれ、創世計画

が何なのかを。我らが為したことが、果たして世界を救う契機になれたのかを……。もしそうだとしたら「

そのときは、我を褒めてくれ。

「ダっちゃん」

その一言と共に、忠勝は歩み出した。

ゆっくりと、しかし確かに距離を開けるその足取りを、酒井は止める術を持たない。手の届かない先へと向かう友に、酒井が出来るのは叫ぶことだけだ。

「娘、どーすんだよ!? 他にもいろいろあるだろうよ!? お前は  
」

言葉が止まった。

理由は簡単だ。先ほどまで、一定の間隔を持って生じていた鼓動が変わった。

あれほどまでに大気を揺らしていた脈絡が、今度は地殻の底に蓄積され、同時に緩急をつけながら激しい勢いで浮かび上がってくる。

臨界点に達したエネルギーの波動は止まることを知らず、煮え切らない感情を発散させるかのように地表を達し、

「!？」

その瞬間。三河が砕けた。

血管が破裂するかのように空間が弾け、広大な大地がまるで薄脆い煉瓦のように？げ割れ、

「これは」

ここから、三河最後の秒読みが始まる。

## 第五話〈祭り前の喧騒〉（後書き）

おお、クロよ、倒れてしまうとは情けない、とリアルで言われたク口です。

次回からテンション上げるために全裸準備してたら、季節が冬であることを忘れていたぜ。いけね。

とまあ、相変わらず駄文ですね、今回。

六話からバトル一直線ですから、どうしても嵐前の静けさが静か過ぎて、グダグダな感じになってしまします。

その辺勘弁して貰いたいけど、クロの実力不足が原因なのも否定できなない。

やべ。

何時の間にかライフがゼロになってきてるぜ。

では、ライフ回復に備えて、また次回御会いしましょう。

P・S：勝手に妄想してたけど、結城に声を当てるならどの声優が御似合いかな？

## 第六話　若姫と侍女の舞い

空を照らす光がある。

天壤を焦がす真夏の太陽にも似た黄金色の垂幕は、しかし天照の輝アマテラスきとは真逆な意味を持つ不安を人々に植え付けた。

ざわめきと喧騒、ただただ繰り返され、増幅して止まらない猜疑と困惑の嵐。花火の噂に釣られて集まった者達は、その期待値を遥かに越える異端な空気に浸かる。

そしてその中で、大きな音が響く。

耳鳴りに似た周波動は人工的ではなく、空気を、地面を、町を、船を、木々を、川を、生き物を、心を震わせた。寄せては返り、来ては戻る揺れを伴い、圧力を纏ったそれはまるでいだいだら法師の悲鳴のよう。

光は宵闇の空を掴む懇願の手の平みたい<sup>に</sup>地面から昇り、響きと揺れは激情を孕んだ怨嗟の如く、一つの場所へとその千鳥足を向かわせる。

「三河が……」

「……割れている？」

スケール感の狂った聴覚と視覚のハーモニーに、誰かが呟いた。

場所は右舷二番艦・多摩表層部。山に遮られた三河の方角を数多の人物達が見ている。これから始まる筈だった宴祭に心を踊らされた

住民達は、開かれた屋台や手に持つ土産や食べ物や思考の片隅に置いて行き、薄闇の中で自己主張に余念がない残光に見事心身を奪われた。大衆の放つ蠢きに似た雰囲気は祭とは程遠くても、確かな賑やかさを衰えさせないのは流石観光区画といったところか。

そしてそんな中、見知った影が見える。決して見晴らしが良いとは言えない甲板の片隅で、チェス盤の駒のように突っ立っているのは正純とP-01sだ。人込みに視界を遮られた対照的な色を持つ小柄な体格は、しかしそれでも地平の先にある異変を確認することが出来た。

「……どうなっているんだ？」

既に幾人かが呟いた台詞を、正純はまた繰り返す。飽きることなく、異なる人達の口から吐き出される疑問は、ただその答えが出てくるまでの時間を享受する。そして大衆意識の一端を担った黒長髪は、無視できない懸念を思考の海に泳がせた。

「酒井学長に……、結城は戻っているのか？」

地平の先で、バラバラに引き裂かれる三河の轟音が鳴り止まない。傍にいる自動人形は終始無口で、しかしその足の裏に潜んでいる黒藻の獣は、その感覚器を震えさせては集合意識の不安を存分に表し

ている。

「正純様。

あれが、花火なのですか？」

冷性で無感情な表情のまま、首を傾げながら問うP・01sに、正純は言葉が出ない。

花火？ あれは花火なのか？ 解らない。そうだとしても、そうでなくても、今の異状を花火や祭という文字で解釈するには無理がある。何れにせよ、これ以上ここに居てはいけない。静かな夜をざわめつかせる地殻の咆哮に、飽きることなく人々が広場や甲板に集まっている。このままでは、網に獲られた鰯イワシの大群のようになりかねない。皆よろしく押し競饅頭なんてことは避けたい。

「ブルーサンダー青雷亭へ行こう。あそこには神肖筐体モニタがあるから、こちらよりは状況が解りやすいだろう」

提案に、P・01sが頷いた。白と黒は異変と人込みから背を向け、広場から離れようとする。しかし急ぎ足である正純と違って、自動人形はマイペースだ。群集の隙間を縫うように潜り抜ける正純の後を、P・01sがゆったりとした歩調で続く。そんな二人の足下では、黒藻の獣が、

『おれね』

という言葉と共に、路傍にある側溝に小さな身を隠した。それをP  
-01sが手を振りながら見届ける。

「……急ごう」

足の止まった自動人形を、正純が促す。焦りと戸惑いを含んだ自分の口調に、正純は歯痒い気持ちを抱いた。霧がかかった様な当惑の空気に、自分はただ、事実が確認できる場所を探るしか出来なかった。

/  
/

闇の中をただ只管走る。燃え盛る木々や番屋を背後に大きく振りきり、目指すのは森の先にある三河だ。夜空は時刻に不釣り合いな色に染められ、しかしそれが逆に目的地への道標として、闇夜を駆ける



結城を誘う。

場所は三河郊外と名古屋の間にある樹林。遠くにある新名古屋城の上空を旋回する武神を確認し、彼は事態の深刻さを嫌というほど理解した。

「聖連が動き出したか……」

果たしてタイミング的には有利か？

先ほど監視用の番屋を見て来たが、その状況は余りにも宜しくない。死人や怪我人が出てないのが幸いだが、その代わりに御陀仏になつてくれた輩がある。御蔭様で少しは今の騒ぎに対する答えが見えてきた。壊滅された番屋で、警備体制が敷かれた状態で攻撃を赦された三征西班牙の学生達は、既に安全な場所へ移動してある。見晴らしのいい山道の真ん中だから、後続の部隊が来ても直ぐに対処できるだろう。

その代わり、早すぎたキャンプファイヤーには壊れた自動人形共を放り投げておいた。三河の侍女服を着た代物が聖連の番屋に現れた時点でおかしいのだが、それがこちらを攻撃してくるとなると容赦は必要ないだろう。

「三河を監視している番屋に、三河の自動人形が襲撃した。解りやすい事情だ」

三河自動人形は松平家当主である松平・元信の所有物だ。彼女達に命令を下せるのは彼しかおらず、それは元信が聖連に反抗したという事実を表している。先ほど感じた大きな地響きと震動も、元信が原因だということは予想出来る。個人で手に負えない事態には、物量も戦力もある聖連に向いて貰うしかない。幸い、西の空では三征西班牙の護衛艦を確認することが出来た。行動が予想よりも早いのは、流石現役の強国といったところか、非常事態にぬかりはない。

「……見えてきたか」

樹林の先に光が見えた。

身を大きく乗り出して木々の間を衝き抜け、その先に広がるのは三河とその中心部にある名古屋だ。闇色をした空とは対照的な光を発している三河に、天地が逆さまになったような倒錯感を憶える。半球状の光霧に覆われた三河は、地上にその半分を埋める太陽に似ている。しかし、それ以前に最も結城の目を引いたのは、血管の如く罅裂かれた大地と、それを花蕾のように咲かせた名古屋だった。

「無事なのは名古屋だけ？ ……これってまさか……」

地脈炉の暴走だ。爆心地である新名古屋城が無造作に地脈を吸い上

げているため、それを中心に逆流した流体が地殻を侵蝕・変換している。資料や文献で大まかの現象や特徴は知っているが、郊外近くまで影響を及ぼすなんて規模は聞いたことがない。

「新名古屋城の地脈炉は全部で五基。その全てを暴走させる積もりか？」

冗談ではない。

現在記録されている地脈炉暴走事件の中で、最も新しいのは八年前のムラサイ反勢力掃蕩に、P・A・ODAが使ったものだ。その五倍という規模と威力なんて、想像したくもない。

こんなことをするという意図は掴めないが、国一つが消滅するという事態は宜しくない。考えるまでもなく、結城は地面を強く蹴った足裏に柔らかい土の感触を残しながら、出来る限りの最高速で三河の町を突き進む。

目指すは中心地・名古屋。直線距離としては目測で約4キロ。国道線に沿って走り、並みの加速系より速い自分の足なら10分足らずで辿り着くが、番屋のときと同じように、自動人形が邪魔に入るかもしれない。

郊外の坂を下り、アスファルトの地面を踏み、伝統的な長屋や木造の建物の間を抜ける。視界の隅では、聖連の武神が一定の高度を保ったまま、哨戒機動を行っている。今にでも地上に降りて来ないのは、空間に充満する、指向性を持った流体に干渉されたくないのだらう。

今現在、三河では名古屋に向けて、大気や地殻に存在する流体が凄まじい勢いで吸収されている。武神は人工駆動系や関節で動く鎧武

者であり、有人機は搭乗者を情報分解して機体の制御管理系に流し込むことで武神を操作する。そしてその操作に必要な循環系エネルギーが流体だ。三河を包む光は吸収されている流体の流れが生じたものであり、それに触れるということは武神の出力が空間の流体と共に喰われるということの意味する。対空装備と機動性を重視した十字翼の武神は防護板が薄く、地脈の干渉を受け易い。対処するには、最低でもスラスター系を保護できる装甲服が必要だ。そしてその方法に行き着いたかのように、西の空で動きがあった。先ほど、確認できた三征西班牙の護衛艦が接近して来たのだ。武神の装備と援軍を乗せた船は二隻。その巨体を確認次第、空を舞う三機の武神はその航路を護衛艦に向け、

「!？」

次の瞬間。前方の道路上で轟音が響いた。

轟音は爆発よりも短い快音を響かせ、ドップラー効果によって、風を切る鋭利な音を空の彼方に送らせた。

砲撃だ。

火薬の炸裂音とは程遠い、音の壁を突き破ったソニックブームを発するのは形式不明の対艦滑腔砲。造型が無骨で、砲身が長いそれは貫通力よりも衝撃力に重点を置いており、初速の速い砲弾は数秒間の間を置いて、西の空で破壊の業火と爆音を奏でた。

そして、護衛艦の一隻をたった今、一撃で轟沈させた存在を、結城は十メートル離れた位置で確認した。アスファルト材とコンクリート、そして鉄筋や石材で強引に固めた大砲を携えたのは侍女服姿の

自動人形。そこら辺にある量産型とは違い、一目でその独特性を見分けられる特徴に、結城は眉を顰めた。視線の先、黒い角型の感覚器を持ったのは見知った造型を持つ女性。昼間に出会った、名前を覚えただけの、心ではそれなりに評価していた人物。

「本多家の、鹿角さんか……」

三河自動人形統括。武者の力を持つ、魂から生まれた者を前に、三河最初の戦いが始まる。

/  
/

「Jud、本多家御用、兼三河自動人形統括の鹿角です。こんな場所で出会うとは奇遇ですね、若様」

目の前、道端でうつかり顔を出会わせちゃった、みたいなノリを淡々とした口調で言う鹿角さん。昼間と違い、オレに対する呼称が『若様』に変わったということに、オレは目を細めた。

今までそのような呼び方で呼ばれたことはなく、しかしその意味を

理解できないほど、オレは自分を忘れてはいない。

「その呼び方、やはりアンタも気付いていたか……」

「Jud.。十二年前、酒井学長の手引きで武蔵に渡った少年のことは、当時の三河重臣ならば誰でも知っていることです。私の方は、後に忠勝様から聞いたので」

「なんだ？ それはつまり、昼間の食堂で、オレのことを知らないのは本多・二代だけということか？ たたく、揃いに揃って器用に隠しやがる」

「その場で話しても詮無きことですので……、理由はお解かりですかと」

解る訳ねえだろ。と言いつ返したところだが、ここで無駄話をして  
いる暇もない。地脈炉暴走のカウントダウンが迫っている中、足を  
止まらせる事態は等しく障害だ。それに目の前の女はたった今、制  
式武装を積んだ聖連の戦闘艦を一撃で撃ち落したのだ。先ず敵とし  
て考えた方が妥当なのかもしれない。

「時間稼ぎの問答に付き合う気はない。率直に答える。松平・元信は何を企んでいる？ 地脈炉を暴走させた意図はなんだ？」

「Jud、それは私にも解りません」

即答された言葉に、オレはやや目を見開く。

自動人形は嘘をつかない、主の口止めがある場合は、答えられないと言うのがセオリーだ。それを解らないと言うのであれば、それは本当だ。機械式の解答方に聞こえるが、それは彼女独自の思考法に基づいて出た結論だ。残念ながら、この瞬間でこの女の利用価値は、オレにとってはゼロとなった。

「そうか……、ならば、元信本人に聞いて確かめさせて貰おう」

足を一步前に出す。

それと同時に、鹿角さんは右手を素早く振り上げた。腕の動きに連動するように、地面の構造材が跳ね上がる。アスファルトの地面が砕け、礫石の散弾が重力制御の反動によって撃ち出された。空気と地面を大きく挟る攻撃に、オレは初動を確認した時点で、既に回避行動に移っていた。

鹿角さんが手を挙げたのと同じタイミングに、身体を射角の反対側である方向に側転した。

「見事な御手前で」

「……」

攻撃は避けた。こちらは無傷。しかしオレの背後。射線上にあった一階建ての家屋は無事では済まされなかった。

構造材の弾丸に薙ぎ払われた木造建築は、蜂の巣のように穴だらけとなり、コンマの差を置いて崩れ落ちる。情け容赦ない、確実に殺すための一撃だった。それを一瞬の迷いなく繰り出す鹿角さんに対し、オレの次の動きは早かった。

背中にある長棍を右手で引き抜き、そのまま鹿角の足下に向けて投擲する。そして同時に前へ出る。

「！」

反撃に、彼女は対艦砲を手放し、後方へと跳躍した。そして元居た地面に、二メートル長の棍棒が突き刺さる。強烈な衝撃力を纏った攻撃は地面を抉り、アスファルトの地面を爆散させるのと同時に、邪魔な対艦砲を押し折る。

そして砂埃が舞い上がり、鹿角が地面に着地したのと同じ瞬間に、オレは長棍を地面から引き抜き、折れた対艦砲の本体を蹴り飛ばし



た。  
残骸と化した黒い大砲は、それでもその質量は武器として足りえる。大気を突き破り、砂埃を衝撃で吹き飛ばした砲身は鹿角目掛けて突貫し、その人工的で華奢な身体を粉碎しに行く。そして、

「剣を指運に！」

叫びと共に、目の前で鹿角は両手を掲げた。その動きに、砲弾と化した砲身が彼女の目前で止まり、砕け、二つに割れた。そして空中で制止した鉄と礫の固まりはその形を歪ませ、原型を留めない戦術兵器はまるで粘土のように圧縮される。やがて成し遂げられるのは黒い板状の塊。鋭利な尖端を持った二つのパーツは、切断力に特化した短剣そのものだ。

「器用な真似を……、その粋の良さ、惚れるじゃねえか！」

「Jud、お褒めに預かり、光荣です！」

近接武術師を前に剣と来た。ならば出し惜しみはしない。左腰の長剣を引き抜き、こちらも同じ手数で勝負に挑む。

飛ぶように身体を前に衝き出し、リーチの長い長棍で先手を打つ。それを鹿角は肉厚な刀身で弾く、そして同時にもう一本の剣で突く。それをオレは長剣で外側に受け流し、カウンターとして右足で蹴り出す。それを鹿角は左足で踏み止め、こちらの脚力と反動を利用して後方へと跳び退る。そしてその後を、オレは全力のダッシュで追う。

そこからは、剣戟の踊りだ。

名古屋を前に、互いが併走するかのように三河の町を駆ける。足は止まることなく、武器を持つ両手は空間を薙ぎ払うように、目視できない速度で交差した。火花が、斬撃が、金属のぶつかり合う音が、余波で切り裂かれ、蹂躪される建物や器物が空を舞う。

意識を鹿角に集中し、オレは五感の全てを彼女との踊りに注いだ。そして視界の外では、また動きがあった。

西の空に残る護衛艦から、武神と歩兵が降ろされた。三河崩壊の前に、戦況は激化する。

/  
/

『地脈炉暴走確定の時間は、予測であと十五分です』

顔を横に展開された表示枠から伝わる音声を耳に入れ、一人の青年が走る。その速度はまさに風そのもので、彼が持つ字名の意味を損なわない技量を表している。

青年の行き先は三河。夜の大地を混沌に塗れさせた元凶のもとに、金色の短髪を持った彼、立花・宗茂は駆け抜ける。そしてその背後では、彼の妻である立花・？が、遅れを取らない距離で共に走る。

「Tes、こちらの速度でなら、直ぐにでも到着します。先陣が上手く切り抜けていれば良いのですがね」

司令部からの情報に、宗茂は頷く。東の空では黒い煙が大きく吹き上がり、しかしそれでも三河の発する輝きを錆付かせることはない。悪化していく状況に、不意に、後ろにいる？が言葉を作った。

「宗茂様、先に行ってください」

「？さん？」

相方が告げた台詞に、宗茂は視線を寄越す。しかしそれに構わず、？は言葉を続ける。

「時間は刻一刻と迫っています。今動けるものの中で、火力と速度

を両立出来ているのは宗茂様です。私も直ぐに追いつきますので、どうか先に三河へと急行してください」

「?さん……」

言葉に、宗茂は心の中で頷く。

確かに、術式を使い、己の字名である”神速”の力を発揮すれば、直ぐにでも三河に辿り着ける。地脈炉破壊にも、大罪武装である悲嘆の怠情を使えば成功できる。

嫁を置いていくのは宗茂としては非常に忍びないことだが、状況が状況であるがゆえに、ケチをつける暇も無い。ならば善は急げだ。

「祭があると思ったら、本当にとんでもない祭になってきましたね」

「そうですね。しかし近所迷惑になる祭には、少しお灸を据えねばなりません。今期の三河監視は三征<sup>つち</sup>西班牙の担当ですから、張り切ってやっちゃって下さい」

「だとしたら花火も無しですか。私、綺麗な花火を期待していたのですが……、仕方ありませんね」

嘆息と共に、宗茂はギアを上げる。  
地面を蹴る力が増し、風となった身体が烈風に昇華する。

「?さん! 帰ったら私達で宴会を開きましょう! 三河の残念な  
花火とは違う奴を用意しますよ!」

「それは楽しみですね」

返事に、宗茂は笑みを浮かべた。  
同時に、彼は十字型の表示枠を展開し、術式の発動に移る。その間  
にも、後方の?との距離はぐんぐん開かれていく。

220

「元信公。……何故、国を滅ぼすようなことを? そんなことをし  
て、何になるんです?」

押さえていた疑問を口にし、宗茂は速度を上げ続けた。  
徐々に近づいてくる三河の光を前に、決戦への参加者は増え続ける。

/  
/

忠義は、その行為にこそ意味があるもの。

その言葉を頭の中で吟味しながら、本多・二代は居た堪れない気持ちを持って余していた。山岳回廊の上空に浮かぶ三河警護艦の艦橋で、二代は通神や神肖筐体が示す状況に心を悩ませている。

聖連が布いた緊急態勢に、三征西班牙の部隊が三河に突入した。地脈炉暴走の真相は未だ掴めず、非常事態内において、警護隊である自分達は三河に引き戻すべきなのだが、聖連が関るとなると迂闊に行動できない。場合によっては、自分の判断がただでさえ劣勢に陥っている極東の立場を、更に悪化させるかもしれないのだ。

……この不甲斐なさに、こつも歯痒い思いを強いられるとは……

三河の危機に対して、聖連の処置は素早く、且つ的確であるが、それ故に、その意図がはつきりと見えてくる。それは同時に、今の極東を取り巻く現状がどれだけ自分達に不利なのかを示している。

地脈炉の暴走は、最終的に被害が起きるか起きないかで、聖連としては対処に困らない。何れにせよ、今回の事件の責任を極東は背負うこととなり、そしてその中で、必ず極東は何かを失う。それが権力か、それとも物資か、或いはそれ以上の何かか、政治に疎い二代には解らない。しかしだからこそ、何かをしたい気持ちがある。

……状況的に、武蔵が危険で御座るな。手は打ってあるで御座るが、

それもその場凌ぎに過ぎないで御座る。

三河が極東代表なら、武蔵は極東の領土であり、国そのものだ。高度な貿易能力と技術力を持った航空都市艦は、松平家当主である元信公の所有物として認定されており、武蔵の全ては、その上に住む住民達を含めて、三河の財産となっている。前々から聖連は武蔵そのものを覬覦きんぐわんしており、それが今になって、彼らに武蔵を手に入れられるかもしれないチャンスを与えてしまった。

極東の民として、武蔵が聖連の支配下におかれることは避けたい。故に二代は、聖連と武蔵の間に自分達を置くことにした。

有事の際には、自分達が聖連の代わりに動けば、被害が拡大することはない。政治的に力が無く、武力しか持たない自分達では、どんな形でも民の安全を保障しなければならぬ。例えそれが、本心に反する事態となるうとも。

……これが、今の拙者の限界で御座るか……

本当に心配なことは山ほどある。

父や鹿角。三河郊外に住む者達。職務に引つ張られて、二代は自分を殺さなければ冷静を保てないでいる。自分でも無理を感じる中で、不意に彼女は、昼間出会った少年の言葉を思い返した。

『自分を卑下して、私は弱いから、強い貴方の傍にいさせて下さい的な発言は無しだ』

だから強さを願う。他の誰でもない、自分だけの強さを。

『そんな履き違えた想いに、オレとお前の人生をかける積もりは無い』

対等でいられようと、そう決心した。だからこそ、今の状況も試練として乗り越えたい。

『もっと自分を磨いてくれ。オレより強く、魅力的な男を惚れさせるほどに、自分を生きてくれ』

そうしたいのに、今の肩書きがそれを赦さない。三河警護隊総隊長の名が、二代という人物を、ただの少女として認めない。

……結城殿。今一度、二代の脆弱を見逃して下され……

彼の心強さが恋しい。

憧憬が恋慕に変わる日はまだまだ長いが、それでも二代は、一度は自分に道を示してくれた者を思わずにはいられない。

だからこそ考えた。午後に別れた少年は、その後無事に武蔵へと帰れたのだろうか。そして出来れば、もう一度彼に出会って、弱い自分を叱って欲しいと。



/  
/

瓦礫と砂埃が飛散する。

突風と衝撃に運ばれた町の残骸は、踊り子の周囲で賑やかに騒ぐ観衆のように、二人の舞踏者を囲んでは地に落ち、吹き上げては宙を舞う。

建物は壊され、柱は切り裂かれ、地面は斬撃の爪痕を残して、ただただ優雅に舞う若姫と侍女を名古屋まで見送る。

「若様はやはり、元信公の敵なのですね」

黒角を持つ侍女、鹿角は問うた。

姫は何故戻って来たのかと、何故血を流すことを厭わず、己を受け入れない場所を求めたのかと。

「敵だと？ 勘違いするな。オレはハッキリしたいだけだ、

あの男が何を考えているのかを！」

黒装束の姫、結城は答える。

ただ知りたいただけだと。立場ではなく、目的でもなく、昔から知りたかったことなど、そんな陳腐なものではないと。

「知って、どうする御積もりですか？  
若様は、武蔵の学生であるのでしょうか？」

剣戟が交差する。

アスファルト材を圧縮した短剣は、既にその数を最初の三倍に増やしている。しかしそれに相對するのは、相も変わらない一振りの長剣と長棍。数を技量で凌ぎ、質量差を性能で補う結城に、鹿角は手詰まり感を覚えた。このままではいたちごっこだ。

斬っても、撃つても、薙ぎつても、割つても、裂いても、蹴つても、避けても、誘つても、防いでも、弾いても、どの手をとつても壊され、殺され、蹂躪される。

「知って、オレはようやくケジメをつけられるんだ！ アイツを赦すのか、憎むのか、守るのか、愛するのか、諦めるのか。どちらを選ぶにしても、先に進むためには、アイツの考えが解らなければ選べようがないだろう！？」

己が忠義を貫き通したように、向こうもまた、手放せないものがあると、鹿角は理解した。しかしそれでも、自動人形である自分は、

主の命を遂行するしかない。

他者に仕える身として、鹿角は少しだけ、運命の悪戯というものに、愚痴をこぼしたくなつた。

「元信公は、若様を三河から追い出せと命じました。今の三

河の危険性を察し、どうか身を引いてください」

「そうさせたいのなら、アイツと顔を合わせる。でなければ

時間の無駄だ」

「揃いに揃つて、己を曲げない殿方ですね」

平行線のまま、両者は加速した。

手数では押し切れない結城に、鹿角は動きを変える。六本の短剣を再圧縮し、瓦礫や建物の残骸を引き寄せ、一つにする。

「押し通します!」

「!」

立体螺旋を描き、高重力で固められたのは巨大な六角柱。全長十メートル、幅三メートルを持つ巨体をハンマーのように突き出し、重力によるの連続射出によって速射砲の勢いを持った構造物が結城を弾き飛ばす。建物を薙ぎ払い、居住区を横一線に貫いた柱は勢いを殺さずに、そのまま地面へと突き刺さった。

轟音と共に粉塵を巻き上げ、区画一つを丸ごと粉碎した強撃に、鹿角は確かな手応えを感じる。質量的には軽武神の防護板を砕く攻撃だが、相手が相手であるため手段は選べない。

なのだが、

「流石ですね……」

目の前、破碎音が響いた。地響きか、或いは土砂崩れに似た音と共に、柱が砕けた。巻き上がる粉塵の中心では黒装束が立っており、上空へ掲げた長棍がその無傷の身体を守り通したと主張する。

「寸頸の応用ですか……。まさかあれ程の質量を砕くとは……」

「……」

感嘆の言葉に、結城は沈黙を保つ。時間に猶予はない、ここで勝負をつけなければ、あとが面倒だ。そしてそれは鹿角も同様であり、命令は追い出せとは言ったが、死なせていいとは言っていない。

だからこそ、

「!？」

西の方角。国道から疾走してきた武神の姿に、二人は同時に武器を握った。

来るのは三征西班牙の重武神。紅白の装甲を持ったそれは航空系でありながら、重力素子による仮想足部で、名古屋に向かう最短距離を突き進む。

背に十字型の四枚翼を持ち、右脇に三征西班牙の国营企業”清らか<sup>サン・メ</sup>大市”<sup>ルカド</sup>製の長銃を携えた武神は鹿角と結城を確認次第、戦闘姿勢を取る。その背後では、もう一機の武神と、更にその背後にある聖連の地上部隊が確認できる。上空では三機目の武神が援護に回っており、短時間でありながら、正規部隊としての練度を遺憾なく発揮している。

ここまでの道程では、三河の自動人形が彼らの妨害に入っているはずだが、どうやら失敗に終わっているようだ。流石に武神と渡り合える戦力は、三河には少なかった。

「予想より早かったな」

「どう致しますか？　ここから乱戦に持ち込んでも、互いの得にはなりえないと思いますが……」

結論が出るより早く、武神は速度を落とさずに突貫機動を維持し、その照準に銃口を合わせた。

撃つ。

欠片の迷いもなく、武神は弾丸をばら撒いた。敵味方の区別は必要なく、地脈炉暴走を前に、眼前に立ちはだかるのは等しく敵だ。

秒間六発の連射力を持つ長銃はマズルフラッシュを輝かせ、射撃加速用の大型聖術契約書の破片を宙に噴出す。そして砲撃に匹敵する威力を持って飛来する弾丸に、結城と鹿角は同時に動いた。動く方向は真逆、その対処方もまた逆だ。

「盾を視線に！」

「春先の御見上げに、鉛弾は遠慮させて貰う！」

二人の、拳を振り下ろす、顎を上げる動きに応じて、地面が跳ね上

がった。

小型の山だ。

路面の構造材ではなく、その下にある岩盤と土を衝き上がらせるかのように、武神大の山が斜め上に盛上った。

柔軟性と硬度を持った壁は貫通弾を難なく受け止め、同時にその質量を持って武神の行く先を止める。

『!?!』

目の前の障害に対し、武神はスラスターを展開し、急制動をかけた。十字型の四枚翼を開き、武神は山の斜面を足場として空に跳んだ。同時に長銃を背のハードポイントへ接続し、開いた腕で腰に差していた短剣を引き抜く。

そしてスラスターを点火し、急降下の勢いの中で更に加速した武神は短剣の切っ先を鹿角に向ける。

「お先に失礼させて貰おう！」

「！」

同時に、結城が走り出した。

上空から襲撃をかける武神を余所に、彼は鹿角を置いて名古屋へと駆け出そうとする。その動きに、鹿角は武神と結城の両者を見渡し、次の瞬間、

「不作法、失礼致します！」

掛け声と共に、両手を振り下ろす。

路面の構造材が膨れ上がり、圧縮され、作り出されたのは四本の楔。それを手繰りながら、鹿角は後方に跳躍すると同時に、楔を武神の短剣と激突させる。

足場の無い空中で衝撃を作り、武神の質量と加速に押し負けた鹿角は大きく弾き飛ばされる。そして先は名古屋へ向かう結城の頭上。鹿角は彼の行く手を阻むように、楔を彼の眼前にある地面に打ち込んだ。

「席を立つには早すぎます。  
を学んでいただきます」

若様には、乙女に対する気遣い

「さりと自分が乙女であると褒めてね？」

足を止められ、結城は武器を構える。



目の前に着地した鹿角を見据え、そして背後から武神が殺到する。右手に短剣、左手に長銃を持った武神は、既にその銃口をこちらに向けていおり、次の瞬間、武神はその手に握る短剣を投擲した。下方向からの、手首のスナップを用いたのはアンダースロー。流体光を纏った尖端が路面スレスレを切り裂き、その質量の十分の一にも満たない人型を貫こうとする。更にその背後で、長銃のトリガーが振り絞られ、秒間六連射の弾丸が横殴りの軌道を描く。そして嵐のような面攻撃に、二人は動く。片方は重力操作では楔を引き抜き、それを再圧縮する。もう片方は武器を両手に握っては、飛来する短剣に自ら突き進んだ。

「おお、！！」

吼えるような雄叫びを上げ、空気抵抗を減らすための低姿勢疾走を結城はとった。飛来してくる短剣との相対速度と距離を目測し、十二メートルを切った瞬間に結城は跳んだ。低空での助走跳びを行い、身体を縮ませることで飛距離と体面積を確保し、上半身より先に両足を前に出した。その前では、短剣が結城との間に僅かな高度差を持って交差する。その瞬間、地面と水平になるスライディング姿勢によって、結城は短剣の側面を滑走した。足裏で刀面を削り、流体光を飛沫のように吹き上がらせる。そして一瞬の末に、その両足が短剣の鏢に当たる。

「っ！！」

声に出ない掛け声を上げ、結城の上半身が浮かぶ。短剣の鏢に足裏を強く踏み込み、確かな感触と共に、結城は身体を強引に捻る。

接触面を支点に強い回転を施され、空中で結城に踏まれた短剣が釣られて回転した。斜角90度の動きを無理矢理に実現させられた短剣は突き進むことなくその刀身を地面に突き刺さられ、結城はそれを盾として後続する弾丸を防いだ。

一発目は刀身に当たり、側面へと弾かれ、二発目と三発目は後方に弾かれ、同時に短剣に罅を作る。四発目は当たることなく結城の横を掠めるように素通りし、五発目は短剣に弾かれるのと同時に刀身を砕いた。そして最後の六発目を、結城は長棍で弾く。棍棒の末端を握り、両足と腰軸の回転によって遠心力をつけ、体重を上乗せした状態でのフルスイング。全ての打撃力を合計三回転の内に二メートル先の先端に増幅・集中させ、翳むことが赦されない一撃を弾丸の正面に合わせる。

「！」

そしてぶつかり合う弾丸と金属棒は衝撃波と炸裂音を爆散させ、刹那の拮抗の果てに勝負は人間の方に傾いた。弾丸は街の反対側へと飛び、大きく武器を振りかぶった結城の前では、武神が次の弾倉にマガジン手を伸ばす。

そして、

「続けていきます！」

背後、鹿角の声があったのと同時に、結城の両側から黒い大筒が伸び出した。大筒は砲身で、その末端に覗かせるのは三征西班牙の護衛艦を撃ち落とした対艦砲そのもの。

結城が銃撃を凌いでいる間に、鹿角は二門の大砲を重力圧縮で作り上げ、その照準を武神に向ける。そして、作り上げた大砲に使う砲弾は、既に敵がくれてある。先ほど背後に弾かれた二発目と三発目の弾丸を、鹿角は重力制御で回収し、そのまま装填していたのだ。

「物は大切に致しますので！」

そして両手が振り下ろされる。

重力制御による加速を連続作動させ、一瞬の間に砲弾の初速を限界まで高める。それに対して、武神が弾倉を交換するより早く、

「視線にて穿ちなさい！！」

二つの砲撃が炸裂した。

/  
/

視線の先で、結城は武神が倒れて行くのを確認した。放たれた砲撃は見事に命中し、武神の脇腹と右胸を抉ることその機能を完全に殺しきる。装甲の破壊と骨格系、一部神経系への深刻なダメージは無視できるものではなく、武神は膝を落しながら、破損した部分から潤滑油を血のように噴出している。

……決まったか……

一時の勝利を確信したが、それは予想にないものだ。聖連を交えた戦闘を結城は望んでおらず、本来は聖連が事態に対処しているところに、自分が別働で名古屋に乗り込む手筈だった。

鹿角に遭遇し、聖連が思っていたより有能なのが不味かった。此れでは結城の介入が聖連にバレてしまい、状況によっては武蔵と聖連の政治的駆け引きに持ち出されることもある。幸いなのは、自分は弾丸を弾いただけで、止めを与えたのは自動人形だということか。

……ちっ、面倒だ。

しかし、心中で舌打ちしている結城を余所に、隕落した紅白の巨体の背後でまた動きがあった。

崩れ行く武神の後ろで、立ち上がるように長銃を構えたもう一機の武神がいた。それは後続の突撃部隊を先導していた機体で、何時の間にか、それは短い戦闘の合間を狙って、こちらへと接近していた。距離的には結城が対処できる訳が無く、鹿角の対艦砲も弾切れだ。対して、向こうは三十二発の弾丸を装填した長銃をこちらに向け、既にトリガーを引き絞る動きに入った。

次の瞬間、六連射の猛襲が自動人形と少年の身体を粉碎し、その肉塊と生態部品を地面にばら撒かせる光景が浮かぶ。仮想を現実に変換する手順は引き金を引くだけであり、それを武神が実行しようとした、そのときだ。

「三征西班牙製重武神”エル・アソウル猛鷲”に後続の陸上部隊か、  
若、鹿角、動くなよ？  
結ぶ」

背後、男性の声が響いたのと同時に、結城は見た。

空を切るという快音に伴い、武神の動きが止まったのを。  
そして、

直後。遠くで、武神の右腕と右足が割裂した。

正面から横一線という走りを見せた斬撃は、まるでバターを切るかのように武神を引き裂き、その戦闘能力を完全に奪った。しかし、結城が見る先で倒れたのは、何も武神だけではない。先の武神に続いて膝を落ちた二機目の向こう、国道道路の上に、多くの人影が倒れていた。

三征西班牙の制式突撃装備を身に纏い、地面に蹲っているのは、後から追って来た陸上部隊の計七十一名だ。その何れも、誰一人として例外なく、片方の膝を切り割られている。

その異様な光景に、結城はそれを成し遂げた元凶に視線を向けた。自分の背後、自動人形・鹿角の更に後ろにいるのは、三河警護隊の装備一式を着た本多・忠勝だ。その腕には一本の長槍が握られており、横に振りぬかれた槍の先端には、穂先を囲むように展開された円環型の表示枠が見える。

特徴的な笹穂型の槍身は流体光を纏っており、機能性を重視したそれが噂に聞く代物であることを、結城は瞬時に悟った。

「神格武装・蜻蛉切か……」

「J u d .」

言葉に、忠勝が頷く。

蜻蛉切。

聖譜記述において、松平家家臣、東国無双と謳われていた本多・忠勝が持つと記されていた武装だ。穂先に止まった蜻蛉が、そのまま切断されたという逸話から名付けられた武器を、今の忠勝が持つそれにも同様の力がある。

「穂先に載せた名称を割断する。                      どんな物事にも必ず名前があり、それを断ち切ることで、本体を割断するのがこれの能力だ」

忠勝の言葉に、結城は目を細めた。大雑把な説明だが、理解できない話でもない。

”名は体を表す”と言う。

名前は個体や該当するそのものを示す単語であるため、名は決め付けられたそのときから、そのもの一部として、その存在の全てを記録する。

林檎と言えば人は赤い果物を思い浮かべるように、言葉や文字一つで、我々は一つの存在とそれに関する情報を無意識に”結びつける”ことが出来る。それは物質的にも、現象的にも同じ理屈であり、だからこそ、名を斬ると言う事はそれだけで強力な攻撃手段となりえる。

「阻止臨界時間まで残り六分ってところか、随分と余裕がある状態で終わったな」

「随分と遅かったですね。色々と迷惑になりました」

「しょうがねえだろー。殿がようやく最後の準備を終えて中央に入ったからな。ここからは殿だ、我一人しんがりで十分だが、お前はど  
うする？  
今の内に仲間の魂を拾って逃げるなら、これが最  
後の機会になるぞ？」

視線の先、忠勝と鹿角の遣り取りに、結城は動かない。

一見、何事もないかのように振舞ってはいるが。肩に槍を担いだ忠勝の気配は緩んではない。こちらが隙を突こうとするならば、容赦なくカウンターを入れられる状態になっている。東国無双としての年季キャリアが表す迫力に、結城は目に見えない技量を確認した。此処に来て、経験の差に足を引く張られることに、結城は眉を顰める。

そして、

「で、まあ、鹿角は上手くやってくれたが、若がここまで来られるとは流石だな」

「申し訳ありません。若様が予想以上に手強かったので」

「まあ、武蔵の臨時相談役は年鑑資料でも有名人だしなあ、……物



理的に。　　で？　若はこれからどうするんだ？　やっぱり我と一戦交えるか？」

質問に、結城は視線だけを寄越した。

彼は直ぐに答えず、少し間を置いてから、一息し、

「元信と話がしたい」

そう答えた。

決して変わりはない。たった一つの望みを。

そしてその願いに、忠勝は息を小さく吐いた。蜻蛉切を地面に突き立て、間に鹿角を挟んだ両者は睨み合うかのように視線を合わせる。そしてさらなる沈黙の果てに、忠勝が言う。

「若……、どうか、御引取り願いたい。　　我は殿に忠義を誓っ

た身、その命令が我にとって絶対である以上、どのような事があったても、我は若を此処から先に通す訳にはいかない」

「くっ……例えそれが、　　お前の本心に背いてもか！？　本多・忠勝……！」

拒否の言葉に、結城が叫んだ。

それでも、忠勝は引かない。

巖のように佇むその姿は番人そのもので、その意思の固さに、結城は武器を握る力を強めた。

そして、

「……J u d .」

審判を受け入れる返答に、結城の腹の底に炎が燦った。

三河崩壊を目前に、最大の障害を前に、結城は、嘗て壊れた自我が蘇る感覚を憶える。

終焉への残り時間は、既に五分を切ろうとした……。

## 第六話〜若姫と侍女の舞い〜（後書き）

自分で書いてて、原作のボリューム感に改めて絶望を感じたクロです。

そして心理描写はやっぱりムズイね。

アサマチ以外にもヒロインが増えてきたとこだし、でもあと二三人は増やしたい気分。次は麗しい”武蔵”さんでいいかな？

P・S：タグにハーレム付けといたよ。あと声優ネタは個人的に中村悠一か細谷佳正が似合ってると思うけど、やっぱり主人公にイケメンボイスはお約束だな（笑）

## 第七話 葵三葉紋の下で

炎上する新名古屋城を背景に、三河の町は未だ光に包まれている。そんな中、破損した国道の上で、オレはただ佇むことしか出来ない状況に囚われていた。

地脈炉暴走の時間が目前に迫っている中で、目の前に立ちふさがる本多・忠勝と鹿角を見据えることしか出来ない。話し合いは平行線であり、強行突破しようとも、東国最強とその相方を前に、流石に勝てる自信は無い。

本多・二代には偉そうなことを言ったが、正直に申して、オレも自分の実戦能力には不安がある。未知の戦況や危険に対処するために、学べる武芸は片っ端から身体に叩き込んでおいたが、それでは足りない。

脊髄反射レベルに修得した動きも、経験したことのない事態には硬直するものだ。

戦闘能力はあっても、戦争手段がない武蔵では、実戦経験を積むための場が限られている。それでも、オレはこの十年近い時間の中で、自分なりに良くやって来たと思う。魑魅魍魎や妖獣魔獣程度の相手なら嫌というほど被って来たが、人間相手の実戦は今日が初めてだ。真喜子の授業と違って、本当に色々と容赦が無い。人を斬る感触は獣の血肉を絶つようで別に忌避感はないが、その根本である『命を消す』という行為は流石に憚れる。戦争だから仕方が無いというのは体のいい言い訳だ。神や聖人の行いを助力として体現し、その神託や奇跡を力として振舞うのが術式を用いた今の戦争の主体なら、オレ達は神聖の名を背負うその意味に基づいて、『殺す』という行為に対して安易に妥協してはいけない。

とはいえ、格上の相手に、一々そんな手加減をするような舐めた考えを持ち込んでいい訳でもない。殺したくは無いが、殺す気

でかからないと詰む。……まったく、このジレンマ、何時か解消したい。

「まったく、置き土産としては最悪だな」

「Jud、忠勝様は駄目駄目で周りに迷惑をかける駄々っ子ですから、こんな緊迫した状況の中でも相変わらずというのは、流石に空気を読んで欲しいものです」

「違いねえ」

「おいおい！ 何本人を前に好き勝手話てんだ！？ つーか鹿角！ お前一体どっちの味方だよ！？」

「Jud、ヒエラルキー的に見れば、若様が忠勝様より上なのは決定事項ですので、忠勝様を弄り倒すくらいは問題ありません」

「答えになってねえよ！！」

暢気な会話流れる。こんな命懸けの修羅場じゃなければ、結城も軽口の一つや二つを追加していたところだが、そうにもいかない。

心の中の焦りが、早く前へ進めとオレを促す。しかし越えられない絶壁を前に、理性が先に白旗を上げようとしている。

どうする？

ふとここで、オレはあることに気付いた。

きっとそれは、これから先、オレという存在を動かすために必要不可欠な要素だ。

そのことについて結論を出す前に、何やら目の前では何時の間にか不毛な争いが展開されている。

「だいたい忠勝様は甘いのです、外に出かけると酒や焼肉屋や大人買い、猫や犬を見境なく拾って気きて屋敷は動物園、その果てに今は地脈炉ドカンの前に殿を務めるなど、人間はおるか、自動人形ですら全く理解できない思考です。忠勝様、貴方人間ですか？」

「鹿角は解つてねえな、焼肉や酒は中年男のロマンだけ、猫や犬とか、可哀想だから助けてあげるのは当たり前だろ？ それに此処に残るのは私の忠義の証よ、男の最後の生き様を示す戦場、格好良くね？」

「ハイハイJud・Jud。今の、忠勝様が私によく使う返答ですが、どうでしょう？」

「てめえ……」

オレを置いて口喧嘩を始めた二人。

緊張感の無い空気に、しかしオレは武器を握る力を緩めない。

まさかこっちの気を紛らわすための作戦ではないか、と思ってしまうが、困ったことに、極東人は如何なる状況でもマイペースなのが素である。

「なあ、若も何か言ってやれよ。この女マジで面倒臭い」

「何でオレに話を振るんだ？ ……、まあ、この場合は大抵が男の自業自得って相場が決まっているから、諦める」

「Jud、流石若様。こちらの駄目親父と違って、物分りが良くて大変宜しい。空気読める律儀なところは、忠勝様にも見習って欲しいものです」

「空気読めたら律儀なのかよ……」

とまあ、何やら非常に進み難い状況になってきた。

最初に感じた苛立ちも大分収まってきたが、時間が少ないことには  
変わらない。

そろそろ、腹を括るか。

「おい、お前等……」

と、二人を呼び止めようとした、そのときだった。

半径1・5キロメートルに展開していた気配察知能力の範囲内を、  
何かが貫通した。

それは無規則で、しかし指向性を持っており、元ある気配を食い潰  
しながら、凄まじい速度で突き進むそれは、こちらに向かっている。

「！」

その瞬間、オレの判断は素早かったが、果たしてそれが救いになっ  
たかどうかは解らない。

武器を納め、地面を蹴る反動を最大限に利用して、目の前に立つ鹿  
角の懐に潜り、掌底を一閃。そのまま彼女を庄内川の下りへと突き  
飛ばす。

そして足を止めずに、忠勝の方へと突き進み、





だに鳴り響く中で、四つの影が対峙していた。

一つは、結城。

右肩を貫かれた彼は左手で傷口を塞ぎながら、砲撃の元にある人物を見据える。

もう一つは、本多・忠勝。

頬に一筋の削ぎ痕を走らせ、そこから滴る血を無視し、彼は自分達がいる川の反対側を見た。そこには、結城に突き飛ばされた鹿角が倒れており、見たところ、状況は宜しくない様だ。

視線の先、削ぎ落としの余波によって、鹿角の右半身は壊滅した。どうやら、結城の瀬戸際の判断は、彼女を即死させずに済んだだけのような。本来の”運命”と違って、機能停止には陥っていないが、戦力から外されたのは間違いない。彼女は仰向けに倒れたまま、残った左手を軽く振る。自分のことは気にしなくて良いというジェスチャーだが、忠勝は最初から気にしていない。そして、

「お初にお目にかかります」

高らかに響く青年の声に、結城と忠勝が視線を前に向ける。

その先にいるのは、長身の金髪。三征西班牙主教導院アルカラ・デ・エナレスの校章が刺繍された赤白の制服を身に纏い、右腕に一つの武器を携えているのは、

「ヴェロシタート・デ・デイオス 三征西班牙所属”神速”ガルシア・デ・セヴァリヨスを襲

名しました、立花・宗茂、戦種は近接武術師です。そして」

黒と白の金属で出来た剣砲を持ち、彼は高らかに名乗る。

告げられた名前に、結城と忠勝は目をやや見開くが、青年の名乗りはまだ終わっていない。

「三征西班牙に預けられた大罪武装の一つ”リヒ・カクスリフン悲嘆の怠惰”を預かる者、八大竜王と呼ばれる者の一人でもあります」

言葉に、おお、と結城と忠勝が感心した頷きを見せる。

しかし次の瞬間、二人は面倒くさそうな、顰めた表情を浮かべて答えた。

「ノリノリだなお前!!」

/  
/

現れた人物に、結城は怪訝そうな表情を浮かべた。

立花・宗茂。

神速のガルシアとの二重襲名を果たした、本多・忠勝と肩を並べる西国無双と謳われていた男。自分と同年代で、しかし既に数多の戦場を歩き渡り歩いてきた歴戦の猛者。

大罪武装を預かり、三征西班牙の切り札でもある人物を前に、しかし結城は強者が発する威圧感を感じない。寧ろ風のように柔らかく波のような穏やかさが強い。

青臭い二枚目な印象を持つ生真面目な青年に、結城は警戒心を維持しながら、しかし悪くないという評価を下した。腕の立つ武芸者は、一目で相手の力量を見定める眼力を持つのだ。故に、今の結城は失笑したい気分にもなる。

あれでは駄目だと。奇襲を掛けたにも関わらず、正面から名乗り出る時点で戦術として終わっている。甘い部分が抜け切れていないのに、それで西国無双とは片腹痛いと、冷徹な自分が吐き捨てる。

嫌いじゃないな。砲撃で己の存在をアピールさせ、正々堂々と勝負を申し込む粋の良さは侍の鑑だ。こそこそしない果敢さは賞賛に値するもので、解り易い喧嘩の売り方は気に入っていると、感情的な自分は評価する。

異なる自分が相手を見定め、そしてどれも正解ということに頷く自分に、結城は失笑したのだ。存外、自分も暢気なものだなと思う。

「参じるのが遅れて申し訳御座いません」

「申し訳ないと思うならすぐ帰れ、こっちは大事な話をしているところだ」

忠勝の言葉に、宗茂がT e s . と答える。

彼は結城と忠勝を交互に見て、こう言った。

「武蔵アリアダスト教導院生徒会所属、臨時相談役の結城・秀康君に、松平四天王の一人である東国無双、本多・忠勝。 極東代表生の中でも聖連が認定した重要人物が地脈炉暴走を前に大事な話とは、見過ごせない事態ですね。……状況によっては」

252

途切れた言葉に、結城と忠勝は目を見開いた。

視線の先、10メートルの距離を離れた位置にいた宗茂が、その姿を消した。

そして同時に、二人の背後で気配があつた。

視線を振り返るより早く、一瞬の移動に伴う風の動きと共に、声がした。

声は、先ほどまで自分達の前に立っていた宗茂のものだ。

「 武蔵が三河と結託して、聖連に反抗しているものと看做せるのです」

よ、という最後の一字が出ることは無い。

言葉が言い終わる前に、宗茂の眉間に蜻蛉切と長棍の切っ先が向けられているからだ。

槍は既に表示枠を展開しており、跳ね上がる長棍は勢いを殺さずに宗茂の頭蓋へと殺到する。そして、

「 結べ、蜻蛉切」

忠勝の声と共に、立花・宗茂へと、割断と打撃の力が同時に炸裂した。

/  
/

頭上から聞こえる音に、半身が砕かれた鹿角はゆっくりと目を開ける。

身体は上手く動かないが、対話や重力制御機能は生きている。思っていたより問題は無い。

流体抽出機能を持つ心臓部分が無事なため、ちゃんとした修理を受

ければいいのだが、元々殉死覚悟で三河に残っている身としては、贅沢を言っていられない。寧ろ、本来仕えるべき二人目の主君に助けられたことで、申し訳なさがある。

そう思いながら、鹿角は先ほどの破砕音が起きた場所に、目を向けた。

武器を振り抜いた結城と忠勝は川を横断する橋の上に佇んでおり、しかし彼等の前、距離五メートルの位置に、宗茂が片膝を地面についで、大罪武装を構えている。

身体は無傷で、しかし眉を顰めている。息は荒く、無傷な割には無事とは言えない状態だ。

「速度か」

「うむ。  
枚上手か」

若もなかなか早いが、同じ土俵ではやはり神速が一

視界の中心では、三人が睨みあっている。

気のせいではないのだろう、完璧なカウンターを前に、打撃はおろか、蜻蛉切の判断能力が効いてないことに、鹿角は信じ難い表情を浮かべる。

そして、

「神格武装である蜻蛉切の起動システムは、蜻蛉切の刃に対象が映

ることでも名を取得し、割断がなされます。そしてその有効射程距離は約三十メートル。ならば刃に映らぬ位置、またはその距離まで一瞬で退避すればいいのですよ」「

宗茂の説明に、鹿角は眉を顰めた。

どうしてそれを知っている？ という彼女の戸惑いを余所に、宗茂の言葉は続く。

「なかなか見事なカウンターでしたが、今は御二人が協働関係にあることの証明として御見受け頂きまして構いませんね？」

判決を下そうとする問い掛けに、しかし結城と忠勝は答えない。二人は互いに視線を向け、次に宗茂へと向き直ってから、手の平を横に振った。

「いや、オレノ我達が仲間だなんてとんでも御座いません」「

軽く否定する老若の言葉に、宗茂は眉間に皺を寄せた。息は荒いままだが、彼は構わず問い返す。



「では、先ほどの息の合った攻撃は？」

質問に、先に答えたのは結城だ。

彼はコートの裾を破り、その破片を右肩に巻きついて応急処置を取る。

「オレは右肩のツケだ。大罪武装”悲嘆の怠惰”の超過駆動とは、人間相手にエグい真似をしてくれるじゃないか。西国無双」

発せられた言葉から、苛立ちや不機嫌さを感じ取れる。

あちゃー、これはマジで怒らせてしまいましたね、と鹿角が心中で断定する。

しかし体が動かない自分では仲裁に入ることも出来ないため、素直に状況を見送る。

「T e s、私の適応力では、一度に50%が限界です。に  
しても、よくあの距離からの奇襲に気付きましたね」

「勘に自信があるからな。まあ、信じるかはそちらの自由だが、武蔵はこの事件に関与していないぞ。オレが此処にいるのは個人の独断で、どっちかと言うと、聖連おまゐりとは目的が同じだ」

「……成程、参考として保留させて頂きます。そしてその上で言わせて貰います。武装放棄して、投降を御願ひ致します」

荒れた息を整えながら、宗茂はゆっくりと立ち上がる。  
その動きに、忠勝は目を細め、口端を吊り上げながら言う。

「お前、それだけ息を切らしておいてよく言えるなあ」

「今のは、準備が甘かっただけです。かわすことが出来るのは解りました」

その上で、宗茂は武器を構えた。  
見せ付けるように切っ先を向け、宣言する。

「投降を御願ひします。そして御二人には、地脈炉暴走の停止に御助力を。そうでなければ、次には私もこれを使います。そうすれば、

勝負は付きます」

/  
/

降服という意味に、オレは抵抗感を抱えた。

聖連に迫害されてきた人間が、例え正しいと思っても、それに容易く頷ける筈が無い。

そして再確認した。

オレはやはり、連中が嫌いだと。

何故なら、

……あの船以外の人間が、馴れ馴れしくオレのファーストネームを呼ぶんじゃないよ！

自分で律した、名を名乗らない誓約の前に、結城・秀康というフルネームを他人に語られるのは我慢なら無い。事情を知る者ならば既に塵芥にしていたところだが、事情が知らない相手に癩癩を起こすほど、自分は子供ではない。

オーケーオーケー、落ち着け、クールになろう。

元信といい、聖連といい、地脈炉暴走といい、馬鹿三条は何時になっても心労の種だ。今日一日で余りにも多くのことが起きている、御蔭様でオレのキャラが疑われそうになっているな。

「降服はしない。しかし手は貸してやろう。武威の臨時相談役ではなく、一個人としての判断だ」

「T e s 、御協力、感謝します」

「若……」

忠勝の呟きに、オレは目を合わせない。

話すべき言葉は、全て元信に向けると決めてある。

だからこそ、オレが忠勝に語れるのは、平行線の言葉だけだ。

259

「オレは敵だ。敵で構わない。お前達が何を思ってこんなことをしたのはオレには解らないが、国一つを消すことが正しい筈が無い」

だから、

「オレはアイツの考えが知りたいのさ。おれ達は何一つ伝わらうとしなかった、あの男の考えを……」

オレ達は何一つ伝わ

故に、刃を交えてくれ。

お前達が正しいと、オレもまた正しいと、そしてその果てに、本当は両方とも間違っている、誰かが弾劾してくれるまで、オレは平行情線でも有り続けることに妥協しない。

一度は妥協して、それで苦い後悔を飲んだのだから、もうあんな思いはしたくない。

「戦ってくれるよな？ 本多・忠勝。

お前の忠義には、最初

からオレは含まれていないのだから」

言葉に、オレは宗茂の方へと足を踏み入れる。

男として、決して広くない背を忠勝に向け、本当は彼の表情を見るのが不安で、オレは視線を振り向かないでいた。

どうしてだろうか？

今日知り合ったばかりで、鹿角さんを含めて、本当は付き合いの良人達なのに、オレ達は、一人の男が起こした訳の解らない騒動に、殺し合いを始めなければならない。

否、違う、そうじゃない。

解っている。オレにも、選択肢があつたことを。こんな処に寄らずに、黙って武蔵に帰っていれば、騒ぎに心を揺らされても、まだ平穏を掴めた筈なのだ。帰って皆と幽霊探しをして、麻呂に怒られて、

明日のトーリの告白に頭を悩ませるだけの余裕を得た筈だ。

しかし、それをよしとしないのは。

……オレの身勝手な我儘だ。トーリと約束を交わしたときと同じように、逃げたくないオレ自身の、勝手な都合だ。

幼稚で甘い考え。だが手放すことが出来ないのは、それが間違っていたとしても、大切なことに変わりないから。

放って置いたら、事件が自然と解決出来ました、みたいな楽観視は出来ない。

もし聖連が失敗したら、三河が滅びたら、あの男が死んだら、オレはもう二度と、この心にある葛藤の行く末を掴むことが出来ない。

そして今では、姿形が何もかも違う彼女に、本当の事を教えてあげることも出来ない。真実を掴めないあの子の為に、オレが本当の自分達を探し出さなければいけないのだ。

だから、

「だったら、……名古屋の方を見てくれ」

忠勝のその言葉に、オレは光を見た。

光は、新名古屋城から発せられたものだ。

西側正面入り口。それを含む内部の多重隔壁扉が全開され、今まで不動だった新名古屋城が、自分からその姿を顕にした。

そして、数キロという距離に渡って開かれた入り口の先にあるのは地脈統括炉。

直系一キロ、硬質な金属内殻と弾力のある木製外殻に覆われたそれは、既に暴走が完成した他の地脈炉から供給された流体を蓄積している。

そして、変化はそれだけではない。

今まで、指向性を持って名古屋に流れ込んでいた流体の動きが止まった。

流体は霧状の光に変異し、統括炉を中心に循環するように三河の大地で回る。矛盾を許容する流体は侵蝕の中でも秩序を見出し、それは天球図を描くような線円を作り出している。そして止まることを知らない円運動の中心では、新名古屋城から天に向かって一条の光塔が立っていた。

逆漏斗状に起立しているそれは、統括炉の発する光と鼓動に呼応し、徐々にその高度を上げつつ、しかし同時に崩れて行く。

最上部から光の内側へと零れ落ちる塔に、誰もが言葉を失い、しかし把握した。

……逆流しているのか！？

光の正体は、三河を覆う線円と同じ物質で出来ていると、結城は推

測した。

変異した流体は統括炉に蓄積され、しかし許容量をオーバーした流体は逃げ場を求めて空へと上がる。

しかし無駄だ。

積み重なれた流体は、放出と蓄積のバランスが釣り合わず、光の塔はその自重に抗えられずに、母胎の元へと崩れ落ちる。

放出された流体が、その経路を逆流したことで循環性が保てずに、最終的には統括炉ですら処理しきれない流体が一斉にオーバーロードを引き起こす。

簡単な道理だ。

水を流し出す蛇口から、逆に水を叩き込むのと同じだ。

そしてその考えを肯定するかのようになり、空に声が響いた。

それは、遠くにある新名古屋城の外部拡声器から発せられた。

『やあ、諸君。何とかここまで来たよ。タイムリミットまであと五分。そして先ほどの対話も聞かせて貰ったよ。はてさて、そこにいる立花君と結城君はどうするつもりかな？ 時間は有効に使っていないとな』

聞き覚えのある声に、結城は心臓が止まるような気持ちを抱いた。そして叫ぶ、思い焦がれていた、その者の名を。

「松平・元信……！！！」



頷き、ああと応える姿があった。

それは人影、学帽付きの瘦躯の男性はボロボロの白衣を纏い、右手にマイクを握っている。

彼は統括炉の前に立ち、後光に照らされたその者の全貌を確認できる人はいない。

しかし誰も彼もが、それが誰なのかを知っている。そして、

『ようし、じゃあ全国の皆！ こんばんはあー！』

ポーズを取り、マイクに向けて言葉を紡ぐ学帽、元信の行動に、結城と宗茂は僅かに構えた。

だがそれを余所に、忠勝は止めず、鹿角は動かず、そして元信の声もまた止まない。

『この放送！ 共通神帯で全国に放送中だからね！ よい子の皆、これから先生の一挙手一投足を見逃しちゃいけないよ！ ではでは

』

息を吸い、高らかに叫ぶ宣告が、世界中に届いた。

『今日、先生は、地脈炉がいい感じに暴走しつつある三河に来てい  
まあ す！！！！』

/  
/

専用陸港に停泊してある武蔵全艦では、誰もが宙に出現した表示枠  
から、元信の嬉々とした表情と声を見聞きしていた。

しかしそんな中で、主役である元信以外の人物を注意している者達  
がある。  
それは、

「結城……君？」

教導院前の橋にいる梅組の面々は、長年過してきた級友が画面の先  
にいたことに、言葉を失った。

そんな中で、浅間は信じられないかのように、彼の名前を紡ぐ。そ  
して理解した。どうして今まで、彼と連絡が取れないのかを。

共通通神帯での放送。その準備のために、三河は一度、地脈通神機

能を停止させたのだ。個人通神を使用するにしても、流体濃度が高すぎる三河ではジャミングが激しいため、正常な通神手段は通用しない。

しかし、そんな冷静な分析を行っている中で、浅間の心拍数は限界まで上がっていた。

……どうして？ どうして、結城君があそこに……？

番屋の方で爆発が起きた。三河の方から、得体の知れない光と震動が起きた。何かが起こっているのは推測できる、そして今の放送で、それがとても良くないのも解っている。

解っているからこそ、浅間は目の前にある現実を受け入れたくない。画面の中で、結城は元信を見ている。

その表情は当惑か、哀愁か、憤りか、歓喜か。いずれにしても、それは今まで、一度も見なかったことのない結城の表情だ。手には武器が握られており、見間違いじゃなければ、右肩に赤い沁みが出来ている。

怪我だ。

知らないところで危険な場に足を踏み入れ、あまつさえ傷を負っている。そしてそのことに、幼馴染である自分は何も知らずに、暢気に安全地帯に立っている。

そして何よりも、運命の名古屋に、結城を一人置いてきたという状況に、浅間の不安は恐怖となった。

「どうして……、  
どうして一人で背負うとしたんですか！！  
？」

「ちよつ、浅間?!」

浅間の叫びに、傍にいる喜美が振り返る。

しかし、彼女の慟哭は止まらない。両手は立ち竦む己を守るように身体を抱きしめ、しかし心が求める存在は薄っぺらな画面の向こうにある。

「……怪我までして、追い求めなければならぬ過去なのですか？  
！ どうして、私達を……、私を置いて其処にいるんですか  
!?!」

気付いたときには、涙が止まらない。

それが我儘に似た単なる依存でも、浅間は、大事なときに一人で先を進もうとする彼に、悲哀を感じられずにはいらなかった。  
そしてそんな彼女に、誰も投げかける言葉が見つからない。

「御願いです……帰って来てください、

秀君」

それは、幼い頃に使っていた、彼への愛称。  
今では何もかも置いてきた、過ぎ去りし日の思い出に、浅間もまた、  
一人後悔していた。

/  
/

ふざけ過ぎた悪戯だと、結城は思った。

しかし自分を含めて、現場では誰一人、元信の動きに反応できる者  
はいない。

そしてそれはきつと、世界中の誰もが同じなのだろう。

同時に思う。

彼が目の前にいる。

目測距離は三キロメートルはくだらないが、それでも今までよりは、  
もっとも近い距離に、自分は立っている。

薄っぺらな表示枠や、面会謝絶という軽い文字でもなければ、放送  
越しの虚像に満ちた声でもない。      本物の、自分が会いたくて

仕方がない男が、其処にいる。

なのに、

……今まで以上に遠く感じるのは、どうしてだ!?

困惑は身体を突き動かさない。

冷静になれ、空気に毒されるな、お前の為すべき事を思い浮かべろ。理性が檄を入れる。

そうだ、向こうから出向いて、ようやくチャンスが目の前に現れたのだ。立ち止まっている場合じゃない。

そして足を動かし、一歩前に踏み出そうとした瞬間だった。

新名古屋城の方で、また動きがあった。

「あれは  
」

逆光に満たされた城の中から、多くの人影が現れた。

数百を越えるそれは自動人形。

開かれた無数の隔壁扉の陰から、手に様々な楽器を構えた侍女服達  
が、身体をシェイクしつつ歩き出す元信の背後に並んで、続く。  
そして、

「  
」

高く鳴り響く音色に、結城の動きが止まった。

調律され。音圧と音色を変えながら奏でられるそれは、元信の手の動きに合わせて変化し、

「これは……」

やがて、楽器を持たない、無手の自動人形が唄を口ずさむ。  
決して忘れられることのない、あの蜉蝣のような儂い拍子を伴った  
のは、

『 通りませ 』

通し道歌だ。

通りませ 通りませ

行かば 何処が細道なれば

天神元へと 至る細道

御意見御無用 通れぬとても

この子の十の 御祝いに

両のお札を納めに参ず

行きはよいなき 帰りはこわき

我が中こわきの 通しかな

歌に、結城は両の膝を地面についた。

激しい嘔吐感と共に、腹の底から込み上げる異物を押し戻すように、結城は手の平で口を塞いだ。

視界は真っ赤に染まり、その先に見えるのは最早三河の土地でもなければ、光り輝く新名古屋城でもない。

身体を赤い滴で染めた、黒髪の少女げんえいが先に立つ。

涙が、感情が、痛みが、後悔が追い続ける。

そして呪のように、現実の音が響く。

それはマイクを握った、自分が追い詰めるべき者であり、

『おやあ？ 何やら体調が優れない子が一名いるようだが、構わず続けるよ！！ さーて皆！ 今唄っていたこの歌、これから末世を掛けた全てのテストに出ます（配点：世界の命運）。じゃあ、皆さん。先生に何か質問はありますかあー？』

暢気なその声に、歯を食い縛りながら、結城が叫んだ。

彼は長棍を握る右腕を突き出し、その切っ先を上に掲げながらも、元信の方を指す。



「元信……！！！」

息は荒い。酸素が必要だ。

しかし嘔吐感は引かない、少女もまだ前にいる。

悲しいような、嬉しいような微笑を浮かべた小さな影の前に、結城はありつたけの感情を剥き出しに叫ぶ。

何故ならこの日のために、自分は無様な己を晒し続けてきたのだから。

「お前に聞きたい事は山ほどある！」

だがその前に、教える。

……お前は どうして、自分の国を滅ぼそうとするようなことをした！？」

この期に及んで、素直になれない自分に苦笑する。

ああ、オレは馬鹿な男、だと。

しかしこれだけはハッキリさせなければならぬ。この問題の答えは、世界中の誰もが欲しているのだから。個人の我侷で、長引かせていいことじゃない。

そしてその質問に満足したように、赤い視界の先で、元信は頷きと共に応えた。

同時に、結城は少女を見た。

……もう少しだけ待ってくれ。  
つけてやる。

お前に報える答えは、必ず見

そんな考えと共に、結城は聞いた。  
誰もが待ち侘びていた、その言葉は、

『いい質問だね、結城君。』 遠路はるばる、課外授業に来た君  
に、先生は褒美を与える前に逆に一つ問うよ？』

それは、

『危機って、面白いよね？』

/  
/

「先生、よく言うよね？ 考えることは面白いって。じゃあ、やっ  
ぱり、どう考えたって、 危機って、面白いよね？」

両手でマイクを持ち、私は思っていたことを、迷い無く口にする。世界中の人々が私の声を聞いて、動きを確認して、行方を思っているのだ。真摯な気持ちで授業に参加する生徒達に、私は教員として無様な姿を晒してはいけない。そしてなにより、

「考えないと、死んじゃったり、滅びちゃったりするんだもんなあ。すっごくすっごく考えないと解決出来ないと思うんだけど、それってつまり、最大級の面白さだよね？」

初めて出会った、掛替えの無い人の思いに、私は目を背けたくない。地面に膝き、這い蹲って、うつ伏せになろうとも、その目は決して足下ではなく、前を見ている。絶望の最中でも、考えることを止めず、諦めることを選ばないのは、喜ばしい限りだ。だから見てくれ、聞いてくれ、感じてくれ。そしてぶつけてくれ、世界を前にした、君の思いを。

「危機つてのはとても面白いものだ。だけど、もっと面白いものがあるよね？ ハイ、じゃあ結城君。もっともって考える必要があるもの、それはなーんだ？」

『……言葉遊びか……、良いだろう』

ああ、そうだ。素晴らしい目だ。

この瞬間でも、君は考えることを止めない。

それでいい、こういう遣り取りでなければ、面白くない。

私の質問に君が考えて、その答えを予測するように、私が考える。  
だから言ってくれ、その言葉を。

『危機以上にお前がほざくという面白いこと、それは

』

それは、

『末世だ』

末世。

そうだ、そうなのだよ、素晴らしい！

うんうん、実にいい答えだ。

こうまで君が成長出来たことを、私は素直に嬉しいよ！

でも悲しいかな、そんな気持ちを私が君に伝えてあげることが出来ないんだ。だから恨んでくれたまえ、それでこの至福の時間が少しでも続けられるのなら。それも本望だ。

「ああ、君は優秀な生徒だよ、結城君」

私からではない、他の誰かが与えた名でしか君を呼べない私を赦さないでくれ。

「末世。この世の滅びでもある、予見された運命。それは全世界の生徒に対する最高のエンターテインメントだ」

大切な絆より先に、教師として君の前に立つことしか出来ない私を罵ってくれ。

『余興とは、また不謹慎な発言だな……』

「これは真面目な話だよ、結城君。これから君達が立つべき舞台がそれなのだから」

だからこれから君の行く道の礎に、私はなるう。

さあ！　始めようか！　最初で最後の、私からの授業を！！

/  
/

『末世は、以後の未来を持たないという”卒業”だ。　それを前にした君達にとって、そこまでの道程の全てが授業時間となる。この貴重な時間が終わり、末世が来たら、君達は今や昔みたいに教導院に戻ることは出来ず、友達や家族と話をすることも出来なくなる』

元信の言葉を、オレは静かに聞いていた。

理屈は解る、共感できる部分もある。しかしオレにはどうしても、それが元信の言う最高のエンターテインメントとは領けないでいた。

「確定された絶望を前に、お前はこの騒ぎが末世を解決するために必要なものかと言いたいのか？　地脈炉を暴走させて、三河を消滅させることが、世界の破滅を救済することに繋がるとは思えない！」

『素晴らしいね。その否定は”正しさ”から生まれた合理的な論点だよ、結城君。そして答えを求めようとする疑問もまた、君が自分を納得させる真実を追い求める証拠だ。君みたいな行動力のある人間には、きつと大勢の人達が祝福を与えている筈だよね？』

「それは……」

どうだろうか。

オレは他人のことばかり考えて、何時も自分の問題を後回しにしていた。

己を謹みないエゴの塊に、果たして本当の意味で、皆はオレを肯定してくれたのか？

『地脈炉暴走は末世に対する対策のほんの一部だ。過激な方法だが、何もしないよりはマシだろう？ 何せ末世という卒業を迎えるのだとしたら、もはや限られた貴重な時間を必死に過さなければ損だ。結城君。君は現状に甘んじて停滞する人間ではない。世界をより面白くするために、自分から劇を演じることの出来る役者だ』

そうではない。

オレは我慢できなかつただけだ。

あの日の後悔を見たくないから、オレは自分勝手に誰かを幸せにしたいだけなんだ。

御節介で、傍迷惑で、見境無く、誰もが拒絶できない幸福を麻薬のように撒き散らそうとしている自惚れた道化だ。

『世界を揶揄して喜ぶ批評家。世界という舞台で踊って楽しむ者。世界を礎に、世界を作りに行く者。何れも結構だ。等しく素晴らしい。その誰もが自分が足立つ世界を理解し、考慮し、動かしていくんだよ。だから』

だから？

『ここまで先生の問答に付き合ってくれた結城君と、必死に答えを考えた者。そしてたいへんよく出来ました的な人には御褒美をあげよう。それは末世を覆せるかもしれないものだ』

言葉が紡がれる。

少女が俯く。

儂い赤が黒く淀む。

今まで、オレが否定してきたオレ自身を肯定していた男から作られた言葉に、オレの心臓は鷲掴みされた。  
それは、



『大罪武装だ』

## 第八話 三河決戦

『皆さん、大罪武装を全て手に入れたならば』

赤ではなく、黒く淀んだ視界の中で、オレは意識が途絶えるような感覚に覆われた。

酩酊に似た酸欠感に襲われ、しかし正常に稼働している五感が現実と繋ぐ最後の糸を守り抜いている。

幻影である少女の影を見放さずに、元信の言葉を聞き逃さないのが精一杯だ。

『その者は、末世を左右出来る力を手に入れる』

「訳の解らないことを！」

元信の言葉に、近くににいる宗茂が叫んだ。

憤りの感情を含んだ声に、オレは定まらない焦点で彼を見る。

右手にある”悲嘆の怠惰”が顔を反射し、そこに写された自分の表情に、オレは苦笑の一つも吐き出したくなる。

……ひでえ顔だな……

大事な場面なのに、立っていられないとは。

そして何時の間にか、相對している人物が宗茂に入れ替わっている。

ちよつと待て、待つてくれ、オレの話はまだ終わっていない。  
まだ聞きたいことがあるんだ。

懇願するように、オレは顔を上げた。

しかし駄目だ、原初の赤よりも酷い、黒く濁った視界は少女以外の  
何も見えない。

だからオレは問いかけた、この場にいる、自分にしか知覚できない  
罪の意識に。

「オレは、……どうすればいい？」

少女は答えない。

しかしその瞳は、何かを語っているかのように輝いている。

……声を聞いてあげて。

切ない表情で、そんなことを言っているような気がする。  
しかし声とは、何のことだ？

……分かれてしまった、私の声……

分かれた？

何を言っている。お前は此処にいるじゃないか。

オレを苦しませるために、逃げ出さないようにするために、ずっとオレを縛ってきたじゃないか。

オレが、そう望んだが故に……

……うん、だから、もう良いんだよ。ここからは私じゃなくて、本当の私の声を、聞いてあげて……

本当の、お前の声……。

『噂を聞いたことがないかい？』

少女の声が消え、現実が再び浮かび上がる。

いよいよ自分の精神も末期に入ってきたと思っていた刹那に、それは残酷にもオレに立ち上がるための力を与えてくれた。

『大罪武装は、その材料として人間を使用している』

表示枠で、元信が語る。

左手前で、宗茂が構える。

背後で忠勝が静かに事態を見守り、鹿角さんは倒れたまま、状況を見送る。

何時の間にか、淀んだ視界が回復してきた。

少女の姿は既に消え、地についた膝に力を入れて、オレはゆっくりと立ち上がろうとし、

『その噂は、本当だよ？』

肯定する言葉に、オレの意識がハッキリと洗淨された。

/  
/

『その噂は本当だよ。……正確に言えば、大罪武装は人間の感情を部品としている』

世界中の各地で、誰もが元信の言葉を聞いた。人種、身分、性別に関係なく、何時しか誰もが冗談交じりで話していたことが、一気に現実として押し寄せてきた。

『その人間の名は、ホライゾン・アリアダストという』

「え……？」

世界の何処かで、誰かが疑問を口にした。

それは大きな航空都市艦の上か、それとも崩壊間近の町の上か、或いはそれ以外の何処かの誰か。何れにせよ、彼らは聞いた。決して聞き逃さないであろう、運命の言葉を。

『ホライゾン。十年前に私が事故に遭わせ、大罪武装と化した子の名だ。そして去年、彼女の魂に嫉妬の感情を込めて九つ目の大罪武装とし、自動人形の身を与えて武蔵に送った』

それは、

『P-01sという名を持って、武蔵の上で生活している』

/  
/

『自動人形、P-01s。その子の魂が、  
”嫉妬”の大罪武  
装”焦がれの全域”そのものだ』

冷え切った、何かが崩れ落ちる感覚と共に、結城は元信を見た。  
信じられないのではなく、ああ、やっぱりそうなのか、という諦観  
に似た気持ちを抱き、彼は長棍の切っ先を下げた。

『今日、ホライゾンを見たよ。……手を振ってくれていた』

知っている、自分もその場にいた。

でも向かい合うのが不安で、自信がなくて、自分は背を向けていた。

『ホライゾンは、元気そうで、……何よりだ』

その言葉に、結城の頬を、熱い涙が伝った。

/  
/

「愚弟!？」

喜美の声が背後から伝わる中、葵・トリーは走り出す。  
決して早くは無い、しかし自分の持てる最速で、彼は橋の階段を下り、艦首の方に向けて駆け出した。

「愚弟! アンタ、どこ行くの!？」

問い掛けに、答える気力は持ち合わせていない。



どこに行くのかつて？ そんなの解らない。  
否、本当は解っている。しかしそれが本当に自分の行くべき場所な  
のか、迷っている。  
そして迷っているからこそ、尚更行かなくてはならない。  
二度同じ後悔を飲まないために。

……ホライゾン……！

会いたい少女がいる。  
昔とは何もかも違って、他人の都合で望まれない形にされても、そ  
れでも幸せにしたい少女がいる。

………結城！

共に歩みたい友がいる。  
こちらの都合で迷惑を掛けて、しかし気にするなと笑ってくれて、  
駄目な自分を支えてくれた友がいる。

「！」

走り、駆け進み、しかし足を止める。

目の前。

後悔通りを前に、トーリは足が竦む。

己の後悔の形、十年間通れなかった道を、今度はどんな都合で跨がなければいけない？

……お、俺は……

暗い道の先を見る。

今でも鮮明に浮かび上がる、あの惨劇が蘇る。

後悔通りを見るたびに、あの日の現実が再生リプレイされる。

近づくたびに、蘇った記憶が何度もホライゾンライゾンを殺してきた。  
だから通れるわけ無いのだ。  
でも、

いいんじゃないの？

誓いの言葉が、心の中で響く。

通れないのなら、無理に通らなくてもいい。道は一つしかないとは限らねえんだし……

自分のせいで道を閉ざした友人が、そう言った。

しかし、それでもお前が、何時かこの道を通りたいというなら……

それは気遣いで、罪滅ぼしで、身勝手だけど、それがあの日の救いになっていたのかも知れない。

お前が上手く通れる日まで、オレがお前の後悔ごめんを見てやるよ。

道の小脇にポツリと佇む石碑。

自分が壊した少年は、今までずっとそれを守り続けてきた。なんて酷い話だ。

弱くて、逃げることしか出来ない自分の代わりに、大切な友人に自分の罪を押し付けてしまった。

それでアイツの友を気取っているのだから、尚更救いようが無い。

馬鹿は馬鹿でも、これでは本当に大馬鹿野郎だ。

悪ふざけして、日常に浸って、ハシヤいで騒いで、少しはアイツの重荷を軽くしようとしていたのに、でも本当は、自分が気楽になリたかっただけなのだ。

それが祟って、今この時でも、結城が一人三河で苦しんでいるときに、自分は何も出来ない。何もしてやれない。

誰よりもホライゾンの死に後悔していた自分が、まさか残酷にも、その死に苦しんでいた少年を追い詰めてしまった。

……ホライゾンだけじゃなく、結城をも傷つけてしまった……

それは赦されることではない。  
だからこそ、トリーは決心したのだ。  
もう、ホライゾンから逃げない。  
もう、自分の都合で結城を追い詰めたりはしない。  
もう、あの日の自分に嘆いたりはしない。  
もう、不可能な自分を言い訳にはしない。  
だから、

「……………!!」

走る。

暗闇に飛び込み、出来るだけ速く、そして真っ直ぐに進む。  
そして見える。

馬車に轢かれた少女の姿。

毎朝石碑の前に立つ友の背影。

それがどれほど重くて、痛々しいものなのか、今になってようやく  
実感する。

ああ、こんなにも掛替えの無い感情を、自分は置いてきたのか。  
そしてそれが大切だからこそ、結城は見捨てずに拾ってくれた。  
ならば、

……………逃げちゃいけない。必ずその感情を返させて貰うから……………、  
だから!

此処にいないお前の代わりに、自分があの子を助けよう。  
あの日の償いを、成就させるために。

/  
/

「ふざけるな!!」

三河で、結城の慟哭が世界中に響いた。  
それは力無く、しかし確かな意志を持って人々の心を震わせた。

「十年……、十年だぞ!?! 何もかも捨て去って、壊して、それで  
残したものが、自分の子を兵器にしただ?!? どうしてそこまで  
身勝手にいられるんだ?!?!」

『……………』

叫びに、元信は答えない。

感情の破裂音を聞き届けるように、彼は結城の言葉を最後まで受け止めるかのように沈黙した。

「末世や歴史再現……、それ以外にも、人として大切なことがいっぱいあるだろう!? どうして自分の子に、何も言っておけないんだよ!!!? アイツが……、ホライゾンがどれだけお前のことを思っているのか、解っているのか!!!」

事情を知る者は、誰もが目を伏せた。

もういい、もうこれ以上は言うな、と。お前が望んだ幸せは、たった今崩れ去った。だからもう、自分を苦しませることはするな。しかしそれを解っていても、結城は言わずにはいられない。

何かに縋るように、自分の理性を繋げる、最後の光に願うように、彼はその言葉を紡いだ。

十八年間耐えてきた、今までの自分を、投げ捨ててまでも言わなければならぬ言葉。  
それは、

「……何か言ったらどうだ!!! 親父!!!」

/  
/

父を呼ぶ声に、この神州に住む誰もが息を飲んだ。  
それは現場にいる者達も例外ではなく、突然告げられた言葉に、宗  
茂の思考は一瞬停止した。

……今、なんて……？

後ろでは、結城は感情に苦しむ表情を浮かべて、元信を見ている。  
その瞳は真摯で、冗談や悪ふざけをしているようには見えない。  
ああ、そうとも。

こんな重大なときに、嘘を吐く意味など無い。だからそれは本当の  
ことなのだろうと、宗茂は無自覚にそれを受け入れた。  
そして、人々の当惑を弾き飛ばすように、元信の声がした。  
彼は、淡々と、しかし何かを懐かしむような口調で言った。

『結城君。……否、結城・秀康君。……それも違うな。まあ、いい  
だろう。』

いや、良くない。

しかし、言葉の続きを聞くしかない。

『少し、昔話をしようか。  
年の、小さな物語を』

十八年前から始まった、一人の少

/ /

神肖筐体モニタや神啓筐体レディオ、表示枠から告げられた元信の言葉は、至って  
理解し易い話だった。

十八年前。

三河で一人の赤子が生まれた。  
赤子は男性で、三河君主とその内縁の妻の間に授かったものだ。そ  
してそれは以後の時代において、その死を確定された存在であった。  
何れ来る歴史再現の名の下に、嫡子である子は松平・信康の名を襲  
名し、P・A・ODAとの政治問題の末に自害を迫られることとな  
る。

よくて十年。しかしその頃になっても、子は幼いままだ。  
まだ見ぬ青春と人生を謳歌せず、そして祝福されなかった生を受け  
た子に、君主と妻は断腸の思いを決意した。

何れ運命に子を殺されるのなら、初めから子がいなければいいのだ  
と。

君主は、P・A・ODAとの暫定同盟の下、子を入質としてP・A・  
ODAに捧げた。



そして後に二児を身籠った妻を三河から遠ざけ、君主は世間に、自分分は妻と跡取りがいないということを表示した。そしてその事実を知る者は、敵でも味方でもなくなっていた。妻の行方を知るものは居らず、その後の三河に変化は訪れなかった。ゆえに話を子の方に回そう。

『生まれて間も無く、P・A・ODAに送られた子は、更にその身分を変えていた』

跡取りということを隠すために、送られた人質は姫であると、そう言ったのだ。

勿論、そんな出任せが通じるわけでもなく、しかし幸いなことに、P・A・ODAは追求することなく、”そう言うこと”として、姫を受け入れた。

その中にどのような思惑があったのかは、今では定かではないが、後の人生において、姫として育てられた子は5歳の誕生日に、三河で製作された武装と引き換えに極東へと帰るまでの時間を織田家で過ごすこととなる。

『しかし、極東へと帰された子は、三河へと戻ることは無かった』

一度捨てた子を、手元に引き戻せるだけの気概など、三河の君主に

は無い。

人質としての役目を終えた子は姫としての身分を捨て、常陸にある結城家に養子として預けられた。

しかし二度捨てられた子は結城家での生活に馴れ合わず、一年の時を経て、武蔵へと送り出された。

それ以降の話は、何処にでもあるようなものだ。　子は武蔵で

静かに暮らし、十年後に、父親である君主が引き起こした事件に責任を感じて、それを止めるために、此処で再開を果たす。

『大まかな事情はこれだ。　子の名前は松平・秀康。極東継承

権第一位にして、ホライゾン・アリアダストの兄。非凡な武の才能を持ち、P・A・O・D・Aでは、一度は五大頂の一人、”羽柴”の襲名者候補に選ばれたことがある。そのことに肖あやかって、織田家では羽柴・秀康と密かに呼ばれていたな。そして今では常陸結城家の養子として、結城・秀康と名乗る。

……ありふれた悲劇は、つくづく人を狂気に陥れるものだとは思わないかい？　結城君』

秀康とは呼ばない。

元信には、既にそのような資格はないのだから。

己の子の運命を狂わせた元凶は、ただ自分を糾弾する者の反応を待ち望んでいる。

そしてそれを見届けるのは、この神州に住む者全てだ。

『さあ、結城君。君はどうするのかね？』

だからこそ、元信は促す。

己が子を、谷底に突き落とすかのよう。

『聖譜記述にもない世界大戦を引き起こす先生に、君はどのような罰を与えてくれる？』

最初で最後の審判が迫る。

その問い掛けに、結城の判断は思いのほか早かった。

それは、

「止める。お前を止めて、その過ちを償わせて貰う」

過ち。

それは地脈炉暴走か、それとも今まで自分と妹を蔑ろにしてきたことか、或いはホライゾンで大罪武装にしたことか。

どちらにせよ、此処で三河が崩壊したら何も始まらない。

『いいのかい？ もしも三河の消失が、末世を左右するために必要なものだとしたら？』

「関係ない。 オレは何時でも、世界より先に、ちっぽけな人間のために戦ってきたからだ！ 国一つを滅ぼすことが、良い事な訳が無い！！」

それが今の結城が出せる、精一杯の答えだ。

妹を死なせた、自分の運命を狂わせた、そしてそんな自分達を置いて、勝手に消えようとした父親に、最後まで抗ってみせると。

『そっか、最後まで味気ない道を選ぶのも、また道の一つだよな。でも先生としては、言うことが聞けない生徒には、それ相応の罰を与えなくてはいけない。……だからおい、その副長、ちよっとどっにかしなさい』

言葉と共に、結城と宗茂は同時に振り返った。

押すような、それ以上に吹き飛ばすような威圧感のある風が身体を打つ。

それは、

「本多・忠勝！！」

蜻蛉切を携え、東国一の武者が馳せ参じる。

「止めるぜ学級崩壊！！」

逆光に照らされた三河の大地で、最後の剣戟が交わされた。

/  
/

武蔵右舷二番艦・多摩表層部。

人気の少ない商店街の上で、正純は表示枠から放送された事実  
に、心を揺さぶられていた。

大罪武装、結城・秀康、P-01s、三河の消滅。

何れも信じ難い話であり、疑問より先にも、これは夢なの  
ではないかとう現実逃避が浮かび上がる。

しかし次の瞬間。

耳に響く確かな声が、その甘い考えを悉く打ち砕いていく。

「正純様」

背後。

白髪の自動人形の声に、正純は嫌な汗が吹き出ているのを感じる。

正純は不安な気持ちと共に振り返り、相変わらずの無表情を浮かべたP-01sが目の前に立つ。

「あ……」

かける言葉が見つからない。

話が本当なら。この自動人形は友人の生別れの妹で、葵・トーリの罪の形で、この武蔵が抱えた秘密の正体で、

アレは主を失った獣だ。主人の死を受け入れられずに、未練がましく墓穴を守っている狼だ。何れ自壊し、己の愚かさに溺死する、哀れな道化だ。

結城が壊れてしまった、その理由の根源なのだ。

「正純様。なにやら今、P-01sの名と、その正体を示すような放送を聞きましたか……」

首を傾げ、彼女は問う。

自分のことだと言うのに、彼女は酷く冷静で客観的だ。

当然だ。

記憶や感情が無く、放送を聞いても実感が無いのだろう。

真つ当な人間である自分ですら解らないのだ、一年程度の人生経験しかない自動人形に理解できる筈もない。しかしそれが悲しくて、切なくて、この瞬間によろやく、正純は結城が抱えていた苦悩の意味を理解した。

「聞いたところ、結城様は、P-01sの実兄なのですか？」

「……そんな……どうしてだ？ あんまりじゃないか……」

肯定も否定もしない、確認するかのようなP-01sの問い掛けに、正純は腹の底が冷え切るような思いを抱いた。

そこまでする必要が、本当にあつたのか？

息子を捨て、娘を兵器に変え、そうまでして救おうとする世界に、果たして意味はあるのか？

画面越しに響く、結城の感情が針のように心に突き刺さる。

それは怒りか、悲しみか、憎悪か、感動か。

今まで溜め込んできた思いは正しく吐き出すことが出来ず、自分よりも先に、彼は妹のために叫ぶことしか出来ない。

「どうして、魂ある自動人形を大罪武装にした……」

溢れ出そうとする涙を、正純は堪えた。

余りにも残酷な、救いようが無い悲劇。しかし何よりも酷く正純を苛むのは、自分達はそんな結城を一人三河に置いて、何も出来ずに戦わせて上げることしか出来ない。

「どうして、アイツの幸せを奪っていくんだ！」

何時しか夢見た、芸術品のような微笑み。

それはたった今、崖の底へと消え去った。



/ /

決着は一瞬、とまでは行かなかった。

三人の武者。

東国最強と西国最強、そして武蔵最強。

頂点の名を欲しいままにしている三者は、今確かに世界の命運を賭けて刃を競い合う。

そして勝負の行く末を見守るのもまた世界そのもの。

神州に住む人達は成す術もなく、自分達の命運を遠い土地にある、見ず知らずの人間に預けることしか出来ない。

しかしその依存心すらも、我らが厳格な教員は赦してくれなかった。

『この戦いが始まりだ。この戦いが終わっても、もはやそれだけではどうにかなるものではない。これから先、もはや誰もが世界に対して、どうにかしなければいけない』

誰も逃げることは出来ない。

己の運命を他人に背負わせても、それでどうにかなる時代ではない。

動け、立ち上がれ、考えろ、足掻け、突き進め、立ち止まるな。

末世という課題は、未来永劫付き纏う。

『そのためにも、 行け！ 本多・忠勝！ お前の忠義は偏差  
値どのくらいか、全国レベルで見せてみる！！』

/  
/

「応……！！！」

吠えるような言霊を、宗茂は聞いた。

蜻蛉切を携え、その穂先を鮮やかに振るう武芸に、彼は旧派式クラシックカフ一般

聖術イルムによる加速術式を持つて応対する。

背後に回り、武器を叩き込む。

しかしこちらの初動を見切った忠勝は、加速段階と同時に動き、宗茂の先に合わせる様なカウンターを打ち込む。

……流石！ 楽には行きませんね！！

切手大に圧縮された加速術式契約書を足場として展開し、その数に応じた速度を倍加するのが宗茂の”速度”だ。単純明快でトップスピードに勝るが、肉体への負荷が契約書の数に応じて比例するのが難点だ。それを制御できるだけの訓練を為してきたが、それでも決

め手を取れないのは、

……経験の差ですか！

文句を言える状況ではない。

出し惜しみは赦されない。

宗茂は背後を取り続け、対処されるたびに契約書の枚数を増やして行く。

首後ろにある身体用冷却装置である十字型ラジエーターが陽炎を噴出し、光の煙が散るたびに速度を上げて行く。

膂力是对等、性能もポテンシャルも引けを取らない。

しかし宗茂にとって問題なのは、それでも的確にこちらの動きを捌ききる忠勝に加え、もう一人の人物の動きが余りにも信じられないものだからだ。

……これは……

忠勝は下がる。

視界に宗茂と結城を納めて、正面か背後、左か右かに二人の動きを限定させれば、あとは攻撃を流すだけで戦闘の応酬が成立する。得物が伸縮機構を持つ槍であるため、乱戦に持ち込んでもアドバンテージを確保できる。1対1での密着した円運動から、忠勝は対多数用の戦術として、連結式の直線運動を用いた。

対策としては簡単だ。

相手の処理量を超える攻撃を叩き込む、または直線運動そのものを

止めればいい。

ダックスハント

その後は鴨撃ち以下の袋叩きで、簡単に相手を仕留められる。事実、宗茂もそうしようとしていた。

速度にものを言わせて、死角からの連撃をお見舞いする。

幸いなことに、こちらの戦力は二人。目測でも二倍のパワーを持っているし、結城のスタイルが長棍と長剣という二刀流紛いということも考えて、対策には打ってつけた。

なのに、

……どういづことなのですか……？

目の前では、結城が一人で忠勝を抑えていた。

/  
/

結城は、初めから全力だった。

直線運動を持って自分と宗茂を引き摺りながら牽制する忠勝に、打撃と斬撃の嵐を片っ端から叩き込む。

ベスト射程ギリギリの位置からの長棍のスイングは岩石を破壊するほどの威力を持ち、臂力に任せた攻撃を、忠勝は柄をレールのようにして下段に受け流すことで対処した。そして武器を防具として使用したその隙に、長剣の攻撃を入れる。

横腹狙いの突き。

それを蜻蛉切の柄が弾く。

反動を利用して逆手持ちに切り替え、そのまま柄撃ち。

右籠手に逸らされて、そのままタツクルが迫る。

半歩引いて通り過す。同時に長棍の先端を跳ね上がらせる。目掛けるは鳩尾。

先制を見抜かれ、穂先が長棍を押さえ込む。そのまま背を向けられ、しかし石突きの不意打ちが顔面に来た。

首を逸らしてかわす。頬の肉を微かに抉られた。反撃に身体を一回転。体重と遠心力を乗せた長剣の一閃を振るう。

腰を落とすことで避けられた。蜻蛉切が長棍の表面を削るように斬り上がる。

それを絡め取るように、長剣で抑える。武器を封じたのと同時に、顔面への中断蹴りを突き出す。

身体が背後に飛んだ。伸縮機能を起動させられ、六メートル程の距離を開かれる。

そして地面に足がついた瞬間に大地を蹴り、一瞬にして距離を詰めてからまた反撃する。

全ての動きが一瞬で、そこには術式や特別な能力などない。

百戦錬磨の本多・忠勝に、小手先は通じない。ゆえに結城は、今まで自分が学んだ全ての武芸を此処で発揮した。十数年間鍛え上げてきた己の技は、果たして世界レベルの武者相手に通用するのかわ、その総決算だ。

しかし、

……それでも、届かねえか！！？

S字運動と直線運動の駆け引きは既に終わっている。

連撃の結城と回り込みの宗茂の挟撃に対して、忠勝は円心運動に切り替えたのだ。

バツクハンドと槍の旋回打撃。半円を描く足運びは自然と結城と宗茂を同じ対角線上に誘導し、忠勝は石突きと穂先の両方で二人を迎撃する。

更には、三人の動きを歯車のように噛み合わせながら、忠勝は宗茂を正面へと強引に引き摺り込む。

……挟撃を阻止する気か！？

二つの得物を使用する特性上、結城は正面への攻撃角度が広い。

相手を包み込むような攻撃に、忠勝は若者二人を正面に捉える事で、その攻撃手段を半減した。

309

「死角を狙う手は通じないか……、立花・宗茂！！ 火力で決めろ  
！！」

「っ……T e s . . . ! !」

戦力比は2対1。

しかし初対面でコンビネーションを取れていない結城と宗茂では、実質1対1対1というトライアングルを描いている。

これではタイマン勝負の方がまだマシだ。

ゆえに結城は指示を飛ばした。  
戦術は通用しない。自分達の腕では、東国無双の名の下に築き上げた経験と言う鉄壁を打ち砕けない。だとしたら、

……性能で勝負だ!!

運動選手がどれだけ早く走れても、空を飛ぶ船や獣に勝てないと同じように、こちらも”土俵の質”を変える。速度が宗茂の得意手なら、結城はその逆を支配する。  
そのためにも、

「術式を使わせて貰う!」

宣言に、パチン、という何か弾ける音がした。  
音は結城の右手から発せられたものであり、彼は、長棍を包む白い布の止め具を外したのだ。

「!」

驚嘆の反応を示したのは、果たして誰か。

皆の視線が注ぐ中、流体暴発制御御用の封印布が解かれる。風に靡かせて、白い陰の下から現れたのは、黒い金属製の長棍。両端に打撃強化用の金色の柄頭を備え付けたそれは、全体が青白い流体光を纏っている。陽炎のようにゆらゆらと光の尾を引く東洋式の戦槌は、己が神格武装であることを高らかに宣言している。

そして、武器が振るわれる。

ガキンツ、という金属の打撃音が短く響き、忠勝が僅かに一歩引いた。そして、

「  
」

声がした。

今まで正体を隠していた長物はその姿を見せた次の瞬間。皆は確かに、唄の声を聞いた。

/  
/

かごめかごめ



「これは……」

共通通神帯を通して、武蔵にいる人々はそれを聞いた。  
表示枠や神肖筐体、神啓筐体から響くのは、古き時代の童謡。  
武器が交差する金属音と破壊の破裂音と共に、決戦を見届ける全て  
の人々は、確かに歌声を耳にした。

籠の中の鳥は じっくり出やる

夜明けの晩に

鶴と亀と滑った

後ろの正面だあれ？

かごめかごめ

籠の中の鳥は……

「繰り返した……？」

誰かが質問を上げる。

画面の中では、結城が童謡を唄いながら、先ほどまでとは違う足捌きで忠勝と打ち合っている。

唄のリズムと、相手の摺足に合わせて踏む旋回運動は、舞だ。唄と踊り、そして武器を振るう動き、更には宗茂と忠勝の動きをもその一部として取り込み、結城は命懸けの戦場で華やかに舞う。

唄は同じ歌詞を紡ぎ、しかし周回を重ねる毎に、結城の攻撃の質が重くなっていく。弾き、拮抗し、受け流され、捌かれ続けられた技が、負けを認めずにその怒涛さを増していった。

圧して、潰して、火花を散らし、防ぐことを赦さずに叩く。

地面に当たれば大地が砕き、大気を薙げば風が悲鳴を上げる。突きは弾丸、斬りは死神の鎌だ。

治まることを知らず、結城の舞は只管破壊を呼ぶ。

「……………籠目唄」

かこめうた

声がした。

武蔵アリアダスト教導院前の橋上、事態を見守る梅組の中から、喜美の言葉が響いた。

彼女は眉尻を下げ、何かを哀れむような目で、その唄と舞を見る。

「そうまでして、貴方はホライゾンに報いたいよね、……………結城」

言葉に、誰もが暗い顔をした。

そして籠目唄。

通し道歌と並んで、百年前に聖譜で告知されたのを切欠に、試作である原盤が作られた童謡の一つだ。

正式な出自が掴めず、殆どの童謡が今の時代で内容を作り直された中で、籠目唄は奇跡的にも、その本歌とそれに関する資料が完璧に記述されたものである。

しかし、変動する新たな時代に順応する余地を与えない古い唄は、極東が暫定支配され始めた当時において、通し道歌以上の価値を見出されずに、単なる遊び唄として廃れてしまった。

だが、

「子供の頃、皆と一緒に遊ばない貴方に、ホライゾンが教えてあげた唄。……今でも憶えているのね」

その言葉を言った喜美の表情は、形容し難いものだった。

懐かしむような、嬉しいような、悲しいような、色んなものが混ぜ合ったもの。

此処で結城がその唄を歌う真意に、喜美は傍で俯く浅間を見た。

「見てあげなさい、浅間。

貴女が見守らなければ、彼は本当

に一人で戦うことになるのよ」

無理にでも、最後まで見なくてはならない。  
喜美は浅間の肩を優しく抱き。促すように彼女の視線を上げさせた。

「私達の副将の背中が、まだ折れてないわ」

/  
/

決戦は、最終局面に入っていた。  
タイムリミットを前に繰り広げられる死闘を前に、半身を失った鹿角は冷静に目の前の状況を分析していた。  
庄内川を渡る橋の上で張り合う三人の姿を、彼女はやや離れた位置で見届ける。

……重力制御による援護は可能ですが。この距離からだと言闊に動けませんね。

高速で網を編むような動きをする宗茂。  
唄と舞で己を強化しながら、忠勝を引き離さない結城。  
術式による猛襲の牙を剥く二人に、しかし忠勝は崩れない。  
速度を体捌きで封じ、威力を足捌きで避ける。  
だがそれでも、若者二人は己の担当する領域を緩めない。

最早性能以外に、二人には忠勝を出し抜く術はないのだから。

……片方は聖術による加速。もう片方は、  
神道術による加護  
ですか……

客観視点で、鹿角はそう確定した。  
強化に上限が無く、契約書による加速を行う宗茂の術式は単純なものだが、結城の方はそうにはいかない。

……恐らく禊系と加護系の術式を同時使用しています。舞と唄は奉納。術式制御にはあの長棍を使用しているようですが……

情報が少ないために、見た目の特徴しか掴めないが、鹿角の推測は正解に近い。

結城の術式は、オオヤマツミとの上位契約で体现している強化術式ブーストの一種だ。

オオヤマツミは山海の神、酒の神、軍神という三つの役割を持っており、結城はその内、酒の力を信仰している。

神に捧げるのは戦の酒宴。  
己を演者、忠勝を役者、そして宗茂を観客として舞台を構築し、戦闘を酒宴として宛がうことで奉納する。奉納の内容は唄と踊りに加え、演者である自分が宴の雰囲気高めるといふ”労働力”をも含む。精神の高揚は酒酔い、剣戟と戦術の駆け引きは芝居、そして唄と舞は余興。

結城の術は、戦いで神を喜ばせる神楽舞いそのものだ。

そして華やかな舞台を祭り上げた結城に、オオヤマツミは軍神としての力を与える。  
だが、

……キレが鈍ってきていますね……

目の前では、拮抗している三者のバランスが傾き始めている。牽制のみを行う忠勝を前に、結城の動きが遅くなって来たのだ。その理由は、

……肩の傷ですか。

”悲嘆の怠惰”の超過駆動から自分を庇って受けた傷は、治療を受けてない。

コートの切れ端で塞いだだけのそれは、激しい戦闘運動に耐え切れずにいる。

結城の服の右側は真っ赤に染められ、出血を止めなければ、このままでは致死量に至る。

ここまで来て、精神より先に肉体の限界が近づいてきた。

……無常ですが、勝負はつきました。      もしもここで若様を止めないと……

彼が死ぬ。

擦れ違いはあれど、仮にも君主の息子なのだ。

敵として相對しても、それが忠義を捧げるべき相手であるのは変わりはない。

その事実にも、忠勝は勝機を見据えても、決め手を出さない。

結城の衰弱を狙って、そのまま退場させる気なのだ。

……しかし、それでは手遅れになる可能性があります。

治療を受けられる場所は、ここには無い。

その上、地脈炉暴走が迫っている。

ならば、限られた力しか残されていない鹿角が出来ることは、一つしかない。

……主の勝利と、若様の命の安全。その両方を手にする方法。

それを実行するために、鹿角が動く。

/  
/

「くっ……!!」

宗茂は限界に達していた。  
消費した聖術契約書の数は既に四桁を突破しており、平均加速倍率は数十倍に達していた。  
両足の骨格と筋肉の負担は過去最大級であり、内臓の圧迫によって先ほどから嘔吐感が込み上げてくる。  
しかし、

……彼と比べたら、まだ生易しい方ですよ！！

視界の横では、協働関係にある少年が傷を背負いながらも術式の使用を止めない。

唄も踊りも、武器捌きも精彩さが錆付いてきているが、それでも攻撃の手を緩めない。

その光景に、宗茂は奥歯を噛んだ。

……まさか最初の奇襲が詰め手となるとは！

三分前の自分を殺したい気分だ。

不可抗力とは言え、自分が負わせた傷が無ければ、結城の腕前だけで忠勝の足止めを可能としていた。

そうすれば、宗茂は”悲嘆の怠惰”の超過駆動を持って地脈炉を破壊することが出来ていた。

……こちらの落ち度は、こちらで払拭するしかありません！！



変に律儀な男だ。プライドでもあるのだろう。  
しかしだからこそ、立花・宗茂は西国無双足りえる。  
ゆえに彼は動いた、自分の最大の武器をを使って、共に戦う者に敬意を払うと。

/  
/

白く翳み行く視界の中で、結城は武器を薙ぐ。  
長棍と蜻蛉切が激突し、その反動が腕に返ってくるも、それを知覚できていない。

……く……そつたれが……

屈辱だ。納得できない。こんな筈ではないと、心が叫ぶ。  
術式を発動し、武器の拘束を解放したと言っのに、それらの全力を  
発揮する前に、自分が力尽きてしまうとは。

……まだだ、オレはまだ……

戦意はある、戦おうとする気概はある。

しかし無駄だ。

人体は確かな構造と理論に、僅かな神秘で出来ている。

そこに精神論が付け込める余地は無く、現に今でも、結城の意識は昏倒寸前だ。

視界はぼやけており、目に見えるもの全てにモザイクがかかっている。

手足の感覚も麻痺し、得物を扱う手応えが無い。

何もかもが重く、そして軽い。

海の底に沈んだような、身動き一つ取れない錯覚が五感を襲う。

余りにも早すぎた、己の限界。

今まで自分を構築していた原初の赤が、無惨にも自分の体力を奪った。

だがそれでも、結城は唄うことを止めない。

舞い続けることを諦めない。

武器を手放すことを赦さない。

「オレは……まだここにいる！」

まだ、終わってねえぞ！！」

目の前。

横薙ぎに振るわれた蜻蛉切の刃を、結城は同じ動きを持って止めた。ぶつかり合う長棍と槍の先端。

二つの長物は弾き合うことなく、拮抗した状態で数瞬の隙を作る。

そこに黒い円弧が走る。

右肩の上から振り抜かれた長剣の袈裟斬り。

それを忠勝は槍を下方方向に引き戻し、跳ね上がった柄尻で受け止めた。

そして、

「隙あり!!!」

宗茂の声が聞こえる。

穂先が下段に抑えられ、がら空きとなった忠勝の背後を”神速”が縫う。

「結べ! ”悲嘆の怠惰”!!」

叫びに、”悲嘆の怠惰”の刃が光る。

発動するのは通常駆動。

試作品である蜻蛉切と同様のシステムの、刃に映す名を削ぎ落とす力。

防御不能の一撃が忠勝の背後に走り出す。しかし、

「それが見抜けぬとも思ったか!!」

次の瞬間。

忠勝が行った動きに、結城と宗茂は瞠目した。

蜻蛉切の手動分解機構を発動し、彼は自分の得物を両断したのだ。

……これは!?

自分の武器と似た形へと変化した蜻蛉切に、結城は息を飲んだ。

そして忠勝は刃を持った部分を背後に一閃し、その穂先を悲嘆の怠惰の切っ先と合わせる。

その悠然とした動きに、結城の目の前で硝子が割れる音がした。

流体光の光が飛び散り、悲嘆の怠惰の通常駆動が無効化された音だ。

「鏡合わせだ。自分の武器の能力に対して、対策がないとも思っただか？」

刃に映し込む動きを反射された。

まさに業の宿る技に宗茂は戦慄し、しかしそれでも彼は前に出る。加速術式を発動させ、結城に抑えられている左側へと回り込んだ。

「まだです！ まだ終わっていません!!」

しかしその動きを、忠勝はバックハンドで断ち切る。伸縮機構を作動し、槍身のついた柄を最大二メートルへと伸張させる。

斜め上に斬り上がる円弧は宗茂の横腹を狙い、攻撃を当てるのではなく、彼を正面へと誘導させるための軌道を描く。

……来た！

しかしそれは、結城と宗茂にとってはチャンスだ。

下段から浮かび上がる攻撃に、宗茂は強引な足運びを見せた。

迫り来る銀色の刃に向けて、自分から身を乗り出したのだ。自殺行為に見えるそれは、しかし、

「まさか……、蜻蛉切を足場にするつもりか！！？」

Tes・もJud・もない。

跳ね上がる尖端に、宗茂は踏んだ。

それを足場として聖術を上乗せして、百倍以上の加速を得る。

それは速度自体が凶器になるということを意味し、回避も防御も文字通り不可能となる領域だ。

聖術契約書を出るだけ重ね、冷却用ラジエーターが唸り上げる。しかし加速に必要な一步を宗茂が踏み出そうとしたとき、結城は見

た。  
薄れ行く視線の先で、忠勝の口端が吊り上ったのを。  
そして、

「そのような見飽きた芸当が、我に通じると思つかあー!!」

東国無双の叫びに、蜻蛉切の槍先がそれ相応の抗いを見せる。  
バックハンドの手首を下に傾かせ、同時に伸縮機構で伸ばした槍先  
を引き戻したのだ。

結果、宗茂が蜻蛉切を踏むより早く、その足場が下へと落ち、宗茂  
は何も無い宙を踏み外すことになる。  
更には、

「!」

宗茂の手前へと落ちた穂先が、まるで逆再生されたかのようにその尖  
端を再度跳ね上げた。

狙うは宗茂の喉笛。宙に浮いた彼に回避手段は無く、バランスの取  
れない状態では防御も不可能。

フェイントをかけて相手のミスを誘発し、その上で同じ動きを持っ  
てとどめを刺す。

蠍の尻尾のように、蜻蛉切が宗茂の首を獲る。

だがその決定的な瞬間に、結城は叫んだ。

「っ……させるかあ　　！！」

拮抗していた剣と柄のバランスが崩れる。

剣を引き戻す動きに、忠勝の身体が前へと傾く。

しかしそれだけで槍の軌道を逸らすことは出来ない。

故に結城は、己のもう一つの武器を振り抜いた。

……足場が足りないなら、くれてやる！！

同じバックハンドの要領で、結城は長棍を振り下ろした。

跳ね上がる槍の軌道を覆い被さるようになり、長棍が蜻蛉切を強引に地面に叩きつける。

強く、硬い金属音が響く。

術式に加護によって、臂力は結城の方が勝っている。

急所狙いの一撃は封鎖され、そして、

「踏め！！」

反動で弾き返った長棍が、宗茂の足下へと届いた。  
それを、

「おおお  
」！

踏んだ。

否、蹴った。

再び現れた足場を、”神速”が踏破する。

しかし小さい角度を昇った長棍では、理想的な反力を与えることは出来ない。

だがそれでも、宗茂は強引に、容赦なく、全力を持って宙を駆けた。聖術契約書を限界まで消費し、足りない力を自らの技量で補う。

……耐えてくれ、我が身体よ！！

そして跳んだ。

足の腱と筋肉を磨耗し、しかし己の字名に恥じない速度を持って、宗茂は確かに東国無双を抜いた。

……行ける！

衝き抜けた先は本多・忠勝の右横。



着地した宗茂は、そのまま刃を背後に振り抜いた。  
両手と武器を封じられた、忠勝の最初で最後の無防備な死角。  
その横腹を、今度こそ”悲嘆の怠惰”の刃が削ぎ落とす。  
しかし次の瞬間、結城と宗茂は声を聞いた。

「結べ、蜻蛉切」

/  
/

目の前から確かに伝わる声に、しかし宗茂は声の主を確認できなかった。

……どうやって!?

突如視界から消えた忠勝の動きに、当然の疑問を浮かべるが、このときの宗茂の判断は奇跡的に正解だったであろう。

彼は振り向いた。

気配がする左方向。

新名古屋城のある北側へと向けて、宗茂は上半身を向けた。  
そしてその先には、両断した蜻蛉切を繋ぎ合せた本多・忠勝が、そ

の穂先をこちらに向けて突撃してくる姿があった。

瞬時に位置を変換した忠勝の動きを、結城も宗茂も確認できていない。

否、理屈は解る。

蜻蛉切の上位駆動を使用して、方角の事象を割断したのだ。

しかし、そのような手法に感心する余裕など、今の二人にはない。何故なら、

「その距離を、待っていた!!!」

若者二人が、同時に叫ぶ。

蜻蛉切の割断射程は三十メートル。

北の方角を割ったことによって十五メートル分の距離を開いたが、今はそれで十分だ。

宗茂の目の前で、結城が背を見せながら忠勝に立ちふさがる。

最後の鉄壁。

薄れ行く意識に鞭を入れ、結城は”一瞬の時間稼ぎ”に乗り出す。

しかしその弱弱い姿に、忠勝は容赦なく吠える。

「近接武術師」を映せば、決め手でなくても二人同時に結べるぞ  
!!!」

蜻蛉切の穂先には、既に表示棒が展開されている。

数瞬の後に走るであろう割断の力に、若き武者二人は怯まない。

東国無双上等。

実力の差は歴然だ。

だから結城は前に出た、自分から割断の力を受け止めるかのように。そして宗茂は構えた、遠ざかる背中を無駄にしないように。

やがてその瞬間。

激突した三者の意志の果てに、三河決戦の勝負がついた。

## 第八話〈三河決戦〉（後書き）

何やら説明不足がある第八話、如何でしょうか？ クロです。いや、本当に済みませぬね、勝負の行く末を次回に持ち越しして。鹿角さんの判断も次回で明らかになるので、我慢してください。あと、次回ちよつとだけストーリーを飛ばしますので、心の準備をしてください。

なあと、肝心な部分はちゃんと書きますよ。

最後に、何時も誤字を指摘してくれました皆さん、有り難うです。原作基準で、中々オリジナリティに欠ける本作ですが、クロはちゃんとストーリー考えていますよ？ だから暖かい目で見守ってください。

繰り返して五月蠅いですが、皆の感想と応援が、クロの確かな力です。

P・S：術式や武器解放している割に結城が苦戦しているのは仕様です。まだ本気ではありません（汗）。

## 第九話　忘れられた思い出

虚空を引き裂くように、忠勝は蜻蛉切を振り抜いた。目の前、自分に突貫してくるように立ちふさがるのは結城・秀康。運命の悪戯で、袂を分かつことしか出来なかった君主の息子に、しかし忠勝は感傷を捨てて斬り込む。

自分が忠義を誓ったのは三河君主である松平・元信。例え相手が誰であろうと、それに仇名す存在は副将である己が排除する。

蜻蛉切の刃に載せた名は”ストライクフオーサー近接武術師”。個体を特定する精度に欠けるが、それでも相手二人の戦闘能力を奪うには事足りる。

「悪く思つなよ、　　結べー!!」

割断の力が走る。

個人の武を示す名が両断され、その先にある結城と宗茂を切り伏せる。

だがそれと同時に、結城が十束剣を掲げた。

袈裟斬りの構えから振り被ったそれは次の瞬間、蜻蛉切を振るう忠勝へと一直線に投げ出される。

……投擲で攻撃を妨害する気か!?　しかし無駄だ!!

剣は矢のように飛び、十メートルの距離を一気に縮ませる。

漆黒の先端は蜻蛉切の穂先と激突するような軌道を取り、二つの刃が交差しようとしたその時。

「 !? 」

十束剣が、空中で止まった。

時間が止まったかのように、剣は蜻蛉切と繋がるように直線を結ぶ。そして忠勝は聞いた。

静止した長剣の向こうに作られた声を。

それは、

「 軋み啼け、

恠鳥<sup>ぬえ</sup> 」

／  
／

光が宿った。

捻巻く螺旋状の、金色の光を発する表示枠が展開されると同時に、鳥の啼き声が三河に響いた。

低く、翳む、軋る、寂しげに、悲哀を嘆くような声は得体が知れず、狂気を掻きたてる。” 正体不明 ” は秩序あるものを錯乱させる。

黒く鋭い鳥の目<sup>刀身</sup>が映す。

銀色の、名と在り方を結ぶもう一枚の鏡に、鳥は醜い己の姿を見た。悲鳴が轟く。

自虐で、現実逃避な、醜い自分を許容する現実を否定するために、鳥が叫んだ。

そして醜い鳥を映した銀色の鏡もまた、その狂気に共感する。

軋む。

名を結ぶ力が、錯乱の狂気によってその在り方を維持できない。

どうやって名を結ぶのか、どうやって結んだ名を斬るのか、己の役割を正しく認知出来ない。

黒く鋭い恠鳥の儂い悲鳴に、蜻蛉切の割断が”軋み崩れる”。

/  
/

「これは……!?!」

忠勝の目の前で、蜻蛉切の刃から光が散った。

既に発動状態に入った割断能力が、その効果を強引に”自壊”させられたのだ。

理解できないその現象に、忠勝はその原因である前方を見据えた。

目の前に立つのは結城、しかしその手に持つのは長棍でも十束剣でもない。

両の腕に握られた武器は細長く、黒い金属で構築されたそれは、全長三メートルにも及ぶ長い槍だ。長棍の先端と、剣の柄尻を繋ぎ合せて出来た、大太刀とも呼べる長物が携えられている。

繋ぎ目なく、接続部分はまるで強引に捻じ絞られ、溶接されたかのように完全に一体化しており、槍全体が青白い流体光を帯びている。

「此処まで来て、隠し芸を持っていたとは……、味のある真似をしてくれるなあ!! 若!!!」

「J u d . . . . . ! ! !」

種を明かす必要は無い。

結城はそんなロマンチストではないため、このような方法も出来れば使いたくはなかった。

だから言葉を交わさない。

残るは、背後で膨張する気配に全てを託すしかない。

結城の意識は、既に途切れかかっているのだから。

「撃て……、立花……!!」



忠勝の視線の先。

結城の向こうで、砲撃の準備が整った。

決め手を封鎖されたことで、忠勝は”悲嘆の怠惰” 超過駆動を発動させる猶予を与えてしまった。

片膝を地面につき、両腕で剣砲を構えた宗茂は、展開された仮想砲塔を新名古屋城の奥にある統括炉へと照準を合わせる。

「勝負、あります！！」

既にトリガーは引かれた。

掻き篦りの収束は二秒後に発生し、定められた射線上にある空間を根こそぎ削ぎ落とす。

砲撃が成立される結果は不変のもの。ゆえに忠勝は、構えた武器を下ろした。

その表情は残念そうであり、しかし何処か嬉しそうでもあった。だが、

「まったく……、最後の最後に、若い奴に気を取られるとは、歳は取りたくねえものだなあ。……おい、鹿角。なんとかかしてやれ」

最後の一言に、変化が起きた。轟音と共に、砲撃が撃たれた。

結城の背後。

頭上を通り越す掻き篁りの群が、新名古屋城に向けて突き進む。

しかし、その角度は予想より高く、砲撃は統括炉の上、外部隔壁ブ  
ロツクを掠め取る軌道に収まった。

「「!!」」

その有り得ないミスに、結城は背後を振り返る。  
そしてその先で結城が見たのは。

……坂!?

宗茂の足下。

地面を構築する構造材が、バネの様に跳ね上がり、角度の高い斜面  
を作り上げたのだ。

盛り上がった地面は砲撃の角度を強引に上げ、それでも飽きること  
なく、その斜面を登らせる。

そしてその変化をもたらしたのは、宗茂の右側。

庁内川を渡る橋の脇にいた自動人形・鹿角が、残された左手を掲げ  
ている。

重力制御機能をフル稼働させて、彼女は己の持てる限界を発揮した。

「砲撃が……」

そして、掻き篁りの砲撃が翳む。

適応力50%の出力は、射角を修正することを赦さずに、徐々にその効力を減衰していく。

「これで本当に、終わりです……」

鹿角の宣告が響く。

その声と共に、結城と宗茂の敗北が決まった。

/  
/

まだだ  
！！

心の中でそう叫ぶ。

諦めきれない、意地っ張りみたいな闘争心を燃え上がらせ、オレは無理にでも身体を動かした。

「破壊するだけなら、オレにも手はある！！……軋み啼け！ぬ……」

膝が崩れる。

つんのめるように前へと倒れ伏せる。

おかしい。

倒れたというのに、倒れたという実感も感触も無い。

動いている筈なのに、現実の身体はちつとも脳からの命令を聞いてくれない。

そのくせ、

「もう十分だ、若。……これ以上の戦いは、寂しいだけだ……」

耳だけは、何時通りに言葉を拾う。

十分？ 何が十分なんだ？

オレはまだ何もやっていない。

地脈炉の破壊、元信の確保、武蔵への帰還、明日のトーリの告白、ありふれた日常への、皆との悪ふざけ。

オレはまだ何もやっていない！！ その何が十分だと言っただ！！

「若。形は違えど、若が殿のために戦ってくれたことは、我も嬉しい限りだ。だからもう、いいのだ。……死に行く運命であるうとも、最後の最後に、若が折れなかったことが、我と殿への一の手向けだ。若が命を尽くすべき相手は、殿ではない」

視界を誰かが遮る。

おぼろげな視界では確認できないが、そこを退け。

オレはアイツを、元信を赦さない。

訳の解らないクソつたれ、子を捨てた屑、無責任で自分勝手な独善者。

衣服のセンスが最悪で、最後の最後に何も説明しないふざけた大馬

鹿野郎。

しかしそれでも、

「やめましょう、結城君。……私達の負けです。」

それでも、アイツはオレの親父で、最後の家族なんだ。

こんなところで、息子を残して死ぬなんて、正しい訳が無い。

どうしてこうなってしまった？

オレを捨てて、ホライゾンを死なせて、大罪武装や三河の消滅、どれもこれも、オレには理解できない。

末世や世界がどうのこうの前に、オレはただ、普通でありたかったのに……。

親や兄弟、友人がいて、そんなありふれた日常を、どうしてよりもよってオレの生みの親が奪っていく……んだ……。

「結城……君？ ……結城君！？ ……」

聴覚までもが遠退く。

意識は思いのほか早く闇に溶け込み、オレは残り滓程度の理性で嘆く。

何度も自分の予想を裏切る心身の限界に、結城・秀康という人間はたった今崩れた。

結局堪えられなかった、涙と血の滴を落としながら。

/  
/

その後の結末は、やはり変えられない運命であった。

地脈統括炉は予定通り暴走し、三河は世界中の人々に見届けられて消滅した。

決戦の殿を務めた東国無双本多・忠勝と、自動人形・鹿角の二人は、主君である松平・元信と運命を共にし、その生涯と最後の忠義に終止符を打つ。

そして敗北を喫した聖連勢代表である立花・宗茂は、重傷を負って気絶した結城・秀康を連れて三河から脱出。怪我の治療と避難のために、二人は三征西班牙の警護艦に回収されて一般陸港へと撤退。更に時を同じくして、武蔵では聖連代表である教皇総長の命により、大罪武装”焦がれの全域”である自動人形P-01sことホライゾン・アリアダストの回収が行われた。

武装所持を禁じられた武蔵には抵抗する手段がなく、尚且つ今回の事件によってもたらされた被害に対して、聖連は極東への責任追及を申し出た。

何も変えられなかった運命に、しかしそれでも抗う影がある。

三河君主の娘、ホライゾン・アリアダストと同化した大罪武装の回収には、三征西班牙の審問艦に搭載された”刑場”によって彼女を分解して取り出すことだが、それは本人の自害を意味する。

だが極東継承権第一位は、今までその身分を隠されていた彼女の兄、結城・秀康にあるため、聖連は政治的要因に基づき、治療中の彼が目醒ますまでの猶予を極東に与えることとなる。

ホライゾンの自害は本人達の予想できない場所で回避され、しかしその危機は消えていない。

舞台は移る。

結城とホライゾン。武蔵と聖連。

三河消滅を迎えた世界は、しかし確かに本来の運命とは外れた道を辿っていた。

/  
/

十二年前……

よつきした  
夜月下の枝垂桜。

儂く、美しく咲き誇る薄紅色の下で、長い黒髪が蹲っている。

村山表層部にある公園の隅っこに、幼い少年は体育座りで、公園の中央で遊んでいる同年代の子供達を見ていた。

腰まで伸びた濡鴉の髪、少女のような穏和な容姿、蒼穹のような瞳。カーキ色の、子供用のダツフルコートを身に纏っているのは、幼き日の結城。

松平でも羽柴でもない、三つ目の姓を与えられた少年は、夜の片隅に身を寄せる。

目の前では、子供達が笑顔で遊んでいる。

照明が照らされた公園で、彼らは輪を組んで、聞きなれた童謡を唄いながら楽しそうにハシャいでいた。

今日は祭の日だから、夜になっても子供達は家に帰らない。

大人達も商店街や屋台に陣取り、賑やかな町の雰囲気は昼と夜を倒錯したかのよう。

皆笑顔で、喜んでいるのに、しかし結城はちつとも楽しくない。

自分はこの武蔵に来て日が浅く、新しい環境に面白みを見つける余



裕などない。

子供は好奇心旺盛で、何事にも触れたがるが、結城はそんな当たり前な感傷はなかった。

……勝……、利、まっちゃん……

考えているのは、昔の仲間達だ。

結城は引越しが嫌いだ。

自分はこの国の人間ではなく、今籍を置いている家も、自分の本当の家ではない。

大人の都合で無理やり押し入れられた、仮初の屋根裏だ。

そしてその前にいた場所も、やはり自分の家ではなかった。解っている。

結城は自分が誰なのか、幼いながらも理解している。

立場も、使命も、理由も。

しかし解っているからこそ、子供の純粹さは納得出来ていないのだ。

……ここは、わたしの居場所じゃない……

自分には居場所が無い。

実の親に捨てられ、育ててくれた仲間達も、結局は国の都合に抗えずに自分を売った。

そして今の家は好きではなく、結城家の者達も、陰鬱な自分を毛嫌いして、武蔵へと置いていった。

何れ籍を外され、誰にも必要とされない、ただの結城・秀康に成り下がるだろうということを、幼い結城は気づいていた。

そして目の前で、そんな自分を嘲笑つかのように、子供達は楽しく遊ぶ。

その笑顔が眩しくて、ありふれた日常を見せびらかされて、結城はそれの何処が面白いのか、全く理解できない。

形のいい眉が浅く寄せられ、白く柔らかい頬が不機嫌に膨れ上がる。そんなに不愉快なら、別の場所へでも行けばいいというのに、しかし結城には行く当てが無い。

武蔵では一人暮らしで、宛がわれた住家に帰っても、結局一人だ。

世話役の自動人形が一人いるが、彼女も仕事で忙しくて、たまにか顔を出してくれない。

そんな退屈や寂しさを味わうよりは、自虐的な不機嫌の方がまだマシだ。

何より結城は、子供にとって無駄に広い部屋に引き篋もることによって、心が麻痺して行くのが怖い。

そうなってしまうたら、何れ自分は何も感じられなくなり、自分が自分ではなくなるかもしれないのだ。

……嫌いです……こんなところにいたくない……

武蔵にいたくない。

結城家にもいたくない。

P・A・ODAに帰りたい。

しかしそうなったら、勝達が怒るだろう。

強く、楽しく、好きに生きる。

そう教えてくれた大きな鬼さんは、きつと断腸の思いで自分を外に出したのだ。

自分の我侷である赤色の大地に帰ったら、きっと彼らは祝福してくれない。

しかし耐えられない。

結城家も、武蔵も、誰も自分を相手にしてくれないし、この痛みに気づいてくれない。

教導院でも、結城は親がないことで有名な子だ。

そのことだからかわれたこともあるし、虐められたこともある。

しかし気性の荒い自分は丁寧な口調の割に手足が早く、直ぐに周りとう喧嘩することになった。

そのせいで友達はおらず、結城はますますこの船が嫌いになっていった。

もう自分は姫ではない。

羽柴の襲名者候補でもなければ、この身に宿る血の継承者でもない。空っぽな己を、なるほど親が捨てたがるわけだ。

面白みが無く、性格も良い方ではない。

武芸の心得はあるが、護身程度だ。勉強も普通で、それも好きではない。子供は遊び盛りだが、結城は一人でする勉強が嫌いだけだ。文字列に向かい合っても、心の苛立ちは消えてくれないばかりか、余計に腹が立つ一方だ。

自分で考えても、自分のことが好きになれない。

そんな結城・秀康を、他の誰が好きになれる？

子供である自分は強くないし、日常も楽しくない、住む場所も好きになれないから、勝との約束も果たせていない。

そう考えているうちに、目の前で動きがあった。

子供達の親が、子を連れて帰ろうとしているのだ。

祭は楽しかったか、帰ってお風呂に入ろう、夜食でも食べる？ などという家族としてのありふれた会話。そんな”普通”なことすら、

自分には話せる相手がいない。  
なんとという空虚。

言葉に出来ない寂しさと共に、結城は初めて、顔も知らない生みの親を恨んだ。

どうして自分を捨てたのか。

どうして会いに来てくれないのか。

どうして何も伝えてくれないのか。

小さな心は孤独に耐え切れず、自然と青い瞳から、涙が溢れた。  
しかし泣けない。

大きな声で泣きたくても、声が出ない。

泣くことすら上手く出来ない自分が、更に嫌いになる。

……もう……どうでもいいのです……

一人公園に残され、何もかも諦めようとした。

両の膝に顔を埋め、結城は周囲から心を閉ざそうとする。  
しかし、

「おやおや、こんなところでどうしたのかな？ 少年。悩み事があるなら、先生に言ってごらん」

頭上から聞こえた大人の声に、結城は顔を上げた。  
そして目の前に、一人の男性が立っている。

「…………誰？」

眉尻に涙を浮かべ、結城は目の前の人物を見た。

長めの黒髪に丸縁眼鏡、ちよつとボロついた白衣と学帽。

何処か場違いな衣装を着た大人の男性に、結城は首を傾げた。

「先生は先生だよ。それより少年、君の名前を聞いても良いかな？」

「結城……、  
結城・秀康」

先生と自称する男の質問に、結城は答えた。

面白みの無い、好きではない、本当ではない自分の名前。

口にするのも嫌いなのに、何故か結城は教えてしまった。

更に、

「そうか、秀康君か、…………良い名前だね」

「」

否定していた自分の名前を、この人は褒めてくれた。  
そんなことを言われたことは一度も無く、結城は初めて、この武蔵で嫌いになれないものを見つけた気がする。  
そのことにどう反応して良いか解らず、結城が視線を逸らす。  
恥ずかしいのか、照れているのか、頬が少しだけ赤い。

「で？ 秀康君はどうして、ここで泣いているのかな？」

先生が傍に寄る。

視線を低くするように、彼は同じ体育座りで結城の横に座った。  
そのことが妙に居心地が悪くて、結城は少しだけ反対側に身体をずらす。

しかし先生は御構い無しに、顔を近づかせながら問うた。

「ひょっとして、 秀康君は友達がないのかな？」

「っ、そ、そうじゃないです！」

思わず否定したが、事実だ。

でも自分は意地っ張りで、負けず嫌いで、弱い自分を受け入れよう  
としない。

しかし泣いていた理由はそうじゃなくて、結城はただ、必要とされ  
ない、何も無い自分に苛立っていただけだ。

「そっか、それは良かった」

先生は頷いた。

そのことに、結城は胸がチクリと痛む。

嘘をついてしまったことと、自分から苦悩を隠してしまったことに  
良心が苛む。

益体のない見栄を張って、それで後悔した。

結城は、一秒前の自分を殺したい気分になった。  
そして、

「皆帰っていったけど、秀康君は家に帰らないのかい？ 親が心配  
するでしょっ？」

「……」

その言葉に、結城は俯いた。  
どう答えて良いのか解らず、結城は少しの間、何も言わずに地面を見た。

そのことに先生は詮索せず、そして開いた沈黙に耐えられないのか、結城はおずおずと声を出した。

「わ、わたし……、一人暮らしなんです、  
親はいません……」

周りは知っているが、自分から話したことは一度も無い。

その事実を、結城は初めて出会った大人に告白した。

本当は、親ならいる。

会ったことがないだけだ。

何処にいるのかも知っているが、顔を合わせることは叶わない。

そのことが結城を苦しめ、彼は親がいないということで無理矢理自分を納得させた。

「そうか……、大変だったね。  
寂しかっただろう?」

そして、その言葉に、結城は先生を見た。

自分の苦しみを言い当てた大人に、結城は不思議なものを見るような目をした。

きつと、今の自分はとてもおかしい顔をしているだろう。



でも先生は笑わずに、その大きな手を結城の頭に乘せた。  
ザラザラとした、大人の男性ならではの、無骨で安心感のある感  
触に、結城は止まっていた涙が再び地に落ちた。

「へ……？」

頬を伝う暖かい感触に、結城はどうして？ と思った。  
涙が止まらない。

泣きたくないのに、上手く泣けないのに、それでも涙が溢れる。  
そのことに、先生は結城の身体を、優しく引き寄せた。

「泣いて良いんだよ？ 一人ぼつちは、辛いよね？ ……そ  
れで耐え切れなかつたら、思いつき泣けば良い。そうでもしな  
いと、私達は何時か泣けなくなる。そんな人間らしい感情を捨てて生  
きるの、きつと楽しくないから」

結城は、零れ落ちる涙も拭わずに、ただ先生の言葉を聞いていた。  
この先、自分の大切な何かを支える、真摯な心音を。

「そして泣き止んだら、考えよう。」

もう二度と、同じことで

泣かないように、そうするためにはどうするかを。　　楽しいこと、好きなことを探しに行こう。趣味でもいい、勉強でもいい、スポーツでもいい、友達でもいい。だって何もしいよりは、ずっとマシだから」

結城はこの時、理解した。

ああ、そうか……、と。

自分は無いことばかりを考えていた。

無いことに悔やんで、其処に転がっている、手を伸ばせば手に入れられる幸福を見失った。

そしてそのことに気づかず、ずっと立ち止まって、ただの結城・秀康に妥協してしまったのだと。

「強く、楽に、好きに生きよう。　　それは目的地じゃなくて、そうありたいと願う、何よりも大切な、君の支えだったはずだ」

大好きな仲間達が示してくれた、素敵な一言。  
それがまた一度、見えた気がした。  
忘れようとしたその温もりに、

「君は一人じゃない、君が望むものは、ちゃんと君と共にあるよ、秀康」

結城は泣いた。  
大声を出して、生まれたばかりの赤子のように、先生の胸父親の中で泣き続けた。

/  
/

「おや？ 目が覚めましたか」

目覚めて聞こえた第一声は、若い少女の声だ。  
見知らぬ天井。  
見覚えの無い白い空間の中で、結城は病室のベッドの上で覚醒した。

「ここは……？」

「T e s :、三河一般陸港に停泊している、三征西班牙のクラーケン級審問艦内の医務室です。御身体の調子はどうですか？」

ベッドの横、自分の右側から響く少女の声に、結城は未だに朦朧とした意識を奮い立たせる。

一体何が起きているのか、どうして自分は此処にいるのか、それを考えて、そして、

……オレは……夢を見て……三河……地脈炉……、元信……っ！！

跳ね上がるように上半身を起こす。

その動きに、傍にいる少女はビックリとしたが、直ぐに結城の異変に気づいた。

それは、

「三河は……、元信は……？ どうしてオレは此処にいるんだ……」

「Tes、  
現在時刻は夜中の三時。今から七時間前に、三河は地脈炉暴走によって消滅。その黒幕である松平・元信公は、配下の本多・忠勝様と自動人形・鹿角と共に……」

少女の言葉が終わるより早く、結城は動いた。  
病み上がりの身体を奮わせ。

目も翳む速度で少女の細い首を掴んだ。

その表情は剣呑というよりも、悪鬼のように見えた。

「……嘘だ!!」

「ん……。本当……です……。三河は消えました……。貴方の……。御父上も……」

苦悶に満ちた、少女の声が響く。

その、余りにも実感の無い事実には、結城は先ほどの夢を思い出した。幼かった、あの日の公園。

孤独に苛まれていた自分を支えてくれた人は、もうこの世にはいない。

そしてそのことを前にして、自分は何も出来ないどころか、無様にも生き延びてしまった。

そのことが、結城の理性を軋ませる。

「あ……あああああああ

!!!!」

吠えるような絶叫。

断末魔のような悲鳴と共に、結城は両手で頭を抱えた。

拘束を解かれた少女は咳き込むが、自分より結城の方がよっぽど重

症のようで、彼女はナースコールを鳴らす。  
そして、

「落ち着いてください、結城様！」

「違う！ …… そんな筈じゃない！！ オレは……、生きて欲しかった！！ アイツに生きて欲しかったんだ！！」

錯乱。

外界から己を閉ざす結城に、少女は眉を寄せる。

この世で最後の肉親を失ったショックが、少年の心を壊す。

その余りにも惨い姿に、少女は自分らしくも無い大声を上げた。

「目を醒ましてください！！」

人工物である、鈍重な己の両手で結城をベッドに抑えつける。

少女は結城と視線を合わせ、その心を逃がさないように言葉を紡ぐ。

「自分を、これ以上壊さないで下さい。 …… 結城様は死力を尽くし

ました。その結果がアレです。変えられなかった運命で自分を傷つけるのは、結城様を大事にしてきた人達への侮辱です。結城様には、まだ守るべきものがあるでしょう?」

少女の声に、結城は力を抜いた。  
そして今までのことが、鮮明に頭に浮かぶ。

己の出自。

P・A・O・D・A。

勝との約束。

結城家。

武蔵。

梅組の仲間達。

ホライゾンの死。

三河の消滅。

松平・元信。

ああ、そうだ。

自分はまた何も守れなかった、何も果たせなかった。

ホライゾンの死に囚われて、色々なものを捨ててきた。

勝達との絆。

仲間達との絆。

自分の孤独を棚上げにして、不幸に浸っていた。

親に見捨てられたことに固執し、これまで築き上げた日常を手放し、

……君は一人じゃない、君が望むものは、ちゃんと君と共にあるよ、  
秀康。

確かに残された、父の思いすらも忘れてしまった。

「っ……、オレは、                    なんて馬鹿な奴だ……！」

まだ、残されていた。

自分は一人ではないと、それ以前に、自分を必要としてくれる人達の顔を、結城は憶えている。

……皆。

帰りたい。

あの船へ。

自分が守りたいと願った、温もりの場所に。

/  
/

……もう、大丈夫でしょうね。



ベッドに抑えていた少年の表情を確かめ、両の義腕を持った少女、立花・？は心を撫で下ろした。

三河が消滅し、自分の夫である宗茂が無事帰還して来たのはいいが、通神で緊急治療の準備を要請してきたのを聞いたときは気絶する思いだった。

結局、治療を必要としたのは宗茂ではなく、彼が抱え帰ってきた極東の生徒の方だったので、？は不謹慎ながらもほっとした。宗茂に万が一のことがあつたら殉死覚悟をしていたのだから、真に心臓に悪い。

とは言つても、ERに投げ込んだ少年の容態は最悪であり、三時間に渡る手術と輸血の結果。御覧の通り、一命を取りとめた。

……どちらかと言えば、こちらに責任がありますからね。

聞いたところ、”悲嘆の怠惰”の掻き筆りの砲撃、その先発である削ぎ落としの一つを喰らって負傷したのが原因だ。そのことについて？は一時間前に超説教したからいいとして、同時に目の前にいる少年の強靱な生命力にも感嘆した。

……医者によると、出血多量でショック死するところでしたが、流石は武蔵最強と言ったところですか。

武蔵の臨時相談役はちょっとした有名人だが、今回の事件で世界的に注目を浴びるだろう。

松平家の跡取り、P・A・ODAの元襲名者候補。

その事実は、否応なく聖連の警戒と注意を引きつける。

先ほどの不安定な精神といい、この男にはこれから、過酷な道が待っているに違いない。

下手をすれば、自分も彼の敵に回る事になるのだ。

彼の境遇を鑑みれば、同情の余地はあるが、?としてはどうにも出れない。

一個人の力など、高が知れているからだ。

……つと、そろそろ身体を退きませんかといけませんね。

自分の義腕は軽量装甲で出来ているが、それでも重量はある。

結城が思いのほか馬鹿力だったため、つい両手で抑えてしまった。

何より今の体勢を誰かに見させるわけにもいかない。

結城の両肩を抑えた?は彼に跨り、四つん這いの姿勢で身体を乗せている。

傍から見れば、色々と誤解されてしまう状態なため、何やら先ほどから結城の視線が左右に泳いでいるのも気になる。

何処か体調が優れないのだろうか?

「どうかしましたか? さっきからキョロキョロと見回して」

「え、いや……その……、この体勢、超目のやり場に困るんだけど……」

……はい？

言葉に、？は視線をやや下に移す。

そこにあるのは何処に出しても恥ずかしくない二つの巨砲であり、大艦巨砲主義である紳士達には有り難い御褒美の逸品である。つまりそれは自分のオツパイ。極東語で訛るのならオパーイか。とにかく、結城の顔を引き攣った告白の意味に気付いた？は、普段彼女が見せない羞恥心溢れる赤面を晒し、身体を素早く退かそうとしたが、

「？さん？ 結城君の様子はどうですか？ 医務係の生徒を連れて

……来まし……た……よ？」

何の前触れもなく部屋に入ってきた宗茂と医務係の女生徒の姿に、？は全身が硬直した。

腹の底が冷え切ったように冷たく、そして重い。

自覚できるほどに嫌な汗が噴出し、？は笑顔のまま扉の方で立って動かない宗茂と視線を合わせる。

……く、空気が滅茶苦茶悪いです！ 宗茂様、黙ってないで下さい！ 沈黙が痛いです！！

心の中で叫びながら、しかし体勢を移すことを完璧に忘れていた立花嫁。

不用心め、これでは誰が見ても立派な不倫と逢引だ。しかし目の前の誤解を指摘する者はこの場に居らず、

「お、お邪魔しましたー……」

チヨモランマ級の氷点下に耐えられなかった医務係の退室する声に、宗茂が笑顔のまま気絶した。

「宗茂様！！？」

時刻は夜中の三時十五分。  
賑やかな目覚めと共に、結城の新たな出会いと運命が始まった。

## 第九話く忘れられた思い出く（後書き）

ホカホカで短めの第九話です。クロです。

寧ろ今まで長かった分、今回は結城の昔話と三河編の一段落として締め上げました。

そして何やら最近、感想コメントが少なくなってきた（汗。

うおー！！ それでもオレは書き続けるぜー！！

そして手に入れた原作4巻（中）。

でも今度は（下）の方が手に入らない（涙目。

何方か海外通販で境ホラ購入出来る方法知りませんか？

クロ、台湾なので……。

## 第十話〜お帰りなさい〜

朝の七時過ぎ。

太陽が顔を覗かせた空の下で、結城は強い風が吹く甲板の上にいた。蒼穹の青、護衛艦の紅白、視界に広がる山溪と、空を上る赤い光の柱。

湿気が満ちた空気は自然を潤い、しかし人の肌に破壊の余波を想起させる冷やややかさを帯びている。

遠い東を見る結城の顔は、儚さだけを残している。

数時間前にあつた三河の町の光景は存在しない。

地脈炉暴走の残滓である赤い地脈光を前に、結城は残酷な現実を思い知らされ、そして実感した。

父は死んだ、そして自分は失敗した。

変えたくて仕方が無かった運命は、その尽力を嘲笑うかのように予定調和を突き進んだ。

その代償は大きく。今この瞬間、自分の帰るべき場所が失われようとしている。

だがそんな逆境の中でも、結城が手にしたものがある。

ホライゾンは、まだ生きている。

肉体は死んだ、しかしその魂は自動人形の身体に宿っている。

今までの子の死に対する無力感に苛まされていた自分に、挽回のチャンスが与えられた。

……泣き止んだら、考えよう。もう二度と、同じことで泣か

ないように、そうするためにはどうするかを。

父との思い出を振り返り、結城は静かに目を閉じた。  
自分は既に泣いた。泣けないほどまでに泣いた。  
だからこれから先はリベンジだ。  
鋼の心を業火で打ち鳴らし、結城は氷と熱で己を鍛え上げる。

……強く、楽に、好きに生きよう。      それは目的地じゃなくて、  
そうありたいと願う、何よりも大切な、君の支えだったはずだ。

失った絆と約束。

失った願いと祝福。

もう二度と、手放したりはしない。

見失っていた自分を取り戻し、見落としていた輝きを拾い上げる。

……君は一人じゃない。      君が望むものは、ちゃんと君と共に  
あるよ、秀康。

自分が望んだもの。それは夢だ。

そうありたいと思う、”継続”の幻想。

儂く、想像上の、叶わない夢想。

しかしそれでいい。

夢は叶わないからこそ価値があり、現実的ではないからこそ、追い  
求める意義がある。

儂いから思い続ける、なんとも素晴らしい一途な感情だ。

それが再び、この胸に宿り、確かな力として、結城・秀康を構築す

る。  
更に、

「……………」ねりこみ練込」

言葉と共に、仮想の力を現実として実感する。

肺に新鮮な空気を吸い込み、硬質な地面を踏みしめる感触を確かめる。

肌を優しく撫でる空気。

鼻をくすぐる環境の香り。

山の向こうから覗かせる、日の出の温度。

物音、気配、確かな存在達の自己宣告。

目を閉じてても、身体が感じた情報が自然と正しい映像を視界に映す。

そしてそれを基準に、五感を肉体の外側へと延長させる。

「……………」地脈、接続」

合一を果たす。

エーテル

A T E L L 単位の流体を媒介に、己の存在を環境と同調させる。

矛盾を許容する物質が、”個”と”全”の一体化を可能とし、



「  
」

地脈の経路から、流体を吸収する。

特殊な呼吸方と瞑想から、より効率良く内燃拝気を蓄積する技法。  
圧縮された流体光は身体の表面に薄い膜を張り、無駄にATELL  
を地脈に逃さないために、”内側”へとその光を浸透させている。

英気を養い、力を溜め込む。

三河の大地は消えたが、その土地に宿る地脈は死んでいない。

その強い生命力を受け継ぐかのように、結城はその恩恵を身に宿し  
て再起した。

/  
/

「そろそろ出発ですよ、結城君」

朝の精神統一を終え、護衛艦の出入り口へと渡ったオレの前にそい  
つ等はいた。

短い金髪、爽やかな表情。

両の義腕、愛想のない表情。

極端な対比を持つ組み合わせは、立花夫婦だ。

二人の姿を確認し、オレは肩を軽く竦めた。

これから武蔵に帰る。連中は関所までの護衛だそうだ。

「物好きな奴らだな、一人で帰れるのに」

「そもいきません。結城様は三征西班牙（うち）が招き入れた客人ですので、帰国までの安全は我々が保障しないといけません」

立花嫁の言うことは理解している。しかし本当の事を言うと、それだけではない筈だ。

昨夜の事件で、オレの正体が世間にバレた。

極東継承権第一位の肩書きは聖連にとってイレギュラーであり、しかし新名古屋城の暴走に、三河以外の極東国家が関与していないのは調査済みだ。オレは昨夜の戦闘で聖連と協働したのが幸いし、怪我の治療も兼ねて三征西班牙では賓客扱いしている。

これは他の聖連国家からの干渉を避けるのと同時に、聖連と極東の両方に情報整理や精神的猶予を与える処置でもある。

何せ松平の跡取りなのだ、国家主権の行き先はオレかホライゾン。聖連としては何としてもこっちの身柄を確保したいのだろうけど、生憎力業では政治的に不利になる。

後の相対と会談の場に備えて、先ずはオレを武蔵に帰してから、後々三河消失についての責任を追及するのだそうだ。

「と言っている割には、強引にうちの妹を拉致したそうじゃないか」  
船を降りる。

現在オレ達が居る場所は、一般陸港より北にある西側広間。  
西の山岳回廊を壁としているこの地点は、貿易や輸送などに使われる聖連向けの交流場だ。

此処から更に北に進んだ処に関所が有り、今は其処が目的地である。

「現場の話だと、姫ホライゾン・アリアダストは自分の意志でK・P・A・Italiaの正規部隊と同行したそうですよ。余り棘々しい言葉遣いはよくないかと」

「継承権の主張に興味はないが、オレの優先順位が上だと言う状況に、部隊を武蔵に遣わせたのは性急過ぎないか？ 武蔵を手中に収めるのに、勢力も物量もある聖連がそんなに慌てる必要はないのだろう？ 捉えるのは大罪武装であるホライゾンと、国権を預かるオレの筈だ。      そうまでして、武蔵の技術が欲しいのかね？ 貧乏国家ども」

皮肉な発言に、二人は目を逸らした。

しかし今の言葉も、別段珍しい話ではない。

Tsirc教譜とムラサイ教譜は戒律に縛られているため、利子

収入による金融業が認められていない。極東ではそのような制限がないため、聖連諸国は各国にある極東居留地に銀行を作らせては、暫定支配と歴史再現に必要な金融をそれら銀行から借款している。その中でも三征西班牙は、レコンキスタの後に来る国家統制を目的に T s i r h c 教譜に縋り、その戒律に準じた純潔主義を掲げたことによつて、異端、異族である極東圏の金融活動を取れなくなった。既に三征西班牙は二度の破産宣告を行つており、グランド・フェリシスマ・アルマダ 期的に近い、アルマダ海戦”の歴史再現の準備として、本国で”超祝福艦隊”を建造中だそうだ。国庫が窮屈している状態での、戦争主力の開発。そこに投じられている資金は莫大であり、うちの守銭奴の見立てでは、三度目の破産宣告は近いだろう。

そうなれば三征西班牙は国民の生活と以後の国策や活動が息苦しくなり、内政問題に殆どの人力と資源を回すことになる。そうならないために、極東の完全支配と、優秀な貿易能力を持つ武蔵の航空船技術は必要なものだ。

そしてこれらの問題は三征西班牙のみならず、他の T s i r h c 教譜国家にも言えることである。

「教皇総長は御機嫌だろうな。三河に足を踏み入れた直後に、お宝が足下に転がってきたようなものだよ。　しかしホライゾンは大罪武装という名目で確保出来ても、武蔵の方はどうするんだ？」

「なんだか、既に聖連への対策を考えているような口振りですね？」

完全支配されること前提に事態が進んでいるのだ。そう考えるのは

妥当だろ。

誰も、自分の居場所が無くなるというのに、何も思わない筈がない。だったら黙っても身体に悪いだけだ。言いたいことは今の内に言わせて貰おう。

「ですが、仮に極東の完全支配を逃れても、姫ホライゾンの件は回避不可能なのは？ 武蔵は武装解除されている身ですから、大罪武装の奉還は確定事項です」

立花嫁が告げたことは確かだ。

例え完全支配に至らなくても、三河消失に対する責任問題はある。武蔵と大罪武装を明け渡し、しかしそれはホライゾンの死と、住民達の空を奪うのと同義だ。

元信おやしが明確な後継者を指名していないことが仇となり、聖連が自分の都合によってオレの継承権を無視することだあってある、なぜなら、

……オレは結城家に籍を入れている人間だ。そのことを突付いて、聖連がオレの継承権を無効にするかもしれない。

「面倒だ……」

気晴らしに散歩に出かけたら、運悪く交通事故に出会ったようなものだ。  
まさか久しぶりの三河来訪に運命を賭ける事になるとは、誰も思っ  
まい。

「まあ、考えても詮無きことですし、  
そろそろ見えてきまし  
たよ」

立花夫の声に、オレは前を見た。

西側広間を離れ、何時の間にか自分達は山道を歩いていた。  
左手側に聳える山岳回廊を見渡し、遠くにある関所の入り口を確認  
する。

もうじき武蔵だ。其処に着けば、この二人ともおさらばで、立場的  
には敵同士となるだろう。

そう考えると、不意に、昨夜のことを思い出す。

オレには見届けることが出来なかった、最後の三河のことを。

「本当に負けちまったんだな、オレ達……」

「……T e s .」

眩きに、立花夫が同意した。

あの場で、死力を尽くしてもなお届かなかった高みに、同じ思いはあるのだろうか。

オレはバトルマニアとか、そんなアグレッシブな人間ではないが、あれだけの努力を振り絞っても報われない結果というのは、流石に堪える。

そして思い知らされた。

世の中、本当にどうしようもないこともあるんだと。

「1対1タイムンだったら確実に負けてたよな。肩の傷や、鹿角さんの一押しを見抜けなかったのは単なる言い訳だ。東国無双は、伊達じゃなかった」

「こちらは死ぬほど動いていたのに、向こうは最後まで余裕でしたからね。それで最後に死を選ぶなんて、理解できません」

そうだろうな。

勝ち逃げされた気分だが、それ以上の勝負が出来なかったのはオレ達が未熟だったからだ。

それに、

「あの方の死は、あの方が自ら選んだものですよ、宗茂様。

宗茂様が何かを思うことは、忠勝様の選択を汚すことになります」

その通りだ。

最後の最後まで、あの人達は自分の生き方を歪めなかった。

地脈炉暴走が末世解決とどう結びつけるのかは疑問だが、それが命を懸けるに値することと判断したからこそ、本多・忠勝は戦い抜き、元信と鹿角さんは三河と運命を共にした。

強く、楽しく、好きに生きる。

オレ達がどうこう言える訳がない。

人生の最後まで、己の意志で決めたその生き様の輝きは、まだ生きている人達には計り知れないものだから。

「でも、無責任な話だよな。  
なんてよ……」

自分の子を置いて、勝手に死ぬ

上の空で呟いた言葉に、立花夫婦は応えない。

これだけは確かな真実であり、誰にも反論のしようがない、本人達だけの心音だから。

そして、

「結城様

実は、忠勝様から”蜻蛉切”を預かっております。



二代様にお渡しになられるといいかと」

その一言に、立花嫁はそれを持ち出した。

義腕に搭載された二奏空間から引き出したのは、黒い伸縮機構付きの柄と、蜻蛉型燃料メーターを本体に持った笹穂型の長槍。

両手で掲げられた蜻蛉切を前に、オレは軽く息を吸った。

極東一の武者の形見。

しかしそれを手にすることは、オレには出来ない。

負い目があるのだろう、そして己の未熟さにも。どちらにしても、オレから二代に手渡すことは、単なる慰めにしかない。あの娘も武者なら、武者として父の残したものを受け継ぎたい筈だ。だから、

「後で情報交換会があるそうじゃないか。そのときに、お前達からあの子に渡してくれないか？」

「いいのですか？ そうだと、色々と不都合があるかもしれませんよ？」

政治的な話だろう。  
だが構わない。

蜻蛉切を預かったのは立花であり、オレじゃないから。

ならばその義務は結城・秀康のものじゃないし、勝手に持ち越され

て良いものでもない。

しかし、同時に思う。あの生真面目で、責任感の強い侍少女のことだ。今回の事件に関して、彼女なりに思うところがあるなら、オレから伝えられることもあるんじゃないかと。だとしたら、

「情報交換会、色々大変そうだろうな……。でもまあ、オレはそれでも、あの子が蜻蛉切を”受け入れてくれる”と、そう信じているよ」

「本多・二代、ですか。……恨むでしょうかね、今回のことを」

誰をどう恨むとは言わない辺り、立花夫も悩んでいるのだろう。その答えは誰にも解らない、二代だけにあるものだ。オレか、それとも立花・宗茂か、或いはその両方が。どちらにしても、本多の力は受け継がれた。ならばそこだけは、不確かな運命に任せよう。

「恨まれても、仕方がないさ。それも戦乱の世で、肩に担うべきものなら、受け入れるしかない」

「随分と達観していますね。」

目が覚めたときは死人みたいだ



関所の入り口を目前に、少しだけ後ろを振り返る。

イチャつきながらも後を追ってくる立花夫婦に、どうしてこのような日常は普通に長続きしないのかと思う。

解っている。時代が、血に宿る宿命がそう赦さないのだ。

歴史を鑑みる。

今オレ達が辿っているのは、古く遠い昔に行われた、人という種が築き上げてきた因果だ。

人間は闘争の果てに進歩し、闘争の果てに潰えた。

それは天に昇り、再びこの神州の地に舞い降りたことでも変わらず、あまつさえそれらを他の異族達にも宿命付けた。

既知の輪廻は止まることを知らず、人という存在がいる限り、何度も繰り返す。

「……………」

嘆息を抱き、オレは足を止めた。

見上げる蒼穹は何時でも青く、しかし不変なものは何処にも無い。

年月はあらゆるものを磨耗し、そしてその果てに新たな何かを生み出す。

今眺めている空も、一秒前の空とは違うのだ。

その余りにも些細な変化に気づくのに、オレ達はどれだけの血肉を失わなければならない？

そして今この瞬間で、一人の少女がその命を散らそうとしている。

それをオレは、どうにかしたい。

変わり行く物事の中でも、変わらずに済むものだってある筈だ。

「結城様」

意識を呼び止める声に、オレは振り向く。

其処にいるのは、自分たちの日常を思い描く男女。

違う地平線に住む者、違う立場、違う身分。

何もかもが違うというのに、オレ達が望んだ平穏が同じなのは、なんと皮肉なことか。

そのような嘆きを抱くオレの前で、立花・？はあるものをオレに手渡した。

金属製の、細長い槍。

蜻蛉切よりも長い、黒い外殻に覆われたのは見慣れた相棒。

一メートル長の刀身を白い布で隠した恠鳥が、再びその主の下へと帰還した。

「関所を通れば武蔵です。

技術部の検査が終わりましたので、

ここでお返し致します」

「見た様子だと、何も手に入れていないようだな」

言葉に、立花夫婦が苦笑した。

二人は一度だけ恠鳥を見てから、こう言った。

「研究員達が頭を抱えていましたよ。                      どんなに調べても、中  
身が”解らない”と」

「頑丈で、よく切れる、そして長い三拍子以外の仕掛けは見当た  
らないそうです」

だろうな。

恠鳥はそういう理屈で出来ている。

オレの相棒は照れ屋だから、認めた相手以外に心は開かない。  
三征西班牙の解析器材は、コイツの目に合わなかったようだ。

「”正体不明”が売りだからな。                      こう見えても、試作品なん  
だけ、恠鳥は」

「そうなんですか？」

額きを一つ。

恠鳥はとある武装を参考に作られた模造品みたいなものだ。

製作元はP・A・ODAとIZUMOの協働だが、恠鳥は製作当時からそのスペックの殆どを変えていない。手の出しようがないブラツクボックスは、その翼を広げることには忌避しているからだ。

「準神格武装”恠鳥”。  
オレの昔の仲間から与えられた、置き見上げみたいなものさ」

言葉と共に、関所へと入る。

益体のない会話は此処まで。

その後のオレ達はそれぞれの居場所へと帰ることとなる。

何かの接点を交えることもなく、それが結城・秀康と立花夫婦の距離だと、互いがそう納得した。

後に歴史再現を基盤とした、切っても切れない腐れ縁になったのは、そのときの話だ。

今はワクワクビクビク、遅すぎた帰宅のついでに、仲間達に叱られてくるか。

/  
/

「行ってしまいましたね」

関所を通り、去り行く結城の背中を見届け、？はそう言った。彼女の隣りでは、宗茂が同じくその背後を見据えて頷く。

「どう思いますかね？　？さん。　　彼、敵になるとおもいますか？」

質問に、？は考えた。

昨夜、結城が目を醒ましたときのことを思い出す。

父の死と、己の無力感に絶望したあの時の彼の目には、色んなものが混じってあった。

何処までも広がる負の感情。

しかしその中で、確かな温もりを宿したことに、？は不思議な感覚を憶えた。

……気を失っている中で、彼は何を見たのでしょうか。

あの場にいた自分にも知りえない、結城・秀康を支えた最後の一柱。その無形の力に、？は懐かしいという感じをした。



「結城様は、昔の私に似てました。己を慎みない、抜き身の刃みた  
いな鋭さがありました。今でもそのような感覚はありますが

……」

その鋭さが、頼もしいと思えるのはどうしてか。

そして不意に、？は思い出した。

昨夜、自分から言い出した、彼への言葉を。

……自分を、これ以上壊さないで下さい。……結城様は死力を尽く  
しました。その結果がアレです。変えられなかった運命で自分を傷  
つけるのは、結城様を大事にしてきた人達への侮辱です。結  
城様には、まだ守るべきものがあるでしょう？

ああ、そうか。

彼は振り返ることを選んだのだ。

前に進む以前に、今までの自分を見捨てなかった人達に報えること  
を、彼は望んだのだ。  
だとしたら、

「彼は来ますよ、宗茂様。

姫ホライゾンを助けるために、私

達の敵になります」

自分は、なんとも厄介な獣を呼び覚ましてしまった。

そのことに呆れながらも、？は笑みを浮かべた。

そう言えば、宗茂と結ばれたときの自分も、あのような感じであったな。

「似たような道を辿っても、同じ幸せを手に入れられないのは、運命ですね」

世の不条理に嘆くのは、これが初めてだ。

青い空の下で、？はもう此処にはいない結城に一礼した。

「……………？さん？ どうしたんです？」

「なんでもありませんよ」

これはお返しだ。

彼が身体を張った御蔭で、自分の愛する人が傷つかずに済んだのだから。

「彼には勝ちましょう。宗茂様」

/  
/

木漏れ日に照らされた後悔通りの上で、一人の少女が立っていた。極東の制服を身に纏ったのは、異なる色の瞳を持った巫女少女、浅間・智。

三河消失の事件による事後の調査や地脈の乱れに備えて、彼女は一睡もしていなかった。

聖連の指揮下にある三河警護隊の指示により、昨夜から武蔵では非常態勢が敷かれ、一般市民は不用意な外出を禁じられた。周囲が緊張に包まれる中、しかし浅間神社は警護隊の要請によって諸処に駆り出され、その跡取りである自分も例外ではなかった。

結局、朝によやく非常態勢が解かれたため、一応圧縮睡眠で休憩を取ってはいたが、あまり効き目はなかった。

……これから、どうするのでしょうか……

朝の五時。深夜に続く聖連臨時代表である教皇総長と、武蔵の暫定議会側の会議の判断として、一先ずの結論は出た。

それは、ホライゾンの体内にある大罪武装の摘出と武蔵の移譲であり、一つは武装解除された武蔵には大罪武装を所持できないということとで解釈され、もう一つは三河消失に対する責任としての処置で

あると宣告された。

そして更には、武蔵の所有者は三河君主である松平・元信だが、彼が地脈炉暴走によって死亡した今、極東と武蔵の所有権はその跡取りである嫡子に引き継がれる。

結城・秀康とホライゾン・アリアダスト。現時点で極東継承権を持つこの二人に対し、聖連からの引責自害が迫られている。

そしてそのことについて、武蔵に動きはない。

君主も、武装も、主権も持たない武蔵では、圧倒的物量を持つ聖連代表団に太刀打ちできない。三河の被害は収まったが、土地を失った三河の住民達は暫定議会の判断によって武蔵に移住してきている。輸送艦を仮設住宅地として改造したお粗末なものだが、それが返って事態の深刻さを表していた。

余りにも無惨な、天災のような蹂躪。

その伽藍洞のような結末に、人々は抵抗よりも先に、仕方がないと諦観した。

町に活気は無く。人気も少ない。監視と警護を担当とする警護隊の姿が目立つ中、昨日まであった当たり前のような日常が崩れ去った。怪異、末世、そのような問題よりも先に、浅間はどうしてこうなっってしまったんだろうと、不公平な運命に嘆いた。

そして、

「ほんと、馬鹿ですよね、私って……」

目の前を見る。

今浅間がいるのは、後悔通りの脇にある石碑の前だ。  
ホライゾンが死んだときに建てたそれも、今ではどれほどの意味を  
持っているのか。

しかしそれでも、浅間はここにいなければならぬと思った。

朝の御被を終えてからここに来たのには、理由がある。

何時もなら必ず、この時間でこの場所にいる少年を待ったためだ。

妹を失い、その死に後悔した少年はその生き方を変えた。

悲しみを越えるために、罪を償うために、彼は十年の歳月を費やした。

その中で一度も、彼は朝の追弔を欠かしたことはない。

それが今になってこの場所にいないことに、浅間は消え失せた日常  
が指の隙間から零れ落ちたということを実感した。

「酷いですよね。彼の過去を知っていても、私達は何もしな  
かった。安易に他人の心に踏み入れることに遠慮して、本当に気付  
くべき痛みまでも見過ごしていた」

だから彼は一人で戦った。

仲間達よりも、彼は見落としていた絆を選んだ。

不器用な自分達よりも、恋焦がれていた家族愛を追い求めたのだ。

そしてその結果は見事玉砕。

手の届かぬ地平で、浅間は大切な何かを取り零した喪失感を味わっ  
た。

己の無力感に、自然と涙が滲んでくる。

心の中にある苦悩に、しかし目の前の石碑は何も応じない。

よく考えれば、ここが不幸の始まりで、胸に宿る想いの原点でもあ

った。

不完全な結城に己自身を重ねたからこそ、浅間・智は彼を思い続けてきた。

それが今、失われようとしているときに、浅間は再びそのことを思い確かめた。

謝りたい。

彼に手を差し伸べなかったことに。

感謝したい。

彼を好きになれたことに。

助けたい。

今まで力になれなかった償いに。

一緒にいたい。

もう二度と、このような悲哀を感じたくないために。

だから、

「置いていかないで下さい。

結城君」

涙脆い子供のように、喉がしゃくり上げる。

大粒の涙がポロポロと地面に落ちては染みを作りあげる。

懺悔だ。

力の無い自分が、自分達が、掛替えの無い仲間を見捨てた。その空虚に、浅間は後悔した。

例え無理だと解つても、昨夜は泣くことよりも先に、彼の元へと駆けつけるべきだったのだと。そういうやり直しを求めてしまった。そしてそのような弱気な自分に、またも涙が滴り落ちる。悲哀の雫を拭うことなく、彼女は叱られた子供のように、声にならない慟哭を晒し続けた。そして、

「何一人で泣いているんだよ」

聞き慣れた。欲していた声が、耳に届いた。

「トリーにでも虐められたか？ それとも、喜美がまた身体ネタでからかったか？」

視線を、艦首側に向ける。

そこには、人影がある。

少女のような、しかし凜とした容姿。空の青、蒼穹の瞳。何時もの三つ編みではない、一つに結んだ黒長髪は左肩から垂れており、その背中には、天を指しているかのような長い槍が背負われている。身に着ているのは何時もの黒コートではなく、白いYシャツに黒ズボンというラフな格好だが、その憎たらしいまでに余裕たっぷりな表情は見間違えるものではない。

「結城……君？」

思わず目を丸くした。

涙ぐんだ両目は赤く腫れており、しかし翳んだ視線は確かにその姿を捉えた。

ゆったりとした歩調で歩み寄る彼に、浅間は心拍数が跳ね上がるのを感じた。

そして理解した。

この胸の高鳴りが伝える、彼が本物である事実を。

だから、

「ああ、オレだ。

オレ、結城・秀康は、ここにいますよ」

幼い頃からの、もう一人の幼馴染と同じ口癖に、浅間は駆け出した。待ち望んだ彼の、結城の元に。

/  
/



微風が吹く後悔通りの上で、結城は目の前にいる浅間の姿に、自分が武蔵へと帰ってきたことを実感した。一晩しか経っていないが、体感的には何ヶ月にも及んだかのように思える。

色々心配をかけたのだろう、涙目で駆け寄ってくる長年の幼馴染に、結城は自然と苦笑を浮かべた。

そして、彼は見た。

視線の先、一瞬の内に視界を埋めるのは白。

空気を射抜くような勢いで突貫するそれは、風を切る音と共に殺到した。

しかし結城は避ける。

首だけを僅かに傾いて、命中精度九割九の人間射的を難なくかわす。同時に一歩前に踏み出す。

そして穿たれる二射目。

同じ要領で回避し、ズドンという轟音と共に一射目が背後の地面に着弾。

続けて三射目。これも避ける。更に前に一歩。

ズドン。四射目。

しかし無傷。両者の距離は縮まり、だが命中率は逆に下がっていく。それでも浅間は撃ち続け、それらを結城は優雅な足取りでかわしていく。

そしてどれくらい続いたのか、一瞬でも、数分とも言える応酬の果てに、結城は浅間の前に立った。

全弾撃ちつくし、顔を俯かせる彼女に、結城は何も言わない。

少しの間、二人を取り巻く空気は沈黙に包まれた。

でもその気まずさが、今の結城には必要で、心地が良い。

彼は通りを吹きぬく風に、その鮮やかな黒髪を靡かせながら、浅間にしか聞こえない声で言った。

「気が済んだか？」

質問に、浅間は首を小さく横に振る。  
顔を俯かせたまま、彼女は答える。

「一発も当ててません。返ってキツイです」

返事に、結城はそうか、と呟く。  
思いを届かせる射的は、本人が拒んだが故に空回り。  
これでは人間的に駄目だなと考え、結城はそつと手を伸ばした。  
冷え性な、冷たい指先が浅間の頬に触れた。

暖かい。

その確かな人肌の温もりに、結城は彼女の顔を上げた。  
形の良い眉は八の字を描き、宝石のような綺麗な瞳は涙で輝いてい  
た。

しかしその煌きが悲哀で飾られて良い筈が無い。  
揺れる涙を優しく拭き取り、結城はまたも苦笑を一つ漏らす。

「結城君の手、冷たいです……」

「お前は暖かいよ。」

「今も昔も、それだけは変わらない」

このような遣り取りは、何時ぶりだろうか。

懐かしく思えるほどに、自分は日常を蔑ろにして来たのか。

細めた目の先に見える浅間が、現在と過去の結城を明確に隔てた。

しかしもういい。

今の結城も、昔の結城も、等しく己自身だ。

だからここからやり直そう。

自分の帰りを待ってくれた者のために、またあの日の日常を追い求めよう。

だから、

「本当に……、帰ってきたんですね？」

「ああ、何度でも帰ってくるさ。」

「お前を置いていくことだけは、絶対にしない」

「告げよう。」

「この場で最も必要な、何よりも大切なその言葉を。」

「ただいま、智」

## 第十話〜お帰りなさい〜（後書き）

うおお〜！！ 悪戦苦闘の末に完成した第十話です！！ クロで  
す！！

ようやくアサマチと結城の遣り取りを書けたが、皆さんどう思いま  
す？

こんなズドン巫女で大丈夫か？

ともあれ今回は短めだが、次回から臨時生徒総会ですね。

フハハ、自分の出来に不安すぎてビクビクしています。

個人としてはホライゾン救出編を超えればオレのターンなんですけ  
ど、やはり原作基準は頭悪いなあ、と思ってしまう。

その辺は御勘弁。これが今のクロの限界です。

そして色々と感想を下さった皆さん有り難うです。

予告として次回、現在決めた4ヒロインのターン。

お楽しみに。

## 第十一話 決意の行方

武蔵アリアダスト教導院が、朝の一時限目の授業を終えようとした時間。

三河警護隊総隊長である本多・二代は、短い草の生えた丘の上にいた。

微風が吹く中、彼女は視界に映る人影達を見据えている。

目の前にあるのは、K・P・A・Italiaと三征西班牙の学生達。

そして己の背後には、極東式の装備を身に纏った警護隊隊員達が列を作っている。

これから始まるのは、三河に集う聖連所属国による情報交換会。

建前だけの会議だが、本番が開始する前に、三征西班牙から極東へ、ある預かり物を奉還するとの話が出た。その預かり物とは、今は亡き本多・忠勝がその後継者に残した本多家の力の象徴、神格武装”蜻蛉切”である。

それを受け渡す儀式が、これから始まる。

そしてそのことに、二代は自分らしくない不安を抱いていた。

それは、

……受け取るということに異論はないので御座るが……

考えと共に、二代は前を見た。

視界の先、三征西班牙の学生の列の中央に、一組の男女がいる。

その内、金髪の男性の方に、二代は視線を向けた。

立花・宗茂。

西国無双と謳われた、自分と同年代でありながら、既に百戦錬磨の兵として活躍している青年。

昨夜の父との戦いの中で、彼は己が憧れた少年と協働し、敗北はしたものの無傷で生還した。

父である本多・忠勝とは、二代も手合わせの中で一度も勝ったことは無いが、本気の殺し合いの果てに無事でいられるという自信は無い。にもかかわらず、この立花・宗茂は五体満足で生き延びたのだ。敵かに佇むその姿が、技量というものを雄弁に語っている。

そんな強敵を前に二代は心を奮わせるも、同時に弱気にもなる。その理由は、

…… 結城殿が、松平の血筋。すなわち拙者の主君に御座る。しかし

……

昨夜の戦闘で、かの少年は重傷を負った。

流れ弾によるものだが、その原因を作ったのは目の前にいる立花・宗茂。

そして三河が消滅し、己の君主が聖連の船に治療として連れ去られた時、二代がやっていた事とは、

…… もう一人の君主でもある、ホライゾン・アリアダスト様を聖連に明け渡してしまった……！

屈辱だ。

極東の民のためとは言え、二代は君主二人を手放した事実にも奥歯を

噛んだ。

なんとも不甲斐なく、なんとも愚かで無力だ。

仕方ない、そうするしかなかった、それ以外の方法は宜しくない。

そんな陳腐で打算的な言葉は、侍の魂には言い訳に過ぎない。

忠義を至上とし、そのための力を磨いてきたというのに、二代はその力を振るう前に、自分から両手を下げた。

……結城殿は、既に武蔵に帰還したとの報告があつたで御座るが……

本当は、自分の手で彼の安全を確保したかった。

ささやかな、しかし確かな可能性を教えてくれた少年に報いたいと、そう願ったのに。

しかし彼は二代の知りえないところで、他の誰かに救われた。

その喪失感、父の死と、結城が松平の跡取りである事実を知ったことで、更に拡大していった。

……無念。                   やはり拙者は、まだ父達の高みには遠く及ばぬか

……

迷いがある。

しかし時は残酷なものだ。少女に答えを導き出す暇を与えずに、事態は進む。

目の前、宗茂の傍に立っていた少女が、前に出た。

両の義腕を持った黒髪の女生徒は、両手に蜻蛉切を掲げ、丘を囲む生徒の集団の真ん中で足を止める。

そして彼女は二代に一礼し、



「極東、三河圏新名古屋城教導院所属特殊予備役、本多・忠勝様から、同所属三年、本多・二代様への預かりものです」

宣告に、二代は内心で戸惑った。

しかし形式的に一礼を返し、彼女は前へと進む。

そして義腕の女を正面に、距離五メートルの位置で足を止めた。

それ以上近づかないのは、蜻蛉切を見据えるのと、それが今の自分と父との距離であるからだ。

五メートル。

近いようで、しかし実戦では致命的なまでに遠い位置。

それが世間知らずで、未熟な己自身を示しているかのようで、二代は暫し無言となった。

そして同時に実感した、父の最期を見届けた少年少女達を前に、自分の目標は本当に死んだのだと。だから、

「如何様に？」

「多くのことを教えていただきました」

聞かずにいられなかった疑問に、義腕の少女は即答した。

左様で御座るか、と納得する。

父は最後まで父らしいな、と。

ならば更に確かめることがある、さっきのは今までの自分に対して求めた疑問だ。

そしてここからの疑問は、これからの自分に対してのものだ。それは、

「結城殿は、無事であられたか？」

知りえなかった、君主の安否を問うた。

自分と同じく、父を失った結城の痛みを、二代は理解している。だからこそ、彼の力になれなかった自分の代わりに、その顛末を見届けた立花に、二代は答えを求めた。

それはこれからの、迷える本多の忠義に対する道標ともなりえるから。

そして、その返事は、

「……結城様は、お強い御仁です。この場で蜻蛉切を二代様にお渡しすると、改めて頼まれておりました」

「結城殿が？ 彼はなんと？」

「Yes、この会議の場を見越して、二代様なら『受け取ってください』と、そう信じておりました」

答えに、二代は目を見開いた。

自分は迷っていた。

聖連が極東の反感を買わないための、政治的なこの情報交換会で、

自分に出来ることは無い。  
蜻蛉切を受け取っても、それは自分が手にしたのではなく、他人から譲り受けたものだ。  
それはやはり、自分が弱くて、君主の力になれない、忠義に報えないものだと思っていた。  
しかし、

……それを解って尚、拙者に蜻蛉切を持つてと言うので御座るか、結城殿。

それは己が君主からの、確かな伝言だった。

非力な自分に、力を持つてと言った。

戦うことしか出来ない自分に、武器を取れと言った。

未熟者である自分に、父の意志を継げと言った。

足下しか見ていない自分に、前を見れと言った。

……それで御座るな……、  
拙者に出来ることなど、高が知れているで御座る。

限界なのだ。

一個人の枠に囚われた、哀れな限界だ。

しかしその何が悪い。人間は元々、一人で生きて行けるほど器用ではない。

足りない部分を補うために力が必要で、その力を発揮できる繋がりが必要なのだ。

二代は思い返した。

昨日の午後。あの素朴な食堂で教えられた、結城の一言を。

……拙者は侍、                   しかし侍以前に、一人の女子で御座る。

侍に政治は向いていない。

自分は本来、考え込むようなタイプではない。

三度の飯より武芸、駒を動かすより、自分から動くことの方が性に合っている。

そんな自分が、ガラにも無く、出来ないことで悩んでしまった。

……駄目で御座るな。                   目の前に居らぬというのに、また結城殿に説教されてし申たで御座る。

開き直れば、思いのほか大した事ではない。

自分は侍、ならば侍らしく、力を振るうことを考えれば良いのだ。

思えば、結城だけではない。

蜻蛉切を前に、二代はそう感じた。

預かったのは三征西班牙だが、それを自分に受け継がせようとしたのは、父の意志だ。

ならば自分は、まだ戦える。

力を求めてくれた主君に、力を認めてくれる父に、力を試せる舞台に、二代は己の未熟を甘受しよう。

その方が、まだまだ先に進めそうな気がするから。

そしてその第一歩として、二代は主の期待に応えよう。

「では」

前へと出る。

平坦な、ゆっくりとした、ただの歩みだ。

しかしその足運びに隙は無く、重心は岩石のように堅牢で、一寸のブレもない体幹運動は芸術品のよう。

真っ直ぐとした軸の直線運動に、皆が息を呑んだ。

術式に頼らない、人間としての純粹な、力強い意志の証明。

飾る必要の無い、己の力で踏み出した道の先に、二代は蜻蛉切の前に立った。

そして、

「蜻蛉切、確かに御受け致し申した」

手に取る。

感謝の言葉は無い。それはまだ早すぎる。

自分の意志が向ける先は、既に決まっているのだから。

「本多・二代、父以上の位置を目指すこと、そして極東が主に絶対の忠義を尽くすことを、この蜻蛉切に誓い申す」

/  
/

日の入る教室の中で、生徒達の姿がある。

雑多な種族を持った彼らは、三年梅組のメンバー達だ。

聖連からの非常態勢が解かれた今、武蔵では仮初の日常が舞い戻っており、教導院では生徒達が何時も通りの授業に勤しんでいた。

そして現在は二時限目。聖連の情報交換会が何の異変も無く無事に開かれている今、三年梅組は作文の授業を行っている。皆が視線を下げて原稿用紙と睨み合っている中、黒板には白いチョークによって書かれた題目がある。

”私がして欲しいこと”。

逆発想とも言うべきか、求めるという人の欲望とは違いベクトルでの、”求められる”という題目に、一人の少女が頭を抱えていた。

浅間だ。

彼女は頂垂れていた。これは拙いと。

何しろ自分は浅間神社の跡取り。

神職者は他人に奉仕する職業で、神聖なる神の意向を人々に伝える仲介役としては、無欲且つ清廉でなければならぬ。それゆえに、今回の作文の題目は、浅間にとっては致命的なまでに、己の欲望を曝け出すものだった。

……こんな題材、巫女である私に書けるわけないじゃないですか！！

内心では拒んでも、執筆しようとすることを諦めないのは何故か。右往左往に悩んでいる中、浅間は不意に、視線を右に移した。

正確に言えば右手前、隣にある鈴の前にある席。今は誰もいない、空いているそれは結城の席だ。

彼は今、教導院にいない。

朝早く彼と再会を果たした浅間だが、そのあと直ぐに結城と別れた。三河の件で武蔵王や暫定議会に呼び出しを受けた彼は、皆と顔を合わせることなく諸処に駆り出されていた。

そのことに少し残念だと思っても、彼の代わりに浅間が皆に宜しく伝えておいた。

……相変わらず忙しい人ですね。

今頃あちこち走り回っている結城の姿を想像し、浅間は自然と笑みを浮かべた。

そして寂しくも思う。手の届かぬ場所に彼がいるということに、またも不安を感じた。

そうしたら、答えが出てきたような感じがした。自分がして欲しいこと、それは。

……んん、 傍に、いて欲しいです。

まるで恋人のような話だ。告白もしていないというのに。

と、告白と言えば、浅間は視線を動かした。

窓際が一番後ろの席。

そこには机に突っ伏してあるトリーの姿があった。

昨夜、元信公の放送の後、彼はホライゾンの元へと駆けつけたが、結果は玉砕。

今日は楽しい告白の日だった筈なのに、運命とはどれだけ悪戯なものか。

そして浅間は、その中に自分を投影した。

トリーはホライゾンのことが好きだ、だから告白しようとした。ならば自分は？

結城のことが好きで、しかし中々踏み出せていない。

思い返せば、自分が彼のことに好意を抱いたのは、随分昔からだ。幼馴染で、住んでいる場所が近いということもある。

子供の頃から、術式の修行でよく神社に通うことがあり、浅間はずっと結城のことを見てきた。

優しくも厳しく、気遣いがあつて、しかし偶にドジなところがある。そんなドジな部分にも愛嬌があり、何でもそつなくこなす彼を慕う者もたくさんいる。

主に一年や二年の後輩達。臨時相談役である彼は教導院全生徒代表であるため、生徒委員会にも顔が利く。男女問わず、教導院の外でも結城を頼る人達は大勢おり、暗に影のキングとか言われているのかないとか。

……新年の行事でも、色々お手伝ってくれていますし……

自分でも驚くくらいに、結城は当たり前のようにこの武蔵にいた。だから浅間には耐えられなかったのだろう。

自分の日常を構築していた少年が、昨夜の戦いで傷を負ったこと、そのせいでいなくなるかもしれないことに。

……でも、ちゃんと帰ってきてくれました。



そのことが素直に嬉しい。  
昔から、約束だけはちゃんと守ってくれる人だ。  
今朝も、弱気で泣いていた自分をあやしてくれた。

……そう言えば、あのときは超秀困気良かったですね。

告白するには持って来いなシーンだったが、自分は先にズドンを優先してしまった。

いや、あれはあれで必要な処置だ。

巫女は人を撃つてはいけませんが、そもそも結城には一度も当たった例がない。

加速術式が使えないくせに、あのずば抜けた回避技量は馬鹿げている。

408

……あれですね、傍に追いつけない私への当て付けですね。  
当てて見せる、みたいな。

そう考えれば挑戦心が燃え上がるものだ。  
何時かギャフンと言わせて、そして……、

……ここ、告白とか、  
いや、ここは強気に、っ、付き合っ  
て下さい、みたいな？

そうとすれば、後はどうなるのだろうか？

地味に真面目な彼のことだから、無碍にはしない筈だが、色々と困るだろう。

それとも、自分の気持ちを素直に受け入れてくれるのだろうか？

……だとしたら、一押しが必要ですか？ うーんと、えーと、抱きしめてあげるとか。な、なんか恥ずかしいですね。じゃあ、キ、キスとか？

キヤー！ いきなり過ぎですよ、結城君！！ えーと、んと、他にはオツパイ揉んで、つて、違います！ トーリ君じゃあるまいし！！ あ、でも結城君つて巨乳派ですかね？ それとも貧乳派？ 雑食って言いましたからどちらでもOKでしょうか？

えー？ でもどこまでなら結城君は頷いてくれるんでしょうかねー？ バレンタイン作戦はいい加減飽きましたし。新年は何時も一緒に過していますから……、ええー？ や、やつぱりあんなこととかじゃ駄目でしょうか？ それとも、そ、そんなことまで！？

結城君ドSだけと身内には超甘いですから、私からリードしないと……、う、わ、わああー！！ 何考えているんですか私は！！ それはまだ早すぎますよー！

「えへへ……、あ」

何やら途中から邪な妄想に耽っている中、浅間は、はっと我に返った。

辺りを見渡すと、教室にいる皆がこちらに視線を向けている。

そして教壇の上では、担任のオリオトライが首を傾げながら浅間をジーンと凝視し、

「な、何ですか?! 皆ともこつちを見て!?!」

「あ、うん。なんかニヤついて結城が何とか言っていて楽しんでるとこ悪いんだけど……、次の原稿用紙いる?」

教師の言葉に、浅間は耳を赤くしながら、へ? という疑問を作りながら、視線を下に移した。

オリオトライの指摘に、浅間は自分の原稿用紙数枚が文字で埋められているのを見た。

明らかに自分の筆跡で並べられたそれらの内容は、

「  
」

思わず鼻の下が伸びそうになった。

いけません、鼻血、鼻血。

咄嗟に袖で鼻から下を隠し、浅間は顔を赤くしながら、同時に青褪めているという矛盾を感じる。

……な、なんとというエロ小説!! しかも題名は”私がして欲しいこと”!!

しかもよく見ると主役は自分。

ちよっ、神職者に対する冒読です! 誰ですか!?! こんなけしからん官能ものを書いたのは!?! って、あ、私ですね、巫女失格で

すね。などという自問自答をしながら、浅間は涙目になる。嫌な汗が全身に貼りつく感覚を覚え、己の失敗に反省した。

……う、有頂天になってしまいましたね。まさかこのような不注意を犯してしまうとは……。この場にはいないのに私を困らせる結城君恐るべし！そして欲望恐るべしです！！

ともあれ、これは他人に見せていい作文ではない。特にこのクラスのメンバーの殆どが外道モンスターだ。内容の一字でもバレた暁には、自分はお嫁にいけなくなる。毎日三食後に校庭で朗読されるのは確実。その後、毎年の祭や新年の行事に笑い話として恥死されるのも予想出来ている。そうなれば人間性的にお仕舞いだ。告白なんて論外。

……まさに神道ガツテム！こんなところで自爆するとは、一生の不覚です！あ、でも結城君なら解つてくれますよね？

こんなときでも都合の良い想像が止まらないのは、ある意味前向きか。

兎に角、この邪念に満ちた紙束は机にしまっておこうと、浅間がそう決めた瞬間。オリオトライが言葉を作った。

「よし、見たところ大体出来たみたいだから、出来た人、ちょっと読んで貰おうかな。じゃあ、出席番号から見て……、浅間ー、出来てるみたいだし読んでくれる？」

「ぶっ！！ え、ええええええええ！？ ちよっ、だ、駄目です！！  
駄目ですよコレは！！！」

跳ね上がるように、浅間は席を立った。

熱のある汗をかきつつ、彼女は原稿用紙を両手で抱きしめる。  
その慌てた様子に、皆が期待の視線を送るが、とりあえず、浅間は  
思いついた言い訳を口にした。

「こ、これは、その……、そ、そう！ 封印です！！ 南西の……  
多摩の方角から邪念を捉えたので！ それを文字にして原稿用紙に  
封じていました！ 読んだら呪われますよ？！ 禿げますよ！！  
だから、あまり宜しくないかと！！！」

「なんか微妙な邪念ね……、でもまあ、授業中もお仕事とは、色  
々大変ねえ、浅間神社は」

「は、はいっ！ 大変です！ 超大変！！ ズドンとかドカンとか  
気持ちいいので、それくらい大変です！！ だから……、ええと、  
焼却炉！ 焼却炉行っていいですか！？」

「まあまあ、君が結城一筋なのはよく理解しているから、ちよつと  
それは後にしなさい。他のクラスも授業やってるし、次から妄想は  
頭の中だけにしときなさい」

壮大にバレている。

的確な指摘に浅間は頂垂れるも、とりあえず作文の内容が公表され

る危険は回避出来た。  
彼女は暗い溜息を吐いて椅子に座りなおし、そしてオリオトライも浅間から視線を外した。

「うーん。浅間が趣旨間違っているようだから……、じゃあ、鈴」

「あ、は、……はい？」

担任の呼び声に、浅間の横で返事があつた。  
自分の右側、二つ隣の席。

そこに座る盲目の少女が、僅かな驚きを持って顔を上げた。  
その仕草に、オリオトライは笑みを浮かべ、安心させるような口調で聞いた。

「あのね鈴、貴女の、読んでも大丈夫？」

「はい、だ、大丈夫です」

……え？

少し戸惑った、しかし確かな頷きに、浅間は身を硬くした。  
自分と同じ思いなのか、他の皆も一斉に視線を鈴に注ぐ。  
それは気遣いであり、不安であり、迷いでもある。  
その意味は解る。

鈴は目が見えず、子供の頃は日常生活に不便があることが多かった。

特に文字の読み書きに関しては、矯正のしようがない問題であり、彼女は複雑な漢字を書くことが出来ず、文章の殆どを平仮名で表している。そして端正な筆跡もままならず、字を揃えて書くことも至難だ。

一応、今までの教導院生活では、皆で助け合っていた。鈴の前の席に結城を置いたのもそのため、学生代表である彼は鈴の世話役でもあった。

高等部に入ってからには鈴も自立出来るようになり、結城の役目も少なくなつて来たが、流石に読み書きまではフオーしきれない。なのに、今鈴の目の前にある原稿用紙には、何故か文字が多く書かれていた。

その数はざつと十枚以上。

あまり綺麗ではない、大きさはまちまちで、列も乱れている。

しかし誠意を感じる、鈴が必死に書き込んでいた文字がそこにあった。

そして、

「ええと鈴？　自分で読める？」

オリオトライの問い掛けに、鈴は首を横に振った。

そして彼女は言った、己の望みを、誰かに委ねる言葉を。

「誰か、御願ひ、し、します」

告げた一言に、浅間の胸の奥で何かが刺さった。  
迷い無く、自分の作文を誰かに預けられる鈴に、浅間は己を鑑みた。  
告白に似た、素直に他人を信じられることを、果たして自分は出来るのだろうか。  
好きな異性がいて。彼と共にありたくて。しかしその彼に、浅間は  
本当の意味で、自分自身を委ねられるのだろうか。  
反省の意思に、浅間は自分が少しだけ恥ずかしい。  
そんな彼女の横で、鈴は臆病ながらも、自分を曝け出した。  
そして、

「よし、じゃあ、浅間。                      代わりに読んであげて」

オリオトライの声が響いた。  
それは、一つの切っ掛けとしては十分な狼煙だった。

/  
/

教室で鈴の作文が読まれている中。武蔵王と暫定議会との事後報告  
を終えた結城は、軽食屋である青雷亭<sup>ブルーサンダー</sup>にいた。  
昨日まで妹であるホライゾンが働いていた店に人気は無く、何時も  
より広く感じる空間の中で、彼は窓際の席で朝食であるパンを齧っ  
ている。

そしてその向かいのカウンターでは、店を仕切る店主が頼杖を立て  
ながら彼を見ていた。そのことに結城は気にもせず、食事を進むの



と同時に、目の前に展開してある幾つもの表示枠の内容を見詰めていた。  
そして、

「来たようだよ、結城」

店主の言葉に、結城は窓の外を見た。

ガラス越しに見える向かいの通りから、一人の学生が歩いて来ている。

黒長髪に男子制服。

小柄な体格に、元気の無い足取りで店へと近寄るのは、正純だ。

結城はその姿を確認し、そして正純と視線を合わせる。こちらの存在に気付いた正純は一瞬身を硬くし、しかし直ぐに店の中へと入ってくる。

「おはよう、正純」

「……おはよう。 帰っていたのか、結城」

「まあな、麻呂やお前の親父に呼び出されて、さっき用事を終えたばかりだ」

「……そうか」

返事に、結城は頷いた。

パンの最後の一口を喉に通らせ、彼は正純に向かいの席へ座るよう

に促す。

多く語らない結城の態度に、正純は緊張と不安に目を泳がせたが、逃げても仕方が無いと思い、彼の前へと歩み寄った。

重苦しい動きで席につき、正純は表示枠を見る結城の顔を直視できずに視線を逸らす。

そして、

「ホライゾンが、連れて行かれたそうだな……」

「……っ」

声を呑む。罪悪感か、それとも恐怖か。正純は淡々な口調で語られたその一言に、言葉が出ない。

そんな自分の不安を見透かしたのか、結城は息を一つ吐いてから、こう言った。

「大まかな事情は智から聞いた。詳しいところまで解った訳じゃないが、別に正純を責めているわけではないぞ」

それは甘美な慰めだ。

たった一つの逃げ道のように、その声は正純の弱さを露顕した。だから正純は否定した。

違うのだ、と。己の本心で、理性を弾劾する。

自分は彼女の傍にいなから、彼女を守れなかった。

後に来た葵達が必死にホライゾンを引きとめようとしたのに、あ那时的自分は逆に彼の邪魔をしたのだ。少女一人の生死を前に、自

分は何も出来なかったのではなく、何もしなかったのだと、正純は昨夜の顛末を、懺悔するかのように語った。

そして声を震わせた告白に、結城も店主も何も語らず、ただ静かに聞いていた。

そして、

「私は、無力だ。政治家として正しいと思っても、そのことが本当の自分を殺しているのに気づかない。もっと上手くやれた筈なのに、私はどうしても、政治家でありたいが故に、人間を捨ててしまうのだ」

泣き崩れるような声に、結城は目を細めた。

そして正純は泣いた。

声にならない嗚咽を漏らし、頭を垂れては、机の上に小さな水溜りを作る。

その光景に、結城は動いた。

些細な、軽い動きだ。

目の前に展示されている表示枠を手に取り、彼は正純の前に差し出した。

その内容は、

「麻呂から受け取った、今朝オレが帰って来たときに、聖連臨時代表である教皇総長から発した正式な声明だ。内容はオレの極

東継承権の否決。聖連の調査では、オレが生まれたのは三河だが、最初に戸籍を登録したのがP・A・ODAで、その後は結城家を経て武蔵に移ったために、三河でのオレの記録はないらしい。故に聖連は、オレの極東継承権には効力がないと判断し、ホライゾンに嫡

子相続の儀式を行わせたそうだ」

それはつまり、

「ホライゾンが極東の君主となり、三河消滅の事件に対する責任を背負うことになる。大罪武装の摘出と共に、引責自害という形で、あの子は死ぬのだろう」

告げられた言葉に、正純は泣くことも忘れて結城を見た。

大きく見開いたその目は、表示枠よりも先に、話にあった少女の兄に視線を注ぐ。

その表情は何処か困ったような、哀れむような、苦笑が混じったものだった。

確かな痛みを含んだ結城の感情に、正純はどうやって声をかけていいのか解らなかった。

そしてその間にも、結城の言葉は続いた。

「コレ、共通通神帯を通して、各国のコミュニティサイトや放送委員によって報道されている、……多分、皆知っていると思う。

にしても、ままならないよな。これが一番、皆の安全を保障できる方法だというのは解ってる。でも、そんな客観的な視点を抜きにしても、やっぱり助けたいよな、ホライゾンのこと」

救いたい。それは単なる願望ではない。

正純自身もそう考えていた、確かな目的の一つだ。

そのための対抗策を考えてはいるものの、未熟者である自分には、それを行えるだけの力がない。

世の中、人間一人の都合で動ける程単純ではないのだ。

今回の事件は、世界そのものを巻き込んだ。どう転んでも、大勢の人達を道連れにする。そんな中で、ただ失いたくないという子供のようないは罷り通らない。

そして、

「悔しいか？ 正純」

質問に、正純は結城を見た。

問い掛けの意味を理解できず、同時に、特定できないほどの後悔を呑んできたことを自覚した。

襲名が失敗こと。母を失ったこと。政治家になり切れないこと。ホライゾンを救えなかったこと。そして、

……お前を、一人で戦わせてしまったこと……

何かが出来たわけじゃないが、どうにかしたかった。

何故なら、自分はずっとこの少年に助けられていたから。

初めて武蔵に来たとき、生徒会選挙のとき、空腹で倒れていたとき、そして男装を隠している今だって、こうやって挫けているときですら、正純は悲しくても、結城と共にいることが心地良いと感じてしまう。

だからこそ、正純には理解できないのだ。

何故この男は自分を責めない？

何故自分に優しくする？

いっそのこと、こんな軟弱な自分を叱ってくれたら、どれだけ気楽なことが。

結城にはその資格があるのに、一度も正純の葛藤を指摘したことが無い。

そう考えれば、確かに悔しくもある。

この一年、正純はずっと、結城に甘えていたのだから。

「……お前がいてくれれば、手の届く位置に結城がいれば、どうにかなれると思った。だがそれは間違いだった……、私は誰かの力になりたくても、自分の目標を追い求めるがために、お前の優しさに縋ったために、自分自身を未熟者のままに納得させていたのだ」

だから何も救えなかった。何も守れなかった。

己を卑下し、弱さを肯定しても、背中を見せて守ってくれる人がいるからと、正純は非力な自分を告白した。そんな自分をどうにかしたくて堪らないのに、それと同じくらいに、正純は自分より先に誰かのためになりたかった。

順序が逆で、弱いままの自分では、ただ立っていることしか出来ないと知りつつ。

そしてそんな絶望を前に、結城は応えた。

道を示すわけでもない、光を見せるわけでもない。

転んだ子供を、自分から立たせるみたいなの、優しくも厳しい一言を。

それは、

「力なら、あるだろう?。」

「……え?。」

声に、正純は疑問を上げた。

しかし、結城は構わずに言葉を続ける。

彼は、一枚の表示枠を前に出し、

「ホライゾンが連れ去られて、武蔵の移譲が決まって。麻呂は教導院派の反抗を防ぐために、総長連合と生徒会役員が持つ権限の殆どを没収した。その中でまともに動けるのは、暫定議会に吸収されて権限の預かりを逃れた武蔵の副会長だけ。つまり正純、お前だ」

そして、

「今のオレ達には何も出来ない。経済も、軍事も、行政も、交渉も、それらを仕切るだけの権限がない、ただの一般生徒だ。……しかし、その全てをまとめて動かすための政治は、正純、お前にしか出来ない。そしてそれを成し遂げるだけの力を、今のお前は持っている」

言葉が胸に沁みる。

自分はまだ転んだままだが、しかし結城は見捨てないでくれた。

手を差し伸べても、決して彼から自分の手を取ってくれることはな

いが、その手を握らせるように、激励の言葉が伝わる。

「未熟者で何が悪い？ オレ達はまだまだ若い、青二才で世間知らずなルーキーだ。でもそれだからこそ、オレ達は知っている。生意氣ぶっても、自分の足りないところに気づき、上に行ける事を理解する。お前も解っている筈だ、正純。本当に必要なのは、目に見えて納得する力なんかじゃない。弱さを知って、そして強くあろうとする気持ちだが、何よりも大切な、オレ達の原動力だ」

だから、

「<sup>おせて</sup>面を上げる、副会長。そして立て、正純。お前のなりたいたい政治家は、お前が守りたい人達を助けるためだろう？ そのための努力は、決して無駄じゃない」

もう一度確かめる、己の心に問いかける声に、正純は制服の胸を掴んだ。

思い返せば、確かにそうだった。

松平による人払い。怪異による被害。鎖国状態となった三河。次々と没落してゆく環境に、正純は苦しむ人々の顔が耐えられなかった。

武の才能は無いが、それでも何か出来ると思い、そして政治家としての父に憧れていたからこそ、正純は自分でも人の助けになりたい一心で、政治家を目指した。そのことを、





暫定議会のこととか、聖連との交渉とか色々と問題はあるが、それらを気にしないくらいに、結城の声には力があつた。だから正純は頷いた。ただかまりはあるが、しかし自分の心は、もうそちら側についたのだから。

/  
/

わたしには すきな人が います  
ずっと むかしから います

ずっと むかしの ことでした  
小とうぶ にゆうがくしきの ことでした

/  
/

「お騒がせして済みません」

「いって、 これからも頑張りな、若者達」

長年世話になった店主に一礼し、オレと正純は店を出た。  
これから向かう先は教導院。

武蔵の未来を決める場に、既に集まって貰う人達に連絡を入れてある。

「後は馬鹿が復活すれば良いだけの話だ。まあ、アイツのとだ、心配はいらねえだろ」

笑みと共に、オレ達は歩き出す。  
蒼穹の青の下。

先ずは一人目の仲間と共に。

/  
/

わたし いやでした  
きょうどういんに いくの いやでした

おとうさん わたしのいえ あかあさん あさから はたらいてます  
二人 こられません でした わたし にゅうがくしき 一人でした  
でも おとうさん おかあさん しんぱい するの で なきませ  
んました

でも

本とうは おめでとう 言って ほしくて

/  
/

何処までも青い空。

オレと、ホライゾンの目と同じ色。

ずっと昔に見た赤の色は、此処にはない。

強く、楽しく、好きに生きる。

でもオレは強くない。

楽しい生き方なんて解らない。

だから好きな人生もみつからない。

しかし、何時までもオレを見守ってくれる青は、嫌いじゃない。

じゃあ、先ずは此処から始めよう。

この青が続くことを、守ってあげよう。

/  
/

きょうどういん ひょうそうぶ たかいところに あります  
かいだん わたしのきらいな かいだん ながく あります

だから かいだんのまえで かんがえました  
おめでとうと 言われないなら のぼらなくていいかと

ほかの人たちは はじめてあう人たちは わたしにきづかず  
おかあさん おとうさんと のぼっていきます

わたし は 一人でした だけど

こえがきこえました

ねえ どうしたの

ねえ どうして ないているの

それは、トリーさんと ホライゾン でした

/  
/

奥多摩に続く道の上。

小さな公園を通り過ぎた。

小さい頃、一人で泣いていた村山の公園とよく似た、広くない空間。

父との、たった一つの思い出が蘇る。

そのことに、自然と笑みが浮かび上がる。

そして懐かしくも思う。

ここは、オレとアイツ等が初めて出会った場所。

喜美と智。トリーとホライゾン。

一人寂しく見る枝垂桜に、楽しい仲間が増えた。

/  
/

二人も 二人でした だけでした  
おとうさん おかあさん おしごと でした

いきなり トリーくんが わたしの 手を とって  
ホライゾンが ちょっと おこりました  
そして ホライゾンが わたしの 左の手を とって  
かいだんを のぼろうと いうのでした

/  
/

墓地に着いた。

見知った顔がそこにいた。

オレをこの青空の下に連れてきた人。

広くて寂しい家の中で、ずっとオレの世話をしてくれた人。

酒井学長と”武蔵”さん。

今まで有り難う。

そしてこれからもよろしく。

オレは感謝の笑みを浮かべた。

そして学長も笑った。

”武蔵”さんは一礼し、オレ達は前に進んだ。

/  
/

わたしは ききました  
いいのと

にゆうがくしきは はじまるうと してました  
おくれるよと 言いました

でも トーリックくんは おれはふりょうなんだ と言って  
ホライゾンが わらうんです

そして ホライゾンが 手を取り  
トーリックくんが せなかをささえて  
わたしたちは かいだんを のぼりました

/  
/

後悔通り。

木漏れ日が射す道の上に、ネイトとマサがいた。  
二人は呆れたような、喜んでいるような顔をした。

そして二人以外に、一人の少女がいた。

オレにしか見えない、オレだけの真実。

黒い髪と青い瞳。

白のカチューシャをつけた小さな女の子が、石碑の前でオレに笑みを向けている。

もう、大丈夫だよ、と。オレに微笑んでくれた。

それが嬉しかった。

そして皆がおかしな目でオレを見た。

何がそんなに嬉しいの？ と。

オレは応えない。

礼を言うには、まだ早すぎる。

/  
/



わたしは おぼえています

かぜのにおい さくらの ちる おと

まちのひびき そらのうなりも そして人のこえも なにもかも

きづけば かいだんを のぼりおえていて

わたしは しりました

いつのまにか 二人が 手 や せなか はなしていて  
わたしが 一人で かいだんを のぼっていたことを

わたしは 一人で かいだんを のぼれて  
でも 三人 いっしょに かいだんを のぼって

そして きがつきました

かいだんの うえで みなか わたしたちを まっていたのを  
みな わたしを おうえんしてくれていて

トリーくんが 言いました

ホライゾンと 二人で 言いました

おめでとう これから よろしく

いえにかえって おとうさん おかあさん はなしをしたら  
よろこんで おめでとう 言ってくれて

がんばったね と 言ってくれて わたしは また なきました

/  
/

階段が見えた。

ずっと登って来た、オレ達の青春を見届けてきた階段。

そしてこれからも、何時までも見届けて欲しいと願う、皆の夢。

校庭でたくさんさんの馬車が停めてある。

武蔵のお偉いさんである、議員の人達。

彼等の中で、ノブタンとコニタンを見た。

正純は緊張したが、大丈夫だと安心させる。

アレは面白くて良い人達だ。

一緒に仕事をするオレが、一番よく知っている。

そしてあの人達も、この船を大事に思う、オレ達の仲間だ。

/  
/

中とうぶは にかいそうめ で かいだんが ありませんでした

高とうぶは かいだんが ありますが

わたしは もう 一人で のぼれました

でも トーリックさんは にゅうがくしきの とき 一どだけ  
手をとってくれました

それは かつて ホライゾンが とってくれた 左の手です

みなは むかしと おなじように 上で まっついてくれて  
そして トーリックさんは ホライゾンと おなじで 手をはなしてく  
れていて

わたしは 一人で のぼれて みなと あつまって  
でも ホライゾンが いません

そのかわりに ゆうきくんが いました

ホライゾンとおなじにおい おなじくらい あたたかいひと  
でも さびしがりやな みんなのおにいさん

/  
/

階段を登った。

橋の上に、人がいた。

麻呂と麻呂嫁だ。

厳しい顔をしている麻呂に、オレは挨拶した。  
そして怒られた。麻呂を麻呂と呼ぶなど。  
しかし、オレは笑った。

真面目で皆を守ってくれる王様が、オレは好きだ。

そして前を見る。

校舎の方。たくさん生徒が集まっている。

その先頭に立つ生徒達を、オレは見た。

皆だ。

オレの我侭を受け入れてくれる。

オレを叱ってくれる、オレの大切な仲間達がいた。

/  
/

わたしには すきな人が います

わたしは トーリックの ことが すき

ホライゾンの ことが すき

みな の ことが すき

ホライゾンと いっしょの トーリックが ーばんすき

おねがいです……

/  
/

「お前より先に、オレが答えを見つけたよ。                      だから、あの時の約束と同じように、お前の不可能を、オレの万能が支えてやる」

声を上げた。

気づけば、大勢の人達が教導院に集まっている。

そして町の方では、誰もがオレ達の動きに注目している。

見えない人達、聞こえない人達は、放送や表示枠を通して確認している。

だからオレは言う。

目の前、同じ後悔を抱いた、オレを兄弟と呼んでくれる男に。

「ホライゾンを救う方法を、オレとお前と、皆で決めよう！」

息を吸う。

そして口を開く。

可能を導く、不可能に、

「葵・トリー……！」

## 第十一話の決意の行方（後書き）

よっしやあー！！ 4巻<下>ゲットだぜえー！！ のクロです。

やはり悪戦苦闘の末に完成した第十一話。

なにやら都合が良すぎる展開は勘弁してください。温かい目で見てみ下さい。

そして報告。

4巻の方を先に読みたいので、更新が遅れてしまつかも知れませんが皆さんとは暫しのお別れです。

と、まあ、自重せずに次の日に投稿するかもしれませんが、ぼちぼち待つててください。

では皆さん、また次回。

## 第十二話 臨時生徒総会 上

茶色が歩く。

武蔵中央後艦奥多摩表層部の上を、空を見上げながら闊歩している者がいる。

尖った耳にセミロングの黒髪、繊細で華奢な体格に簡素な朽葉色の和装を纏ったのは、長寿族の少女だ。

鼻唄を響かせながら、神事用の舞扇まいおしで口を隠し、彼女は人込み雑多な大通りを悠々に進む。

軽い足取りで目指すのは武蔵アリアダスト教導院。

これから始まる会談の場に、少女は高鳴る気持ちで馳せ参じる。

「何だか面白いことになってきましたねー」

何処か嬉しそうな、陽気な口調で少女は言う。  
そして思い返す。

自分は故郷での仕事関係で関東から引越して来た帰化住民だ。

昨日の午後に武蔵に到着し、昨夜手続きを終えたのは良いが、まさか新たな就職先が無くなるかもしれないという事態になった。

三河の崩壊に、聖連からの武蔵移譲。

突然の事件に、余りにも慌しい状況の中、引越しの準備もままならなかった。

「んー、お蔭様で家具の搬入や御近所挨拶も碌に出来ませんでしたわー。  
聖連は相変わらず邪魔ばかりですな」

愚痴をこぼしながらも、少女は上機嫌だ。

軸の傾かない重心運動を基に、彼女は奥多摩艦尾へと集う人々の間を難なく進む。

武の足運びだ。

まるで窓の隙間をすり抜ける風のように、少女は人と人の間を縫う。

「武蔵が移譲されたら住民が江戸に押し込まれてしまいますから、面倒ないざこざで田舎行きなんてのは御免被ります」

そうならない為にも、武蔵には飛び続けて貰わないといけない。

そしてそれを可能とする人物達が、この先にある教導院に集まっている。

だから少女は行く。舞扇を翳し、前へと進む。

そして見た。空中に展開する鳥居型の表示枠、艦内放送によって映されるのは武蔵アリアダスト教導院前の橋上。そこにいる人影達を見据えながら、そして少女は笑みを浮かべた。

その視線は、画面に映る一人の人物に向けられている。

「暫く見ないうちに、随分といい顔になってしまった」

昔の誼<sup>よ</sup>みの姿を確認し、少女は笑みを浮かべた。

かれこれ十年くらいは会っていないが、簡単に忘れるような間柄でもない。

今回の引越しも、半分は彼に用があって来たみたいなものだ。

色々と、話したいことも有る。



その前に、武蔵を聖連の手に渡すことを止めなければならぬ。  
自分と彼が対等に向き合える場に、極東の完全支配という枷は必要  
ない。

「無粋な輩には、痛い目を遭わせて上げればいいんですよ、結城様」

名を呼ぶ声と共に、少女は人込みの中へと姿を消した。  
開かれる祭を前に、新たな役者が舞台上上がる。

/  
/

教導院前。二階校舎の昇降口に繋がる橋の上では、武蔵を動かす各  
代表と生徒達が集まっている。

武蔵王、酒井学長、総艦長”武蔵”、暫定議会、機関部、騎士領、  
商工会、元総長連合及び生徒会役員。そしてこれから始まる、武蔵  
の命運を決める会合に、大勢の人々が表層部に上がり、空中に展開  
された表示枠による艦内放送を見届けている。

そんな中、声が響いた。

橋の中央、腕を組んで立っている少年がいる。

結城だ。

黒髪を頂辺りで一つに結んだ彼は、周囲に視線を送りながら言う。

「ここで決めようか、皆。ホライゾンを助ける、それが可能かどうかを」

言葉に、群衆がざわめく。

そんな中、一人の人物が橋の中央に出た。

金の王冠を被り、礼装用の杖を携えたのは武蔵王ヨシナオだ。

彼は前にいる結城を見据え、そして問うた。

「結城元相談役。

それは、武蔵の選択を己に迫るということ

になるぞ？ 聖連との全面戦争が可能となる会議、武蔵王である麻

呂としては同意出来ない」

提示された意見に、結城は頷いた。

そうだろうな、という前置きをしてから、彼は返事を返す。

「ヨシナオ教頭。そちらの懸念は理解している。しかし、国の活動方針を決めるのは中央集権である教導院だ。総長連合と生徒会の権限が武蔵王に預かっている現在でも、教導院側の姿勢を決めることが出来る方法がある」

それは、

「生徒会副会長本多・正純の権限を持って臨時生徒総会を開く。議題は一つ、三河消失の責任に対する、姫ホライゾンの引責自害と武蔵の移譲に対して、武蔵側の反抗が可能かどうかを見極めること。その結果を持って、武蔵アリアダスト教導院側の総意とする」

宣告に、成程、とヨシナオが呟いた。

生徒の反抗を抑えるための権限預かりと、副会長の暫定議会への取り込みが裏目に出たと。

そして生徒間の相対をルールとした臨時生徒総会に対して、武蔵王である自分は議決の否決権以外に関与する手段は無い。

総会の結果が全面戦争になり得るのであれば、それを否決すればいいだけの話だが、それを承知の上で総会を開くという事は、

……それなりに合理的な内容を持っているということか。

生徒総会による正式的な議論であれば信憑性がついてくる。

住民や議会、他の機関や武蔵王である自分などに対しても参考になるため、武蔵の限界と可能性を論じる価値は十分にある。結城の思惑は、意見の潰し合いによる姫奪還の可否を模索することだ。

継承権を否定されても、やはり彼は松平の血筋だと、ヨシナオは思った。今まで教導院と暫定議会、そして武蔵王の補佐として働いてきた彼が、初めて自分の手で国を動かそうとしている。そして、

「酒井学長。臨時生徒総会を開くことを承認して貰えないだろうか？」

言葉と共に、結城が表示枠を開いた。

臨時生徒総会の開催に必要な契約書を示したそれを掲げ、彼は酒井を見た。

その視線に、猫背で煙管を啜えた酒井は頭を軽く掻き、ややあつてから会釈を送った。

「いいねえ、若いつてのは。俺としては、完全に結城に任せる積もりだったから、こうなることは解っていたさ。臨時生徒総会、

同意しよう。でもルールは守れよ？ あと説明も抜くな。天罰は怖いからね。誰もが納得できるような結果を出すなら、文句はない」

注意に、結城はJud・と応える。

そして酒井が契約書に捺印し、それを結城がヨシナオに見せる。

確かな承認と、提示された契約書の内容に、ヨシナオは溜息をついた。

「生徒と相對出来るのは生徒のみ。学長の正式な認可と校則法に従ったものであるならば、麻呂としても無碍には出来ん。しかし

良いのかね？ 結城君。臨時生徒総会を通して、それが聖連との全面戦争になったら、極東は完全支配という最悪の状況に向き合わなければならぬ。その膨大なりスクを前に、君達は全極東の未来を肩身に背負うことを買って出ているのだよ？」

その嘆きの意味を、結城は理解している。ホライゾンの自害と聖連

に対する反抗。究極の二択の中で、自分が選んだ道の意味を違えはしない。失ったものが多すぎるために、結城は同じ後悔を吞まないと決めた。

無謀に考えるならば、勝てば良いだけの話だ。

ホライゾンが死んだら、全てが失われる。聖連に負けたら、何もかもが奪われる。そうならないためにも、そしてやらずして後悔しないためにも、皆で確かめる必要があるのだ。そこに学生や身分は関係ない。武蔵の進むべき道を、他の国の者達に決められたくは無い。自分の最後の家族の運命を、他人に握られたくは無い。だから、

「ヨシナオ王。一ついいか？」

聞きたいことがある。

目の前の、民を守ろうとする王様に、見届けて欲しいことがある。それは、

「貴方に総会の立会人を務めて貰いたい。そして、その結果を持って、王の預かる総長連合と生徒会の権限を取引したい」

自分達が決めた道を、王に認めて貰いたいと言う。

過程を見届け、結果を見極め、その先を見定める義務を背負って欲しいと、結城は言った。強制ではなく、王自らの判断と意志で権限を返還して欲しいという願いに、ヨシナオは目を細めた。

そして苦笑した。この少年は、本当に諦めが悪いと。妹を、父を、居場所を失い、それでも足掻きながら戦おうとする。あの物静かで

人見知りだった幼子が、よくも気高く育ったものだ。王になれなかった王を前に、ヨシナオはかつての己の民を想った。六護式仏蘭西の小さな領地だった。三征西班牙との中立商業都市を作るために、その土地を奪われた。人民のために平和な中立を求め、自分がいれば、民は聖連に反抗して犠牲を生むこととなる。滅ばされるよりはいいと思い、国の意向で武蔵に王として派遣されたことを望んだのだ。

……しかし……

土地は変わった。民も散り散りになったと聞いた。

どうだろうか。

争いはよくないが、戦わずして奪われる後悔も苦いものだ。しかし戦って民が傷つくことはもつと嫌だ。どうすれば良いのか解らず、結局は人命を第一に考えて、自分は己を頼っていた民に背いた。命を尊う気持ちは、今でも変わらない。しかしだからこそ、あの日と同じ状況を前にして、自分は改めて民の幸せについて苦悩するのだ。後悔と無念を前にして、ヨシナオは結城と、その背後にいる学生達を見た。どんな形でも良い。諦めに妥協したくないという精神に、ヨシナオはあの日の救いを求めていたのかもしれない。ならば、その輝きのおこぼれに預かるのも、また一興かもしれない。

「T e s、いいであろう。貴殿等の正当なる勝負を指針として、皆の納得出来る結論を出すことを誓おう。そしてそうなるための努力をしてきたまえ」

「Jud、礼を言つよ、麻呂」

「馬鹿もん。麻呂を麻呂といって良いのは麻呂だけじゃ」

期待はある、悩みもある。

だからこそ、託さねばならない意志もある。  
自分は王だ。

しかし、民なくして王は無い。

だからこそ見守ろうと、民が動かす国を前に、臨時生徒総会が始まる。

/  
/

「では、参加者を確認していこうか」

始められた臨時生徒総会に、結城の音が響く。

言葉と共に、彼は周囲を見た。

この総会に集まる者達を見据え、

「機関部代表は直政。武蔵騎士階級代表はナイト・ミトツダイラ。  
暫定議会代表は本多・正純。極東・三河警護隊は一先ず保留、

本多・二代は情報交換会から帰って来る途中だったな？」

「 J u d . 」

確認に、中量級装甲を纏った警護隊員が会釈した。  
返事に結城は頷き、そして言葉の続きを作る。

「他の部署と生徒委員達からは代表者を選んでいない。全生徒の暫定代表権は彼らの同意によってこちらが預かっている。 つまり、今この場にいるオレ達の相対で武蔵の方向性を決めていくこととなる」

そして、

「議題のホライゾン救出について、各部署の意見はなんだ？」

質問に、前に出る者がいた。

右の義腕を腰に当て、煙管を咥えているのは直政だ。

彼女は結城と視線を合わせ、軽い笑みを浮かべながら言った。

「帰って早々、顔を合わしに来たら臨時生徒総会とは、豪く派手に決めてきたもんだねえ、結城。身内に鬼畜するだけじゃ物足りないのかい？ 聖連に喧嘩を売ろうとするなんてさ」

「は。お前が軽口叩けて安心したよ、マサ。 機関部としても、



聖連に従うと働き口が無くなってしまっただろ？ こちらの提案はどちらかと言うと機関部向きだぞ？」

「そうさねえ。機関部は武蔵運用の要だから、聖連としてはそれを極東の残党に任せたら反乱が起こされる恐れがある、武蔵の移譲で引継作業を終えたら、あたしらは御役御免って訳さ。だからまあ、機関部の不安は簡単なことさ。聖連に逆らうのはいいけど、武蔵が沈められるのだけは勘弁したい。その上で教えて欲しいのさ。武装解除された武蔵が、一体どうやって聖連と戦うのか、と」

そして直政は町の方と、皆の方を見た。  
口端から煙を吐き、左腕を頭上に掲げて、拳を握る。

「各国が持つ戦力の代表格とやり合う基準はなんだい?! 航空艦? 機竜? 機動殻? どちらにしても、あたしら機関部にとってはそうじゃないのさ!」

言葉と共に、直政の前に一枚の表示枠が来た。  
鈍色の光が宿ったそれに、彼女は腕を振り下ろす。  
そして硝子の割れる音と共に、表示枠が砕け、

「あ、やべ」

結城の呟きに、皆がそれを見た。

中央前艦武蔵野の後部、機関区画である橋状艦橋下の底面デッキか

ら、一つの影が白い線を引きながら空に飛んだ。揚力による断熱膨張が水蒸気を凝縮させ、細長い飛行機雲を描く。一瞬にして奥多摩艦首を越え、逆光に身を隠すと共に教導院の真上に昇ったそれに、誰もが視線を注ぐ。そして、

「あたしの走狗はちょっと特殊だね。その御蔭で、あたしみたいな若い女が機関部で一端の顔を気取っていらるんだけど、その辺、ちよつと社会見学と行こうじゃないか」

言うなり、轟音が響いた。

高さ三メートルの砂埃と烈風を吹き荒らし、直政の背後に激突コースを敢行したのは、赤黒い衣装を纏った巨大な人型。足下に着地衝撃緩和用の鳥居型紋章を展開し、スマートなシルエットを持った鉄の塊は、身長十メートルを誇る重武神だ。

女性型で、翼を持たぬそれを背に、直政が誇らしげに言う。

「重武神”地摺朱雀”。あたしが地上にいた頃、戦場になった実家周辺の土地で見つけた武神の破片を寄せ集めて作り上げた代物さ。色々あってあたしの走狗が宿って作業用になってはいるが、中枢部が戦闘系ってこともあって、機関部の重武神作業班では最強だよ」

「 武神戦力とは……、またふざけた真似をしてくれる」

「そう言うなって。この子、作業仕様で装甲薄い分、トルク重視だから、力比べなら他国の重武神とも良い勝負出来ると思うさね。

で？ どうだい？ 武神を相手に出来るヤツはいるかい？ そ

の方法と結果を見て、武装解除された極東に戦う手段があるかどうかを見極めさせて貰うよ」

直政の言葉に、結城が半目を向けた。

そして周囲では誰もが沈黙し、赤の鉄巨人を前に汗を掻きながら首を横に振った。

無理だ、と誰かが小さな諦めを呟く。

その声を聞いてか、結城が右手で軽く頭を掻いた。

彼は溜息一つ吐いてから、直政に向けて言った。

「うっわ、話聞くだけだったのに、なんで勝手に一回戦始めてんの？ マサ」

「そんなの、相対の序でにしとけばいいじゃないか。必要最

低限の戦力の提示は、現状での最重要科目だよ？」

言葉に、結城は内心で頷いた。

武神と正面から勝負を挑めるのは、他国の教導院で言えば副長か英雄クラスの存在だ。戦術や装備の運用を加えればその限りではないが、武神戦力を戦争行動の基盤における参考値として持ち出す機関部の発想は間違っていない。航空艦と機動殻、そして歩兵や異族に続く今の戦場の主流は武神に傾いていると言って良い。何せ六護式仏蘭西や三征西班牙、そして一部の関東勢力などでは、既に戦闘用武神部隊の投入は普遍的なものとなっているからだ。

……確かに、武神を基準として武蔵の戦力を試すことには一理ある。

そのような簡易的な分析をしている中で、結城の目の前で直政が動いた。

右義腕による遠隔操作で地摺朱雀を操縦し、その巨大な左手を自分の方へと差し出した。

そして跳躍するように直政が武神の手の平に乗り、その肩に腰を下ろす。

手馴れた動きに結城は目を細め、ややあつてから、

「 ちよつとタイム」

という一言と共に、彼は背後に振り向いた。

校舎側。昇降口の前にいる皆と顔を合わせ、結城は腕を組んだ。

「作戦会議だ。 誰が良い提案はないか？」

「おいおい、結城！ ようやく俺達に出番が回って来たかと思ったら、いきなりラスボスレベルの相手を押し付けてくんなよ！ お前マジで自分だけ良い空気吸ってんな！！」

「やかましい、この天然猥褻物。 いいか？ 元はと言えば、お前が人の妹に下劣で汚らわしい欲望を抱いているからこんな面倒なことになったのだ。少しはこっちの苦勞に対して懺悔しろ」

「あつれー?! なんで俺逆切れされてんの!? 結城、お前三河がドツカンされたこと忘れてね? お前んとこの親父が極道やって

んの全然触れてねえし。つーか俺の健全な思春期の性衝動がどうして武神とドンパチすることに繋がってんの?！」

「お前の思春期が健全だと? そんな恐ろしいことが有って堪るか。いいか? 昔からこの武蔵で起きた騒動の九割は葵・トリーが原因だということの説明できるんだ。だから直政が完全に殺る気全開で容赦ないのも全部お前のせいでいいんだよ。面倒くせえ」

「完全に逆切れだコレ!!」

皆の息の合ったツツコミに、結城が舌打ちした。そして地摺朱雀と直政を背後に、彼は落ち着きの溜息を吐いた。

「とは言え、武神相手に戦って勝利出来るということには大きな意味がある。武蔵ではオレかナイトが可能だが、それだけだと物足りない。他に對抗できる人選が欲しいな」

「サラリと俺に対する嫌がらせをスルーしたよ、コイツ。でもそうだなあ、どうせやるなら見所のある組み合わせが面白いんじゃない? だからシロ、お前が行けよ」

トリーの笑ったような言葉に、皆が、え? という疑問を作った。そして皆の中から、今度は点蔵が慌てた動きで前に出た。

「ト、トリー殿!? あのデカ物相手に商人全開のベルトー二殿とはどういう思惑で御座るか!? デザートみたいにバラエティ重視

で良い状況では無いで御座るよ!!!?」

「馬鹿だなあ、テンゾーは。そんなの決まっているだろう?  
私怨だよ」

「ちよつ! この男、最悪で御座るよ!! しかも馬鹿のくせに人を馬鹿と!」

「だってあの鬼畜商人、金に超汚えし、いつもいっつも俺にひどいこと言うじゃん? たまには酷い目に遭えよ。つーか遭ってくれよ。遭って俺に土下座して反省して下さい」

「お前等、オレがいない間に何があつた? ……んー、しかしそうだなあ。インチキ守銭奴の罰当たりならオレも一度は見てみたい。つーことで、おいそこの元会計、ちよつとミンチにされて来い」

「馬鹿と鬼畜の最悪コンビキター!!! ていうか結城殿!? さっき戦力が貴重とか真面目に言つてたのでは!? どんな思考回路で馬鹿と同じ結論に!」

点蔵の叫びに、馬鹿と鬼畜が親指を立ててスルーした。しかし話題の当人であるシロジロは全く動じない。彼は何時ものフラットとした表情で一步前に踏み出し、二人に対してこう言った。

「ぶ、つまりアレに戦って勝てば、私の普段の言動が正当化出来るという訳だな? お安い御用だ。二人とも一生後悔しろ」

「おいおい、何だかすげえやる気出してね？」

「ハイリスクハイリターンの商売ほど燃えるものはないからな。

機関部の信頼に、武蔵が武神と同等の戦力を証明出来るのなら、相対自体は安いものだ。更には結城を辱める権利と、馬鹿を大馬鹿野郎に出来るというサービス特典までついてくる」

「おい、ちょっと待て！ オレを辱める権利とはどういうことだ！  
？ 何の話だ？！」

結城の質問に、しかしシロジロは答えない。

彼は前に進み、首元のハードポイントから走狗である白狐のエリマキを呼び出す。

そして地摺朱雀の肩に座る直政に視線を向ける。

「先鋒戦は私が相手だ。術式による契約のために、ハイデイからの  
仲介支援を行う。文句はないな？」

「シカトすんじゃないやねええ                    ！！！」

無視した。

結城の抗議を余所に、直政はシロジロの言葉に頷く。  
義腕を軽く回し、彼女は相対する商人を見据えた。

「それがアンタの何時も通りならいいさ。                    しかしシロジロ。」

会計で商人やってるアンタが武神とどうやって戦うのか、見せて欲しいもんだね」

次の瞬間。武神が動いた。

小さな、しかし確かな拳動は構えだ。

重心を落とし、腰の捻りと共に前に踏み込み、

「皆！ 退いてな！

ちと派手に行くよ！！」

掛け声に、拳が突き出される。

十メートル大の巨体が生み出す瞬発力。十トンクラスの質量は体軸の回転運動による相乗効果を得て、重量そのものを武器として商人に発射した。

人間の筋肉運動を鉄の塊で再現する。鮮やかなスマッシュブローを叩き込まれ、強烈な破砕音と共に攻撃がシロジロに激突した。

/  
/

昼下がりの午後。

赤の巨人が吹き上げる蒸気と陽炎を前に、トリーは地面に膝をついた。

正面。拳を突き出し、橋の構造材に打撃を正確に撃ち込んだ光景に、彼は苦悶な表情を浮かべた。



悔やみと悲しみが滲んだ顔に皆が沈黙し、そしてトリーが息の詰まった言葉を作る。

「く……、シロ、俺はお前のことを一生忘れない。　　今まで鬼畜で性格汚くて、俺に文句ばっか言ってる嫌なヤツだったけど、その守銭奴ぶりは最悪だったよ!!」

「追悼するのか蔑むのかどっちなんだあ　　!!」

嫌味たっぷりのトリーの芝居に、結城が恠鳥の長棍部分でフルスイングをかます。

今し方武神の放った一撃にも劣らぬ鋭利な一閃が顔面に直撃し、馬鹿が昇降口の奥へと吹っ飛んだ。  
情け容赦無い、掛値無しの殺人バツティングに、全員が青褪めた。  
そして、

「よく見る、まだ勝負はついてないぞ」

校舎内に突っ込んだ馬鹿を無視した結城の言葉に、皆が前を見た。  
地摺朱雀の拳が激突した先、確かな金属音が響いた中で、しかし衝撃の風の中に立っている人影がある。

シロジロだ。

両腕を頭上に交差し、武神の拳を確かに受け止めた構えを取る彼の姿は無傷だ。

その光景に直政はおろか、結城以外の誰もが眉を顰めた。手加減はしていない、あの強烈な風圧と衝撃音は嘘を付かず、地摺朱雀の攻撃は確かに直撃した筈だ。

「どう言う仕掛けだい？」

直政が猜疑の声をあげた。

次の瞬間。武神が止まった拳を引き戻し、再び身構える。相手の底が知れぬ状況に、直政は商人を睨んだ。

対して、両腕を掲げたシロジロは視線を上げ、相對する己の客を見る。

そして、

「さて、本店の商品は御気に召して貰えたかな？」

「余裕たっぷりかい。一体これは何の術式だい？」

質問に、シロジロは不敵な笑みを浮かべた。

術式。確かな答えに、彼は否定も肯定もせず、ただこう答えた。

「なに、それよりもっと単純な、金の力だ」

/ /

『　　いいか、戦争が経済活動であるように、戦闘行為の多くは金でどうにでもなる』

シロジロの言葉が放送を通して武威全艦に響く中、それを見守る教導院側でも動きがあった。

昇降口前、長棍を肩に担ぐ結城は半目で皆を見渡し、そして問うた。

「さつき守銭奴がオレを辱める権利とか言ってたが、アレはどう言うことだ？」

「フッフ、ちよっとした賭け事よ。　　貴方、断りも無しに三河

で一晩ハシャいで来たでしょ？　その罰ゲームとして、相對戦の結果でどうやって虐めるか決めようとしたってわけ、ククク」

「臨時生徒総会で遊ぶな。　つかせめて本人に確認を取れ！　あと最後の三文字怖いからやめろ」

ちなみに私は守銭奴と同戦線よ、という喜美の返事に、結城が頂垂れた。

そろそろ本格的に外道どもを殺つてしまおうかと本気で悩んでいる中、不意に彼は横を見た。

右手側のやや離れた位置、昇降口前の床に座る人影の群がいる。

眼前に鳥居型の表示枠を展開し、極東の中量級装甲一式を身に包んだのは警護隊百五十名の隊員達だ。

ピクリとも動かず、不動の状態で居座る彼等を見て、

「シロジロの契約神って、確か稻荷系の商業神サンクトだったな？ 金で大抵のことは解決出来るスキル。術式の応用にも金銭による仲介が可能だった筈だ」

言葉に、今度はハイデイが頷いた。

彼女は目の前に大量の表示枠を開いては閉じて、結城に説明する。

「警護隊の”労働力”を一括して時給払いで借り受けたの。警護隊も労働の神の加護を得ているから、サンクトの神社を仲介として、お金で労働の神が管理している警護隊の労働力を買えばいいだけ」

「加護の仲介取引か。時給払いは神社側の査定が必要だが、謂わば警護隊百五十名の力を”レンタル”していると言っことか」

結論に、横にいる警護隊副隊長がJud・と答える。

彼は目の前の表示枠に記されている仲介金の値段を確認し、結城に返事を返す。

「極東警護隊の報酬は教導院と神社の両方で受け賜っている。神社側での目安の時給は一人五千円程度だが、仲介料込みは倍払いの一万。そこで貸し与えているのは純粋な質量であるため、一人平均七十キ口として、百五十人なら約10・5トンの重量換算だ。重武神相手には充分な力だ」

成程、と結城が頷く。  
警護隊が教導院側に協力的姿勢を取るのには、やはり武蔵の決断を見極めたいからだろう。  
しかし、総価格一時間百五十万の仲介料金は安くない。生徒会権限が王に預けられている中、シロジロが商工会幹部の権限でそれを支払うとは思えない。

「なあハイデイ、これどう考えてもポケットマネーだろ？ 金に汚いお前達がそんな慈善事業するとは思えないから、正直に言いなさい。どうやって払うんだ？ 百五十万」

結城の問い掛けに、ハイデイはちょっと待っててねー、と間を置く。手元の動きを素早く行い、そして多くある表示枠の中から一枚を結城の前に出す。  
それは、

「基本は生徒会と総長連合の経費で支払うんだけど、それも権限が返還されてからなんだけどね。だから残りの部分はユツキーの罰ゲームに頼もうと思うの。ユツキー、去年からアサマチの家の神社で奉納の神楽舞披露するでしょ？ 今年見れなかった分、シロ君が相対に勝ったらユツキーに一日女装ルールを設けることにしたの。そんでその写真を高く売って残金収集、ってわけ」

「は？ オレをお前等の金勘定に利用するってのか？ そんな面倒なことしなくても、オレが残りの金を払えば良いんだろう？ 女装

なんて御免だよ」

「んー、でもそれだとシロ君がユツキーに貸し一つ作るっていうのは怖いかなー。しかも罰ゲームは一日女装で満場一致しているからユツキーに逃げ場は無いよ」

言葉に、結城が背後にいる皆を睨んだ。

提案者が誰かは解らないが、勝手な真似をしてくれると悪態をつく。そして次の瞬間、正面から強い風が来た。

橋の上で対峙していたシロジロと地摺朱雀が、横町の方へと移動したのだ。

「始まったね。ユツキーは解説とかしなくて良いの？」

「その辺は放送委員の仕事だ。あと、罰ゲームのこと、もっと詳しく話せ」

「んー、ユツキーって、去年に臨時相談役に就任したときに女装したことあるでしょ？ 今更断っても説得力ないと思うなー。あの時はセージュンとトリー君、喜美とアサマチ以外の皆は見えないからその辺の補充みたいなものかな？ あ、勿論、趣旨は三河の夜遊びに対する罰ゲームだよ、うん」

「夜遊び違う、死ぬところだったんだぞ？ それに去年のアレは元忠がオレの副長補佐からの役職変わりにケチをつけて生徒会長権限で強制しただけだ。好きでやっている訳じゃない」

「前総長は祭好きな人だからねえ。ユツキー色々可愛がられてた

でしょ。でもそれはそれ、これはこれだよ。ユツキーが皆に心配掛けて無茶したのは事実だし」

「ふん、要するに、単にお前等がこの機会を利用して公衆の面前でオレを貶したいってことだけはよく解ったよ」

「ありゃ？ 開き直った？」

首を傾げたハイデイに、結城はそっぽを向く。

同時に、町の方で轟音が響いた。

遠くでは、上半身を家屋の上から覗かせた地摺朱雀が、地面に向けて攻撃を放つのを確認できる。

それはシロジロが未だに武神と対抗していることを示し、勝負が続くということの意味する。

臨時生徒総会は、まだ始まったばかりだ。

/  
/

今朝の西側広場。立花夫婦の随伴で武蔵に帰って来た結城は、二人に対して聖連の金融問題を説いた。教譜戒律に縛られた聖連諸国は金融業による利子収入を認めずに、暫定支配と歴史再現に必要な資金を極東に設けた銀行から借款していると。

『しかし、極東の銀行には他国の投資家や企業が預けた金以外にも、

極東側の利用者の金を同等に入っている！ それらは極東の民が国際貿易や輸送によって稼いだものであり、各国居留地の民が税金として納めたものを、領主が銀行に預けたものだ！』

そして今、奥多摩の横町で激突の破砕音が響く中で、商人が全艦放送を通して同様の問題を論ずる。

神道教譜には戒律による制限が無く、そして異端でもない極東は暫定支配体制の下でも金融事業を営むことが出来る。しかしホライゾンの自害に伴う武蔵の移譲と極東の国権が聖連の手に渡ってしまったら、完全支配体制を敷かれた極東の借款が全て踏み倒されることとなる。

そうなれば、極東の持つ資金が全て奪われ、形しかない銀行と各国に吸収された住民達は、聖連諸国の言いなりになるしかない。

『人々は既に動いている！ 昨夜の事件を前に、完全支配による借金の踏み倒しを懸念した極東の人々が、今朝になって預金の引き落としを行おうとしたが、聖連は三河消失を”聖連に対する敵対行為の恐れ有り”と解釈し、”敵対行為への資金投入の恐れを避ける”という名目で極東側の金融を凍結した！』

極東居留地に対する暫定支配を利用した圧政だ。

聖連の金融凍結によって、現在、多くの国や居留地では極東側の金が引き出せない。

しかし、極東の中で、中立の独立領地である武蔵は聖連派遣の武蔵王の管理下にあるが、暫定支配を直接受けていない。故に金融の独立性を保つ武蔵に、各国の極東の住民達が手持ちの資産を神社に代演奉納し、それらを外燃拝気として武蔵に預けられている。



『それは、武蔵が極東最大の燃料庫と銀行になりつつあるということだ！！　だがホライゾン・アリアダストが自害し、武蔵が聖連に移譲されたらそれらの資源も無くなる！』

そうならなければ、ホライゾンを筆頭とした三河松平家が極東を支配し、武蔵は資金と言う名の戦力が集う場所となる。

『武蔵は戦えるのだ！！　武蔵が飛び続けることで、そして金が集まり続ける限り！！　武蔵は聖連に負けはしない！！』

叫びと共に、拳が放たれた。

武神の鉄拳と、風を纏った人の拳がぶつかり合う。

木造建築は指向性を持った労働力によって被害は無いが、それでも家屋の窓が衝撃によって震え、そして鉄風雷火の如き破碎が宙に舞う。

両者は殴り合いに突入した。

人の動きで応対するシロジロに、地摺朱雀は武道に則った技で攻めるが、小さい標的には質量そのものが凶器となる。武神の拳を商人が受け止め、風の打撃を武神が捌く。

火花と陽炎、烈風と蒸気が横町の中央で渦巻き、

『うおお』

『！！！！』

『うおお』

唸りをあげたのは、果たしてどっちが先か。

シロジロは退きながら攻撃を突き出し、地摺朱雀は進みながら牽制する。

そして一進一退の戦況を前に、教導院前でも動きがあった。

先ほどのシロジロの分析に対して、結城は橋の上で言葉を作った。視線を前に注ぎ、告げるのは、

「経済的に見れば今の武蔵はドデカい金庫だ。しかしそれは武蔵が聖連の支配から逃れられる場合のみ続けられる。住民達の動きは、完全に武蔵に委ねられていると言っている」

そして、

「商人であるシロジロが武神相手に善戦しているんだ。戦力的に考えれば、十分参考になる。その上で、ここで質問をしよう。

ナイト。武蔵の騎士であるお前が、何故ここにいる？」

質問と共に、結城は見据えた。

己の前方。

ポリュームの大きい銀色の髪を伸ばした、鋭い黄色の瞳を持った少女。背中に自分の背丈ほどの大きさを持ったケースを背負った半人狼は、突然声を掛けられたことで眉を顰めた。

「何故つて……、私は騎士階級代表ですわ。貴方達教導院側が聖連との全面戦争を行うかもしれないというのに、民を守るためにある騎士にも、この状況を見定める権利があるのでは？」

「まあ、そうだな。しかしナイト。見定めるだけでは、お前が此処にいる理由にはならない。騎士領がこの臨時生徒総会で相対戦に参加する理由はなんだ？」

結城の何かの意味を含めた問い掛けに、ミトツダイラはやや目を見開いた。

彼女は息を吸い、背負っていたケースを左右の地面に置いた。

床に載ったそれは橋の構造材を僅かに軋ませ、そして対のケースの上に、ミトツダイラは手を掛ける。

彼女は軽くケースの側面を掴み、軽々と持ち上げ、肩の上に掲げる。その上でミトツダイラは結城と視線を合わせ、

466

「ナイト・アルジヨント・ルウ銀狼”・ミトツダイラ。武蔵騎士階級代表として、武蔵アリアダスト教導院に問うことは一つのみ」

言った。この場における、己の立場としての言葉を。

「現在、武蔵の総長兼生徒会長の権限は武蔵王に預けられている状態。しかし派遣役で、騎士に報償を与えるという経済基盤を持たない王に、私達騎士が従うことは出来ません。そんな状況において、教導院側は何を持って私達を従えるのですの？」

ケースを肩に載せて、騎士が問う。  
目の前にいる結城、そしてその背後にいる皆を見て、

「聖連との戦争を前提に、騎士を従えるに相応しい相手は、どなた？」

言葉共に、町の方で再び轟音が響く。

同時に、臨時生徒総会二回戦の相対が、一回戦と平行して始まった。

## 第十二話 臨時生徒総会 上 (後書き)

一週間ぶりに、新年を迎えての投稿です。クロです。

いよいよ始まった臨時生徒総会。原作と少し違った展開は次回に持ち越しですが、如何でしょうか？

原作の情報量が多すぎて、やはり臨時生徒総会は飛ばすも弄るも難しいですね。

新たな一年に向けて、続けて頑張っていくと思います。

では皆さん、また次回。

P.S:Do As Infinityの『誓い』聞いて、地味に作品とマッチしてると思ったけど、どう？

### 第十三話 臨時生徒総会 中

自動人形 P - 01s は考えた。

三征西班牙のクラーケン級審問艦に設置された”アンダミオ・テラ・エジエクシオン刑場”の中で、彼女は手元にある本を読みながら、答えの無い自問自答に耽っていた。

己が何者であり、そして何をすべきかと。

……難しいものですね。

昨夜から始まった一連の出来事の中で、運命と言つものは目まぐるしく転化しているといい。

地脈炉の暴走、三河の消失、十年前の悲劇の裏に隠された大罪武装の真実と、今まで知りえなかった己の正体。

P - 01s は P - 01s ではなく、軽食屋の店員である自分はまやかしたかった。

三河君主である父、松平・元信の乗る馬車に轢かれ、一度は生死の境を彷徨った少女ホライゾン・アリアダスト。滅びを迎えた肉体から魂を抜き取り、納め切れなかった感情を大罪武装に分化し、そして魂を自動人形の身体に移植したのが本当の自分。

”焦がれの全域”。九つ目の大罪武装にして、三河松平の嫡女。自動人形の身体を持った、感情と記憶を失った元人間。父の犯した過ちを償うために、この身を果たして民を救う者。

……解りやすい話です。

武装解除された武蔵にとつて、大罪武装である自分の存在は危険だ。そして松平の跡取りである自分には、国の生じた問題に対する責任を負う義務がある。

聖連の提示した贖罪と、その結果に異論はない。極東の君主として引責自害することで、それで全てが上手く治まる。

本に書いてあった通り。過去の指導者達を前例に、そして自動人形の最善を持つて、自分の判断が正しいと明言できる。アイデンティティーとでも言うのか。自動人形は人に尽くすための最善を導き、そして君主は国と民を守るための最善を歩む。

……似たもの同士。      案外自動人形って指導者向きな存在なのですね。このような状況で新たな社会の組み合わせを悟り開くとは、ホライゾンやりましたと判断できます。

ある意味前向きな自動人形だ。

しかし本のページを捲り、ふとホライゾンは思った。

強制された己の運命に疑いは無い。君主が国の利益の為に死ぬのはいい、父の過ちを子である自分が背負うのにも異論はない。本で学び、それ以外の参考値がない自分にはそれが当然であり、そして過去の歴史においてもこれが正解だと言える。  
ならば、

……ホライゾンと同じ運命を辿ったあの方は、どう思っているのでしょうか……

自分には兄がいると聞いた。

名は結城・秀康。

二度の養子縁組と三度の転居を繰り返した、名も経歴も自分とは違う、しかしかつては同じ血を受け継いだ少年。他ならぬ己達の父が昨夜に告白した事実には、ホライゾンは意外性を感じた。

……結城様が、ホライゾンの兄……

記憶に残る、それなりに付き合いのある人物だ。

武蔵の臨時相談役。本多・正純の友人。青雷亭の常連客。鬼畜。決まって昼食と週末の朝食は店で済ませるため、彼の味の好みは憶えている。時々取り留めのない会話をすることもあり、偶に本などを薦められることもある。横町や商店街でも有名人で、店主とも付き合いが長いらしい。番屋の警備員が彼を番長と呼んでいるのは、まあ恐らく彼らなりの敬意の表し方だろう。

……周りから頼られている方だと判断できます。

結城様は、

上手く武蔵に馴染んでいるんですね。

浅い一年間という記憶しかない自分と違って、兄である彼は十分に己を生きていた。彼を必要としている者は多く、彼はそこにいるべき人間だと、ホライゾンは心の中で頷いた。結城にはもう、継承権はない。聖連が難癖付けてその権限を否決したそうだが、それで良いと思う。



彼はまだまだ生きて行ける人間だ。

三河が消滅し、親であり、家族である父が死んだ。兄である結城はそれを止めるために戦い、だが失敗し、そして大きく悲しんだ。それは感情を持たない自動人形である自分には理解できないものであり、しかしそれが人にとって望まぬことなのは解っている。だから、

……もうこれ以上。兄に迷惑を掛けることは赦されないのですね。

傷を背負った者を自害に送り出すことは残酷だ。

そのような感傷が無くとも、ホライゾン自身がその責務を引き受けて良かったと思っっている。

感情の無い、記憶のない、何もかも未熟な自分が、この身一つで全てを救えるのなら、それは意義のある命の使い方だと。

継承者である兄が死んだら、極東は聖連に預けられ、そして大罪武装である自分も無事では済まない。しかし大罪武装であり、継承者でもある自分が自害すれば、兄が死なずに全てが平和に解決できる。

……結城様が自害すれば、ホライゾンも道連れ。しかしホライゾンが自害すれば、武蔵が救われて結城様に貸し一つ。これ程解りやすい名案はありませんね。

思わず親指を立ててしまった。

自動人形の最善という自己犠牲に、しかしホライゾンは気付いた。否、気付いてしまった。

それは、父の死に悲しみを抱いた彼が、果たして自分が死を選んだ

ことに妥協するのだろうか。

……どうでしょうか。      ホライゾン  
は自動人形で、記憶が無い  
ホライゾンは、結城様にとってのホライゾンではないのかもしれない  
せん。何もかもが昔と違うホライゾンを、結城様はどう思っている  
のでしょうか……

或いは、自分には無い、本当の自分がどんな人なのかという問題の  
答えを、彼は持っているのかも知れない。だがそれを確かめる術は  
なく、今のホライゾンに出来ることは、己に課せられた役目を全う  
することのみ。最善の判断を持って、多くの人々の安堵と平和を得  
る。その中には、己の兄も含まれている。

知りえぬ答えを手放すと共に、ホライゾンは死を選ぶ。可能性の交  
わらない、自動人形の性が成す所業。

自分は死んでいい存在だと、かつての自分自身が絶望した現実。  
残酷な最善を覆してくれる人を望み、しかし己は最善しか選ばぬと  
いう矛盾。

そんな葛藤すら、感情の無い自分には理解できない。  
本を捲る動きだけが何時も通りで、ホライゾンは、自分が人間らし  
く悩んでいるのに気付かない。結末の無い自問自答が繰り返され、  
そしてまた一つの疑問が浮かぶ。

昨夜。死に歩む己を引きとめようとした人物。  
どこか見覚えのある、しかし思い出せない少年。

ホライゾンが自分をホライゾンとして自覚するまえに、その名を呼  
んでくれた少年。

彼の名は葵・トリー。だがそれすらも、ホライゾンは知らない。  
ただ思うのは、

「あの方は、誰なのでしょう？」

/ /

「騎士を従えようとする相手は、どなたですか？」

ミトツダイラの言葉が、晴天下の武蔵に響く。

相対を望む声に、しかし彼女の正面に立つ校舎側の皆の内、正純は考えた。

聖譜記述によると、騎士の起源は古代ギリシア・ローマ時代に遡る。古代ローマの兵役制度では、軍に所属する騎兵を「エクイテス」と呼んでいる。しかし騎馬民族ではないローマ人にとって、馬術は限られた富裕階級のみが学べる技術であり、つまり彼らは騎兵として軍に加わる程度の財力を持つ富裕な市民であった。当時のエクイテスは貴族パトリキと平民プレブス、そして奴隷と同じくして一種の階級として認知されているが、後の共和政期から始まった版図拡大を契機に、ローマは傘下にある同盟国からの援軍や傭兵である騎馬民族に依存したが為に、エクイテスという言葉は「騎士」というよりは単に経済人や資産家を指すものとなっていった。

しかしその後、元老院階級で財産保持の制限を加えるクラウディウス法が可決されると、政治的活躍ではなく経済的利益を求める貴族や資産家は元老院を離れ、自らを「騎士」として強調するようにな

った。そして時代が共和政期から帝政期に変わるに連れ、ローマ軍の中核が傭兵頼みであった重装騎兵から資金と訓練のかかる歩兵と軽装騎兵に転換されたことも後押しとなり、次第に騎士は軍事的エリートから経済的エリートを意味する階級へと変遷していった。後に元老院議員の選出に「一定の財産を持つ」という法律が制定されると、騎士階級の間人がローマの経済界を代表する立場として改めて台頭し、帝政期では皇帝権を脅かす元老院階級を牽制したいと考えた歴代皇帝が、自らの直属の側近として騎士を重用した事で権威は更に高まり、騎士は古代ローマ帝国の体制を支える重要な職務となった。

……つまり元々騎士と言うのは、古代ローマ時代から確立された、経済界から移転した軍事的エリートのことを指す。騎士は最初から平民より地位が高く、当時は民を守ると言うよりは、王政を補佐すると言う義務に傾いていた。

それが今のような騎士道に殉ずると言うものになったのは、中世ヨーロッパ時代からのことだが、根本的には古代ローマから発足した騎士を根源とする。

……まあ、ともあれ、歴史的に見ても騎士は有力者な訳で……

思考を止め、正純は横を見た。

昇降口前、生徒達が集まっている群衆の先頭では、三年梅組の面々が低いスクラムを組んでいる。

何やら話し合いをしている皆を視界に収め、

「何をやっているんだ？」

質問に、皆の中からトリーが首を振り向いた。

「ああ？ 作戦会議だよ。見て解んねえのセージュン。お前もこっち来いよ」

「はあ……」

促しに、正純は納得が行かずとも輪の中に加わる。普段から疎遠になっている分、妙な気分だが、トリーの横で結城が無言で手招きをしているため、なんだか断ることが出来ない雰囲気になっている。

……まあ、これも一つの始まりだろう。

今まで距離を置いてきた分、ゆっくりと稼げて行けば良いと思う。これからは一緒に活動する仲間だ、コミュニケーションは必要だ。

「で？ 何か結論は出たのか？」

「うん。 とりあえず。結城、お前行って来いよ」

馬鹿の一言に皆が冷や汗掻いて首を横に振った。  
青褪めた必死な表情に、正純は思わず首を傾げる。

「ト、トリー殿。結城殿は昨夜の戦闘で負傷して、……とりあえず、  
ここは自分が毒とか罠でどうにかして見るのはどうかと……?」

「そ、そんな面倒なことより、私が弓矢でズドンした方が早くあり  
ません……?」

「どちらかと言うと……、ナイちゃんとガツちゃんが空からやっち  
やった方が確実じゃないかな……?」

「小生、ミトツダイラさんは範囲外なのでパスでお願いします!」

「びびってる時はカレーですネー」

……ツッコミどころ満載だが、最後辺りは無視していいよな?

身内に対して全く容赦のない攻略法を考えてるのは人としてどうか  
と思うが、異常者の集まりだからこれが当然なのだろう。

……あ、つまり私は普通なんだな、うん。

等と言う自己評価を余所に、正純は思った。馬鹿が結城を指名した

途端に、皆の様子が慌しくなった。

彼がミトツダイラと相對することに不都合があるのか、その辺りは正純には解らない。多分、過去に何かあったのだろうと思い、結城の方を見ると、彼は何時もの素っ気無い表情をしているだけだ。

……新参である私には知りえないことが……

一年程度の付き合いしかない自分としては、この疎外感は齒痒いものだ。

何時か解る日が来るのだろうかと考え、正純は詮索したい気持ちを堪える。

そして、

「あの……、早くして下さいませんか?」

背後から伝わるミトツダイラの促しに、皆が改めて顔を合わせた。

「まあ、オレが出ても良いんだけど。やっぱりここはウルキアが行けば?」

「そうだな。もしホライゾンを救うことになったら、異端審問官志望である拙僧は動けん。K・P・A・Italiaも三征西班牙も旧派で異端ではないからな。そのどちらとも拙僧が戦うことは出来ん」





「騎士つて、一般人よりも社会的地位が上の人間のことだよ。なにどうして向こうは相對しようとするんだろう？ そんなことするまでもなく、騎士は民を支配する側なのに、相對で負けたら返って損だよ？」

ネシンバラの言葉に、結城と正純以外の皆が首を傾げた。  
そして全員が無言でミトツダイラを見て、注目を受けた本人は僅かながら身を引き、

「な、何ですか？」

という声に、皆が素早く視線を戻す。  
そして、

「ふむ。ネシンバラ殿、話の続きを」

「あれ？ 普通ここでツツコミ入れるよね？ なんだか新鮮な気分だなあ」

「馬鹿ね、この眼鏡。後で鬼畜の女装が見れるんだから、ここでア  
ンタに気力ゲージ消耗しても意味無いじゃない。要はミトツダイラ  
なんてどうでもいいから、早くこの相對を終わらせなさい」

「オレ怒っていいよな？ いいよな?!」

まあまあ、と皆が一樣に結城を宥める傍らで、アデーレが手を小さく挙げた。

彼女は大きめのふかぶかな制服の袖を手繰り寄せながら、

「今の話。従士や騎士側から見ても変ですよ。　　そもそも騎士とか従士って自陣側の民とは争わないものでして……」

言葉を区切り、アデーレは一枚の表示枠を出した。

その内容を皆に見せながら、彼女は話の続きをする。  
それは、

「武蔵における騎士の話なんですが、……聖譜記述の歴史再現によれば、二百年前の中世末期には、騎士と王の領地を報償とする封建貴族の制度は大部分崩壊しているんです。今は権力と財力を報償とする宮廷貴族の時代です」

説明に、幾人かが頷いた。

ルネッサンスの興隆や百年戦争の戦乱を経て、中世盛期に行った十字軍遠征の疲弊と宗教革命の混乱をまとめるために、西ヨーロッパを始めとした多くの国では中央集権を用いた。

当時では大飢饉や黒死病、旧派の教会大分裂といった社会的騒乱が祟って、中世後期の危機と呼ばれた時期では、民衆の暴動や党派的抗争が頻繁していった。

そして何れ来る各国の軍備増強の下で、封建時代で騎兵を始めとする騎士達の軍事的優位性は失われた。質よりも物量戦力を重点に、

戦争そのものの流行がヨーロッパでまた一度変遷した背景の裏では、二つの重要な要素が絡んでいた。

傭兵と火薬だ。

金さえ払えば集団戦力を提供する傭兵と、将来の戦争指揮に革命を齎した火薬兵器の導入は、当時の中世期戦争において要塞などの防衛戦と歩兵の需給性を高めていった。

現在では極東以外のどの国でも、国軍としての教導院全学生に対する戦科必修が始まっている。

もはや戦争は、時間と訓練と人力さえあれば支えられるものとなっているからだ。兵士の選抜に、生まれつきの身分を頼りにしていた過去と違い、今は使えるものは何でも使う時代になっている。

「……そして封建貴族だった騎士達は国軍の成立とともに自らの装備を捨てて、過去の帝政期ローマのような、国の政治や経済、軍事に参加する新たな身分に変わって行った。それが俗に言う宮廷貴族。そして宮廷貴族の有力者は爵位などの位を与えられるが、それらを持ってない者を今では騎士と呼んでいる。近世になって普遍化した騎士の定義は、この頃に確定されたものなんだけれど……」

今の時代では、極東は聖連の暫定支配下において、武装解除されている。

学生の年齢制限と、国軍を持たない武蔵では最低限の防衛戦力として、聖連から派遣された騎士達を中心に構築してはいるが、彼らは中世の封建貴族そのままの形としている。その理由は聖連への協調と非敵対を示すための封建制度の流用だ。しかしそれは同時に、彼らは国軍に守られた宮廷貴族ではなく、過去の騎士道精神に基づい

た、民を自ら守る封建時代の騎士を買って出ているということになる。何せ武蔵の騎士達は、”聖連との協調有り”なために家系として継いだ武装を持てるレアな存在だ。武装を持ってない武蔵の中で、明確的な戦力を提示できるのは彼らしかない。

「一回戦の相対でシロジロが言っていた経済問題と合わせて見てもおかしいぞ？ 何せ聖連の完全支配が始まったら、オレ達全員江戸に移住して、江戸松平の暫定襲名者であるネイトの管理下になるだろう？ 封建騎士を存在意義にしている連中が王様になることはないだろう。金は無いから経済基盤が無いし、そのときは武蔵王が極東にいる理由もなくなるから、騎士として仕える君主がいない。そして実権を持たない傀儡を統治者にしたら、騎士としてのアイデンティティーに矛盾が生じるしな。ネイト堅物だから、王様になっても自分が騎士だと言い張ると思う」

結城の推測に、皆がうーん、と唸った。

そんな中、不意に、トーリが笑みを浮かべてこう言った。

「話難しくてよく解んねえけど。要するに結城やネシンバラ、アデーレの言うように、ネイトは俺達より偉くて、しかし俺達を守るのがフツーなんだよな？」

「まあ、そうじゃないと封建騎士の名折れだからな。　　っーか、ネイト自身がそんな感じの騎士だし」

結城の返事に、トーリがそうかと頷く。

彼は一つ伸びをして、笑みを濃くし、視線の先で首を傾げている三ツツダイラを見て、

「じゃあ、ネイトが向こうにいるのには何か理由があつて、それさえクリアすれば、ネイトは俺達の味方になってくれるんだよな」

告げる言葉に、誰も返事を返さない。

その沈黙を応答と取ったのか、トリーはもう一度だけ深く頷く。

「安心した。ネイトが敵になっちまったら、俺ら、ちょっとやりにくいもんな」

「……それはいいとして。相対には誰を出すんだ？」

結城の質問に、トリーは皆を見た。  
彼はうーん、と小さく唸ってから、

「そつだな、まあ、今の流れで言うつとよ、立候補優先で条件は明確だよな？」

色々解らない部分が多いが、既に人選は決めてある。  
笑みを崩さぬまま、この場を切り抜けられる人物を見て、トリーは言った。

「ここは頼むから、ナイトにちょっと反省して来て貰おうぜ？」

/  
/

奥多摩表層部の横町で、大きな破碎音が起きた。粉塵を巻き上げ、瓦礫や木材の破片が宙に舞う中、一回戦目の相対の終わりを告げる光景があった。

「私の勝ちだな、労働者」

己の正面、地面の構造材ごと地下階層まで沈んだ家屋を前に、シロジロは言った。

確かな勝利宣言。崩れ落ちた大きな穴の底には、相対者である直政と地摺朱雀の姿がある。

瓦礫に生まれた武神は身動きが取れず、その胸上では直政が呆れ果てたような表情でシロジロを見上げた。

「まさか、無人となった建物を構造材ごと買い取るとは……」

「帰化していない住民が、今朝武蔵から退避したのでな。空いた物件があれば、あとは私がどれだけ自分の金を示せるかの勝負だ。私

の財産となった土地は私の管理下にあるため、労働力制御の影響を受けない。それを気づかれない誘導に、お前はまんまと嵌ったわけだ」

理屈は解る。

買い取った土地を陥落させて戦闘に使うという、最もシンプルな落とし罠という戦術に、直政は負けたのだ。機関部の立場でしか状況を見ていない、商人の戦い方を見抜けなかった文句の言いようのない敗北。それを一つの経験とし、直政は地摺朱雀を埋める瓦礫を除きながら、感嘆の溜息を吐いた。

そして、

「向こうも二回戦をやっている頃だろうし、  
あんたらは機関部にどうして欲しいんだい？」

「仕事だ」

質問に、シロジロが即答した。

同時に、彼は眼前に一枚の表示枠を開く。

「結城と馬鹿の考えは単純だ。ホライゾンを救うための力と、武蔵が聖連に対抗できるという可能性を示す。そして私は金さえ集めることが出来ればそれでいい。しかしその両方を成就させるためにも、武蔵は飛び続けなければならぬ。そしてこの巨大な船を空に昇らせることが出来るのは機関部しかない。武蔵が飛ぶことによって、機関部は仕事を続けられ、私は金儲けでき、そして結城と馬鹿は武

蔵の力を示せることになる。                      そのためにも直政、私達はお前の力が必要だ」

「身勝手な話さね。                      でもまあ、それも慣れっこだよ」

返事に、シロジロは表示枠を見た。

画面には安堵の表情を浮かべたハイデイが映っており、その向こうでは、既に二回戦の相対も佳境に入っているようだ。

「ハイデイ、                      武神を起こすのに周囲の人の手を借りるが、経費で頼む。あと、罰ゲームと撮影の準備をしる。結城を逃がすなよ」

『J u d d . . ! 』

指示と共に、シロジロは空を見た。

その動きに釣られて、直政も頭上を見上げる。

青い天上。三河を離れて行く客船の群がある。

武蔵の移譲を前に、帰化していない住民達を乗せた船だ。

「あの者達を臆病というには、少し酷な話だな。                      しかし、残った私達が負けたら、彼らは勝者となる」

完全支配が始まれば、極東の価値も消える。

帰化住民ではない彼らには、まだ安息の土地があるということだ。



「そして私達に敗北は赦されない。  
下では拝めないからな」

極東の金も力も、聖連の

/  
/

晴天下の武蔵アリアダスト教導院前で、結城は橋の中央に立った。  
武器を皆に預け、構えを取らずに佇む姿は、己が二回戦の相対者で  
あることを遠回しに示している。

そして彼が相手に選ばれたことによつて、ミトツダイヤは僅かなが  
らも身構えた。

「本当は鈴さんが喜美辺りで良いんだけど、結局オレが出て来ちま  
ったよ」

「そのようですわね。 私としては別にそれでいいんですけれ  
ど……、どうして武器を持たないのです？」

質問に、結城は手を顎に当てた。

うーん、と小さく唸り、彼は首を小さく傾げながら、こう言った。

「別に戦うことだけが相対とは限らないだろう？ それに、ほら。

オレとお前のことだから、”あの時”の続きとして、今回は

話し合いで解決しないかな？」

結城の言葉に、ミトツダイラは軽く息を呑んだ。

あの時、という単語に、彼女は思わずケースを担ぐ両手の力を強めた。

しかし何とか平常心を保ち、ミトツダイラは結城を見据える。

「話すことなんて……、私達騎士団は、己に従える者を求めているだけですわ」

「じゃあ、やっぱりそうなんだな？」

確認をするかのような言葉に、ミトツダイラは小さくうろたえた。

……やはり、解っていますわね。私の目的を……

自分は使命を持ってここに来た。

それは自分達騎士が話し合いによって決めたことであり、それが武蔵にとっての最善であることも理解している。例えそれが、己の本心に背いた結果であろうとも。

……私がこの場で果たすべきこと……、例えそれが、結城、貴方に恨まれようとも……

思い、ミトツダイラは動いた。  
両手に掲げるケースを手放し、同時に目を伏せては片膝を地面につかせた。  
そして、

「武蔵騎士団、そして領主代表、ネイト・ミトツダイラが、領民に  
宣言いたします」

/  
/

「我々、武蔵騎士団は」

ネイトの言葉が確かに耳に届く中、オレは目を微かに細めた。  
そして背後で、ネシンバラの声が聞こえる。

「結城君！ ミトツダイラ君を止めて！！」

ああ、解ってる。

ネイトは、騎士として市民と相対し、そして負けるつもりだろう。  
それは市民権力の台頭を促す、一種の人民革命を意図的に成立させる行為であり、聖譜記述では、後の英国や六護式仏蘭西でも王侯貴

族の陥落を成就させるものである。

武蔵の騎士は己の身分を捨てることによって、極東の市民革命を世界中に浸透させる気だ。聖連との全面戦争で、彼らは自分達では住民を守りきれないと知った。その上で、騎士を捨てることで、民に力を与えようとしたのだろう。

……面度な話だ。そして難儀なことだ。今のお前は、こんな形でしか人を守れないのか。

残念だと思うのと同時に、嬉しくもある。

例え戦うことが出来なくとも、ナイト、お前は騎士で在り続けてきたんだよな。

だったら、ここでお前みたいな騎士が潰えるのを、オレは好としない。  
なぜなら、

「お前は、まだあの約束を忘れていないんだよな」

/  
/

結城の言葉に、ミトツダイラは顔を上げた。

約束。

それが何を意味するのかは解っている。過ぎ去りし幼き日の、しかし既に果たされなかった誓約だ。

今みたいな、……否、今と同じような日に、また繰り返されそうになっている悲劇に、自分は誇りと使命を選んだ。

……もう、我俣を言っていられる立場じゃないんですのよ。

少しは、大人になるべきだと思った。

だがかつての自分は、無力な己に苛立って力を振舞っていた。

そしてそのことが原因で、今守るべき人達を傷つけてしまった。

その中には、結城も含まれている。

「……これが、私に出来る最善ですわ」

「解ってる。そしてそれは、今のホライゾンにも言えることだ。自分を犠牲にして、全てを救う。なんとも高潔な精神じゃないか……」

何も言えない。

この男なりの皮肉か、或いは嘆息か。その何れにしても、ミトツダイラは結城に負い目を感じている。

中等部の頃。あの時から始まった、互いの間違い。それに目を瞑って生きて行けるほど、自分は出来の良い人間ではないのだ。

「ズルイ話ですわね。 貴方が相手として出て来て、しかし私と戦わないなんて……」

「今のネイトなら、オレ素手でも勝てるぞ？ ……だが、そうだな。わざと負けようとするネイトに勝っても、きっと誰も納得しないと思う。そしてオレは怒る。ホライゾンの命がかかっている相対に、手を抜くなと」

「  
」

解っている。自分の決断は多くのものを貶していると。

王の道を、その友人の誇りを、己の本心と、皆の願い、そして姫の命を。

だが不器用な自分には、それ以外の、民を守れる方法が解らない。聖連と言う強大な敵を前に、何時の間にか立場と力量の差に妥協してしまったのだ。

「可能性を論じる相対に、オレは諦めを見たくない。 戦う前に負けようとしても、後で残るのは後悔だけだ。 ……ネイト、騎士団の判断は解った。だが、オレ達はまだ、お前の答えを聞いていない」

「私の答え……」

声に、ミトツダイラは俯いた。

後悔をしない答えとはなんだ？

未来が見えないが為に、人の出した答えは全て不確かなものだ。

それに対して後悔しないと言うのは、例え間違ったと解つても、その決意には妥協しないということだ。己の王も、結城も、後悔を経て決意を固めた。  
そして自分は、

……騎士として、皆を守ろうと。そう在ろうとして……

かつて守ると誓い、しかし守れなかった命に対する責任感と、それを棚に上げて、目の前の少年を傷つけてしまった負い目がある。そしてその全てをひっくり返して、自分の主君はこの武蔵の騎士でいいと言ってくれた。

……そうすわね。 私は武蔵の騎士で、我が王の騎士で……

守ることが騎士の役目で、騎士を頼る民に尽くすのもまた、騎士の務めだと。  
それを教えてくれたのは、他の誰でもない、結城とトリーだった。かつて命を懸けてそれを示してくれた二人に、自分は他の何でもない、一人の騎士として報えるべきだった。  
だから、

「 結城。あの日の傷は、まだ残っています? 」

質問に、結城は少し考えたあと、それを見せた。

シャツの最初のボタンを二つ外し、開かれた襟の下、左首筋にあるのは小さな爪痕。

かつての自分が彼に残した、未熟の証明の一つ。

他にもあったが、目に見える形で残されたのはそれしかない。

治療すれば何時でも消せるのに、あえて残しているのは、それが互いの戒めであるからだ。

……今でもそれを背負ってくれるとは、本当に変なところで律儀な男ですわね……

そして、それを確認出来ただけで十分だと、ミトツダイラは己自身に苦笑した。

他人に預けた、己の痛みを前に、ようやく目が覚めた。

「私の答えを言う前に、教えてください、結城。 武蔵の民は、騎士にどうして欲しいのです？」

問い掛けに、結城は小さな笑みを浮かべた。

遠い昔、今では姿形が違う少女と、よく似た微笑だ。

それを前に、ミトツダイラは聞いた。  
守るべき民の、真摯な願いを。

「助けてくれ。 オレ達の居場所と、あの日守れなかった、オレ達の後悔を……」



「 J u d . 」

確かな頷きと共に、ミトツダイラは立ち上がった。

騎士として、民を前に跪くことはない。

そしてそれは同時に、自分は何が何でも、民の守護としてあり続けることを示す。

「騎士の魂は、何時でも民の救いですわ。それは義務であり、使命であり、そして誇りでもある騎士道。このネイト・アルシヨント・ルウ銀狼”・ミトツダイラ、武蔵アリアダスト教導院総長連合元第五特務として、貴方方の力になると誓います」

宣言に、皆が、わ、わ、という驚嘆を、おお、という歓声に変えた。

その声を前に、ミトツダイラは笑みを浮かべた。

騎士で良いのだと、そう実感しながら、臨時生徒総会二回戦目の相対が終了を告げた。

／  
／

「この相対、私の勝ちですわ。騎士は民より上という位置関係は変わっていませんし、さっきも結城から騎士に協力を請うてきましたしね」

「負けず嫌いな奴だな。まあ、これで一勝一敗ってことではないけど、どうすんだ？ 結城。もう他に相対者はいないぞ？ 引き分けのままでもうやって決着つくんだ？」

トリーの質問に、結城は考えた。

現在、各艦では先の相対と放送委員の広報によって、大勢の人達が外へと出てきている。

暫定支配下にある極東の中で、武威の立ち位置は常に危険地帯を彷徨っているため、武威の人々は武威の動向に敏感だ。

国の存続に対して危機感を抱くのはいいことだ。しかしそれ故に、武威の方向性を決める臨時生徒総会に油断は赦されない。

しかし正純が最初からこちら側についたことで、相対戦のバランスが傾いている。

本来なら、ここで一番重要な政治討論と演説で締めるのだが、

「別に臨時生徒総会は必ずしも相対戦で進む訳じゃないが……」

「やはり政治問題は反論相手がないと説得力に欠けるものだからな。しかし相対の相手がいない以上。ここは私が演説でどうにかするしかないだろう」

正純のフォローに、結城は軽く頭を掻いた。

こうなったら致し方ないと、そう結論しようとしたときだ、

「相対の相手なら、ここにいますよ」

階段の方。

己の正面から聞こえる声に、皆が振り向いた。

……は？

目を見開き、間拔な疑問詞を心の中で吐いたのと同時に、結城は聞いた。

何者かが階段を登って来る足音と共に、また声が届いてきたのを。

「臨時生徒総会の最後を、演説だけで終わらせるのは少々惜しいですね」

聞き覚えのある、少女の声だ。

随分と長い間意識していなかった、しかし決して忘れない人物。

その予感と共に、足音が橋の上に辿り着く。

それは、

「お久しぶりですね」

長寿族の特徴である尖った耳。

肩まで伸ばしたセミロングの黒髪。

繊細な体格を包んだ朽葉色の和装。

口元を隠す、鮮やかな絵画が描かれた舞扇。

何処か愉快そうな口調で話すその仕草は、十二年前の記憶とは何一つ変わっていない。

新たな相対者。

予期していなかった人物の登場に、結城はその名を呼んだ。

「紫・原姫……!？」

### 第十三話 臨時生徒総会 中 (後書き)

風邪で寝込んで更新が遅れてしまったクロです。

あと二、三話辺りで戦闘シーンのターンに入る中、難関である臨時生徒総会も佳境に入ってきましたね。

あと鈴さんの出番を奪ってすいません。反省していますので。

ここで新キャラについてちょっと境ホラ風に説明、

名：紫・原姫

属：??? 武蔵アリアダスト教導院

役：バイト巫女

種：近接武術師

特：粉碎系スマイル女

うん、なんだか訳解んないよね。

ネタバレは自重するので、とにかく結城のパワーアップ要員として認知して頂ければいいかと。それだけですよ？

では皆さん。また次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5444y/>

---

夜月下の枝垂桜

2012年1月6日16時51分発行